

みんなくりポジトリ

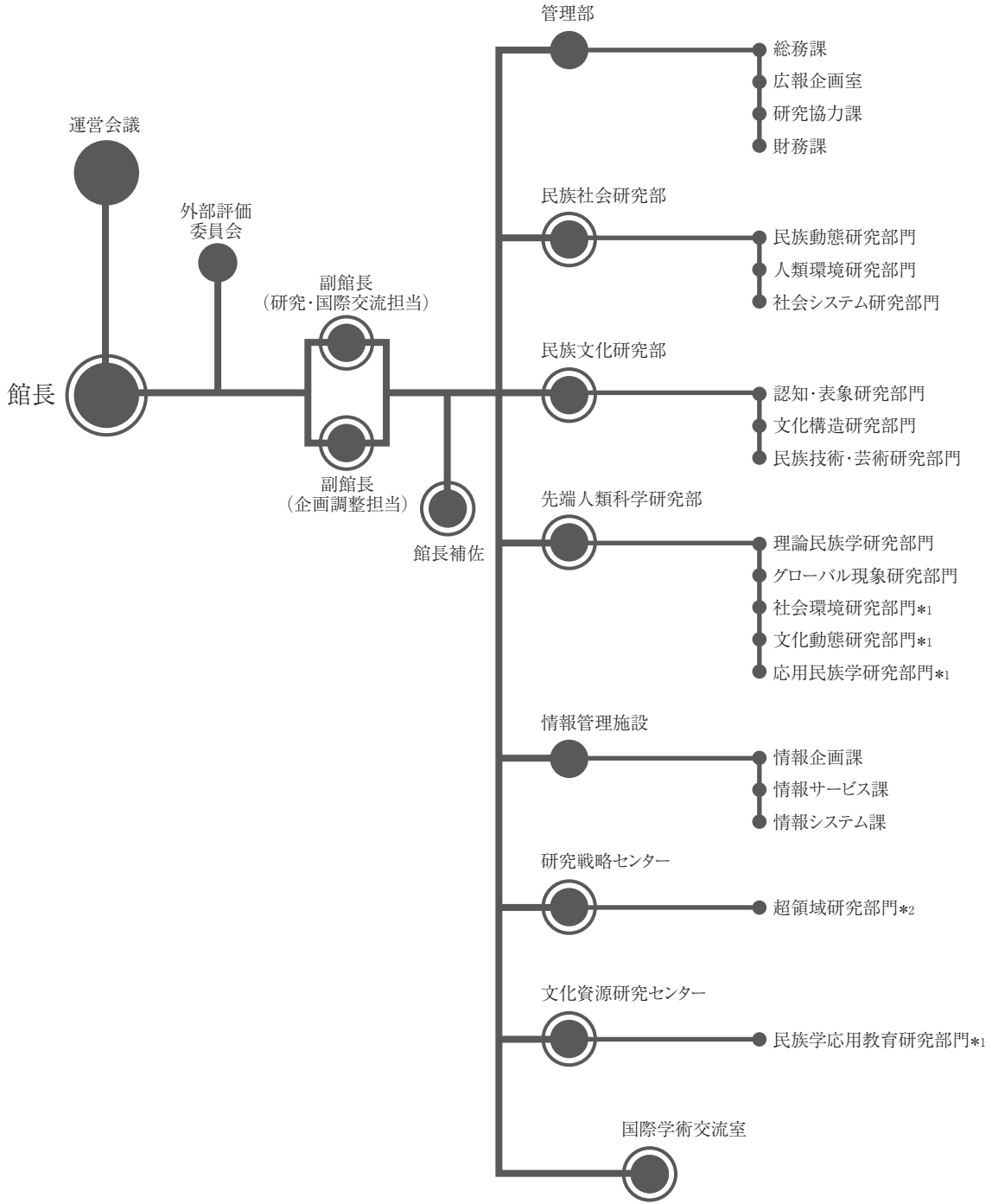
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

1.組織

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-05-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5323

1 組織

組織構成図 (2013年3月31日現在)



注) *1 客員研究部門
*2 外国人客員研究部門

運営組織 (2013年3月31日現在)

●運営会議

植野弘子	東洋大学社会学部教授*1
栗田博之	東京外国語大学副学長*2
栗本英世	大阪大学大学院人間科学研究科教授*1
建畠 哲	京都市立芸術大学学長
富沢寿勇	静岡県立大学副学長*3
松田 凡	京都文教大学総合社会学部長*3
松田素二	京都大学大学院文学研究科教授*2
吉岡政徳	神戸大学大学院国際文化学研究科教授*1
渡邊欣雄	國學院大學文学部教授
(館内)	
朝倉敏夫	文化資源研究センター長*1*2*3
韓 敏	民族社会研究部長*1*2*3
岸上伸啓	研究戦略センター長*1*2*3
久保正敏	文化資源研究センター教授 総合研究大学院大学文化科学研究科 地域文化学専攻長*1
杉本良男	副館長 (企画調整担当) 情報管理施設長*1*2
寺田吉孝	先端人類科学研究部長*1*2*3
西尾哲夫	副館長 (研究・国際交流担当) 国際学術交流室長*1*2
八杉佳穂	民族文化研究部長*1*2*3

注) *1 人事委員会委員
*2 共同利用委員会委員
*3 研究倫理委員会委員

●外部評価委員会

安達 淳	国立情報学研究所副所長
黒柳俊之	独立行政法人国際協力機構理事
小泉潤二	大阪大学大学院人間科学研究科教授
野村正朗	公益財団法人りそなアジア・オセアニア 財団理事長
八村廣三郎	立命館大学情報理工学部長
堀井良殷	公益財団法人大阪21世紀協会理事長
宮田亮平	東京藝術大学学長
三輪嘉六	国立文化財機構九州国立博物館長
山本真鳥	法政大学経済学部教授

館内運営組織 (2013年3月31日現在)

●部長会議

●館内各種委員会

自己点検・評価委員会	大学院委員会
福利厚生委員会	図書委員会
安全衛生委員会	学術情報リポジトリ委員会
ハラスメント防止委員会	情報システム委員会 (休止)
広報企画会議	情報システム整備委員会
機関研究運営会議	文化資源運営会議
刊行物審査委員会	集団研修博物館学集中コース運営委員会
研究出版委員会	施設マネジメント委員会
知的財産委員会	危機管理委員会
科学研究費補助金管理体制検討委員会	東日本大震災被災地支援対策会議
「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点運営委員会	

現員 (2013年3月31日現在)

区 分	館長	教授	准教授	助教	特任教授	事務職員・技術職員	計
館長	1						1
管理部						25	25
情報管理施設						19	19
研究部		16	16	4	1		37
研究戦略センター		6	2	2			10
文化資源研究センター		5	5	2			12
小計	1	27	23	8		44	104
客員 (国内)		14	7				21
客員 (国外)*		9	3				12
計	1	50	33	8	1	44	137

注) 客員 (国外)*は、のべ人数

歴代館長・名誉教授 (2013年3月31日現在)

●歴代館長

初 代／梅棹忠夫 (故人)	1974年 6月～1993年 3月
第 2代／佐々木高明	1993年 4月～1997年 3月
第 3代／石毛直道	1997年 4月～2003年 3月
第 4代／松園萬亀雄	2003年 4月～2009年 3月
第 5代／須藤健一	2009年 4月～

●名誉教授

祖父江孝男 (故人)	1984年 4月 1日	端 信行	2001年 4月 1日
岩田慶治 (故人)	1985年 4月 1日	小山修三	2002年 4月 1日
加藤九祚	1986年 4月 1日	森田恒之	2002年 4月 1日
伊藤幹治	1988年 4月 1日	石毛直道	2003年 4月 1日
中村俊亀智 (故人)	1988年 4月 1日	栗田靖之	2003年 4月 1日
君島久子	1989年 4月 1日	杉田繁治	2003年 4月 1日
和田祐一 (故人)	1990年 4月 1日	熊倉功夫	2004年 4月 1日
垂水 稔 (故人)	1991年 4月 1日	立川武藏	2004年 4月 1日
杉本尚次	1992年 4月 1日	田邊繁治	2004年 4月 1日
梅棹忠夫 (故人)	1993年 4月 1日	藤井龍彦	2004年 4月 1日
大給近達	1993年 4月 1日	山田陸男 (故人)	2004年 4月 1日
片倉素子 (故人)	1993年 4月 1日	江口一久 (故人)	2005年 4月 1日
竹村卓二 (故人)	1994年 4月 1日	大塚和義	2005年 4月 1日
周 達生	1995年 4月 1日	松原正毅	2005年 4月 1日
松澤員子	1995年 4月 1日	石森秀三	2006年 4月 1日
大丸 弘	1996年 4月 1日	野村雅一	2006年 4月 1日
友枝啓泰 (故人)	1996年 4月 1日	大森康宏	2007年 4月 1日
藤井知昭	1996年 4月 1日	山本紀夫	2007年 4月 1日
佐々木高明	1997年 4月 1日	松園萬亀雄	2009年 4月 1日
杉村 棟	1997年 4月 1日	松山利夫	2010年 4月 1日
和田正平	1998年 4月 1日	長野泰彦	2011年 4月 1日
清水昭俊	2000年 4月 1日	秋道智彌	2012年 4月 1日
黒田悦子	2001年 4月 1日	中牧弘允	2012年 4月 1日
崎山 理	2001年 4月 1日		

研究部教員の紹介 (2013年3月31日現在)

組織図に基づく現員一覧

館長		須藤健一		
副館長 (企画調整担当)		杉本良男		
副館長 (研究・国際交流担当)		西尾哲夫		
館長補佐		園田直子		
研究部	職名・研究部門	教授	准教授	助教
民族社会研究部	研究部長	韓 敏		
	民族動態	小長谷有紀	三島禎子	菅瀬晶子
		庄司博史	横山廣子	
	人類環境	池谷和信	飯田 卓	
印東道子		MATTHEWS, Peter J.		
社会システム	田村克己	宇田川妙子	太田心平	
		佐藤浩司		
民族文化研究部	研究部長	八杉佳穂		
	認知・表象	塚田誠之	信田敏宏	齋藤玲子
		森 明子	山中由里子	
	文化構造	杉本良男	新免光比呂	藤本透子
		廣瀬浩二郎		
民族技術・芸術	近藤雅樹	菊澤律子		
	吉本 忍	白川千尋	丹羽典生	
先端人類科学研究部	研究部長	寺田吉孝		
	理論民族学	佐々木史郎	齋藤 晃	
		鈴木七美 竹沢尚一郎	陳 天璽	
グローバル現象	関本照夫*	鈴木 紀		
研究戦略センター	岸上伸啓 (センター長)	檜永真佐夫	伊藤敦規	
	笹原亮二	三尾 稔	小川さやか	
	關 雄二			
	西尾哲夫			
	野林厚志			
	平井京之介			
文化資源研究センター	朝倉敏夫 (センター長)	林 勲男	上羽陽子	
	久保正敏	日高真吾	川瀬 慈	
	小林繁樹	福岡正太		
	園田直子	南 真木人		
	吉田憲司	山本泰則		
国際学術交流室	西尾哲夫 (室長)	菊澤律子 (兼)		
	印東道子 (兼)	陳 天璽 (兼)		
		信田敏宏 (兼)		
		MATTHEWS, Peter J. (兼)		
		山中由里子 (兼)		

*特任研究員 (特任教授) を示す。

1946年生。【学歴】埼玉大学教養学部卒（1969）、東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）修士課程修了（1972）、東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）博士課程単位取得満期退学（1975）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1975）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1986）、神戸大学国際文化学部教授（1993）、神戸大学国際文化学部長（2000）、神戸大学大学院総合人間科学研究科長（2002）、神戸大学附属図書館長（2005）、神戸大学大学院国際文化学研究科教授（2007）、国立民族学博物館館長（2009）【学位】文学博士（東京都立大学 1986）、文学修士（東京都立大学 1972）【専攻・専門】社会人類学、オセアニアの社会と文化、海外移住、伝統政治と民主主義【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、南島史学会、生態人類学会、ニュージーランド学会

【主要業績】

[単著]

須藤健一

2008 『オセアニアの人類学——海外移住、民主化、伝統の政治』東京：風響社。

1989 『母系社会の構造——サンゴ礁の島々の民族誌』東京：紀伊国屋書店。

[編著]

須藤健一編

2012 『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』東京：風響社。

【受賞歴】

2010 第2回石川榮吉賞

1985 第16回澁澤賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

オセアニアの移民と母社会の生活戦略に関する人類学的研究

・研究の目的

オセアニア島嶼国、とりわけミクロネシアとポリネシア地域からの海外移住の歴史は半世紀を経るが、母社会の居住者は移民への送金依存体質からの脱皮を目指した生活戦略を試みている。本年度は、その動きを母社会におけるインフォーマルセクターとトランスナショナル・ビジネスの展開をとおしてオセアニアにおける海外移住の社会・経済的な特徴を明らかにする。

・成果

トンガ社会は、現在でも海外からの仕送りが国内総生産の30パーセントを占めており、国民経済は海外移住者の送金に依存する体質を継続してきている。しかし、政治的には、海外移住者の政治経済的支援もあり、君主制から民主制へと徐々に変化しつつある。特に、選挙制度改革がすすみ、2010年の総選挙では平民議員が貴族議員を凌ぎ過半数を占めた。このような民主化の動きとともに、海外移住者から贈られる商品（中古品）をインフォーマルセクター（フリーマーケット）で販売し経済的利益を求める動きが2000年頃から顕著になってきている。そのような国民の政治的・経済的な自律志向の動きについて論文で発表した（須藤 2012）。

◎出版物による業績

[共編]

須藤健一編

2012 『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』東京：風響社。

須藤健一・清水久夫編

2012 『土方久功日記Ⅳ』土方久功著（国立民族学博物館調査報告108）大阪：国立民族学博物館。

柄木田康之・須藤健一編

2012 『オセアニアと公共圏——フィールドワークからみた重層性』京都：昭和堂。

[論文]

須藤健一

- 2012 「序」須藤健一編『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』pp. 1-12, 東京：風響社。
- 2012 「トンガ王国の政治改革と君主制への固執」須藤健一編『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』pp. 155-181, 東京：風響社。
- 2012 「母系社会のしくみ——土方久功が住んだ50年後のサタワル」土方久功著、須藤健一・清水久夫編『土方久功日記Ⅳ』（国立民族学博物館調査報告108）pp. 593-629, 大阪：国立民族学博物館。
- 2012 「はじめに——オセアニア島嶼国の動き」柄木田康之・須藤健一編『オセアニアと公共圏——フィールドワークからみた重層性』pp. i-xiv, 京都：昭和堂。

[その他]

須藤健一

- 2012 「こころの玉手箱」5回連載『日本経済新聞』4月16日, 17日, 18日, 19日, 20日夕刊。
- 2012 「はじめに」『月刊みんぱく』編集部編『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』pp. i-ii, 東京：丸善出版。
- 2012 「あとがき」須藤健一編『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』pp. 327-330, 東京：風響社。
- 2012 「記念講演 島世界をつなぐ知と技——今に生きる航海術」『第39回技術士全国大会（大阪）』pp. 106-111, 公益社団法人日本技術士会。
- 2013 「旅・いろいろ地球人 贈り物① 三つの義務」『毎日新聞』1月10日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年9月22日 「島世界をつなぐ知と技——今に生きる航海術」第39回技術士全国大会、大阪国際交流センター
- 2013年1月13日 「心のなかに島を描く——マイクロネシアの島認識法」岡山大学人文学フロンティア2012シンポジウム『「島」に生きる、「島」を想う』、岡山大学50周年記念館
- 2013年3月2日 「カヌーと伝統的航海術——オセアニア資料の収集と展示公開」鹿児島大学シンポジウム『島フィールド学の蓄積・展示・展開』、鹿児島大学稲盛会館

・研究講演

- 2012年4月16日 『「居場所」を求めて越境する人びと——オセアニアの海外移住』第17期垂水文化講座、井植記念館ホール
- 2012年7月10日 「星と波と風と——オセアニアの航海術」関西不動産三田会7月度例会、ホテルモンテ大阪
- 2012年9月25日 「21世紀のみんぱく」2012年秋季神戸シルバーカレッジ
- 2012年10月10日 「星と波と風と——今に生きる航海術」関西RPの会、大阪凌霜クラブ
- 2012年10月27日 「海を制覇した人々——今に生きる航海術」佐渡高校関西地区同窓会、大阪弥生会館
- 2012年12月14日 「先住民の文化運動——オセアニアを中心に」大阪府立春日丘高等学校67期生総合学習「探究」民博見学会、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

- 2012年4月1日 「織りと樹皮布づくり」第247回みんぱくウィークエンド・サロン
- 2012年9月16日 子守康範（MBS ラジオパーソナリティ）× 須藤健一（みんぱく館長）スペシャル対談「ラジオパーソナリティと館長が歩いた南の島々——イースター島からサタワル島まで」国立民族学博物館
- 2013年1月20日 「すいたんと行こう！みんぱく学校で世界のくらし大発見」吹田にぎわい観光協会主催、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

- 2012年5月24日～6月7日—アメリカ合衆国（アメリカ合衆国南西部の先住民博物館等の視察）
- 2012年6月14日～17日—大韓民国（韓国国立民俗博物館との交流協定更新）
- 2012年7月14日～22日—モンゴル（モンゴル科学技術大学にて日本学術振興会研究拠点形成事業公開セミナー参加およびウランバートル市内の博物館視察）
- 2012年8月27日～8月30日—中華人民共和国（中国故宫博物院との交流協定更新および中国社会科学院との交流協定締結）
- 2013年1月27日～2月6日—フランス、オランダ（パリ・デカルト大学との学術交流協定締結およびオランダ・

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター理事、芦屋市文化振興審議会委員、関西サイエンス・フォーラム理事、京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点運営委員、公益財団法人大阪府文化財センター評議員、彩都（国際文化公園都市）建設推進協議会特別委員、財団法人日本博物館協会理事、公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団助成事業選考委員長、財団法人坂田記念ジャーナリズム振興財団理事、独立行政法人国立美術館 国際美術館評議員、財団法人大阪ユニセフ協会理事、大阪府第24回山片蟠桃賞審査委員、汎太平洋フォーラム理事、公益財団法人太平洋人材交流センター最高顧問、日本ニュージーランドセンター理事、金沢大学大学院人間社会環境研究科文化資源マネージャー養成プログラムアドバイザー、独立行政法人国際協力機構エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト国内支援委員

西尾哲夫 [にしお てつお] ————— 副館長（研究・国際交流担当）、研究戦略センター教授

1958年生。【学歴】大阪外国語大学外国語学部アラビア語科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程言語学専攻修了（1984）、京都大学大学院文学研究科博士後期課程言語学専攻満期退学（1987）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1989）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（1994）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1998）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2006）、国立民族学博物館民族文化研究部長（2008）【学位】文学博士（京都大学大学院文学研究科 2005）、言語学修士（京都大学大学院文学研究科 1984）【専攻・専門】言語学・アラブ研究 1）アラブ遊牧民の言語人類学的研究 2）アラビアン・ナイトをめぐる比較文明学的研究【所属学会】日本言語学会、日本中東学会、日本オリエント学会

【主要業績】

[単著]

西尾哲夫

- 2011 『世界史の中のアラビアンナイト』（NHK ブックス）東京：NHK 出版。
- 2007 『アラビアンナイト——文明のはざまに生まれた物語』東京：岩波書店。
- 2006 『アラブ・イスラム社会の異人論』京都：世界思想社。

【受賞歴】

- 2011 第28回田邊尚雄賞（東洋音楽学会）
- 1992 オリエント学会奨励賞、新村出記念財団研究助成賞、流沙海西奨学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

オリエンタリズムの文学空間創出メカニズムの研究

・研究の目的

アラビアンナイトは、オリエンタリズムという時代的文化的枠組に規定されることによって、現代における一般の中東イメージ構築への地下水脈としての役割を果たしてきた。本研究では、ガラン訳アラビアンナイト出現以降（18世紀以降）のアラビアンナイト受容による文明間イメージ形成と文学テキスト生成の相互作用を明らかにする。具体的には、三菱財団人文科学研究助成による「アラビアンナイト仏語訳者マルドリユスの遺贈コレクションに関する書誌学的研究」の一環として、マルドリユス遺贈コレクションの調査をおこなうとともに、当該資料の目録化とデジタル化を実施した。

・成果

- 1) 論文として、“The Takarazuka Revue and the Fantasy of “Arabia” in Japan”. In *Scheherazade’s Children: Global Encounters with the Arabian Nights*, edited by Marina Warner and Philip F. Kennedy. New York University Press (2013年11月刊行). を発表した。

- 2) 三菱財団人文科学研究助成による「アラビアンナイト伝説者マルドリユスの遺贈コレクションに関する書誌学的研究」の一環として、マルドリユス遺贈コレクションの調査をおこなった。資料の整理をとおして目録化されたデジタルデータは、『アラビアンナイトのフランス語翻訳者、ジョセフ・シャルル・マルドリユスの遺贈コレクション目録』としてフランスの出版社から刊行されることになっている。今後、多くの謎を残したマルドリユス訳の解明がすすめば、アラビアンナイト研究にとどまらずフランス文学研究全般にも大きく貢献する第一級の資料として、中東との関係も含めた当時のフランス社会に関する様々な研究が可能になる。
- 3) 科学研究費補助金（基盤研究（A））「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く」（研究代表者：西尾哲夫）による海外調査ならびに文献調査をおこなった。

◎出版物による業績

[その他]

西尾哲夫

連続エッセイ「アラビアンナイトへの誘い」

第1回「『パリのアラブ人』——〈アラジン〉を伝えた人」『EURASIA』239: 14-15。

第2回「美女のショッピング——迷宮都市フェズのバザール」『EURASIA』240: 14-15。

第3回「カイロの舞姫——現代ベリーダンス事情」『EURASIA』241: 14-15。

第4回「中世のカイロ——『カイロを見ずば、世界を見ず』」『EURASIA』242: 14-15。

第5回「ウイグルのアリババ——シルクロードのアラビアンナイト」『EURASIA』243: 16-17。

第6回「シンドバッドの海へ——インド洋のイスラム商人」『EURASIA』244: 14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2012年5月20日 「言語と文化の境界——言語人類学の再構築のために」『非境界型世界の研究——中東的な人間関係のしくみ』

・研究講演

2012年5月13日 「魅惑のアラビアンナイト」展（2012年5月9日～6月6日）ギャラリートーク『イスラーム世界とアラビアンナイト』教文館ナルニア国（東京）

2012年6月9日 「児童文学としてのアラビアンナイト——その源流と形成過程」2012年度神戸YWCA マザーズカレッジ連続講座『物語の源流を訪ねて』第1回

2012年7月3日 「児童文学としてのアラビアンナイト」東京子ども図書館

2012年7月8日 「アラビアンナイトの香り」香研究会第11回セミナー、ふくい南青山291ホール（東京）

2013年1月23日、30日 「アラブの春とアラビアンナイト」川西市清和台公民館民族学講座、兵庫県川西市清和台公民館

・広報・社会連携活動

2012年4月15日 「新生アラビア語が生んだ“フェイスブック革命”」第249回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

2012年5月26日～6月5日—フランス・オーストリア（アラビアンナイト伝説者マルドリユスの遺贈コレクションに関する書誌学的研究調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）センター員、科学研究費補助金（基盤研究（A））「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「中東・北アフリカ地域における音文化の越境と変容に関する民族音楽学的研究」（研究代表者：水野信男）研究分担者

- ・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

三菱財団人文科学研究助成「アラビアンナイト伝説者マルドリユスの遺贈コレクションに関する書誌学的研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本オリエント学会編集委員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所運営委員

・非常勤講師

京都大学文学部「アラブ語」

杉本良男 [すぎもと よしお]——副館長（企画調整担当）、民族文化研究部教授

1950年生。【学歴】東京都立大学人文学部人文科学科卒（1974）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻修士課程修了（1977）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士課程単位取得退学（1980）【職歴】国際基督教大学教養学部社会科学科非常勤助手（1979）、南山大学文学部講師（1981）、南山大学人類学研究所第一種研究所員併任（1984）、南山大学文学部助教授（1986）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1995）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1995）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（1999）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2011）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 1995）、文学修士（東京都立大学 1977）【専攻・専門】社会人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、「宗教と社会」学会、日本南アジア学会

【主要業績】

[単著]

杉本良男

2002 『インド映画への招待状』東京：青弓社。

[編著]

杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編

2013 『スリランカを知るための58章』東京：明石書店。

立川武蔵・海津正倫・杉本良男編

2012 『朝倉世界地理講座——大地と人間の物語 4 南アジア』東京：朝倉書店。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

キリスト教文明とナショナリズム

・研究の目的

本研究は、主としてフランス革命期以後の「キリスト教文明」の展開が、南アジア地域においてどのような影響を与え、またそれがどのような問題を引き起こしているのかについて、文献研究と現地調査によって系譜論的に明らかにしようとするものである。本主題に関連して、各種外部資金により、ロシア、中国、インド文明の相互比較、津波災害復興過程における宗教間対立と融和、南インド村落社会の構造変動などについての研究を継続的に進めている。

・成果

本年度は、共同研究「キリスト教文明とナショナリズム」（2007～2011年度）の成果刊行を予定して、研究出版委員会において承認され、2013年度に刊行予定となった。

科学研究費新学術領域研究・計画研究「地域大国の文化的求心力と遠心力」（研究代表者：望月哲男、2008～2012年度）により、南インドにおける宗教ナショナリズムに関する文献研究を継続し、同研究関連のシンポジウムにおいてマダム・ブラヴァツキーのインド・ナショナリズムに対する貢献について発表するとともに、成果刊行のための同趣旨の原稿を完成した。

科学研究費補助金（基盤研究（B））「独立後インドの消費変動：農村社会経済構造の長期変動との関連に注目して」（研究代表者：柳澤 悠、2010～2012年度）により、南インド農村の20年を経た再調査を実施し、この間の社会の根本的な構造変化について実証的に明らかにする試みを継続的に実施した。

科学研究費補助金（基盤研究（A））「大規模災害被災地における環境変化と脆弱性克服に関する研究」（研究代表者：林 勲男、2008～2012年度）により、南インド、タミルナドゥ州における津波被災地の復興状況につ

いて現地調査を実施し、その成果刊行にむけて整理作業を実施した。

◎出版物による業績

[共編]

立川武藏・杉本良男・海津正倫編

2012 『朝倉世界地理講座——大地と人間の物語 4 南アジア』 東京：朝倉書店。

杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編

2013 『スリランカを知るための58章』 東京：明石書店。

[論文]

杉本良男

2012 「自然・社会・文化の多様性」立川武藏・杉本良男・海津正倫編『朝倉世界地理講座——大地と人間の物語 4 南アジア』 pp. 17-31, 東京：朝倉書店。

2012 「スリランカの宗教」立川武藏・杉本良男・海津正倫編『朝倉世界地理講座——大地と人間の物語 4 南アジア』 pp. 332-340, 東京：朝倉書店。

2012 「ゾロアスター教」立川武藏・杉本良男・海津正倫編『朝倉世界地理講座——大地と人間の物語 4 南アジア』 p. 379, 東京：朝倉書店。

[その他]

杉本良男

2012 「カーストと部族」金 基淑編『カーストから現代インドを知るための30章』 pp. 59-60, 東京：明石書店。

2012 「カーストと映画」金 基淑編『カーストから現代インドを知るための30章』 pp. 128-129, 東京：明石書店。

2012 「ブラーマン——サンスクリットからIT産業へ」金 基淑編『カーストから現代インドを知るための30章』 pp. 132-139, 東京：明石書店。

2013 「スリランカという国」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 19-22, 東京：明石書店。

2013 「南アジアの中のスリランカ」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 32-35, 東京：明石書店。

2013 「王権と宗教」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 81-84, 東京：明石書店。

2013 「カーストの現在」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 122-124, 東京：明石書店。

2013 「神々と仏」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 164-167, 東京：明石書店。

2013 「得と益」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 168-173, 東京：明石書店。

2013 「アブラハムの宗教」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 174-178, 東京：明石書店。

2013 「悪魔祓いとピリット」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 184-188, 東京：明石書店。

2013 「サリーを着こなす」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 194-197, 東京：明石書店。

2013 「クリケット・マッチのある日」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 213-216, 東京：明石書店。

2013 「津波復興支援の諸問題」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 258-260, 東京：明石書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年11月16日～17日 「国際シンポジウム——大規模災害とコミュニティの再生 (International Symposium: Catastrophes and Constructing Communities)」 実行委員長、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年12月8日 「趣旨説明」新学術第6班後援研究会『ユーラシア地域大国における聖地の研究』第1回研究

会、新潟国際情報大学

2013年1月26日 「周縁からの統合イデオロギー——マダム・ブラヴァツキーとインド・ナショナリズム」新学術領域研究総括シンポジウム『ユーラシア地域大国の比較から見える新しい世界像』早稲田大学

2013年3月21日 「南インドの大津波災害からの復興」平成24年度総研大学術交流会、総合研究大学院大学

・広報・社会連携活動

2012年5月25日 「インドカレー」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2012年7月15日 みんなく映画会「インド・クラシック映画特集——放浪者」

2012年7月16日 みんなく映画会「インド・クラシック映画特集——踊り子」

2012年7月22日 みんなく映画会「インド・クラシック映画特集——音楽ホール」

2012年8月4日 みんなく映画会「インド・クラシック映画特集——シャンカラバラナム」

2012年8月5日 みんなく映画会「インド・クラシック映画特集——第一の敬意」

◎調査活動

・国内調査

2012年11月23日～25日—隠岐島巡検調査

・海外調査

2012年8月7日～17日—中華人民共和国（中国東北地方における文化統合のイデオロギーに関する調査研究）

2012年8月27日～9月10日—インド（津波災害復興過程における宗教の役割についての調査研究）

2012年12月15日～23日—インド、シンガポール（南インドのポピュラー・カルチャーとナショナリズムの関係についての調査研究）

◎大学院教育

・指導教員

副指導 1名

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（新学術領域研究）「地域大国の文化的求心力と遠心力」（研究代表者：望月哲男）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「大規模災害被災地における環境変化と脆弱性克服に関する研究」（研究代表者：林 勲男）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「独立後インドの消費変動：農村社会経済構造の長期変動との関連に注目して」（研究代表者：柳澤 悠）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

公益信託「澁澤民族学振興基金」運営委員、日本学術会議連携会員

民族社会研究部

韓 敏 [ハン ミン]————— 部長(併) 教授

【学歴】中国吉林大学外国語学部日本語科卒（1983）、中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科日本文学専攻修士課程修了（1986）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1989）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程修了（1993）【職歴】武蔵大学人文学部非常勤講師（1992）、東京大学教養学部客員研究員（1994）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2011）【学位】学術博士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科1993）、学術修士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科1989）、文学修士（中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科1986）【専攻・専門】文化人類学専攻、現代中国の漢族研究【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

Han, M.

- 2001 *Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58). Osaka: National Museum of Ethnology (『回応革命与改革——皖北李村の社会変遷与延続』南京: 江蘇人民出版社, 2007).

[編著]

韓 敏編

- 2009 『革命の実践と表象——現代中国への人類学的アプローチ』東京: 風響社。

[共編著]

Han, M. and N. Graburn

- 2010 *Tourism and Glocalization: Perspectives on East Asian Societies* (Senri Ethnological Studies 76). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

革命、改革とグローバル化の中国に関する人類学的研究

・研究の目的

本研究の目的は近代中国の革命、改革とグローバル化の過程における社会と文化の連続性と非連続性を究明することにある。具体的に文献調査・聞き取り調査・ものの収集を通して、社会主義革命理念の制度化、近代的シンボルの形成と人びとの生活実践を考察する。

・成果

本研究は科学研究費補助金（基盤研究（C））（一般）（2001～2013）「現代中国の人々の生活実践に関する人類学的ライフヒストリー・アプローチ」（研究代表者：韓 敏）のプロジェクトと連動して実施された。その成果は以下のようにまとめることができる。

- 1) 近代的シンボルと国民国家の聖地作りについて、次の論文を書いた。

韓 敏

- 2012 「毛沢東の生誕地 韶山——社会主義近代国家の新聖地」星野英紀・山中 弘・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』pp.206-211, 東京: 弘文堂。

- 2) 近代中国の革命、改革とグローバル化の過程における社会と文化の連続性と非連続性について、機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース（代表者：韓 敏 2012.4～2015.3）」で実施し、国際シンポジウム「中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究」を開催し、その成果を次のように刊行した。

韓 敏

- 2012a 「家族・民族・国家のディスコース——社会の連続性と非連続性を作りだす仕組み」『民博通信』137: 8-9。

- 2012b 「国際シンポジウム 中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究」『民博通信』139: 31。

◎出版物による業績

[論文]

韓 敏

- 2012 「毛沢東の生誕地 韶山——社会主義近代国家の新聖地」星野英紀・山中 弘・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』pp.206-211, 東京: 弘文堂。

[その他]

韓 敏

- 2012 「家族・民族・国家のディスコース——社会の連続性と非連続性を作りだす仕組み」『民博通信』137: 8-9。

- 2012 「国際シンポジウム 中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究」『民博通信』139: 31。

- 2013 「世界最長の家系図」『月刊みんぱく』37(1): 20。

Han, M.

- 2012 Cultural Transmission in Glocalization. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 34: 13.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・展示

中国地域の常設展示模様替えなど

・広報・社会連携活動

2012年8月7日 「中国の夏の遊び」『世界の夏を楽しもう!』真夏サロン

◎調査活動

・海外調査

2012年7月27日～8月2日—アメリカ合衆国（アメリカにおけるチャイナタウンの文化表象に関する資料調査）

2012年8月27日～30日—中華人民共和国（中国故宫博物院との交流協定更新及び中国社会科学院との交流協定締結）

2012年12月6日～12日—中華人民共和国（中国福建における映像取材と標本資料収集）

2013年3月24日～29日—中華人民共和国（中国におけるライフヒストリーの調査、標本資料の収集）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

◎社会活動・館外活動

・学会の開催

2012年11月24日～25日 国際シンポジウム「中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究」(Chinese Society and Ethnicity: Anthropological Frameworks and Case Studies) 国立民族学博物館

池谷和信 [いけや かずのぶ] ————— 教授

1958年生。【学歴】東北大学理学部地球科学系卒（1981）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1983）、東北大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学（1990）【職歴】北海道大学文学部附属北方文化研究施設助手（1990）、国立民族学博物館第1研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学先導科学研究科併任助教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2009～2010）【学位】理学博士（東北大学大学院理学研究科 2003）【専攻・専門】環境人類学・文化地理学 1) 世界の狩猟採集文化、家畜文化の研究 2) 植民地時代における民族社会の変容に関する研究 3) 地球環境問題に関する研究【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本地理学会、日本沙漠学会、人文地理学会、日本人類学会、日本熱帯生態学会、日本民俗学会、生き物文化誌学会、ヒトと動物の関係学会、American Anthropological Association、日本生態学会、日本養豚学会、環境社会学会

【主要業績】

[単著]

池谷和信

2003 『山菜採りの社会誌——資源利用とテリトリー』仙台：東北大学出版会。

2002 『国家のなかでの狩猟採集民——カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』（国立民族学博物館研究叢書4）大阪：国立民族学博物館。

[編著]

池谷和信編

2009 『地球環境史からの問い——ヒトと自然の共生とは何か』東京：岩波書店。

【受賞歴】

2007 日本地理学会優秀賞

1998 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

湿潤熱帯における家畜飼育に関する研究

・研究の目的

これまで、アジア・アフリカの農民を対象にした生態人類学・環境人類学的研究では、農耕活動に関する詳細な記述・分析が進められたが、農耕以外の生業については、その重要度が十分に論議されていないために、その報告は多くはない。本研究では、湿潤熱帯地域に暮らす農民（主としてバングラデシュやベトナム）を対象にして、家畜からみでの自然資源利用の様態とその変化を把握することを目的とする。

・成果

バングラデシュやベトナムにおいて、上述の研究テーマに関する現地調査を進めることができた。その成果の一部は、タイのバンコクで開催された家畜に関する国際会議で報告した。また、家畜と人とのかかわりについて概説した2冊の一般書（中学生以上を対象）『わたしたちのくらしと家畜 ①家畜ってなんだろう、②家畜にいま何がおきているのか』（いずれも童心社）を刊行した。なお、バングラデシュの豚遊牧に関する研究論文は、2013年度にSpringer社から刊行の予定である。

◎出版物による業績

[単著]

池谷和信

2013 『わたしたちのくらしと家畜 ①家畜ってなんだろう』東京：童心社。

2013 『わたしたちのくらしと家畜 ②家畜にいま何がおきているのか』東京：童心社。

[編著]

池谷和信編

2012 『ボツワナを知るための52章（エリア・スタディーズ99）』東京：明石書店。

[共著]

池谷和信ほか

2012 『高等学校 新地理A』東京：帝国書院。

[論文]

池谷和信

2012 「山地農民の採集活動の多様性——日本列島からの展望」クライナー・ヨーゼフ編『日本民族の源流を探る——柳田國男「後狩詞記」再考』pp.43-60, 東京：三弥井書店。

2012 「民博のアフリカビーズコレクション——フィールドでの資料収集と情報収集の実践」朝木由香・鈴木智香子編『ビーズ イン アフリカ』pp.106-111, 神奈川：神奈川県立近代美術館。

Ikeya, K.

2012 The Minpaku African Beads Collection: Practical Experience with Material and Information Collection. In Asaki, Y. and Suzuki, C. (eds.) *Beads in Africa*. pp.112-115. Hayama: The Museum of Modern Art.

2013 Peccary Traders and Peruvian Amazon Distribution. *The Proceedings of the International Workshop on "Incentive of Local Community for REDD and Semi-domestication of Non-timber Forest Products"* pp.59-67, Division of Environmental Ecology, Asian and African Area Studies, Kyoto University.

[その他]

池谷和信

2012 「新刊紹介 ボツワナを知るための55章 池谷和信編、明石書店」『アフリカ研究』81: 7。

2012 「『狩猟採集民』からみた新たな地球環境史」『民博通信』39: 18-19。

2012 「メンバーによる研究紹介 池谷和信」『アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究』2: 55-63。

2012 「野生でもない家畜でもないアマゾンの動物との関係性——熱帯の生き物文化に学ぶ」『生き物文化誌学会ニュースレター』28/29: 11-13。

2012 「アマゾンの動物と人——肉・皮・ペット」生き物文化誌学会・鶴岡例会プログラム・要旨集, pp.12-13。

2012 「モンスーンアジアにおける家畜文化史——豚・鶏・アヒル」『動物法ニュース』35: 43-45。

2012 「旅いろいろ地球人 風を求めて⑤ 砂漠の弓矢猟師」『毎日新聞』8月2日夕刊。

- 2012 「モンsoonアジアの家畜文化を考える」『牛のはくぶつかん』（牛の博物館ニュースレター）39: 2。
- 2012 「ラクダミルクこそパワーの源」『月刊みんぱく』編集部編『食べられる生きものたち』pp. 30-31, 東京: 丸善出版。
- 2012 「はじめに——ボツワナとはどのような国か?」『ボツワナを知るための52章』pp. 3-11, 東京: 明石書店。
- 2012 「憎きライオン——カラハリの獣害問題」『ボツワナを知るための52章』pp. 34-37, 東京: 明石書店。
- 2012 「アフリカのゾウの王国」『ボツワナを知るための52章』pp. 42-43, 東京: 明石書店。
- 2012 「ヘレロ女性の衣装に刻まれた歴史——民族のアイデンティティ形成」『ボツワナを知るための52章』pp. 84-87, 東京: 明石書店。
- 2012 「スイカの栽培から利用まで——煮込み・丸焼き・蒸し焼き」『ボツワナを知るための52章』pp. 131-134, 東京: 明石書店。
- 2012 「カラハリ砂漠の狩猟——犬と人との絆」『ボツワナを知るための52章』pp. 139-142, 東京: 明石書店。
- 2012 「新たに生まれたサン・アート——絵を描くアーティストの誕生」『ボツワナを知るための52章』pp. 146-150, 東京: 明石書店。
- 2012 「押し寄せる中国人」『ボツワナを知るための52章』pp. 163-164, 東京: 明石書店。
- 2012 「首長国の誕生と変貌——19世紀のボツワナ人」『ボツワナを知るための52章』pp. 202-206, 東京: 明石書店。
- 2012 「アフリカーナーの移住とハンシー農場——カラハリ砂漠の白人マイノリティ」『ボツワナを知るための52章』pp. 213-216, 東京: 明石書店。
- 2012 「カラハリ先住民の静かな戦い——ロイ・セサナ氏のライフヒストリー」『ボツワナを知るための52章』pp. 264-268, 東京: 明石書店。
- 2012 「おわりに」『ボツワナを知るための52章』pp. 316-317, 東京: 明石書店。
- 2012 「狩猟採集民から学ぶ自然と人との共生」『at home TIME』365: 5-6。
- 2013 「書評 高倉浩樹著 極北の牧畜民サハ——進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌」『地域研究』13(2): 450-455。
- 2013 「サハラ以南のアフリカの生活・文化」帝国書院編集部『高等学校 新地理A 教授資料』pp. 148-155, 東京: 帝国書院。
- 2013 「アンダマン島民の現在——スマトラ島沖地震の6年後」『月刊みんぱく』37(3): 10-11。
- 2013 「バングラデシュにおけるブタの遊牧について」『生態人類学ニュースレター』18: 12。

Ikeya, K.

- 2012 San Citizenship in the Central Kalahari Game Reserve, Botswana. *American Anthropological Association. 2012 Annual Meeting Program*, p. 220.
- 2012 The Taming Process of Red Junglefowl. *Abstract HCMR Symposium The 15th AAAP Animal Science Congress*, p. 14.
- 2013 Peccary Traders and Peruvian Amazon Distribution. *The International Workshop on "Incentive of Local Community for REDD and Semi-domestication of Non-timber Forest Products"*, p. 11.

大光英人・池谷和信

- 2012 「JICA の活動から見たボツワナと日本——青年海外協力隊の20年」『ボツワナを知るための52章』pp. 294-299, 東京: 明石書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

- 2012年11月3日 「共同研究会の目的・方法・今後の計画」『熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から』
- 2012年12月9日 「問題提起——熱帯アメリカ低地」『熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から』
- 2013年3月16日 「現在の狩猟採集民の狩猟行動と肉食——アフリカの事例を中心として」『肉食行為の研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年5月26日 「コンゴ民主共和国・キンシャサの養豚について」第49回日本アフリカ学会、国立民族学博物館。
- 2012年6月2日 「これまでの熱帯家畜利用研究会の活動」第12回熱帯家畜利用研究会、国立民族学博物館
- 2012年6月16日 「ペルーアマゾンにおけるペッカーリーについて」第22回日本熱帯生態学会、横浜国立大学

- 2012年6月30日 「アマゾンの生き物文化——趣旨説明」第48回生き物文化誌学会、山形県鶴岡市
- 2012年6月30日 「アマゾンの動物と人——肉、皮、ペット」第48回生き物文化誌学会、山形県鶴岡市
- 2012年7月7日 (中井信介と共同発表)「タイにおける山地民の政策と地域社会——狩猟採集民ムラブリの事例」日本タイ学会、大阪大学
- 2012年7月14日 「生き物文化誌『学』とは何か——新しいまなざしが新しい世界を拓く(パネルディスカッション)」(福岡伸一・柏原精一・池谷和信・宇根 豊)」第10回生き物文化誌学会大会、福岡リーセントホテル
- 2012年7月27日 ‘From Wild to Tame: the Relationship of Wild Chicken with Mountain Farmers’ 第4回環境人類学セミナー、国立民族学博物館
- 2012年7月28日 「アフリカ狩猟採集民の世界——展示場の『もの』からのメッセージ」地球おはなし村の研修、国立民族学博物館ナビひろば
- 2012年9月24日 「南アジアの環境人類学の地平——家畜・人関係を中心として」2012年度現代インド・南アジアセミナー、国立民族学博物館
- 2012年10月7日 「アフリカの地場産業——ナイジェリアのビーズ細工の事例」日本地理学会、神戸大学
- 2012年10月7日 「コメント『ゾドと遊牧知——乾燥地災害学の体系化に向けて』(代表：篠田雅人)」日本地理学会、神戸大学
- 2012年11月15日 ‘San Citizenship in The Central Kalahari Game Reserve, Botswana’ American Anthropological Association. 2012 Annual Meeting, San Francisco, USA.
- 2012年11月27日 ‘The Taming Process of Red Junglefowlthe’ The 15th AAAP (The Asian-Australasian Association of Animal Production Societies) Animal Science Congress. Thammasart University, Rungsit Campus.
- 2012年12月1日 「熱帯アジアにおける農民の生業複合——乳に依存しない家畜飼育の事例」『乳利用の有無からの牧畜論再考——旧・新大陸の対比』(代表：平田昌弘)、京都大学東南アジア研究所
- 2012年12月8日 「コメント」日本沙漠学会沙漠誌分科会『サーヘル地域における旱魃と人間活動の変容』(代表：石本雄大)、総合地球環境学研究所
- 2012年12月11日 「地球環境から見た文明の変遷——新たな人類文明史観を求めて」『惑星科学と生命科学の融合：生命概念の普遍化をめざして』(代表：長谷川真理子)、総合研究大学院大学・葉山国際湘南村センター
- 2013年1月26日 Peccary Hide Traders and Peruvian Amazon Distribution. The International Workshop on “Incentive of Local community for REDD and semi-domestication of non-timber forest products” (Global Environment Research Fund: E-1002, Ministry of Environment, Japan)
- 2013年2月2日 「アフリカ狩猟採集民のモラルエコノミー再考」モラルエコノミー研究会、京都大学農学部
- 2013年2月10日 「コメント」『旧人・新人の狩猟具と狩猟法』文部科学省科研費新学術領域研究「交替劇」東北大学川内キャンパス
- 2013年3月29日 「家畜化と人類文化史——民族学からのアプローチ」在来家畜研究会・日本動物遺伝育種学会合同シンポジウム『家畜化とは』、安田女子大学広島キャンパス
- 2013年3月30日 「日本のコモنزと地理学」(ポスター発表)日本地理学会、立正大学熊谷キャンパス
- ・研究講演
- 2012年9月30日 「民博のビーズコレクション——フィールドワークを通して」『ビーズ イン アフリカ』、神奈川県立近代美術館・葉山
- 2012年10月26日 「コメント」みんぱく公開講演会『だから人類は地球を歩いた——太平洋へ アメリカへ』、日経ホール
- 2012年11月9日 「ブタの文化史」兵庫県阪神シニアカレッジ・国際理解学科、尼崎市中小企業センター
- 2013年1月11日 「世界の多様な自然と環境——熱帯雨林と人」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館
- ・展示
- 本館常設展示「日本地域の文化・山のくらし」新構築(養蜂、家畜飼育、焼畑、採集担当)
- 共催展示「国立民族学博物館コレクションによるビーズ・イン・アフリカ展」神奈川県立近代美術館(葉山)

・映像作品

池谷和信撮影・監修

『ヨルバのビーズ職人——ナイジェリア』（7分30秒、国立民族学博物館、2012年7月制作）

池谷和信ほか監修

テレビ東京「所さんの世界ビックリ村3」（2012年12月29日18～21時放送）

この部分は電子媒体による公開の許諾が得られていません

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

副指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（A））「熱帯地域における農民の家畜利用に関する環境史的研究」研究代表者、（基盤研究（S））「牧畜文化解析によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明とその現代的動態の研究」（研究代表者：嶋田義仁）研究分担者、（基盤研究（A））「アフリカ・モラル・エコノミーを基調とした農村発展に関する比較研究」（研究代表者：松村和彦）研究分担者、（基盤研究（A））「アフリカ熱帯林におけるタンパク質獲得の現状と将来」（研究代表者：木村大治）研究分担者、（基盤研究（A））「熱帯高地における環境開発の地域間比較研究——『高地文明』の発見に向けて」（研究代表者：山本紀夫）研究分担者、（基盤研究（B））「多起源的家畜化モデルの構築と学融合型資料収蔵システムの確立」（研究代表者：遠藤秀紀）研究分担者、環境省・地球環境研究総合推進費「地域住民のREDDへのインセンティブと森林生態資源のセミドメスティケーション化」（代表者：小林繁男）研究分担者、総合研究大学院大学・学融合研究事業「資源利用と環境に関する学融合的研究：狩猟採集から食料生産への生業の変化と社会」（代表者：本郷一美）研究分担者、総合地球環境学研究所研究プロジェクト「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性——歴史生態学からのアプローチ」（代表者：羽生淳子）研究分担者、家禽資源研究会（HCMR）研究分担者、牛車研究会（代表者：池内克史）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

Before Farming: the Archaeology and Anthropology of Hunter-gatherers, *Quarterly Online Journal* (UK) 編集委員、*Nomadic Peoples*, *Berghahn Journal* (UK) 編集委員、*Museum Anthropology* (USA) 編集委員、*Tribes and Tribals* (India) 編集委員、人文地理編集委員、人文地理学会評議員、生き物文化誌学会常任理事、ヒトと動物の関係学会評議員、北海道立北方民族博物館研究協力員、家畜資源研究会理事、国際commons会議 (The Congress of International Association of Commons) 準備委員、第10回国際狩猟採集社会会議 (10th Conference on Hunting and Gathering Societies) 準備委員

・非常勤講師

京都大学文学部及び大学院文学研究科「地理学特殊講義」「社会学特殊講義」、広島大学大学院国際協力研究科集中講義「途上国農村地域研究」

印東道子 [いんとう みちこ] ————— 教授

【学歴】 東京女子大学文理学部史学科卒 (1976)、ニュージーランド・オタゴ大学人類学部修士課程修了 (1982)、ニュージーランド・オタゴ大学人類学部大学院博士課程修了 (1988) **【職歴】** 東京女子大学文理学部史学科研究助手 (1976)、北海道東海大学国際文化学部助教授 (1988)、北海道東海大学国際文化学部教授 (1996)、国立民族学博物館民族社会研究部教授 (2000)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授 (2001)、放送大学客員教授 (2006) **【学位】** Ph.D. (オタゴ大学人類学部大学院博士課程 1989)、M.A. (オタゴ大学人類学部大学院修士課程 1982) **【専攻・専門】** オセアニア先史学・民族学 1) オセアニアの土器文化、2) 島嶼環境における人間居住 **【所属学会】** 日本オセアニア学会、日本文化人類学会、日本人類学会、日本考古学協会、Polynesian Society、New Zealand Archaeological Society、Indo-Pacific Prehistory Association

【主要業績】

[単著]

印東道子

2002 『オセアニア 暮らしの考古学』(朝日選書 715) 東京: 朝日新聞社。

[編著]

印東道子編

2007 『生態資源と象徴化』(資源人類学 7) 東京: 弘文堂。

2006 『環境と資源利用の人類学: 西太平洋諸島の生活と文化』 東京: 明石書店。

【受賞歴】

2006 大同生命地域研究奨励賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

島嶼環境への人類の移動と適応

・研究の目的

- 1) オセアニアの島嶼環境への人類の移動の様子や移動後の居住に関する研究を、科学研究費補助金(基盤研究(A))「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」(研究代表者: 松村博文)の研究分担者として行った。特に、今年度は1994年度に行ったマイクロネシア・ファイス島のハサハベイ埋葬遺跡から出土した人工遺物、人骨、自然遺物類などの分析を行った。
- 2) オセアニアへ拡散した人類文化の多様性に関して、総合研究大学院大学の戦略的研究プロジェクト「現生人類の拡散による遺伝子と文化の多様性創出に関する総合的研究」(代表者: 斉藤成也)の総括チームの一員として連携をとりながら研究を展開した。特に、人間と動植物の遺伝的多様性について、文献資料とブタの歯を利用したアイソトープ分析から考察を進めた。
- 3) 新規共同研究会「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究: 資源利用と物質文化の時空間比較」(研究代表: 小野林太郎)において、海域世界を特徴とするオセアニアへ拡散した初期の人々

の物質文化がどのように変化したかを海洋適応との関連で文献資料を収集した。

・成果

- 1) 2008～2012年に行った民博共同研究会「人類の移動誌：進化的視点から」の成果刊行物を企画、編集した。2013年4月に臨川書店から印東道子編『人類の移動誌』として刊行予定である。
- 2) 同上共同研究会の成果に関して企画された『みんなく公開講演会 だから人類は地球を歩いた——太平洋へアメリカへ』（2012年10月、東京・日経ホール）で「海を越えてオセアニアへ」と題した発表を行った。
- 3) 科学研究費補助金（基盤研究（A））「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」（研究分担）に関連し、ファイス島の出土人骨のDNA分析を国立科学博物館の篠田博士に依頼した結果、複雑な人類の移動史の一端が明らかになったので、連名で日本人類学会大会（慶應義塾大学）で発表を行った。
- 4) 総合研究大学院大学の戦略的研究プロジェクト「現生人類の拡散による遺伝子と文化の多様性創出に関する総合的研究」（代表者：斉藤成也）の総括チームの一員として研究を進め、日本人類学会大会で企画したシンポジウム「現生人類の多様化と均質化を遺伝子と文化から探る」（慶應義塾大学）で発表を行った。

◎出版物による業績

[論文]

小野林太郎・印東道子

2013 「ミクロネシア・ファイス島におけるサメ・マグロ類の利用と時間変化」『動物考古学』30: 83-104。
Storey A. A. *et al.*

2012 Investigating the Global Dispersal of Chickens in Prehistory Using Ancient Mitochondrial DNA Signatures. *PLoS ONE* 7(7): e39171.

[その他]

印東道子

2012 「旅・いろいろ地球人 ずらりと並べる⑧ ウミガメの分配」『毎日新聞』6月28日夕刊。

2012 「島を『楽園』に変えたポリネシア人」『紫明』31: 26-30。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年6月30日 「人類の海域への急速な拡散——オーストラリアへ、そしてポリネシアへ」第2回交替劇プロジェクト公開講座、キャンパス・イノベーションセンター東京
- 2012年10月26日 「海を越えてオセアニアへ」みんなく公開講演会『だから人類は地球を歩いた——太平洋へアメリカへ』日経ホール
- 2012年11月2日 「考古データから見たオセアニアにおける現生人類の多様化と均質化——土器文化を中心に」第66回日本人類学会大会発表、慶應義塾大学
- 2012年11月4日 「ファイス島出土人骨のミトコンドリアDNA分析」（篠田謙一・印東道子）第66回日本人類学会大会発表、慶應義塾大学

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（2人）

・論文審査

博士論文審査委員長（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
- 総合研究大学院大学学融合推進センター戦略的研究プロジェクト「現生人類の拡散による遺伝子と文化の多様性創出に関する総合的研究」（代表者：斉藤成也）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」（研究代表者：松村博文）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本人類学会評議員、日本オセアニア学会理事、同評議員、日本学術会議連携会員、*People and Culture in Oceania* 編集委員、*Anthropological Science* 和文誌編集委員、*Journal of Island and Coastal Archaeology* (Routledge) 編集委員、*Journal of Pacific Archaeology* (New Zealand Archaeological Association) 編集委員

小長谷有紀 [こながや ゆき] 教授

1957年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1983）、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学（1986）【職歴】京都大学文学部助手（1986）、国立民族学博物館第1研究部助手（1987）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1993）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2000）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2004）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2009-2011）【学位】文学修士（京都大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】人文学【所属学会】日本文化人類学会、日本モンゴル学会、人文地理学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

小長谷有紀

1996 『モンゴル草原の生活世界』（朝日選書 551）東京：朝日新聞出版。

1991 『モンゴルの春——人類学スケッチ・ブック』東京：河出書房新社。

[編著]

小長谷有紀編

2004 『モンゴルの二十世紀——社会主義をきたた人びとの証言』東京：中央公論新社（中公叢書）。

【受賞歴】

2009 大同生命地域研究奨励賞

2007 モンゴル国ナイラムダルメダル（友好勲章）

1993 第29回翻訳出版文化賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴルにおける社会主義的近代化

・研究の目的

これまで、「モンゴルにとって20世紀とはなんであったか？」という問いを立てて行ってきた研究を継承しつつ、「社会主義的近代化とはなんであったか？」という問いへと問題を鋭角に転換して、各個研究ではモンゴルおよび中国内モンゴル自治区についての事例研究を目的とする。社会主義的近代化を体現した当事者たちによるナラティブ（語り）を収集し、それらを多声的に構成して近代化という時空間に関するモノグラフ（民族誌的歴史）を描くことによって、正統な歴史記述とは異なるテキストをナラティブから構成する。

・成果

- 1) インタビューの口述資料のうち、国立民族学博物館調査報告（SER）41号および71号に収録したインフォーマントより3名を選択し、コロンビア大学のロッサビ特任教授のもとで監修し、SER107号として刊行した。
- 2) インタビュー口述資料のうち、ハラホリン農場に係る3名のモンゴル語、日本語のテキストをそれぞれ完成させた。SERに資料として来年度に提出する予定である。
- 3) 農業については、英語論文、モンゴル語論文のほかに、国営農場の資料集をSER110号として刊行した。
- 4) ポスト社会主義時代についても、女性に焦点をあて、外来研究員のマクスダ氏と共同でインタビューの口述資料集をSER112号として刊行した。

なお、梅棹資料に関する共同研究の成果を優先させたため、未刊行の口述史資料について刊行するまでにはいたらなかった。梅棹忠夫アーカイブズに関連する業績は以下4点。

小長谷有紀 「ゲーテと梅棹忠夫」『モルフィギア』34: 33-45, ナカニシヤ出版。

小長谷有紀 「梅棹忠夫のモンゴル調査におけるスケッチ資料」『国立民族学博物館研究報告』37(1): 91-122, 国立民族学博物館。

小長谷有紀 「梅棹忠夫のコレクション精神」『民族藝術』29: 60-66, 民族芸術学会。

小長谷有紀・堀田あゆみと共編 『梅棹忠夫モンゴル調査スケッチ原画集』（国立民族学博物館調査報告111）、

国立民族学博物館。

◎出版物による業績

[共編]

小長谷有紀・チョローン編

2013 『モンゴル国営農場資料集』(国立民族学博物館調査報告110) 大阪: 国立民族学博物館。

小長谷有紀・堀田あゆみ編

2013 『梅棹忠夫モンゴル調査スケッチ原画集』(国立民族学博物館調査報告111) 大阪: 国立民族学博物館。

Konagaya, Y., Lkhagvasuren, I. (interviews conducted), M. Rossabi (trans.) and M. Rossabi (ed. and intro.)

2012 *A Herder, a Trader, and a Lawyer; Three Twentieth-Century Mongolian Leaders* (Senri Ethnological Reports 107) Osaka: National Museum of Ethnology.

Konagaya, Y. and S. Maqsooda (eds.)

2013 *Development Trajectories for Mongolian Women in and after Transition* (Senri Ethnological Reports 112) Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

小長谷有紀

2012 「中央ユーラシアの社会主義的近代化——カザフスタンとモンゴルの対比から」『中央アジア環境史 第3巻 激動の近現代』pp.5-22, 京都: 臨川書店。

2012 「ゲーテと梅棹忠夫」『モルフォロジー』34: 33-45。

2012 「梅棹忠夫のモンゴル調査におけるスケッチ資料」『国立民族学博物館研究報告』37(1): 91-122。

2013 「梅棹忠夫のコレクション精神」『民族藝術』29: 60-66。

2013 「モンゴルにおける遊牧——その特徴がしめす現代の変容」佐藤洋一郎ほか編『イエローベルトの環境史——サヘルからシルクロードへ』pp.88-96, 東京: 弘文堂。

2013 「チンギス・ハーン崇拜の近代的起源——日本とモンゴルの応答関係から」『国立民族学博物館研究報告』37(4): 425-447。

Konagaya, Y., N. Yamamura *et al.* (eds.)

2012 *The Impact of Agricultural Development on Nomadic Pastoralism in Mongolia: The Mongolian Ecosystem Network*, pp.255-267. Tokyo: Springer.

Konagaya, Y. and A. Maekawa

2012 Characteristics and Transformation of the Pastoral System in Mongolia. In N. Yamamura *et al.* (eds.) *The Mongolian Ecosystem Network*, pp.9-21. Tokyo: Springer.

2012 Mongol ulsyn gazar tariangiin salbaryn khögjil, nüüdiin mal aj akhuid nölöolsön ni. In Z. Baasanjargal *et al.* (eds.) *Mongolyn nüüdiin mal aj akhui ekosistemiin süljee*, pp.380-395. Ulaanbaatar (モンゴル語「モンゴル国における農業開発の遊牧に対する影響」).

2012 Mongol Ulsyn Belcheeriin mal aj akhuin yalgarakh whinj ba tuunii oorchlolt. In Z. Baasanjargal *et al.* (eds.) *Mongolyn nüüdiin mal aj akhui ekosistemiin süljee*, pp.451-466. Ulaanbaatar (モンゴル語「モンゴル国の牧畜の特長とその変容」).

[書評]

小長谷有紀

2012 「原 克著『白物家電の神話——モダンライフの表象文化論』」『信濃毎日新聞』4月15日朝刊。

2012 「スティーブン・ラーソン著『ミレニアム1』」『信濃毎日新聞』5月6日朝刊。

2012 「高倉浩樹編『極寒のシベリアに生きる——トナカイと氷と先住民』」『信濃毎日新聞』6月3日朝刊。

2012 「梅棹忠夫と梅棹アーカイブのいま」『新日本海新聞』6月3日朝刊。

2012 「窪田順平監修『中央アジア環境史1——環境変動と人間』」『信濃毎日新聞』7月1日朝刊。

2012 「宮本常一著『忘れられた日本人』」『信濃毎日新聞』7月29日朝刊。

2012 「山極寿一著『子育てが人間にもたらす平穏』」『信濃毎日新聞』11月4日朝刊。

2013 「ドンドウブジャ著『ここにも激しく躍動する生きた心臓がある』」『信濃毎日新聞』1月6日朝刊。

2013 「小玉武著『佐治敬三』」『信濃毎日新聞』1月6日朝刊。

2013 「高野秀行著『移民の宴』」『信濃毎日新聞』2月3日朝刊。

[その他]

小長谷有紀

2012 「梅棹忠夫モンゴル見聞録」『読売新聞』7月19日夕刊。

2012 「ウマと子どもたち」企画展パンフレット『スーホの白い馬と草原の民』pp.5-7, 財団法人馬事文化財団。

2012 「トゥバ人たちの住むところ——中国・ロシア・モンゴルをまたいで」『図書』766: 14-19。

2013 「梅棹スケッチ原画の底本をつくる」『民博通信』140: 26-27。

Konagaya, Y.

2013 The History of Agricultural Development in Mongolia: Seeking the Trade off between Development and Conservation. In Akiko Sakai (eds), *Callapse and Restoration of Ecosystem Networks with Human Activity*, pp.74-78, Kyoto: RIHN (総合地球環境学研究所)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年8月25日 「Narrative on the Socialist Life as the Legacy of Perestroika」, IIASワークショップ “The Legacy of Perestroika Discourses in Knowledge Production on Central Asia”, ウランバートル大学

2012年9月12日 「人文科学・社会科学における研究の国際化と学際化」科学研究費助成事業支援プログラム、神戸学院大学

2013年1月15日 「スーダン調査報告」科学研究費補助金（基盤（B））『アフロユーラシアにおける初期農業・牧畜文化の比較研究』（研究代表者：佐藤洋一郎）報告会、キャンパスプラザ京都

2013年2月26日 「モンゴル文化遺産に関する日本の協力20年の全容」文化遺産国際協力コンソーシアム第16回アジア中央アジア分科会、東京文化財研究所

◎調査活動

・海外調査

2012年4月23日～5月13日—中華人民共和国（共同研究「梅棹忠夫モンゴル研究資料の学術的利用」の国際化に関わる中国内蒙古調査）

2012年6月6日～21日—フィンランド、エストニア（日本関連の在外資料調査）

2012年7月17日～8月20日—モンゴル、中華人民共和国、ロシア（モンゴルの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査、及びトゥバの現代変容に関する映像音響資料収集）

2012年8月23日～27日—モンゴル（国際アジア研究所のワークショップ参加）

2012年9月15日～10月1日—エチオピア、スーダン（アフロユーラシアにおける初期農耕・牧畜文化の比較研究）

2013年3月20日～24日—モンゴル（モンゴル国立法律研究所での科研費「モンゴルの国土利用と自然環境保全のあり方に関する文理融合型研究」報告会参加及び調査研究）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）、外国人特別研究員（1人）

・論文審査

博士論文審査委員（2件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究(A)）「モンゴル・中央アジアにおける社会主義的近代化に関する比較研究」（代表者：小長谷有紀）研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「灌漑管理統合評価指標の開発～改めて『良い灌漑とは？』」（研究代表者：渡邊紹裕）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究(A)）「近代世界におけるジェノサイド的現象に関する歴史的研究」（研究代表者：石田勇治）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究(A)）「モンゴルの土地利用と自然環境保全のあり方に関する文理融合型研究」（代表者：加藤和久）連携研究者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

中央環境審議会委員、2012年度JRA賞馬事文化賞選考委員会委員、人間文化研究機構総合地球環境学研究所運

営会議委員、東京大学東洋文化研究所付属東洋学研究情報センター運営委員会委員、日本学術会議連携委員、科学研究費委員会専門委員、地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム査読委員、平成24年度グローバルCOEプログラム委員会専門委員

・学会の開催

2013年1月8日～9日 国際研究フォーラム『国際共同取材、中国・ロシア・モンゴル国のトゥバ人たち——テュルク系とモンゴル系のあいだ』国立民族学博物館

2013年2月15日 国際シンポジウム『モンゴル国における鉱業開発の諸問題——歴史的視点から』国立民族学博物館

庄司博史 [しょうじ ひろし]————— 教授

【学歴】 ヘルシンキ大学文学部卒（1977）、関西外国語大学大学院外国語研究科修士課程修了（1980）【職歴】 国立民族学博物館第3研究部助手（1980）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1990）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1991）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部部長（2000-2002）、総合研究大学院大学文化科学科比較文化専攻長（2003-2004）【学位】 文学修士（関西外国語大学 1980）【専攻・専門】 言語学、ウラル語学、言語政策論【所属学会】 日本ウラル学会、日本言語学会、日本社会言語科学会、日本移民学会、多言語化現象研究会

【主要業績】

[編著]

庄司博史編

1999 『ことばの二〇世紀』（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容6）東京：ドメス出版。

[共編]

庄司博史・P. バックハウス・F. クルマス編

2009 『日本の言語景観』東京：三元社。

真田信治・庄司博史編

2005 『事典——日本の多言語社会』東京：岩波書店。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本の多民族化・多言語化の実態についての研究

・研究の目的

本研究では近年の外国人増加にともなう地域の多民族化の実態をふまえ、多民族化がいかにかに社会の多言語化に影響するか、また多言語化はいかにかに日本社会の言語間の関係、日本人の言語意識にかかわるかに焦点をあて研究を進めてきた。今年度は、特に多言語化の実態を移民言語政策、移民母語教育とのかかわりに注目しつつ調査研究をすすめる。また非識字者の社会参加に関する研究も国際比較の観点から進める予定である。本研究は、共同研究「日本の移民コミュニティと移民言語」（代表者：庄司博史）との連携のもとすすめている。

・成果

今年度は、以下の出版、および学会での口頭による発表、講演をおこなった。

◎出版物による業績

[共編]

『月刊みんぱく』編集部編／久保正敏・庄司博史責任編集

2012 『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』東京：丸善出版。

[その他]

庄司博史

2012 「多『民族』は共存できるのか——ヨーロッパのころみ」『月刊みんぱく』36(6): 8-9。

2012 「『みんぱく』ヨーロッパ展示の移民コーナーをリニューアル」『M ネット』150: 20。

2012 「北欧の森と人びとをつなぐビルベリー」『月刊みんぱく』編集部編『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』pp. 8-9, 東京：丸善出版。

- 2012 「移民の母語教育最前線——フィンランド」『季刊民族学』36(3): 66-86。
- 2012 「移民の識字問題——多言語サービス、日本語指導、母語教育、そして？」『民博通信』138: 18-19。
- 2012 「マンガ文化は永遠か」『月刊みんぱく』36(11): 20。
- 2012 「セト語——国境で分断されたことばと人びと」小森宏美編『エストニアを知るための59章』pp. 68-72, 東京: 明石書店。
- 2012 「民族衣装——民族をまもり育てた一世紀」小森宏美編『エストニアを知るための59章』pp. 252-256, 東京: 明石書店。
- 2012 「エストニア全国歌謡祭——民族と国をつくった祭り」小森宏美編『エストニアを知るための59章』pp. 257-261, 東京: 明石書店。
- 2012 (翻訳解説)「サーミ言語語法」歴史学研究会編『世界史史料』11 (20世紀の世界II——第二次世界大戦後 冷戦と開発) pp. 396-397, 東京: 岩波書店。
- 庄司博史・久保正敏
- 2012 「おわりに」『月刊みんぱく』編集部編『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』pp. 116-117, 東京: 丸善出版。
- ◎口頭発表・展示・その他の業績
- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年3月9日 「総合コメント」シンポジウム『グローバル化社会における多言語使用と外国語教育』慶応大学次世代研究プロジェクト推進プログラム『非英語圏にすむ日本語母語話者の言語生活』共同研究プロジェクト、慶應義塾大学三田キャンパス
 - ・共同研究会

2012年11月11日 「試論——資産としての移民言語」移民言語と多言語景観研究会『日本の移民コミュニティと移民言語』(明海大学大学院言語景観研究会共催) 明海大学
 - ・研究講演

2012年8月7日 「日本の多民族化、多言語化」関西国際センター・国内大学連携大学生訪日研修、国立民族学博物館

2012年7月26日 「学校における地域を意識した多文化教育のありかた」大阪市小学校教育研究会此花支部 国際理解教育部夏季研修会(西九条小学校)

2012年11月16日 「言語景観」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2013年1月26日 「北欧のパン——ライ麦パンってどんな味？」やっぱりヨーロッパ——春のみんぱくフォーラム・パンセミナー
 - ・みんぱくゼミナール

2013年2月16日 「変わるヨーロッパの言語地図——多『言語』社会から『多言語』社会へ」第417回みんぱくゼミナール
 - ・広報・社会連携活動

2013年1月12日 (映画解説)『パリ20区、僕たちのクラス』みんぱく映画会
- ◎調査活動
- ・海外調査

2012年8月18日～9月12日—フィンランド、エストニア、スウェーデン(「移民女性の言語問題——ハンディ克服のための言語習得戦略と言語支援とのかかわり」の調査、海外日本資料調査研究関連の調査)
- ◎大学院教育
- ・指導教員

主任指導教員(2人)
 - ・博士論文審査

博士論文審査委員(1件)
- ◎上記以外の研究活動
- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金(基盤(C))「移民女性の言語問題——ハンディ克服のための言語習得戦略と言語支援とのかかわり」(研究代表者: 金 美善) 研究分担者

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

関西外国語大学「フィンランド語」、京都外国語大学「言語と文化」

田村克己 [たむら かつみ] ————— 教授

1949年生。【学歴】 東京大学教養学部教養学科文化人類学専攻卒業（1972）、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了（1975）【職歴】 鹿児島大学教養部助手（歴史学科）（1975）、鹿児島大学教養部講師（文化人類学科）（1976）、鹿児島大学教養部助教授（文化人類学科）（1980）、金沢大学文学部助教授（行動科学科文化人類学講座）（1982）、国立民族学博物館研究部助教授（1989）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1989）、国立民族学博物館研究部教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科長（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2003）、国立民族学博物館副館長（2005）、国立民族学博物館情報管理施設長（2005、2010）【学位】 社会学修士（東京大学 1975）【専攻・専門】 東南アジア文化人類学【所属学会】 日本文化人類学会、東南アジア学会

【主要業績】

[編著]

田村克己編

1999 『文化の生産』（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容4）東京：ドメス出版。

[共編]

田村克己・根本 敬編

1997 『暮らしがわかるアジア読本 ビルマ』東京：河出書房新社。

[論文]

田村克己

1996 「ビルマの建国神話について」『国立民族学博物館研究報告』20(4): 607-645。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジアにおける国家と文化に関する人類学的研究

・研究の目的

東南アジアは今、大きな転換点にある。ここ数十年の経済のグローバル化、経済成長にともなう域内の経済発展により、この地域内外の関係は一層緊密化し、このことは文化の面においても現れている。ミャンマーを中心として、国家と文化の関わり方の動態を改めて調査・研究し、比較・分析することによって、この課題について新たな学問的展開を図りたい。とくにミャンマーはこの数年急激な民主化が進み、経済的・社会的変化が著しく、その中でビルマの文化の現在を国の政策との関わりから研究・調査を進める。

・成果

上記の目的にしたがい、研究を進めた。以下はその成果の一部である。2012年5月に釜山で開催された“2012 International Conference of ISEAS, IMS, IIAS/BUFS”にて、“Religious Syncretism as Outer Civilization: Comparative Study in Burma, Vietnam and Japan”というタイトルで研究発表を行い、また本発表をもとにした論文が釜山外国語大学東南アジア研究所発行のSUVANNABHUMIに掲載された。また2013年2月にはアジア太平洋無形遺産文化センターにて開催された無形文化遺産シンポジウム『アジア太平洋地域における無形文化遺産の現状と課題』において、「ミャンマーにおける文化政策と博物館——無形文化遺産に関わって」というタイトルで講演を行った。また共同研究会「『統制』と公共性」に参加し、2013年1月には「『ビルマ式社会主義』下の農村社会、そしてその後」というタイトルで発表を行った。今後も研究会参加等とおして、社会的・文化的側面からビルマ研究を進めている。

◎出版物による業績

[論文]

Tamura, K.

2012 Religious Syncretism as Outer Civilization: Compative Study in Burma, Vietnam and Japan.

SUVANNABHUMI 4(1): 27-42.

[その他]

田村克己

2012 「迷える『玉座』」『月刊みんぱく』36(6): 20。

2012 「旅・いろいろ地球人 美味望郷⑦ 日本の食べ物は『甘い』」『毎日新聞』10月18日夕刊。

2012 「二つの都ネーピードー——伝統と文化の今」『記念シンポジウム講演録 激動するミャンマーはどこへ行くのか?』大妻女子大学人間生活文化研究所創立30周年記念事業。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2013年1月26日 『『ビルマ式社会主義』下の農村社会、そしてその後』『統制』と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ』東京外国語大学

・学外または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年5月18日 ‘Religious Syncretism as Outer Civilization: Comparative Study in Burma, Vietnam and Japan.’ “2012 International Conference of ISEAS, IMS, IAS/BUFS”, Busan, Korea.

・研究講演

2012年10月19日 「二つの都ネーピードー——伝統と文化の今」『激動するミャンマーはどこへ行くのか?』大妻女子大学人間生活文化研究所創立30周年記念事業

2012年11月3日 「趣旨説明」国立民族学博物館主催・日本文化人類学会後援 国際シンポジウム『漢族社会におけるヒト、文化、空間の移動——人類学的アプローチ』国立民族学博物館

2012年11月15日 「国立民族学博物館によるミャンマー博物館支援」『文化遺産国際協力コンソーシアム 第1回ミャンマーワーキンググループ』、東京文化財研究所

2013年2月17日 「ミャンマーにおける文化政策と博物館——無形文化遺産に関わって」アジア太平洋無形文化遺産研究センター・堺市主催「無形文化遺産シンポジウム『アジア太平洋地域における無形文化遺産の現状と課題』」堺市博物館

・広報・社会連携活動

2012年6月12日 「ビルマ/ミャンマーの『民主化』と文化遺産」『教養・実務講座 災害を乗り越えてきた世界遺産の保護活動』上智大学

2012年7月8日 「ビルマ/ミャンマーの口(くち)コミ力(りょく)」第260回みんぱくウィークエンド・サロン

2012年8月4日 「ビルマ/ミャンマーの『絆』の力」第410回 友の会講演会

◎調査活動

・海外調査

2012年5月17日～19日—大韓民国（釜山外国語大学における国際シンポジウム参加）

2012年7月14日～22日—モンゴル（モンゴルの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

2013年1月6日～16日—ミャンマー（ミャンマー連邦共和国における無形文化遺産の現状調査）

2013年2月20日～27日—ミャンマー（ミャンマーの博物館・博物館学に関する共同研究実施に向けた予備調査）

2013年3月18日～28日—ミャンマー（ミャンマーにおける精霊ナツの儀礼及び仏教儀礼の現地調査）

◎大学院教育

・論文審査

論文審査委員（2件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化機構連携研究「『人間文化研究資源』の総合的研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

京都大学東南アジア研究センター研究協力者、豊中市情報収集専門家会議専門委員

1969年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1992）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻修士課程修了（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻博士後期課程研究指導認定退学（1999）【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC1）（1994）、日本学術振興会特別研究員（PD）（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2000）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2006）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学 2000）【専攻・専門】生態人類学、漁民研究、マダガスカル地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、生態人類学会、地域漁業学会、日本オセアニア学会、環境社会学会

【主要業績】

[単著]

飯田 卓

2008 『海を生きる技術と知識の民族誌——マダガスカル漁撈社会の生態人類学』京都：世界思想社。

[編著書]

飯田 卓

2012 『マダガスカル地域文化の動態』（国立民族学博物館調査報告103）大阪：国立民族学博物館。

[論文]

飯田 卓

2010 「ブリコラージュ実践の共同体——マダガスカル、ヴェズ漁村におけるグローバルなフローの流用」『文化人類学』75(1): 60-80。

【受賞歴】

2010 日本アフリカ学会学術研究奨励賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

マダガスカルにおける無形文化遺産の継承

・研究の目的

無形文化遺産とは、慣習、描写、表現、知識、技術など、いわゆる文化に関わることがらのうち、実体そのものでなくその背後にある観念的なものを指している。こうした無形文化遺産の概念は、文化人類学における古典的な文化概念にきわめて近いものの、文化そのものが疑問視されている近年の潮流にあっては、無形文化遺産を保護していこうというユネスコの方針は議論を呼ぶことになる。本研究では、無形文化遺産といえどもあくまで物質的基盤があるという立場に立ち、フィールド研究をとおして、無形文化遺産の保護継承に必要な条件を考察する。

事例としては、マダガスカル共和国のザフィマニリの木彫知識をとりあげる。これは、筆者がフィールド研究を重ねてきた同国において、ユネスコが登録した無形文化遺産の唯一例である。筆者は一昨年度からこの地域についての調査を継続しており、科学研究費補助金（基盤研究（B））「マダガスカルにおける森林資源と文化の持続」（2010～2012年度）にもとづいて、研究を遂行する予定である。

・成果

マダガスカルにおける無形文化遺産の継承の状況を、特別展「マダガスカル 霧の森の暮らし」で紹介し、展示図録／解説書『霧の森の叡智——マダガスカル、無形文化のものづくり』においてさらに深く考察した。木彫り知識は単独で継承されてきたものではなく、家屋建築や編み仕事、焼畑農耕と深く関わりつつ現在のかたちになったもので、木彫り製品の商品化といった外部からの刺激も一定の役割をはたしていたことを明らかにした。

こうした無形文化遺産を「保護継承」しようとするとき、その継承に関わる社会経済的条件を凍結したほうがよいとする議論もありえよう。しかし、木彫りのかたちが商品化とも関わって変化してきた現状を考えれば、凍結による保護継承は、これまでの経緯に逆らう非現実的な提案となるおそれがある。むしろ、ゆるやかな変化を是認したうえで、一部の工芸家によってのみ木彫りがおこなわれるのではなく、その他の市井の人びとが

継承に関わっているという意識をいま以上に育むことが重要となろう。具体的には、ツーリストが看過しがちな自家製家具の製作を遺産継承の一端とみなし、また、木彫りをおこなうことのない女性による編み仕事などのものづくりを木彫りとともにザフィマニリの歴史と結びつけるような考えかたが浸透してはじめて、ザフィマニリの木彫り製作技術は、コミュニティによって支えられるという無形文化遺産の理想にかなったものとなる。

以上のような調査結果をふまえて、コミュニティという受け皿に無形文化遺産が宿るのではなく、逆に、無形文化遺産についての考えかたを軸としてコミュニティのありかたをとらえなおす可能性が生じてくる。この着想をもとに、民博の機関研究「マテリアリティの人間学」の一環として「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」を申請したところ、2013年度から3年間の実施を認められた。今後はこの期間をとおして、ザフィマニリの事例を他の地域の文化遺産（行政的なお墨付きを得たものとはかぎらない）と比較しながら、幅広い視野からとらえていく計画である。

◎出版物による業績

[編著]

飯田 卓責任編集

- 2013 国立民族学博物館編『霧の森の叡智——マダガスカル、無形文化遺産のものづくり (Handicrafting the Intangible: Zafimaniry Heritage in Madagascar)』大阪：国立民族学博物館。

[論文]

飯田 卓

- 2012 「国立民族学博物館の民具資料とアチック写真・フィルム」『国際常民文化研究機構年報』3: 316-317。
- 2012 「道路をバイパスしていく電波——マダガスカルで展開するもうひとつのメディア史」羽渕一代・内藤直樹・岩佐光広編『メディアのフィールドワーク——アフリカとケータイの未来』pp. 36-49, 東京：北樹出版。
- 2012 「ノマディズムと遠距離通信——マダガスカル、ヴェズ漁民における社会空間の重層化」杉本星子編『情報化時代のローカル・コミュニティ——ICTを活用した地域ネットワークの構築』(国立民族学博物館調査報告106) pp. 227-245, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「文化の象徴としての家」国立民族学博物館編『霧の森の叡智——マダガスカル、無形文化遺産のものづくり』pp. 48-55, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「焼畑から受け継いだ粗さと細やかさ」国立民族学博物館編『霧の森の叡智——マダガスカル、無形文化遺産のものづくり』pp. 68-75, 大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月22日 「地域研究における非文字資料の利用」第335回奄美郷土研究会例会、鹿児島県立奄美図書館

・みんぱくゼミナール

2012年7月21日 「情報アクティビスト宣言——市民の知的探究と博物館」第410回みんぱくゼミナール

・研究講演

2012年7月17日 「実践における型と即興、継承と創造——マダガスカル漁民の漁法からみる」東北大学大学院環境科学研究科環境社会人類学研究室公開講座、東北大学

2012年9月22日 「霧の森にくらすザフィマニリ人」在マダガスカル日本人会文化講演会、国際協力事業団アンタナナリボ事務所長宅

2013年3月30日 「何処にでもある何処にもない世界 マダガスカル」第105回国立民族学博物館友の会東京講演会、JICA 市ヶ谷ビル

・展示

特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」実行委員長

◎調査活動

・海外調査

2012年4月1日～7日—フランス、イギリス (2013年春季特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」に関する資料借用交渉)

2012年5月5日～15日—マダガスカル (ザフィマニリ地域の口承に関する調査)

2012年7月24日～9月25日—マダガスカル (ザフィマニリ地域の森林資源利用に関する調査、民話・伝承に関

する調査)

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本アフリカ学会評議員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス・コロキアム運営委員会委員

・非常勤講師

神戸大学大学院「文化情報リテラシー特殊講義」(集中講義)、放送大学「文化人類学」分担協力講師

宇田川妙子 [うだがわ たえこ] ————— 准教授

1960年生。【学歴】 東京大学教養学部教養学科第一卒 (1982)、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了 (1984)、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退 (1990) 【職歴】 東京大学教養学部助手 (1990)、中部大学国際関係学部講師 (1992)、中部大学国際関係学部助教授 (1995)、国立民族学博物館第3研究部併任助教 (1997)、金沢大学文学部助教授 (1998)、国立民族学博物館先端民族学研究部併任助教授 (1998)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授 (2002)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任 (2002)、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授 (2004)、国立民族学博物館民族社会研究部准教授 (2010) 【学位】 社会学修士 (東京大学大学院社会学研究科 1984) 【専攻・専門】 文化人類学 イタリアおよびヨーロッパ地域の人類学的研究・ジェンダーとセクシャリティ研究・ヨーロッパ近代をめぐる問題群 【所属学会】 日本文化人類学会、日本女性学会

【主要業績】

[共編]

宇田川妙子・中谷文美編

2007 『ジェンダー人類学を読む——地域別・テーマ別基本文献レビュー』 京都: 世界思想社。

[論文]

宇田川妙子

2004 「広場は政治に代われるか——イタリアの戶外生活再考」『国立民族学博物館研究報告』28(3): 329-375。

1999 「イタリアの家族論と家族概念」『日伊文化研究』37: 11-22。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

公共性と親密性の再検討と再編

・研究の目的

本研究は、近年さらなる注目を浴びている公共性と親密性(私性)という概念を、理論的に再検討していくことによって、生産的な意味での再編・陶冶につなげていくことを目的とする。具体的には、これまでの社会科学理論等における両概念の変遷や背景、多様性などを探っていく一方で、個別事例としてはイタリア社会を取り上げて、公共性と親密性という概念・構図が孕む限界や可能性を考察しながら、この概念図式のさらなる再編を試みていくつもりである。

・成果

本年度は主に親密性にかんする課題を追求し、以下のように論文および研究発表という形で成果を公表した。

2012年6月1日 「ジェンダーと親族——女性と家内領域を中心に」、河合利光編『家族と生命継承——文化人類学的研究の現在』pp.149-177, 東京: 時潮社。

2012年10月21日 「イタリアの生殖技術論争の変遷」、生殖テクノロジーとヘルスケアを考える研究会、日本科学未来館にて

◎出版物による業績

[論文]

宇田川妙子

2012 「ジェンダーと親族——女性と家内領域を中心に」河合利光編『家族と生命継承——文化人類学的研究の現在』pp.149-177, 東京: 時潮社。

[その他]

宇田川妙子

2012 「生活にきざまれる農業のリズム」『月刊みんぱく』36(6): 3-4。

2012 「パンから見える多様性と共通性」『月刊みんぱく』36(6): 8-9。

2013 「人生、ここにあり！」『社会科navi』2013(3): 18-19。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2012年7月21日 「イタリアの『第三セクター』の動き」『NGO活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月16日 「王権とジェンダー——人類学の視点から」第61回大阪大学歴史教育研究会、大阪大学

2012年10月21日 「イタリアの生殖技術論争の変遷」生殖テクノロジーとヘルスケアを考える研究会、日本科学未来館

・みんぱくゼミナール

2013年3月16日 「家族の今——イタリアの事例から考える」第418回みんぱくゼミナール

・広報・社会連携活動

2012年5月18日 「食事と家族」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2012年7月31日 「イタリアと恐怖映画——イタリアのもう一つの顔」ウィークエンドサロン

2013年1月5日 国立民族学博物館友の会講演会「時間（とき）の変わり目——クリスマスからイースターにかけての祝祭から」

2013年2月3日 ウィークエンドサロン「ヨーロッパの生業と1年」

2013年3月2日 春のワークショップ「オリジナルモバイルを作ろう！」解説

2013年3月9日 やっぱりヨーロッパ関連 パンセミナー「イタリアの日常生活とパン」

2013年3月23日 みんぱく映画会『人生！ここにあり』

◎調査活動

・海外調査

2012年9月23日～10月14日—イタリア（イタリアにおける労働と生活に関する調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究『「シングル」と家族——縁（えにし）の人類学的研究』共同研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本文化人類学会『文化人類学』編集委員

佐藤浩司 [さとう こうじ] ————— 准教授

【学歴】 東京大学工学部卒（1977）、東京大学大学院修士課程修了（1983）、東京大学大学院博士課程単位取得（1989）

【職歴】 国立民族学博物館助手（1989）、国立民族学博物館助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）

【学位】 工学修士（東京大学工学部 1989）【専攻・専門】 建築史学、民族建築学【所属学会】 建築史学会、民俗建築学会、家具道具室内史学会

【主要業績】

[編著]

佐藤浩司編

1998～1999 『シリーズ建築人類学《世界の住まいを読む》1～4』京都：学芸出版社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジア木造建築史の再構築

・研究の目的

東南アジアの木造建築史を概観するための資料の作成、東南アジア史の再構築。

・成果

東南アジアの木造建築を読み解くための資料を作成中。ホームページにて逐次公開している。

<http://www.sumai.org>

◎調査活動

・海外調査

2012年5月22日～27日—インドネシア（インドネシアの木造建造物保存に関する国際共同研究—日本型修理技術の適応と保存意義における調査研究）

2012年6月30日～7月16日—インドネシア（「インドネシア・ニアス島の木造建造物群文化遺産の保存体制構築と修理技術協力」におけるニアス島の木造建造物の保存調査）

2012年10月12日～11月2日—インドネシア（インドネシアの木造建造物に関する調査）

2012年11月26日～30日—台湾（オーストロネシア語族の木造建築に関する研究）

2012年12月24日～2013年1月4日—インドネシア（インドネシア木造建造物保存に関する国際共同研究参加）

2013年2月25日～3月23日—イラン（窓の起源に関する研究）

MATTHEWS, Peter Joseph^[マシウス、ピーター・ジョセフ]——— 准教授

1959年生。【学歴】 オークランド大学卒（1981）、オークランド大学大学院修士課程修了（1984）、オーストラリア国立大学大学院博士課程修了（1990）【職歴】 科学技術庁特別研究員（農水省野菜茶業試験場）（1990）、日本学術振興会特別研究員（京都大学理学部）（1993）、国立民族学博物館第4研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）【学位】 Ph. D.（オーストラリア国立大学 1990）、M. Sc.（オークランド大学 1984）【専攻・専門】 先史学、民族植物学【所属学会】 Society for Economic Botany、Indo-Pacific Prehistory Association、Society of Writers, Editors and Translators (SWET)

【主要業績】

[編著]

Spriggs, M., D. Addison and P. J. Matthews (eds.)

2012 *Irrigated Taro (Colocasia esculenta) in the Indo-Pacific: Biological, Social and Historical Perspectives* (Senri Ethnological Studies 78). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Matthews, P. J.

1996 Ethnobotany, and The Origins of *Broussonetia Papyrifera* in Polynesia (An Essay on Tapa Prehistory). In J. M. Davidson, G. Irwin, B. F. Leach, A. Pawley and D. Brown (eds.) *Oceanic Culture History: Essays in Honour of Roger Green*, pp. 117-132. Wellington: New Zealand Journal of Archaeology.

1991 A Possible Tropical Wildtype Taro: *Colocasia esculenta* var. *aquaticilis*. *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association* 11: 69-81.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1) 「南日本・東南アジアの野生サトイモの民族植物学的・遺伝子学的緊急研究」

2) オセアニア・東南アジア・アフリカにおけるサトイモの起源と進化

- ・研究の目的

- 1) 2011年度から継続中の研究プロジェクト（科学研究費補助金（基盤研究（B））（農学；資源保全））による研究を推進するために、フィリピンで3回、ベトナムで1回の野外調査を行った。
- 2) Massey University (NZ) と Oxford University (UK) の共同研究者・博士課程の学生とともにサトイモに関する共同研究を続けた。

- ・成果

ベトナム北部とフィリピン北部・中部・南部で野外調査を行った。全地域において野生種のサトイモ・野生種の他の *Colocasia* を、またフィリピン中部と南部において野生種と栽培種のクワズイモ (*Alocasia macrorrhizos*) を観察し植物標本を収集した。

サトイモ科 (Araceae) のクロロプラスト DNA (cpDNA) 分析に最適であるさまざまな遺伝子座を同定した。(Ahmed *et al.* 2012)

現在、これを用いて、アジア・太平洋地域から収集された多くの標本（野外調査により新たに加えられたものと国立民族学博物館内に保管されている DNA アーカイブからのもの）について分析を進めている。

これから研究成果として公表を予定していることは、1) 熱帯の2倍体サトイモの多くは1つの大きな母系 cpDNA 系統に属していて、インドーアジアに起源をもつと考えられる 2) 温帯の（寒冷な気候に適応した）3倍体サトイモの多くは2番目に大きい cpDNA 系統に属していて、東アジアに起源をもつと考えられる 3) 野生種には多くの cpDNA の系統があるがこのうち2つの系統のみが大部分の栽培種サトイモに寄与している 4) ベトナム北部で収集した標本の中には、形態学上は異なっているが、類似のあるいは同一の葉緑体ゲノムを示すものがあることから、この地域において異種間の交配が起こったと考えられる。ベトナムの野生種サトイモはこれまでに見つかった南と北の双方の系統を起源としているのかもしれない。食用の植物として、また、ブタの餌として人類が利用し伝播した結果として、この野生種のサトイモの交配が起こった可能性もある。

- ◎出版物による業績

[論文]

Ahmed, I., P. J. Biggs, P. J. Matthews, L. J. Collins, M. D. Hendy, and P. J. Lockhart

2012 Mutational dynamics of aroid chloroplast genomes. *Genome Biology and Evolution* 4(12): 1316-1323.

- ・広報・社会連携活動

2012年4月8日 「民族植物学の旅——くらしに葉をつかう」第248回みんぱくウィークエンド・サロン

- ◎調査活動

- ・海外調査

2012年7月30日～8月14日—ベトナム（ベトナムにおける野生サトイモに関する調査）

2012年9月23日～10月4日—フィリピン（フィリピンにおける野生サトイモに関する調査）

2012年10月12日～24日—イギリス（学術協定提携に関する調査研究及び施設調査）

2012年11月26日～12月8日—フィリピン（フィリピンにおける野生サトイモに関する調査）

2013年1月27日～2月10日—フィリピン（フィリピンにおける野生サトイモに関する調査）

- ◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

Ph. D. Supervision (Massey University, New Zealand)、Ph. D. Adviser (Oxford University, UK)

- ・非常勤講師

名古屋大学農学部「食文化論」（集中講義）

三島禎子 [みしま ていこ] ————— 准教授

1963年生。【学歴】セネガル共和国国立応用経済学院社会コミュニケーション学部卒（1989）、津田塾大学大学院国際関係学研究科博士前期課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究科第2課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究科第3課程修了（1993）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）【学位】D. E. A. Sci. Soc（パリ第5大学大学院社会科学研究科 1993）、M. Soc.（パリ第5大学大学院社会科学研究科 1992）、国際関係学修士（津田塾大学大学院国際関係学研究科 1992）【専攻・専門】文化人類学（西アフリカ研究）【所属学会】アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[論文]

三島禎子

- 2011 「民族の離散と回帰——ソニンケ商人の移動の歴史と現在」駒井 洋監修・編、小倉充夫編『グローバル・ディアスポラ』 pp.105-130, 東京: 明石書店。
- 2007 「ソニンケ商人の歴史——砂漠を越え海を渡る人びと」池谷和信・佐藤廉也・武内進一編『アフリカ I』(朝倉世界地理講座11) pp.286-300, 東京: 朝倉書店。
- 2001 「セネガル・モーリタニア紛争をめぐる民族間関係」和田正平編著『現代アフリカの民族関係』 pp.68-91, 東京: 明石書店。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アフリカ商業民の国際移動に関する人類学的考察——民族文化と経済システム

・研究の目的

本研究の目的は、移動する人びとの主体性に注目することによって、アフリカと世界との関係性を再構築することにある。「主体性」と示す指標として、アフリカ商業民の経済活動をとりあげ、これまでほとんど解明されてこなかったその移動と経済の動態を把握するとともに、ミクロな経済の営みをグローバルかつ歴史的な視点からとらえなおすことを試みる。それに加えて、アフリカの古代王国時代から今日の国民国家における統治体制のなかで、商業民がどのような政治的立場をとってきたか、商業と政治と関わりから考察する。

・成果

今年度は科学研究費『環太平洋地域における移住者コミュニティの動態の比較研究——近年の変遷に注目して』(代表: 栗田和明) によってセネガルとコンゴ共和国への調査を実施し、ソニンケ民族の経済活動の実態について、アフリカ大陸内における展開およびアフリカとアジアとのつながりに関して多くの知見を得た。セネガルではソニンケの国際文化祭に出席しシンポジウムで発表をおこなった。

また『日仏研究交流フォーラム——人口学から世界を理解する』(国立民族学博物館/パリ・デカルト大学人口開発所主催) を開催し、アフリカ研究における学際的なアプローチについて議論を深めた。

◎出版物による業績

[その他]

三島禎子

- 2012 「旅・いろいろ地球人 伝統と電灯⑥ 自ら管理」『毎日新聞』4月12日夕刊。
- 2012 「旅・いろいろ地球人 鉄路叙景⑥ 自転車並み」『毎日新聞』11月8日夕刊。
- 2012 「World Watching from France 殺人犯をめぐる言説」『みんぱく e-news』132 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/132>)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年11月30日 『日仏研究交流フォーラム——人口学から世界を理解する』代表者、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月24日 『遠隔地交易から国際貿易へ——ムスリム商人ソニンケの歴史と現在』立教大学平和・コミュニティ研究機構公開講演会、立教大学

・研究講演

2013年3月22日 「砂漠を越え海を渡ったアフリカの商人たち」京都洛西ロータリークラブ、京都全日空ホテル

・広報・社会連携活動

2012年7月24日 「遠隔地交易から国際貿易へ——ムスリム商人ソニンケの歴史と現在」立教大学平和・コミュニティ研究機構公開講演会、立教大学

2012年7月27日 「10年分の夏」『世界の夏を楽しもう!』真夏サロン

2012年7月29日 「移民の国フランスとアフリカの深い関係」第263回ウィークエンドサロン

◎調査活動

・海外調査

2013年1月3日～2月1日—フランス、セネガル、コンゴ共和国(アフリカ大陸における商業民の移住とネッ

トワークに関する調査、フランス国立パリ・デカルト大学との学術交流協定締結)

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

論文ゼミ

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（A））「環太平洋地域における移住者コミュニティの動態の比較研究——近年の変遷に注目して 2011-2014」研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「在日在沖アフリカ人の生活戦略と日中アフリカ関係の都市人類学的研究 2011-2013」研究協力者

- ・学会の開催

2012年5月26日～27日 第49回日本アフリカ学会開催実行委員

横山廣子 [よこやま ひろこ] ————— 准教授

【学歴】 東京大学教養学部教養学科文化人類学専攻卒（1977）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1981）

【職歴】 東京大学教養学部助手（1981）、東洋英和女学院短期大学国際教養科専任講師（1986）、東洋英和女学院大学人文学部社会科学科助教授（1989）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）【学位】 社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1981）【専攻・専門】 文化人類学 1) 雲南省大理ペー族社会の研究、2) 中国における国家とエスニシティに関する研究、3) 中国西南部から東南アジア大陸部における民族集団の移動と包摂に関する研究【所属学会】 日本文化人類学会、東南アジア学会、American Anthropological Association

【主要業績】

[編著]

横山廣子編

2004 『少数民族の文化と社会の動態——東アジアからの視点』（国立民族学博物館調査報告50）大阪：国立民族学博物館。

2001 『中国における民族文化の動態と国家をめぐる人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告20）大阪：国立民族学博物館。

[共編]

塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編

2001 『流動する民族——中国南部の移住とエスニシティ』東京：平凡社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国雲南省とその隣接地域における文化・社会とアイデンティティ

・研究の目的

政治や経済の情勢、あるいは人々をとりまく社会状況の変化とともに、地域の人々の生活や文化・社会がどのように変化し、それとともに自身やその属する集団、社会的カテゴリー、あるいは文化に対する人々の認識や意識がどのように変化するかを現地調査データならびに民族誌などの調査資料、地方志などの歴史的資料に基づいて実証的に明らかにする。

・成果

現地調査に基づき、中国雲南省のペー族の春節時期の祝祭および人びとが人生で経験する通過儀礼、ならびに国家による伝統的文化技能保持者に関する文化政策に焦点を当て、それらが近年、どのように変化し、地域社会や文化のあり方にどのような影響を与えているかについて研究を進めた。

調査地では、春節時期の祝祭活動は、経済状況の好転ともない、より盛大に実施される一方、その儀礼的

伝承部分の多くが、大きな変化を経ることなく維持されていることが明らかになった。年配者の宗教組織が祝祭活動の運営を担っており、村の行政的リーダーと一線を画しつつ連携するという体制の存在がそれを可能にしている。他方、人びとの生活と密接な関係を持つ人生儀礼は、経済や生活の変化につれて儀礼の変化はより大きい。しかし、部分的な象徴化を進めることによって儀礼行為の元来の意味を保持している。また、近年の中国政府の文化政策は特に無形文化遺産重視の傾向を強めており、伝統的文化技能保持者の発掘・認定が進み、それをてこにした地域あるいは民族の伝統文化の発揚がはかられ、一定の成果が上がっている。

以上の成果をもとに、マルチメディア番組「雲南省のペー族の暮らしと文化」のコンテンツの制作・編集を今年度も進め、73小番組（386分）のコンテンツを完成させた。これにより3年間で合計175小番組（709分）のコンテンツが全て完成した。

◎出版物による業績

[論文]

横山廣子

2013 「博物館以及城市文化遺産の保護と発展」呉 定元主編『「維護文化遺産 發展城市文化」円卓論壇文集』pp. 66-99, 中国山西省介休: 介休市政協。

[書評]

横山廣子

2013 「鈴木正崇編『東アジアの民衆文化と祝祭空間』書評」『中国研究月報』67(2): 31-36。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウム

2012年11月24日～25日 《機関研究成果公開》国際シンポジウム「中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究」第2セッション座長

・共同研究会

2012年11月17日 「湖南ペー族における民族文化とポリティクス」『中国における民族文化の資源化とポリティクス——南部地域を中心とした人類学・歴史学的研究』

・みんぱく若手研究者奨励セミナー

2012年11月28日～30日 2012年度みんぱく若手研究者奨励セミナー「包摂と自律の人間学——空間をめぐる」総合討論発言者

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月2日 「大理から見た湖南省のペー族」ペー族文化国際学術シンポジウム、中華人民共和国湖南省桑植県

2012年9月3日 「博物館ならびに都市文化遺産の保護と発展」文化遺産の保護、運用と都市文化の発展に関する国際円卓会議、中華人民共和国山西省介休市

・研究講演

2012年4月15日 「ビデオテークより ペー族の映像民族誌——制作過程で考えること」第101回国立民族学博物館友の会東京講演会

2012年11月18日 「多様な民族がともに暮らす雲南 そして日本」岸和田市自主学習グループDa Capo 公開講座、岸和田市立公民館

2013年3月1日 「人生観のいろいろな姿」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

・映像番組

横山廣子 [監修]

2012 「中国雲南省ペー族のたいまつ祭り」(国立民族学博物館海外映像音響資料、24分、2010年撮影、2012年制作)

2012 「中国雲南省ペー族の中元節」(国立民族学博物館海外映像音響資料、23分、2010年撮影、2012年制作)

2012 「中国雲南省ペー族の結婚式」(国立民族学博物館海外映像音響資料、23分、2007年撮影、2012年制作)

・広報社会連携活動

2012年12月2日 「黄土文明と現代中国——山西省介休(かいきゅう)市で展開する観光開発」第278回みんぱくウィークエンド・サロン

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

研究生受け入れ教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

論文ゼミ

・論文審査

博士論文審査委員（1件）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

大阪大学「ビルマ文化講義Ⅱa、ビルマ文化講義Ⅱb」

太田心平 [おおた しんぺい] ————— 助教

1975年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科社会学専修卒（1998）、大阪大学大学院人間科学研究科人間学専攻博士前期課程修了（2000）、ソウル大学大学院人類学科博士課程単位取得（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了（2007）【職歴】日本学術振興会特別研究員（PD）（2004）、大阪大学大学院人間科学研究科特任助手（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2010）、アメリカ自然史博物館上級研究員（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2012）【学位】博士（人間科学）（大阪大学 2007）【専攻・専門】社会文化人類学、北東アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、韓国文化人類学会（韓国）、朝鮮学会、韓国・朝鮮文化研究会

【主要業績】

[論文]

太田心平

2012 「国家と民族に背いて——アイデンティティの生き苦しさ、韓国を去りゆく人びと」太田好信編『政治的アイデンティティの人類学——21世紀の権力変容と民主化にむけて』pp. 304-336, 京都: 昭和堂。

2008 「センセーショナルリズムへの冷笑——移行の言説としての韓国『民主化』と元労働運動家たちの懐古」石塚道子・田沼幸子・富山一郎編『ポスト・ユートピアの人類学』pp. 161-186, 京都: 人文書院。

2003 「政治と発話——現代韓国の政治文化を構築する『誤解』」『民族学研究』68(1): 44-64。

Ota, S.

2006 Ryohan: Anthropology of Knowledge and the Japanese Representation of Korean Yangban under Colonialization. *Korean Cultural Anthropology* 39(2): 85-128 (韓国語)。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

韓国・朝鮮における文化の統合性と多様性

・研究の目的

韓国・朝鮮の社会は民族的な均質性が高く、その文化も統合的に捉えられている傾向が強い。しかし、社会の表面に色々な対立項が看守できるように、韓国・朝鮮の社会には多様性が秘められている。この研究の目的は、韓国・朝鮮の事例をもとに、社会文化の統合性と多様性の両立状況がいかにかに可能であり、それによりもたらされる緊張状態がいかにかに文化変容の原動力となっているのかを明らかにすることにある。

・成果

この期間には、主として4種類の研究をおこなった。

第1に、以前におこなった脱王朝・脱植民地国家における中央エリート階層の歴史人類学的研究を総合的に整理し、韓国・朝鮮の地域有力者がどのように多様であり、しかしどのように統合されてきたのかを、再考的な視点から明らかにした。

第2に、国際移民と母国社会の相互作用に関する人類学的研究として、韓国社会における海外コリアンの表象様式や、それを海外コリアンがどう認識、解釈しているのかに関する研究をおこなった。

さらに、植民地朝鮮における文化の統合（伝統の創造、真正な文化のオーデッティングなど）のメカニズムを明らかにするため、物質文化に関する2種類の研究を展開した。

全体のうちの第3として、現在では韓国・朝鮮の伝統的な民芸品・美術品として知られる高麗青磁が、どのように復興されたのかを問い直した。

同じく第4に、韓国・朝鮮の在来文化のイメージが固定された様相を、近代における記録写真という媒体への着目から掘り下げた。

脱王朝・脱植民地国家における中央エリート階層の歴史人類学的研究を総合的に整理する作業においては、単著『양반의 탄생: 한국의 '진정한 문화' 와 근대 일본의 지식사회 (The Birth of Yangban: Korean 'Authentic Culture' and Intellectual Society in Modern Japan)』として結実した。同書は、韓国での出版に向けて、印刷中である。

国際移民と母国社会の相互作用に関する人類学的研究は、総合研究大学院大学の若手教員海外派遣事業から調査研究資金を受け、かつ、科学研究費補助金（基盤研究（B））（課題番号：21401046、2009～2012年度、研究代表者：朝倉敏夫）に研究分担者として参加することにより、おこなった。この中間成果は、共編『한민족 해외동포의 현주소: 당사자와 일본 연구자의 목소리 (Contemporary Aspects of Oversea Koreans: Voices of the Natives and Japanese Scholars)』として、韓国で出版された。

高麗青磁の復興に関する研究は、科学研究費補助金（若手研究（B））（課題番号：22720337、2010～2013年度）を研究代表者として受諾して進めた。この成果の一部は、上記の単著によって公刊されようとしている。また、学術誌論文としての公刊や、韓国社会への現地還元も準備中である。

近代の記録写真に関する研究は、神奈川大学の共同研究「東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史」（2009～2013年度、研究代表者：角南聡一郎）により遂行してきた。この成果は、『東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史』（国際常民文化研究叢書3）に、論文「写真のマテリアリティ——現代韓国に残る植民地遺産を再考するための一試論」として掲載されることとなり、印刷中である。

◎出版物による業績

[編著]

太田心平

2012 『한민족 해외동포의 현주소: 당사자와 일본 연구자의 목소리』, 아사쿠라 도시오 & 오타 심페이 (eds.) Seoul: 학연문화사 (『韓民族海外同胞の現住所——当事者と日本の研究者の声』朝倉敏夫・太田心平編, Seoul: 學研文化社。).

[論文]

太田心平

2012 “조사자가 찾아왔다: 시점의 전환과 지식의 재귀성에 관한 메모” In 아사쿠라 도시오 & 오타 심페이 (eds.) 『한민족 해외동포의 현주소: 당사자와 일본 연구자의 목소리』 pp. 315-339, Seoul: 학연문화사 (『調査者がやってきた——視点の転換と知識の再帰性に関するメモ』朝倉敏夫・太田心平編 『韓民族海外同胞の現住所——当事者と日本の研究者の声』 pp. 315-339, Seoul: 學研文化社。).

2012 “나오며” In 아사쿠라 도시오 & 오타 심페이 (eds.) 『한민족 해외동포의 현주소: 당사자와 일본 연구자의 목소리』 pp. 341-343, Seoul: 학연문화사 (『おわりに』朝倉敏夫・太田心平編 『韓民族海外同胞の現住所——当事者と日本の研究者の声』 pp. 341-343, Seoul: 學研文化社。).

2013 「写真のマテリアリティ——現代韓国に残る植民地遺産を再考するための一試論」神奈川大学国際常民文化研究機構編 『国際常民文化研究叢書3——東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史』 pp. 85-97, 横浜: 神奈川大学国際常民文化研究機構。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年9月18日 ‘Seoul Style 2002: A Gigantic Experience of Japan’s Archeology of Present,’ Activity Report Series of Museum Anthropology No.201203, New York: Columbia University

2013年1月11日 ‘Comments from a Native Eastern Asian Curator,’ International Workshop Asian Interactions: Natures, Peoples, Changes, New York: American Museum of Natural History.

・広報・社会連携活動

新規広報メディア開発・評価担当

2013年3月31日 「韓国人主婦がカナダ生活で困るモノ——外からみた韓国物質文化」第293回みんなくウィ

ークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

2012年4月5日～2013年2月2日—アメリカ合衆国、カナダ（在米韓国系「絶望移民」に関する調査研究）

2013年2月14日～3月30日—大韓民国、アメリカ合衆国、カナダ（在米コリアンと韓国人のネットワークの人類学的研究及び標本資料収集）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（若手研究（B））「実業家・富田儀作の高麗青磁復興事業を事例とした植民地のエージェントの人類学的研究」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「東アジアにおけるコリアン・ネットワークの人類学的研究」（研究代表者：朝倉敏夫）研究分担者、機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究：ロシア民族学博物館との国際共同研究」（研究代表者：佐々木史郎）研究分担者、機関研究「中国における家族・民族・国家ディスコースの生成と実態——グローバルな視点から」（研究代表者：韓 敏）国立民族学博物館研究分担者、機関研究「布と人間の人類学的研究」（研究代表者：関本照夫）研究分担者、神奈川大学国際常民文化研究機構国際常民文化研究「東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史」（研究代表者：角南聡一郎）共同研究者

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

宮崎公立大学「韓国文化論」（集中講義）

・他機関から委嘱された委員など

アメリカ自然史博物館人類学部門（アメリカ合衆国）上級研究員、神奈川大学国際常民文化研究機構共同研究者

菅瀬晶子 [すがせ あきこ] ————— 助教

【学歴】東京外国語大学外国語学部アラビア語学科卒（1995）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程（アジア第三専攻）修了（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程（地域文化学専攻）修了（2006）

【職歴】日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2006）、総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員（2006）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2008）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2009）、神奈川大学経営学部非常勤講師（2010）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2010）、共立女子大学国際学部非常勤講師（2010）、大阪大学外国語学部非常勤講師（2010）、総合研究大学院大学学融合推進センター特別研究員（2010）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2011）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2006）、修士（学術）（東京外国語大学大学院 1999）【専攻・専門】文化人類学・中東地域研究（パレスチナ・イスラエルを中心とした、東地中海地域アラビア語圏）【所属学会】日本中東学会、日本文化人類学会、京都ユダヤ思想学会

【主要業績】

[単著]

菅瀬晶子

2012 『豊稔と共生への祈り——パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬』（民族紛争の背景に関する地政学的研究19）大阪：大阪大学世界言語研究センター。

2010 『イスラームを知る6 新月の夜も十字架は輝く——中東のキリスト教徒』東京：山川出版社。

2009 『イスラエルのアラブ人キリスト教徒——その社会とアイデンティティ』広島：淡水社。

【受賞歴】

2006 長倉研究奨励賞、総研大研究賞受賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象

・研究の目的

本研究は、前年度までにおこなってきた聖者アル・ハディル崇敬研究の間口を広げ、より相対的な内容にしたものである。東地中海アラビア語圏に生きるマイノリティ、ことにキリスト教徒とシーア派ムスリム、かつてはアラビア語を母語としてきた中東系ユダヤ教徒（ミズラヒーム）を対象とし、日常生活のなかで、あるいはさまざまな文化活動をとおして、彼らがどのように宗教的アイデンティティを表象してきたかについて研究を進めた。なかでもイスラエル・ガリラヤ地方とレバノン南部における、複数の聖者崇敬の様態に重点を置き、異なる宗教・教派間で崇敬を共有することに対する意識や、崇敬が彼らの相互関係に与える影響を調査した。

・成果

前年度1月～2月におこなったレバノン南部におけるフィールドワークの成果については、6月23日に日本文化人類学会で口頭発表をおこなった。また、現在論文を執筆中であり、次年度の夏までには完成予定である。また、8月～9月には東京工業大学創立130周年記念「ぐるなび」食の未来創成寄付講座の経費で、パレスチナ・イスラエルにおけるキリスト教徒の菜食文化について調査を実施した。2月には科学研究費補助金（基盤研究（A））「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く」（研究代表者：西尾哲夫）分担金にて、キリスト教徒特有の豚肉食についての調査もおこなった。後者については調査の結果、宗教的に豚肉食を禁じられているはずのムスリムやユダヤ教徒が、積極的に豚肉食あるいは豚肉流通にかかわっているという事実が判明した。次年度も調査を続行し、次年度～次々年度前半に論文を執筆する予定である。

◎出版物による業績

[論文]

菅瀬晶子

- 2012 「新たなパレスチナ・イスラエル紛争論を模索する——共同研究・パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点」『民博通信』13: 28-29。
- 2013 「ムジャッダラ考——とある家庭料理にみる、シャーム地方文化論」『季刊民族学』143: 57-74。
- 2013 「2-4 ギリシャ正教会」三代川寛子編著『東方キリスト教諸教会——基礎データと研究案内（増補版）』（SOIAS Research Paper Series 9）pp.127-130, 東京：上智大学アジア文化研究所イスラーム地域研究機構。
- 2013 「2-5 メルキト派カトリック教会（ギリシャ・カトリック教会）」三代川寛子編著『東方キリスト教諸教会——基礎データと研究案内（増補版）』（SOIAS Research Paper Series 9）pp.131-134, 東京：上智大学アジア文化研究所イスラーム地域研究機構。

[その他]

菅瀬晶子

- 2012 「地球ミュージアム紀行 入場無料からみえてくるもの——レバノン・サイダ旧市街の博物館群」『月刊みんぱく』36(8): 16-17。
- 2012 「駅前の異空間アンダーグラウンド——わが街・新宿と大阪駅前ビル」『月刊みんぱく』36(11): 8-9。
- 2013 「みんぱく私の逸品 メノラー」『月刊みんぱく』37(2): 21。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年6月23日 「聖なるものの共有と占有——東地中海アラビア語圏における聖者アル・ハディル崇敬の事例より」日本文化人類学会、広島大学東広島キャンパス
- 2012年9月23日 「東地中海アラビア語圏における、小麦とオリーブの聖性」東京工業大学創立130周年記念「ぐるなび」食の未来創成寄付講座食文化共同研究会第2回公開講義『食の選択に影響を与える文化的要因——文化人類学的アプローチから』東京工業大学田町キャンパス

・研究講演

- 2012年6月15日 「中東のキリスト教」NPO 法人大阪高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

◎調査活動

・国内調査

- 2013年3月23日～24日、28日 東京都新宿区、豊島区（日本展示新構築の資料収集）

・海外調査

- 2012年8月18日～9月8日—イスラエル（アラブ人市民及び中東系ユダヤ人市民のアイデンティティ表象に関する情報収集）

2013年2月12日～3月1日—イスラエル（イスラエル・ガリラヤ地方及びパレスチナ自治区・ヨルダン川西岸地区のキリスト教徒間における聖者崇敬・食文化についての調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
NIHU プログラム・イスラーム地域研究東大拠点研究協力者、東京工業大学創立130周年記念「ぐるなび」食の未来創成寄附講座・食文化共同研究会共同研究者、大阪大学世界言語研究センター「民族紛争の背景に関する地政学的研究」パレスチナ班研究分担者
- ・非常勤講師
滋賀県立大学「国際関係論」

民族文化研究部

八杉佳穂 [やすぎ よしほ] ————— 部長(併)教授

1950年生。【学歴】京都大学文学部卒（1975）【職歴】国立民族学博物館第4研究部助手（1980）、国立民族学博物館第4研究部助教授（1990）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1991）、国立民族学博物館第2研究部教授（1997）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2001）【学位】文学博士（総合研究大学院大学 1994）【専攻・専門】言語人類学、マヤ学【所属学会】日本言語学会、古代アメリカ学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[単著]

八杉佳穂

2004 『チョコレートの文化誌』京都：世界思想社。

2003 『マヤ文字を解く』東京：中央公論新社。

Yasugi, Y.

1995 *Native Middle American Languages: An Areal-Typological Perspective* (Senri Ethnological Studies 39). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

カクチケル語の歴史的研究

・研究の目的

古典カクチケル語の代表的文献である『カクチケル年代記』を主資料にして、カクチケル語の歴史の変遷を分析する。

・成果

カクチケル語の歴史の変遷を分析した結果をもとに、“Marcadores de énfasis en los verbos Kaqchikeles”をグアテマラのパツンで開かれた Formal Approaches to Mayan Linguistics II で発表した。また「カクチケル語の焦点化構文についての一考察」を『言語学論集』21号（東北大学）に発表した。

『カクチケル年代記』の翻訳は終了したが、不明な点が多々残った。それらは文法的な解析だけでは不可能な点であり、歴史的な研究や関連諸語の語彙的な研究を行って解明する必要がある、それに向けた準備をしている。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月23日 「カクチケル語の400年の変化を考えるために」OS研究会、三重大学

2012年8月4日 ‘Marcadores de énfasis en los verbos Kaqchikeles.’ “Formal Approaches to Mayan Linguistics II” Patzún, Guatemala.

2012年12月9日 「逆受動の混乱の原因」OS研究会、広島大学

・ 広報・社会連携活動

2012年4月20日 「チョコレート文化誌」大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2012年5月22日 「マヤとアステカの絵文書」懐徳堂記念会、大阪大学中之島センター

2012年7月23日 「マヤの夏」『世界の夏を楽しもう！』真夏サロン

◎調査活動

・ 海外調査

2012年7月31日～8月22日—グアテマラ（OS型言語の文処理メカニズムに関するフィールド言語認知脳科学的
研究）

2013年3月1日～20日—グアテマラ（OS型言語の文処理メカニズムに関するフィールド言語認知脳科学的研
究）

◎大学院教育

・ 指導教員

主任指導教員（2人）

近藤雅樹 [こんどう まさき] ————— 教授

1951年生。【学歴】武蔵野美術大学造形学部美術学科卒（1977）【職歴】修徳高等学校（東京都葛飾区）美術科講師（1977）、財団法人日本常民文化研究所委託研究員（1977）、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課県立博物館設立準備室技術職員（1980）、兵庫県立歴史博物館技術職員・学芸員（1982）、兵庫県立歴史博物館主任・学芸員（1989）、国立民族学博物館第1研究部助手（1990）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1995）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1996）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（1999）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（2003）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長（2007）【専攻・専門】日本物質文化論（民具研究）、民俗学【所属学会】日本文化人類学会、日本民俗学会、日本民具学会、道具学会

【主要業績】

[単著]

近藤雅樹

1997 『ぐうたらテクノロジー——熱烈！明治・大正「特許」事情』東京：河出書房新社。

1995 『おんな紋——血縁のフォークロア』東京：河出書房新社。

[編著]

近藤雅樹編

2001 『図説 大正昭和くらしの博物誌——民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム』東京：河出書房新社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・ 研究課題

渋沢敬三研究

・ 研究の目的

渋沢敬三の学術上の功績を、彼が主導的な役割をはたして推進し、形成した民具標本コレクションを中心に解明する。

・ 成果

『渋沢敬三著作集』全5巻を読み返し、2013年度秋に開催する特別展の構想に反映させるための記事を抽出し、残された民具コレクションとの照合作業を進めた。また「MRAハウス」からの寄付金による各地への追跡調査を実施した。これらによって得られた成果は展覧会の企画に反映する予定である。

◎出版物による業績

[編著]

近藤雅樹

2012 『国際シンポジウム「在外資料の調査研究——バルト海周辺地域の日本コレクション」』国立民族学博物館。

[論文]

近藤雅樹

2012 「資料翻刻『新指定重要民俗資料特別展覧』について」『民具マンスリー』45(4): 14-21。

Kondo, M.

2012 Research on Materials Related to Japan around the Baltic Sea Area: International Forum February 4-5, 2012. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 34: 14.

[監修]

近藤雅樹

2012 株式会社どりむ編『こわい！不思議！江戸の怪談 絵事典 お化け・妖怪から怪奇現象まで』京都：PHP 研究所。

[その他]

近藤雅樹

2012 「砥石入」『月刊みんぱく』36(4): 21。

2012 「アチック・ミュージアムの民具コレクション34 附木」『民具マンスリー』45(7): 24。

2013 「今和次郎と石黒忠篤、渋沢敬三」『今和次郎と考現学 暮らしの“今”をとらえた〈目〉と〈手〉』pp. 176-179, 東京：河出書房新社。

2013 「追悼 中村俊亀智 民博名誉教授を偲ぶ」『月刊みんぱく』37(3): 16。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2012年9月14日 「女紋のはなし」NPO 法人大阪府高齢者大学『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

・海外調査

2012年6月3日～18日—ロシア（ロシアと北欧における在外日本関連アジア資料の調査研究）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

2012年度文化資源プロジェクト 渋沢敬三没後50周年記念特別展開催準備活動代表者、人間文化研究機構連携研究『筌』を通してみる学際的研究」研究代表者、人間文化研究機構連携研究「画中画の世界」研究分担者

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

財団法人MRAハウス「渋沢敬三記念基金」実行委員会委員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

芦屋市文化財審議会委員、伊丹市文化財審議会委員、財団法人 小田家博物館むろやの園評議員、神奈川大学国際常民文化研究機構運営委員、法政大学国際日本学研究所・研究プロジェクト「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討——〈日本意識〉の過去・現在・未来」プロジェクトメンバー、和歌山県立紀伊風土記の丘協議会委員

・非常勤講師

神戸大学国際文化学部「博物館概論」、宝塚大学造形芸術学部「博物館情報論」（集中講義）

杉本良男 [すぎもと よしお]————— 副館長（企画調整担当）、教授

塚田誠之 [つかだ しげゆき]————— 教授

1952年生。【学歴】北海道大学文学部史学科東洋史学専攻卒（1978）、北海道大学大学院文学研究科修士課程東洋史学専攻修了（1980）、北海道大学大学院文学研究科博士後期課程東洋史学専攻単位取得（1987）【職歴】国立民族学

博物館第3研究部助手（1988）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科研究科長（2011）【学位】文学博士（北海道大学 2001）、文学修士（北海道大学大学院文学研究科 1980）【専攻・専門】歴史学 中国南部地域（広西・貴州等）の壮（チワン）族をはじめとする諸民族の歴史民族学的研究【所属学会】日本文化人類学会、史学会、宋代史研究会、北海道大学東洋史談話会、北大史学会、漢民族研究学会（中国）、壮学学会（中国）

【主要業績】

[単著]

塚田誠之

2000 『壮族文化史研究——明代以降を中心として』東京：第一書房。

[編著]

塚田誠之編

2010 『中国国境地域の移動と交流——近現代中国の南と北』東京：有志舎。

[論文]

塚田誠之

2012 「漢族と非漢族との相互影響について——広西の「蔗園人」の習俗に関する一考察」瀬川昌久編『近現代中国における民族認識の人類学』（東北アジア研究専書）pp. 73-104, 京都：昭和堂。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国南部・広西におけるチワン族のネットワーク、社会・文化の動態

・研究の目的

中国広西のチワン（壮）族について、国境を越えてベトナムの同系民族のヌン族との間にネットワークが構築されている。これまでに両者間のネットワークの実態について調査に基づいて研究を行い成果を挙げてきたが、2012年度も継続して中越の双方から調査を実施し一層掘り下げた検討を行う。ネットワークとして壮族とヌン族の間に結ばれる擬制的な親族ネットワークとしての「ラオトン」関係、通婚の実態等に重点を置いて研究を行う。また、壮族のもとで文化を資源化する動きが近年顕著にみられる。社会体制も変化しつつある。これらの点についても調査研究を行う。調査研究は科学研究費補助金（基盤研究（B））「中国の『国境文化』の人類学的研究」（代表者：塚田誠之）による。なお、壮族のもとで文化を観光資源化する動きが近年顕著にみられるが、この点についても研究を行う。

・成果

中越国境地域に居住する壮族とベトナム側のヌン族・タイ族との擬制的な親族「ラオトン」関係について、中国とベトナムでの実地調査を経て、その契機、儀礼、婚葬や長寿祝い・年中行事等の際の往来、相互扶助、呼称、意識におけるその目的や重要性等、多面的な検討を行い、科研報告書「中国の『国境文化』の人類学的研究」（塚田誠之編）に論文を執筆をした。

壮族のもとでの文化の資源化の動きの現状と問題点について、中越国境線を流れる観光地「徳天瀑布」をめぐる壮族の人々、政府やその出先機関、企業、さらにはベトナム側の人々といった諸主体の動向に留意をして検討し、11月に民博共同研究会で口頭発表を行った。

◎出版物による業績

[編著書]

塚田誠之編

2013 『西南中国少数民族の文化資源の“いま”』（国立民族学博物館調査報告109）大阪：国立民族学博物館。

2013 『中国の「国境文化」の人類学的研究』2010～2012年度科学研究費補助金（基盤研究（B））課題番号22401046 研究成果報告書，大阪：国立民族学博物館。

[論文]

塚田誠之

- 2013 「もう一つの親族、“ラオトン”——チワン（壮）族とベトナム民族とのネットワークの一側面」
塚田誠之編『中国の「国境文化」の人類学的研究』2010～2012年度科学研究費補助金（基盤研究
（B））課題番号22401046 研究成果報告書, pp. 39-58, 大阪：国立民族学博物館。

[その他]

塚田誠之

- 2012 「中国における民族文化の資源化とポリティクスに関する中間報告」『民博通信』136: 14-15。
2013 「中国における民族文化の資源化とポリティクスの諸相」『民博通信』140: 24-25。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年11月4日 「総合討論」国際シンポジウム『漢族社会におけるヒト、文化、空間の移動——人類学的アプローチ』国立民族学博物館第4セミナー室

・共同研究

2012年11月17日 「国境地域における観光をめぐる諸問題——徳天跨国瀑布観光の事例から」『中国における民族文化の資源化とポリティクス』

◎調査活動

・国内調査

2012年6月19日—東洋文庫（戦前の海南島の情勢に関する文献調査）
2013年1月10日—国立国会図書館東京本館（戦前の海南島の情勢に関する文献調査）
2013年3月14日—東洋文庫（広西教育史等に関する文献調査）
2013年3月15日—東京大学東洋文化研究所（戦前の海南島開発政策等に関する文献調査）
2013年3月16日—国立国会図書館東京本館（戦前の広西・海南島の紀行記録に関する文献調査）

・海外調査

2012年8月13日～30日—中華人民共和国（壮（チワン）族の「国境文化」の実態調査及び漢族「屯堡人」の実態調査）
2012年11月27日～12月8日—ベトナム（ベトナムの中越国境地域におけるヌン族・タイ族の「国境文化」に関する実態調査）

◎大学院教育

・論文審査

予備審査委員（1件）

森 明子 [もり あきこ]—————教授

【学歴】 筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科単位取得退学（1989）**【職歴】** 筑波大学歴史・人類学系文部技官（1989）、筑波大学歴史・人類学系助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1997）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター長・教授（2009）、民族文化研究部教授（2011）**【学位】** 文学博士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1997）、文学修士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1984）**【専攻・専門】** 文化人類学 1) ヨーロッパ人類学 2) ドイツ、オーストリアの民族誌研究 3) 民族学・民俗学の歴史的展開**【所属学会】** 日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

森 明子

1999 『土地を読みかえる家族——オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌』東京：新曜社。

[編著]

森 明子編

2004 『ヨーロッパ人類学——近代再編の現場（フィールド）から』東京：新曜社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

人類学の記述とその社会的文脈

・研究の目的

人類学の記述と社会との関わりのあるあり方を、政治的経済的関係を含めた歴史的な文脈のなかで検討し、社会における学問実践のあり方を問う。

具体的には、いくつかのプロジェクトとともに研究をすすめる。まず、科学研究費補助金（基盤研究（C））「21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究——ベルリン外国人集住地区の事例」において、ベルリンの外国人集住地区の都市再生プロジェクトと保育園運動について、これを人類学研究としていかに記述するのか検討する。また、科学研究費補助金（基盤研究（B））「民俗学的実践と市民社会——大学・文化行政・市民活動の社会的布置に関する日独比較」において、大学研究と市民社会の関わりについてミュンヘンで約30日間の調査研究を計画している。さらに人類学的記述としての博物館展示について国際シンポジウムを開催する計画である。このほかに、すでに終了した共同研究「ソーシャル概念の再検討」の成果とりまとめ、科学研究費補助金（基盤研究（B））の成果とりまとめを行う。

・成果

- 1) 科学研究費助成事業「21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究——ベルリン外国人集住地区の事例」の調査研究において、70年代以降の保育園運動を中心に、資料収集とインタビュー調査をおこなった。また、中間段階での成果を6月の日本文化人類学会研究大会で発表した。
- 2) 科学研究費助成事業「民俗学的実践と市民社会——大学・文化行政・市民活動の社会的布置に関する日独比較」の一環としてミュンヘンにおいて現地調査した。また、その成果を12月の共同研究で発表し、さらに、小文としても公開した。
- 3) 人類学的記述としての博物館展示に関する国際シンポジウムを3月に開催した。その成果は、次年度に『国立民族学博物館研究報告』に投稿予定である。
- 4) 共同研究「ソーシャル概念の再検討」の成果とりまとめとして、ふたつの成果刊行のための作業をすすめた。第1は英語論文集で、1月に英語論文集を *Senri Ethnological Studies* の一巻として刊行した。第2は日本語による論文集で、編集作業が終了し出版社での作業進捗を待って次年度刊行の見込みである。
- 5) 科研費研究「戦後民俗学の展開に関するドイツと日本の比較研究——社会における学問実践の形」の成果の一部がイギリスの Blackwell 社刊行の図書に所収論文として刊行された。

◎出版物による業績

[編著]

Mori, A. (ed.)

2013 *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social* (Senri Ethnological Studies 81) Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Mori, A.

2012 Japan. In R. F. Bendix and G. Hasan-Rokem (eds.) *A Companion to Folklore*, pp.211-233. Chichester, UK: Blackwell Publishing Ltd.

Mori, A.

2013 Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social: The Anthropology of Europe. In A. Mori (ed.) *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social* (Senri Ethnological Studies 81), pp.3-14. Osaka: National Museum of Ethnology.

[その他]

森 明子

2012 「産業化とともに——一九世紀末～二〇世紀初頭のヨーロッパ」『月刊みんぱく』36(6): 6-7。

2012 「書評 石川真作著『ドイツ在住トルコ系移民の文化と地域社会』」『図書新聞』2012年8月11日版。

2012 「旅・いろいろ地球人 鉄道叙景⑥ 古くて新しい都市の足」『毎日新聞』12月6日夕刊。

2013 「World Watching from München 現代の民族衣装『ディルンドル』」『みんぱく e-news』140
(<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/140>)

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年3月17日 'Introduction to the Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe', International Symposium, "Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe." National Museum of Ethnology, Osaka.

2013年3月17日 'Making Exhibition of European Cultures in Japan: A Case of Minpaku 2012', International Symposium, "Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe." National Museum of Ethnology, Osaka.



・共同研究会

2012年12月25日 「民俗学実践のかたち——ミュンヘン協会の変遷を事例として」国立民族学博物館共同研究会『日本におけるネイティブ人類学／民俗学の成立と文化運動——1930年代から1960年代まで』（研究代表者：重信幸彦）

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月24日 「ベルリンのキンダーラーデン運動について——1980年代から21世紀初頭へ」日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学

・広報・社会連携活動

2012年4月3日、5日 春の遠足・校外学習事前見学&ガイダンス

2012年8月7日 博学連携教員研修ワークショップ・ミュージアム解説

2012年10月25日 「ヨーロッパ展示への招待——ドイツを中心に」（学校教育協力）

2013年2月17日 「ベルリンで既製服が生まれた頃」第288回みんぱくウィークエンド・サロン

2013年2月23日 「ドイツのパン——地方の特徴、そして伝説」やっぱりヨーロッパ——春のみんぱくフォーラム・パンセミナー

・展示

新展示フォーラム 春のみんぱくフォーラム2013

・映像番組

森 明子 [監修]

電子ガイド日本語版・英語版「糸車」"Spinning Wheels"

電子ガイド日本語版・英語版「仕立て職人イダさんの生涯」"Ida's Life as a Tailor"

電子ガイド日本語版・英語版「裁縫道具」"Sewing Tools and Materials"

◎調査活動

・海外調査

2012年8月31日～10月1日ドイツ（民俗学的実践と市民社会—大学・文化行政・市民活動の社会的配置に関する日独比較に関わる現地調査）

2012年11月26日～12月15日ドイツ（21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究に関わる現地調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（C））「21世紀の市民運動に関する文化人類学研究——ベルリン外国人集住地区の事例」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「民俗学的実践と市民社会——大学・文化行政・市民活動の社会的配置に関する日独比較」（研究代表者：岩本通弥）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本文化人類学会学会誌編集委員会委員、人間文化研究機構男女共同参画委員会委員、京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点共同研究委員会委員、Wissenschaftlicher Beirat von Historische Anthropologie:

Kultur-Gesellschaft-Alltag (Köln, Weimar, Wien) (ドイツ・オーストリアで刊行されている学術雑誌の研究顧問)

・学会の開催

2013年3月17日 国際シンポジウム「文化を展示すること——日本とヨーロッパの遠近法を考える」(国立民族学博物館)の企画・運営・発表・司会

吉本 忍 [よしもと しのお]—————教授

1948年生。【学歴】京都市立芸術大学美術学部工芸科卒(1971)、京都市立芸術大学美術専攻科修了(1973)【職歴】国立民族学博物館第2研究部助手(1978)、国立民族学博物館第2研究部助教授(1990)、国立民族学博物館第5研究部助教授(1991)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(1991)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授(1998)、国立民族学博物館民族文化研究部教授(1998)【専攻・専門】民族技術、民族美術・工芸 1)全世界にわたる機織り技術の通文化的研究、2)インドネシアをはじめとする更紗や緋の染織文化研究【所属学会】民族芸術学会

【主要業績】

[単著]

吉本 忍

1996 『ジャワ更紗』東京：平凡社。

1977-78 『インドネシア染織大系(上・下巻)』京都：紫紅社。

[論文]

吉本 忍

1987 「手織機の構造・機能論的分析と分類」『国立民族学博物館研究報告』12(2): 315-447。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1840年代から1930年代にスイスで生産されたプリント更紗の研究(継続)

・研究の目的

本研究は、1840年代から1930年代にスイスで生産されたプリント更紗の技術とデザインの解析をおこない、それらのうちに見いだされるジャワ更紗の技術とデザインの影響、およびその歴史的な展開をあきらかにすることをおもな目的としている。

研究対象とする原資料は、スイスのプーヴィエ・コレクションのプリント更紗の実物資料とサンプル帖であるが、本研究においては、昨年度中に撮影を完了した前記原資料のデジタル画像資料をもとに、プリント更紗の技術とデザインについて個別に検証するとともに、それらの多くに付随する文字資料の解説をおこなう。

・成果

本研究は2006年度に開始し、2010年度においては、2009年度につづいて、16,000カットに及ぶ膨大なデジタル画像の分析を継続するとともに、それらと関連する20世紀に日本で生産されていたプリント更紗の資料調査をおこなってきたが、研究は未だ終了しておらず、2013年度も分析、その他を継続する予定である。

なお、本研究は吉本 忍が研究代表者となっている科学研究費補助金(基盤研究(C)アジア、アフリカ、ヨーロッパに関わるテキスタイル・グローバリゼーションの研究)にもとづいている。

◎調査活動

・国内調査

2013年3月13日～15日 根室市(北構コレクションの観察調査)

◎出版物による業績

[編著]

吉本 忍編著

2013 『世界の織機と織物』大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2013年1月14日 「織りの定義と織機の分類について」『手織機と織物の通文化的研究』

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告
 - 2013年2月17日 「染織技術の継承に係る問題と無形文化遺産」無形文化遺産シンポジウム『アジア太平洋地域における無形文化遺産の現状と課題』アジア太平洋無形文化遺産研究センター
 - 2013年2月23日 「常呂遺跡出土の『箆』と東アジア・東南アジアの織物文化」ところ埋蔵文化財研究センター講演会、北見市常呂町公民館
 - 2013年2月24日 「アットゥシ織りと樹皮文化について」NPO法人ネットプロジェクト・オホーツククラスター湧別川流域研究会、栗原学園遠軽校舎
- ・みんぱくゼミナール
 - 2012年9月15日 「手仕事への回帰」第412回みんぱくゼミナール
- ・研究講演
 - 2012年8月19日 「白山麓の織機と東アジアの機織り文化」はたや記念館ゆめおーれ勝山
- ・広報・社会連携活動
 - 2012年10月5日 「世界の織機と織物」NPO法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館
- ・展示
 - 2012年9月13日～11月27日 特別展「世界の織機と織物—織って！みて！織りのカラクリ大発見」実行委員長
- ◎上記以外の研究活動
 - ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
沖縄県立芸術大学附属研究所客員研究員
- ◎社会活動・館外活動
 - ・他機関から委嘱された委員など
文化ファッション研究機構運営委員

菊澤律子 [きくさわ りつこ] ————— 准教授

1967年生。【学歴】東京大学文学部文科三類言語学専修課程卒（1990）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程言語学専攻修了（1993）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退（1995）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1995）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（2000）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）【学位】Ph. D. (Linguistics)（ハワイ大学 2000）、文学修士（言語学）（東京大学 1993）【専攻・専門】言語学、比較（歴史）言語学、オーストロネシア諸語、記述言語学、オセアニア先史研究【所属学会】日本言語学会、日本オセアニア学会、Association of Linguistic Typology、Australian Linguistic Society、日本歴史言語学会、The Philological Society (UK)、日本展示学会、International Society for Historical Linguistics

【主要業績】

[単著]

Kikusawa, R.

2003 *Proto Central Pacific Ergativity: Its Reconstruction and Development in the Fijian, Rotuman and Polynesian Languages*. Canberra: Pacific Linguistics.

[論文]

Kikusawa, R.

2003 A New View of the Proto Oceanic Pronominal System. *Oceanic Linguistics* 42(1): 161-186.

2003 Did Proto-Oceanians Cultivate *Cyrtosperma Taro*? *People and Culture in Oceania* 19: 26-54.

【受賞歴】

2009 ラルフ・チカト・ホンダ優秀奨学生賞

2008 第4回日本学術振興会賞

2005 第4回日本オセアニア学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

オーストロネシア諸語の比較形態統語論的研究——上位分岐グループ所属言語における格システムと動詞の形態法の発達史を探る

・研究の目的

前年度までのオーストロネシア諸語、とくに台湾域外オーストロネシア諸語（マラヨ・ポリネシア諸語）における格システムと動詞の形態法の発達に関する研究成果を基盤とし、上位分岐グループに属する言語、とくに台湾原住民諸語を中心に、これらの特徴の発達史の解明を目指す。祖語から継承された特徴と、個別の言語（もしくは言語グループ）において発達した特徴について、何を手掛かりに見分けるのかに焦点をあて、最終的にはオーストロネシア祖語における格システムおよび動詞の形態法を再建することを目標とする。なお、台湾原住民諸語に関する調査は台湾フェローシップによる助成を受けて行うものである。

・成果

- 1) Ross (2009) による台湾の諸言語の新しい系統分類における名詞化接辞の動詞接辞化仮説の妥当性について検討した。Ross は、この変化は、複数回起こったと仮定するにはあまりにも複雑であるため、オーストロネシア諸語の発達史の中でただ1回、特定の祖語においてのみみられた変化であるとするのが妥当であるとし、系統分類の基準とするにたと主張する。これに対し菊澤は、Ross は、音韻および語彙の比較再建の手法を形態統語論の特徴の比較再建にあてはめており、その前提として必要な視点が抜け落ちていることを指摘した。より具体的には、具体的な変化のメカニズムが呈示されていないこと、Ross が仮定している名詞化接辞の機能は動名詞化であり、論理的に変化の順序が成り立たないこと、さらには、形態統語論の特徴の変化はシステムの変化としてみるべきであること、したがって、driftの可能性を検討する必要があること等を示した。さらに今後、この変化のプロセスを解明していくためには、どのようなアプローチが必要かであるのかについて検討し、その結果に基づいて Ross が示したデータを試分析した。この研究は、台湾の中央研究院における調査に基づいて行い、台湾フェローシップを得て行った。その成果については、研究報告書“Verb First or Noun First? Examining “Nominalization” in the Context of the Linguistic Subgrouping of Formosan Languages”として台湾政府に提出済みである。今後はこれを出発点として、より広い台湾諸語のデータを取り込みながら、オーストロネシア諸語における動詞接辞の発達について研究を進めたい。
- 2) 言語における項構造の比較再建の手法の研究の一環として、ベルゲン大学のインドヨーロッパ諸語の比較のためのデータベースを利用しつつ、オーストロネシア諸語のデータ入力の方法について検討した。この内容については、7月の国際オーストロネシア言語学会において研究発表を行った。
- 3) オーストロネシア諸語に関する比較言語学的研究の概要について、1月のアメリカ言語学会における歴史言語学に関するワークショップにおいて口頭発表を行った。

◎出版物による業績

[論文]

菊澤律子

2012 「歴史言語学で『言語』を超える——植物名称の比較と先史研究」『歴史言語学』1: 73-86.

Kikusawa, R.

2012 Standardization as Language Loss: Potentially Endangered Malagasy Languages and Their Linguistic Features. *People and Culture in Oceania* 28: 23-44.

[その他]

菊澤律子

2012 「悩ましい『系統図』という存在」『民博通信』138: 14-15.

2012 「知恵の輪が解ける瞬間」2011年度総合研究大学院大学学生セミナー実行委員チーム・セーガン編『研究者34人に聞くあなたにとって美しいものとは——美しき世界を見る34の異なる視線』pp.14-15.

2012 「CRPS とこんにちは！1 脳の不思議」『月刊みんぱく』36(12): 16-17.

2013 「CRPS とこんにちは！2 私の居場所」『月刊みんぱく』37(1): 16-17.

2013 「CRPS とこんにちは！3 『痛い』を伝える難しさ」『月刊みんぱく』37(2): 16-17.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2012年5月26日 「類型論的一般化と形態統語論における比較再建——オーストロネシア諸語における能格・対

格変化をめぐる』『言語の系統関係を探る——その方法論と歴史学研究における意味』

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年7月28日 (with Y. Osugi) 'Introducing the Sign Language and Linguistics Initiative'. "International Symposium on Signed and Spoken Linguistics (1) Description, Documentation, and Conservation". National Museum of Ethnology.

2013年2月10日 'The Application of Tree and Other Diagrams in Historical Linguistics: An Introductory Address'. International Symposium "Let's Talk about Trees". National Museum of Ethnology.

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年5月19日 「インドネシア語の*-i* applicativeの発達史に関する試論」AA研共同研究プロジェクト『インドネシア諸語の記述的研究：その多様性と類似点』2012年度第1回研究会（通算第11回目）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

2012年7月2日 'Identifying Cognate Structures in Austronesian Comparative Syntax'. "13th International Conference on Austronesian Linguistics". Udayana University, Bali.

2013年1月6日 'The Austronesian Language Family.' Satellite Workshop "Foundations of Historical Linguistics" The 87th LSA (Linguistic Society of America) Annual Meeting, Mariott Copley Place, Boston.

2013年1月25日 「手話言語学を世界へつなぐ——メディア発信とe-learning開発に向けて」2012年度学融合研究事業・公開研究報告会、総合研究大学院大学学融合センター

2013年1月26日 「オーストロネシアンの移動の軌跡をことばから探る」海域アジア研究会1月例会、国立民族学博物館

2013年1月29日 (with Y. Osugi) 'Introducing the Sign Language and Linguistics Initiative in Japan'. Asia Pacific Sign Linguistics Research and Training Program, Regional Meeting. The Chinese University of Hong Kong.

2013年2月6日 'Ergativity to Accusativity Hypothesis Revised: In response to Ball 2007'. International Conference on Oceanic Linguistics. University of Newcastle (Australia).

・研究講演

2012年9月24日 'Comparison and Reconstruction of Morphosyntactic Features: The Intersection between Typological Analysis and Historical (Comparative) Linguistics'. Typology Research Group meeting. Institute of Linguistics, Academia Sinica, Taiwan.

2012年12月12日 'Typological Generalizations and Diachronic Analyses: Actancy Systems in Austronesian Languages'. The Department of Foreign Languages and Literature, National Chi Nan University, Taiwan.

2012年12月17日 'Verb First or Noun First? Putting "nominalization" into a historical context'. Linguistic Typology Research Group meeting, Institute of Linguistics, Academia Sinica, Taiwan.

2012年12月19日 'From Taiwan to Oceania: Austronesian Languages and Human Dispersal in The Pacific'. National Kaohsiung University, Taiwan.

2012年12月26日 'Transitivity and Ergativity in Oceanic Languages'. The Graduate Institute of Linguistics, National Tsinghua University, Taiwan.

2013年1月17日 'From Taiwan to Oceania: Austronesian Languages and Human Dispersal in The Pacific'. English Lecture Series, The Center for Language Studies, Otaru University of Commerce.

◎調査活動

・海外調査

2012年7月1日～7日—インドネシア（第12回国際オーストロネシア言語学会における研究報告および運営委員会参加）

2012年8月6日～9月10日—台湾（台湾原住民諸語の統語構造の比較および歴史的再建）

2012年9月10日～17日—アメリカ合衆国（ハワイ大学における言語の記録および保存活動の調査、手話言語学を取り組むための手法に関するプレゼンテーション、インターネット配信の方法に関する調査研究）

- 2012年 9月22日～12月31日—台湾（台湾原住民諸語の統語構造の比較および歴史的再建）
- 2013年 1月2日～9日—アメリカ合衆国（アメリカ言語学会大会参加）
- 2013年 1月28日～2月2日—香港（アジア太平洋手話研究及び研修プログラム第3回地域会議出席）
- 2013年 2月2日～2月7日—オーストラリア（第9回国際オセアニア言語学会参加）
- 2013年 2月27日～3月6日—アメリカ合衆国（言語学セミナーのインターネット配信に関する打ち合わせ）

◎大学院教育

・指導教員

副主任指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

「手話言語と音声言語のシンポジウム（1）『言語の記述・記録・保存』の開催」人間文化研究機構連携研究プロジェクト代表者、「国際シンポジウム『樹について考える』の開催」人間文化研究機構連携研究プロジェクト代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

日本歴史言語学会理事、国際歴史言語学会（International Society for Historical Linguistics）理事、国際言語類型論学会（Association for Linguistic Typology）理事、国際オーストロネシア言語学会運営委員、第12回国際オーストロネシア言語学会専門委員、欧州リサーチ・カウンシル審査員、*Journal of Historical Syntax* 編集顧問委員、*Brill's Studies in Historical Linguistics* 編集顧問委員、*Journal of Historical Linguistics* 編集顧問委員

白川千尋 [しらかわ ちひろ] ————— 准教授

1967年生。【学歴】筑波大学第一学群人文学類卒（1990）、筑波大学大学院環境科学研究科環境科学専攻修了（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻修了（1998）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1998）、川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科助教授（1999）、新潟大学人文学部助教授（2001）、新潟大学人文社会・教育科学系助教授（2004）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2012）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 1998）【専攻・専門】文化人類学【所属学会】日本オセアニア学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

白川千尋

2005 『南太平洋における土地・観光・文化——伝統文化は誰のものか』東京：明石書店。

2001 『カスタム・メレシ——オセアニア民間医療の人類学的研究』東京：風響社。

[編著]

白川千尋・川田牧人編

2012 『呪術の人類学』京都：人文書院。

【受賞歴】

2002 第1回日本オセアニア学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

国際協力ボランティアに関する文化人類学的研究

- ・研究の目的

本研究の目的は、青年海外協力隊員をはじめとする日本の国際協力ボランティアを対象として、その活動の場におけるボランティアと活動の対象となっている人々の相互交渉や感情のありようなどを分析することにより、

従来の支援概念や国際協力ボランティアに関する研究・実践の蓄積を批判的に再検討することである。また、ボランティアの活動の場における文化人類学的知見の使われ方や扱われ方に関する具体的な事例の収集と分析を行うことで、ボランティアの活動における文化人類学の位相を明らかにすることも目的とする。以上の目的にアプローチするための具体的な活動を行う際には、国立民族学博物館機関研究プロジェクト「支援の人類学」(2009～2012年度、代表者：鈴木 紀)、科学研究費補助金(基盤研究(B))「社会的包摂のための実践人類学的研究」(2011～2013年度、代表者：鈴木 紀)、科学研究費補助金(基盤研究(B))「感情と実践——開発人類学の新たな地平」(2012～2014年度、代表者：関根久雄)の経費などを活用する。

・成果

昨年度と同じく本年度も国内外での調査が本研究の主な活動の1つであった。国外調査はネパールとラオスで行った。具体的には、両国でコミュニティ・ディベロップメントに関する活動を行っている青年海外協力隊員を対象として、活動の概要、活動における問題とそれへの対応、隊員として派遣される前の研修で得た知識や情報の効用と限界などに関する聞き取りを行った。一方、国内では主に青年海外協力隊員の派遣前研修を対象として、研修の内容、研修を受講している隊員への知識や情報の教示法などに関する参与観察を行った。以上の国内外での一連の調査は、科学研究費補助金(基盤研究(B))「社会的包摂のための実践人類学的研究」(2011～2013年度、代表者：鈴木 紀)と、科学研究費補助金(基盤研究(B))「感情と実践——開発人類学の新たな地平」(2012～2014年度、代表者：関根久雄)の経費を利用して行った。調査の結果、昨年度と同様に、派遣前研修では文化人類学的知見が豊富に教示されており、そのなかには現在の国際協力のあり方に対する批判的知見も少なからず含まれていること、調査対象とした隊員においてはそれらの知見が個々の活動の計画・運営・評価などに一定の影響を与えていること、隊員とその活動の対象となる人々の間には一方的な支援・被支援関係にとどまらない関係が認められることなどを把握することができた。また、それらに加えて、隊員が活動のカウンタパートたちや対象者たちとの間に信頼関係を構築してゆく過程で、感情の表出をともなう相互行為がきわめて重要な役割を果たしていることも把握することができた。以上に例示した調査結果をはじめとする本研究の成果の一端については、第46回日本文化人類学会研究大会での研究発表「青年海外協力隊をめぐる支援活動」(2012年6月23日、広島大学)や、民博共同研究『実践と感情——開発人類学の新展開』(代表者：関根久雄)での研究発表「感情と信頼関係——青年海外協力隊の事例より」(2013年2月2日、国立民族学博物館)などで取り上げた。加えて、こうした学術的な場だけにとどまらず、より実践的な場(本年度に私が担当した青年海外協力隊員を対象とした複数の研修)においても、本研究を通じて得た知見の活用と還元に取り組んだ。

◎出版物による業績

[その他]

白川千尋

2012 「旅・いろいろ地球人 伝統と電灯⑤ 電気のない島の電気」『毎日新聞』4月5日夕刊。

2012 「World Watching from Vientiane —— 経済成長と蚊帳」『みんなく e-news』137 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/137>)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2013年2月2日 「感情と信頼関係——青年海外協力隊の事例より」『実践と感情——開発人類学の新展開』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月23日 「青年海外協力隊をめぐる支援活動」第46回日本文化人類学会研究大会、広島大学

2012年7月4日 「東南アジアにおける vector borne diseases —— デング熱とマラリアを中心に」名古屋大学環境学研究科GCOE『地球学から基礎・臨床環境学への展開』ORT ラオス特別セミナー、名古屋大学

2012年8月4日 「KAP サーベイと文化人類学」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト『社会開発分野におけるフィールドワークの技術的融合を目指して』東京外国語大学本郷サテライト

2012年12月6日 ‘Malaria Control and Anthropology.’ “JICA Malaria Control Seminar.” Central Vector Borne Disease Control Office, Department of Health, Naypyidaw, Myanmar.

・研究講演

2012年6月17日 「医療と文化、そして現場」青年海外協力隊平成24年度2次隊村落開発普及員隊員・普及法研修、JICA 地球ひろば

2012年7月7日 「蚊帳に見えない蚊帳のはなし」第409回国立民族学博物館友の会講演会

- 2012年 9月 9日 「医療と文化、そして現場」青年海外協力隊平成24年度 3次隊村落開発普及員隊員・普及法研修、JICA 東京国際センター
- 2012年 9月28日 「青年海外協力隊員の支援活動」第23回研究者と実務者による国際協力セミナー、JICA 関西
- 2012年11月 6日 「文化人類学は国際協力に必要か？」群馬県立前橋高等学校人間社会ゼミ講演、国立民族学博物館
- 2013年 3月 3日 「医療と文化、そして現場」青年海外協力隊平成25年度 1次隊コミュニティ開発隊員・普及法研修、JICA 市ヶ谷ビル

◎調査活動

・海外調査

- 2012年 8月21日～8月28日—ネパール、タイ（青年海外協力隊員の活動と感情の相互関係に関する調査）
- 2012年10月29日～11月 4日—ラオス、タイ（青年海外協力隊員の活動と社会的包摂に関する調査）
- 2012年11月29日～12月 9日—ミャンマー（JICA ミャンマー主要感染症対策プロジェクト（マラリア対策）の活動支援）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

論文ゼミ

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

京都大学地域研究統合情報センター共同研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員、科学研究費補助金（基盤研究（B））「社会的包摂のための実践人類学的研究」（代表者：鈴木 紀）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「感情と実践——開発人類学の新たな地平」（代表者：関根久雄）研究分担者

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

国際協力機構短期専門家（ミャンマー主要感染症対策プロジェクトフェーズ2・マラリア対策、医療人類学）

- ・非常勤講師

大阪大学大学院人間科学研究科「国際フィールドワーク論特講Ⅱ」、新潟大学人文学部「文化人類学特殊研究」（集中講義）

新免光比呂 [しんめん みつひろ]————— 准教授

1959年生。【学歴】早稲田大学政治経済学部政治学科卒（1983）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1986）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了（1992）【職歴】東方研究会専任研究員（1992）、横浜国立大学非常勤講師（1992）、帝京大学非常勤講師（1992）、国立民族学博物館第3研究部助手（1993）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2004）【学位】文学修士（東京大学大学院人文科学研究科 1986）【専攻・専門】宗教学・東欧研究【所属学会】東欧史研究会、「宗教と社会」学会

【主要業績】

[単著]

新免光比呂

2000 『祈りと祝祭の国——ルーマニアの宗教文化』京都：淡交社。

[共著]

新免光比呂・保坂俊司・頼住光子

1998 『比較宗教への途3 人間の文化と神秘主義』東京：北樹出版。

[論文]

新免光比呂

1999 「社会主義国家ルーマニアにおける民族と宗教——民族表象の操作と民衆」『国立民族学博物館研究報告』

24(1): 1-42。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アルバニア人の宗教と文化

・研究の目的

アルバニア人の宗教実践と民族文化の実態に関して本国アルバニアと周辺諸国における調査。

・成果

研究計画に従ってアルバニアでの調査を行い、現在の宗教実践と民族文化の実態について知見を得た。その一方、音楽文化の側面についてバルカン地域における比較を視野において研究した。成果の発表としては、研究公演の実施、みんぱくゼミナールでの講演などを行った。

◎出版物による業績

[その他]

新免光比呂

2013 コラム『『汚れなき祈り』によせて』(映画プログラム『汚れなき祈り』) pp. 22-24, マジック・アワー。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくゼミナール

2013年1月19日 「ヨーロッパのキリスト教とファシズム—ルーマニア・レジオナル運動を中心に」 第416回
みんぱくゼミナール

・研究公演

2012年9月2日 「神への祈りと喜びの舞曲——バッハからバルトークへ」

◎調査活動

・国内調査

2012年4月16日～17日—静岡県(原発立地地域自治体の特殊性に関する資料収集および地域住民への聞き取り)

2012年8月4日～7日—東京都(科学研究費補助金(基盤研究(B))『ファシズムと宗教文化に関する地域・時代比較的综合研究』研究会)

2012年12月1日～7日—佐賀県・長崎県(日本ファシズムにおける宗教迫害の源流を明治初期のキリシタン迫害浦上四番崩れに探り、それに関する資料を現地で収集する)

2013年1月21日～25日—長崎県(キリシタン迫害に関する資料収集と調査)

2013年2月10日～10日—東京都(科研による研究会での研究発表『ルーマニア社会とマネー音楽』)

2013年2月25日～28日—熊本県(キリシタンに関する資料収集と調査)

2013年3月17日～22日—東京都(ファシズム比較研究会及びモロッコ系フランス人(ユダヤ人)への聞き取り調査)

・海外調査

2012年10月1日～25日—フランス、ルーマニア(サントリー文化財団研究助成金課題に関連するルーマニア大衆音楽の調査及びルーマニアにおける旧東欧地区における『演歌型』大衆音楽の比較研究)

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員(1名)

・論文審査

予備審査委員(1件)

丹羽典生 [にわ のりお] ————— 准教授

【学歴】慶應義塾大学文学部卒(1996)、東京都立大学大学院社会科学部研究科修士課程修了(1999)、東京都立大学大学院社会科学部研究科博士課程単位修得満期退学(2005) 【職歴】日本学術振興会特別研究員PD・法政大学(2005)、法政大学社会学部兼任教員(2005)、首都大学東京非常勤講師(2006)、筑波大学非常勤講師(2007)、国立民族学博物館研究戦略センター助教(2008)、国立民族学博物館民族文化研究部准教授(2013) 【学位】博士(社会人類学)

(東京都立大学 2006)、修士(社会人類学)(東京都立大学 1999)【専攻・専門】社会人類学、オセアニア地域研究
【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、東京都立大学社会人類学会、早稲田文化人類学会

【主要業績】

[単著]

丹羽典生

2009 『脱伝統としての開発——フィジー・ラミ運動の歴史人類学』東京：明石書店。

[共編著]

丹羽典生・石森大知編

2013 『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』京都：昭和堂。

[論文]

Niwa, N.

2010 Leaving their tradition behind: Development of the Lami movement in Fiji from 1949 to the 1990s.
People and Culture in Oceania 26: 81-108.

【受賞歴】

2010 第9回オセアニア学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

開発モデル村落に関する文化人類学的研究——フィジー諸島共和国の村落部を事例として

・研究の目的

本研究は、開発モデル村落の変容について文化人類学的に考察することを通じて、どのような経済開発の方法が優れていると理解されてきたのか、また、その現在における有効性について明らかにすることを目的としている。主たる事例として、オセアニアのフィジー諸島の農村部を取り上げる。

・成果

研究発表は、京都大学、国立民族学博物館開催のシンポジウム及び研究会等で行った。昨年度に引き続き、本研究課題の一部を進展させて共同研究会(「オセアニアにおける独立期以降の〈紛争〉に関する比較民族誌的研究」)を主宰することを通じて、よりオセアニアという地域研究の枠組みからの考察を行った。著作・論文は、『オセアニアと公共圏』『現代オセアニアの〈紛争〉』などの書籍で公表した。以上の課題を推進するにあたり、科学研究費補助金若手研究(B)(「オセアニアの紛争に関する文化人類学的研究：フィジー諸島共和国の事例から」)によった。

◎出版物による業績

[共編著]

丹羽典生・石森大知編

2013 『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』京都：昭和堂。

[論文]

丹羽典生

2012 「民族化する国家体制と離脱する人びと——フィジーのラミ運動からみる公共圏の形成」柄木田康之・須藤健一編『オセアニアと公共圏——フィールドワークからみた重層性』pp. 53-68, 京都：昭和堂。

2013 「フィジーにおけるクーデタの連鎖」丹羽典生・石森大知編『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』pp. 123-149, 京都：昭和堂。

2013 「〈紛争〉を考える——オセアニア現代への接近」『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』丹羽典生・石森大知編『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』pp. 1-15, 京都：昭和堂。

[その他]

丹羽典生

2012 「フィジー」『日本大百科全書(ニッポニカ)』東京：小学館。

2012 「時事性と民族誌、そしてメラネシア問題へのアプローチ」『民博通信』137: 12-13。

- 2012 「旅・いろいろ地球人——風を求めて④ いにしへの航海者たち」『毎日新聞』7月26日夕刊。
 2012 「異聞逸聞 太平洋の島々における日本人移民の足跡」『月刊みんぱく』36(9): 20。
 2012 「旅・いろいろ地球人——鉄路叙景⑦ 南洋の陸蒸気」『毎日新聞』12月13日夕刊。
 2012 「みんぱくのオタカラ 人肉用フォーク」みんぱく e-news138 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/138otakara>)。
 2012 「カーゴカルト」世界宗教百科事典編集委員会編『世界宗教百科事典』pp. 758-759, 東京: 丸善出版。
 2013 「フィジーの正月」『MAMOR』71: 32。

Niwa, N. (ed.)

- 2013 *Abstract of International Symposium "Cargo Cults and Contemporary Conflicts in Pacific Societies: Seeking a Path of Coexistence in the Age of Globalization"*. Osaka: National Museum of Ethnology.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2013年1月26日 「グローバル化における紛争と宗教的社会運動」国際シンポジウム『グローバル化における紛争と宗教的社会運動——オセアニアにおける共生の技法』国立民族学博物館
 2013年1月26日 「変革期と宗教的社会運動——先住民主体の経済開発思想への期待と変遷」国際シンポジウム『グローバル化における紛争と宗教的社会運動——オセアニアにおける共生の技法』国立民族学博物館

・共同研究会

- 2012年11月17日 「オセアニアの〈紛争〉に関する比較民族誌的研究——グローバル化の中での暴力・民族対立・介入」『オセアニアにおける独立期以降の〈紛争〉に関する比較民族誌的研究』
 2013年2月23日 「見えない民族間通婚——フィジーにおける先住系とインド系の『婚姻』の事例から」『人類学における家族研究の新たな可能性』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年7月16日 ‘What is a Coup Culture?: Other Implication for Future Anthropological Research’ 第86回現代人類学研究会、東京大学駒場キャンパス
 2012年10月21日 「社会人類学の可能性に向けた覚え書き——オナリ神研究に着目した社会的境界への比較の視点」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同研究課題『地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求』共同研究会、アジアアフリカ言語文化研究所本郷サテライト
 2012年11月2日 ‘Current Pacific Islands Studies in Japan and Germany: An Overview’, International Workshop “Identifying New Topics in Fijian Studies.” 一橋大学 (with Dominik Schieder)
 2012年11月2日 ‘Expanding the Ethnography of Social Anthropology Today: A Comparative Analysis of Marriage Practices Between Indigenous Fijians and Minorities in Fiji’, International Workshop “Identifying New Topics in Fijian Studies.” 一橋大学
 2012年12月17日 「アフリカ化論再考——オセアニアから紛争を考える比較の一視点として」『現代の紛争をめぐる地域間比較研究に向けて——アフリカとオセアニアの事例から考える』国立民族学博物館
 2013年2月18日 「ヴァヌアツ移民に関する覚書——フィジーにおけるヴァヌアツ人集落の形成と現状」科学研究費補助金『太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究』研究会、京都大学品川オフィス

◎調査活動

・海外調査

- 2012年7月29日～8月21日—オーストラリア、バヌアツ (バヌアツ系移民に関する資料収集と調査研究)
 2013年3月5日～26日—イギリス・フィンランド (オセアニアの紛争と社会運動に関する史資料の収集及び聞き取り調査)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

- AA 研共同利用・共同研究課題「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」(研究代表者: 高倉浩樹) 共同研究員、科学研究費補助金(基盤研究(A))「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の

共存に関する人類学的研究」(研究代表者：風間計博) 研究分担者、科学研究費補助金(若手研究(B))「オセアニアの紛争に関する文化人類学的研究：フィジー諸島共和国の事例から」研究代表者

◎学会の開催

2012年12月9日 地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ「現代の紛争をめぐる地域間比較研究に向けて——アフリカとオセアニアの事例から考える」(企画責任者：藤井真一) 国立民族学博物館 第5セミナー室

信田敏宏 [のぶた としひろ] ————— 准教授

1968年生。【学歴】東京都立大学人文学部人文科学科社会学専攻卒(1992)、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻修士課程修了(1995)、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士課程単位取得退学(2000)【職歴】東京都立大学人文学部社会学科助手(2001)、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手(2003)、国立民族学博物館研究戦略センター助手(2004)、国立民族学博物館研究戦略センター助教授(2006)【学位】社会人類学博士(東京都立大学 2002)【専攻・専門】社会人類学、東南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、東京都立大学社会人類学会

【主要業績】

[単著]

Nobuta, T.

2009 *Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli in Malaysia*. Subang Jaya, Malaysia: Center for Orang Asli Concerns.

信田敏宏

2004 『周縁を生きる人びと——オラン・アスリの開発とイスラーム化』京都：京都大学学術出版会。

[論文]

信田敏宏

2004 「ドリアン・タワール村の生活世界——マレーシア、オラン・アスリ社会における階層秩序と世帯状況」『国立民族学博物館研究報告』29(2): 201-306。

【受賞歴】

2006 第4回東南アジア史学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民族消滅に関する人類学的研究

・研究の目的

本研究では、マレーシアの先住民オラン・アスリを手がかりに、世界の諸民族が置かれている現状と比較しながら、民族消滅の可能性について研究する。具体的には、近代化・グローバル化の圧力の中で、先住民コミュニティや人びとのアイデンティティが変容していく過程や、近年になって活発に展開されている先住民運動やNGO活動などに焦点を当て、研究を進める。科学研究費補助金などの外部資金の獲得を目指す。

・成果

本研究の成果として、オラン・アスリ社会における親族システムの変容に焦点を当てた論文「親族システムの理念と実践——マレーシア、オラン・アスリ社会の母系制」『国立民族学博物館研究報告』37(3): 311-330(2013年3月刊行)を発表した。

◎出版物による業績

[編著]

小池 誠・信田敏宏編

2013 『生をつなぐ家——親族研究の新たな地平』東京：風響社。

[論文]

信田敏宏

- 2013 「親族システムの理念と実践——マレーシア、オラン・アスリ社会の母系制」『国立民族学博物館研究報告』37(3): 311-330。

[その他]

信田敏宏

- 2012 「バティンの出自と母系アダット」河合利光編『家族と生命継承——文化人類学的研究の現在』pp. 98-100, 東京: 時潮社。
- 2012 「NGO 活動が宗教の壁を越える——タイ、パキスタン、日本における支援の現場から」『民博通信』139: 12-13。
- 2013 「ヘビとの遭遇」『月刊みんぱく』37(1): 8。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

- 2012年7月22日 「問題提起：グローバル支援とは何か？」『NGO 活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座』
- 2012年12月16日 「<パブリックスケープ>という視座」『NGO 活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年11月22日 「<パブリックスケープ>の人類学——マレーシア先住民の事例」京都人類学研究会11月例会、京都大学

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

- 2012年11月22日 「世帯から社会を見る——フィールドワーク技術論」（1年生ゼミ、テーマシリーズ）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

- 東京外国語大学「東南アジア地域文化論」

廣瀬浩二郎 [ひろせ こうじろう]————— 准教授

【学歴】 京都大学文学部国史学科卒（1991）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1993）、カリフォルニア大学バークレイ校留学（1995）、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学（1997）【職歴】 京都大学文学部研修員（1997）、花園大学社会福祉学部非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2008）【学位】 文学博士（京都大学大学院文学研究科 2000）、文学修士（京都大学大学院文学研究科 1993）【専攻・専門】 日本宗教史、民俗学（日本の新宗教、民俗宗教と障害者文化、福祉の関わりについての歴史、人類学的研究）【所属学会】 日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本武道学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

廣瀬浩二郎

- 2009 『さわる文化への招待——触覚でみる手学問のすゝめ』京都: 世界思想社。
- 2001 『人間解放の福祉論——出口王仁三郎と近代日本』大阪: 解放出版社。

[学位論文]

廣瀬浩二郎

- 2000 「宗教に顕れる日本民衆の福祉意識に関する歴史的研究」京都大学大学院文学研究科。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 「バリア・フリー」に関する人類学的研究

・研究の目的

本年度前半には、昨年度までの研究成果をまとめた2冊の単行本を出版する。『さわっておどろく！——点字・点図がひらく世界』（共著）は、幅広い読者を対象とする触文化の概説書である。『さわって楽しむ博物館——ユニバーサル・ミュージアムの可能性』（編著）は、2011年10月に民博で実施した公開シンポジウムの報告書で、博物館・美術館における「さわる展示」の理論と実践事例を紹介することを狙いとしている。今年度は本館展示場に新設された「世界をさわる——感じて広がる」コーナー（探究ひろば）のキャンペーン企画として、連続講座「博物館にさわる」を担当する（6月～8月）。この内容もブックレットとして刊行する予定である。その他、「バリア・フリー」（多文化共生）という大テーマの下、アメリカ天理教、視覚障害者史に関する調査にも引き続き取り組みたい。

・成果

本年度は「世界をさわる——感じて広がる」コーナーの新設に伴い、多くのマスコミ取材を受けた。“触文化”“手学問”という新しい概念が少しずつ社会に普及していく手応えを感じている。2冊の著作『さわっておどろく！』（共著）、『さわって楽しむ博物館』（編著）の出版を通じて、これまでの私の「さわる展示」に関する実践的研究をまとめることができたのは有意義だった。6月～8月に開催した連続講座「博物館にさわる」には300名以上の参加者があり、斬新かつユニークな企画として評価された。本講座の成果は『季刊民族学』に連載中で、来年度には単行本（編著）として刊行したい。その他、アメリカ天理教、視覚障害者史についても引き続き調査、情報収集を行った。

◎出版物による業績

[編著]

廣瀬浩二郎編著

2012 『さわって楽しむ博物館——ユニバーサル・ミュージアムの可能性』 東京：青弓社。

[共著]

廣瀬浩二郎・嶺重 慎

2012年 『さわっておどろく！——点字・点図がひらく世界』（岩波ジュニア新書）東京：岩波書店。

[論文]

廣瀬浩二郎

2012 「世界をさわる手法を求めて——民博の“手学問”展示コーナーがめざすもの」『視覚障害』288: 21-29（視覚障害者支援総合センター）。

2012 「語り」の宇宙へ——視覚障害者文化の復興をめざして」『科学研究費プロジェクト「障害者運動とソーシャルワークの協働と葛藤」公開日韓シンポジウム予稿論文集』 pp. 29-35。

[その他]

廣瀬浩二郎

2012 「語りの力」『京都新聞』6月4日朝刊。

2012 「サイエンス、コミュニケーション、アートの統合をめざして」『季刊民族学』142: 8-90。

2013 「生活さわり方運動の提唱」『季刊民族学』143: 89-94。

小山修三・廣瀬浩二郎

2012 「世界をさわる手法を求めて」『月刊みんぱく』36(7): 2-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年5月27日 「障害と文化」科学研究費プロジェクト『障害者運動とソーシャルワークの協働と葛藤』第1回研究会、京都大学

2012年9月4日 「ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践」2012年度ヒューマンインターフェース学会ワークショップ、九州大学

2012年12月15日 「瞽女の歴史と文化」科学研究費プロジェクト『障害者運動とソーシャルワークの協働と葛藤』公開日韓シンポジウム、キャンパスプラザ京都

・研究講演

2012年5月12日 「ユニバーサル・ミュージアムの可能性」大阪府立中央図書館主催『第1回府民講座』大阪府立中央図書館

2012年6月10日 「さわっておどろく『手学問のすゝめ』」愛媛県視覚障害者協会主催講演会、愛媛県身体障害者福祉センター

- 2012年6月17日 「さわる文化への招待」 滋賀県視覚障害者施設等連絡協議会主催講演会、ピバシティ彦根
- 2012年6月19日 「共生から共活へ」 大阪大学ボランティアサークル「フロンティア」主催講演会、大阪大学
- 2012年6月29日 「ユニバーサル・ミュージアムの試み」 大阪府高齢者大学校主催講演会、大阪市教育会館
- 2012年7月8日 「点から宇宙へ」 大東市立総合文化センター主催講演会、サーティホール
- 2012年7月27日 「世界をさわる手法を求めて」 日本視覚障害社会科教育研究会主催講演会、岐阜県立岐阜盲学校
- 2012年8月2日 「手学問の理論と実践」 全日本盲学校教育研究会主催『第87回全日本盲学校教育研究大会』基調講演、山形国際ホテル
- 2012年8月21日 「観光のユニバーサル・デザイン化をめざして」 倉敷市主催『おもてなしマイスター制度研修会』倉敷市役所
- 2012年9月18日 「視覚障害者の文化と歴史」 島根県立盲学校主催講演会、島根県立盲学校
- 2012年9月24日 「さわる文化への招待」 大阪女学院高等学校主催講演会、大阪女学院高等学校
- 2012年10月7日 「ユニバーサル・ミュージアムとは何か」 福岡市立博物館主催講演会、福岡市立博物館
- 2012年10月8日 「さわって楽しむ美術館」 愛知県立美術館主催講演会、愛知県立美術館
- 2012年10月19日 「さわる文化とユニバーサル・ミュージアム」 大阪大学『グローバル人間学』特別講義、国立民族学博物館
- 2012年10月23日 「さわる文化への招待」 愛知県立大学『文化人類学』特別講義、愛知県立大学
- 2012年10月24日 「ユニバーサル・ミュージアムの試み」 南山大学エクステンションプログラム主催講演会、南山大学
- 2012年11月3日 「ユニバーサル・ミュージアムの可能性」 津市ボランティア協議会主催講演会、三重県教育文化会館
- 2012年11月14日 「博物館とバリアフリー」 2012年度博物館学集中コース、国立民族学博物館
- 2012年12月1日 「瞽女文化にさわる」 つくば市民大学主催講演会、筑波学院大学
- 2012年12月5日 「ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践」 国立教育政策研究所主催『博物館学芸員専門講座』社会教育実践研究センター
- 2012年12月14日 「瞽女文化と現代」 兵庫県視覚障害者福祉協会主催講演会、兵庫県点字図書館
- 2013年1月31日 「さわって楽しむ図書館、博物館の可能性」 京都市立図書館職員研修会、京都市中央図書館
- 2013年2月2日 「ユニバーサル・ミュージアムの可能性」 NPO法人一休会主催講演会、杉並区役所
- 2013年2月27日 「ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践」 国立科学博物館主催講演会、筑波実験植物園
- 2013年3月13日 「さわっておどろく『手学問のすゝめ』」 千里高等学校主催講演会、千里高等学校
- 2013年3月14日 「さわる文化への招待」 大阪教育大学附属平野高等学校主催講演会、大阪教育大学附属平野高等学校
- 2013年3月17日 「音にさわる、色にさわる、心にさわる」 キッズプラザ大阪主催ワークショップ「五感発見、暗闇探検」、キッズプラザ大阪
- 2013年3月24日 「さわって楽しむ資料館、博物館をめざして」 亀岡市文化資料館主催講演会、亀岡市文化資料館
- ・ 広報・社会連携活動
- 2012年5月2日～13日 特別展「さわっておどろく！——触覚がひらく絵画、読書の世界」監修、大阪府立中央図書館
- 2012年6月30日～8月25日 連続講座「博物館にさわる」（全6回）企画・担当
- 2012年7月4日～11日 特別展「さわる文化への招待」監修、大東市立総合文化センター市民ギャラリー
- 2012年8月5日 「さわっておどろく『手学問のすゝめ』」第264回みんなくウィークエンド・サロン
- ・ 展示
- 「日本の文化」展示新構築メンバー
- ◎ 調査活動
- ・ 国内調査
- 2012年6月15日～16日—新潟県上越市、長野市（瞽女文化に関する聞き取り調査）
- 2013年1月27日～30日—長野県栄村（秋山郷における瞽女の活動に関する調査）
- ◎ 大学院教育
- ・ 大学院ゼミでの活動
- 2012年11月8日 「“手学問”の理論と実践」（1年生ゼミ）

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

吹田市立博物館協議会委員

- ・非常勤講師

筑波大学理療科教員養成施設「視覚障害教育」（集中講義）、関西学院大学「障害者と人権」

山中由里子 [やまなか ゆりこ]

准教授

1966年生。【学歴】カラマズー大学フランス語／美術専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程中退（1993）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1992）、東京大学東洋文化研究所助手（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2004）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2009）【学位】学術博士（東京大学 2007）、学術修士（東京大学 1991）【専攻・専門】比較文学比較文化 西アジアにおけるアレクサンドロス伝説の比較文学的研究【所属学会】日本比較文学会、日本中東学会、オリエント学会、日本比較文明学会、国際比較文学会

【主要業績】

[単著]

山中由里子

2009 『アレクサンドロス変相——古代から中世イスラームへ』名古屋：名古屋大学出版会。

[共編]

Yamanaka, Y. and T. Nishio (eds.)

2006 *The Arabian Nights and Orientalism: Perspectives from the East and West*. London: I. B. Tauris.

[論文]

Yamanaka, Y.

2012 The Islamized Alexander in Chinese Geographies and Encyclopaedias. R. Stoneman, K. Erickson and I. Netton (eds.) *The Alexander Romance in Persia and the East* (Ancient Narrative Supplements 15) pp. 263-274, Groningen: Barkhuis.

【受賞歴】

2011 日本学術振興会賞

2011 日本学士院学術奨励賞

2010 島田謹二記念学藝賞

2010 日本比較文学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究

- ・研究の目的

本研究が対象とする「驚異譚」とは、ラテン語で mirabilia、アラビア語・ペルシア語で 'ajā'ib と呼ばれる、辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説である。未知の世界の摩訶不思議を語るこのようなエピソードは、東西の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行記・見聞記などに登場するが、これらの多くは古代世界から中世・近世の中東およびヨーロッパに継承され、様々な文化圏で共有されてきた。本研究で明らかにしようとする問題点は、次の3つの主要な軸にまとめることができる

1) ジャンルの枠組とモチーフの分類：驚異譚を比較研究することによって、実際にその言説の語り手（あるいは編纂者）によってどのように定義され、位置づけられてきたかを明らかにする。複数の文化圏に共通する主なモチーフや逸話を関連作品から抽出し、「異民族の驚異」、「異境の驚異」、「太古の驚異」といった分類を試みる。

2) 知識の伝播と世界観の変遷：権力の移行、人間の移動、書物・視覚イメージの普及など、知識の伝播や未踏の地の発見を促した歴史的な脈を把握した上で、博物学・人文地理学の発展の流れを明らかにする。さら

に、世界地図や挿絵・装飾などの視覚的表象にも注目し、中東とヨーロッパにおける世界観の変遷と相互の影響関係を辿る。

- 3) 宗教・言語・文化的な特異性と超域的な包括性：上記1)と2)のような比較研究を通して、宗教・言語・文化による相違点を浮かびあがらせる一方、異なる文化圏の驚異譚の根底に共通して流れる想像の力と語り力を明らかにする。

・成果

2012年10月26日～28日にドイツのポツダムで開かれた第9回日本学術振興会日独先端科学シンポジウム（JGFos）において、“A Comparative Study of Mediaeval Marvel Literature in the Middle East and Europe”と題してポスター発表を行った。このために、これまでの研究で明らかになってきた中東とヨーロッパにおける驚異譚のジャンルの発展史を視覚化した比較年表のプロトタイプを作成した。今後の研究で、このプロトタイプをさらに改良し、展示などで利用できるものにしてゆく。

パリのアラブ世界研究所で開催された千夜一夜特別展の企画に協力し、図録に日本における千夜一夜について（“Le Japon et les Mille et Une Nuits”）をフランス語で寄稿した。

本研究は、「中東およびヨーロッパにおける驚嘆文学の比較文学的研究」と題して、科学研究費補助金（基盤B）の交付を受けている。さらに共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」とも連携している。

◎出版物による業績

[論文]

山中由里子

2012 「涙壺を求めて——ヨーロッパの聖書の東洋観とシリア派儀礼」川本皓嗣・上垣外憲一編『比較詩学と文化の翻訳』（大手前大学比較文化研究叢書8）pp.249-269, 京都：思文閣。

Yamanaka, Y.

2012 Le Japon et les Mille et Une Nuits. In Institut du monde arabe (ed.) *Les Mille et Une Nuits*, pp.238-245, Paris: Hazan.

[翻訳]

山中由里子

2013 「ゴルダン・ニコロフ『マケドニア博物館のお宝』『月刊みんぱく』37(2): 14-15。

2012 「ユーージン・オーヤン『インターカルチャー——すばらしい新世界』川本皓嗣・上垣外憲一編『比較詩学と文化の翻訳』（大手前大学比較文化研究叢書8）pp.175-201, 京都：思文閣。

[その他]

山中由里子

2012 「World Watching from Turkey アレクサンドロスが見た風景——アナトリア南部編」『みんぱく e-news』133 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/133>)。

2012 「マテマティクム——ドイツの数学博物館」『月刊みんぱく』36(10): 14-15。

2012 「旅・いろいろ地球人 鉄路叙景① 駅舎の優美、列車の不備」『毎日新聞』11月1日夕刊。

2013 「驚異を見る」『民博通信』140: 20-21。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年3月17日 ディスカッサント、国際シンポジウム“Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe” 国立民族学博物館

・共同研究会

2012年5月26日 「驚異の媒介者としてのアレクサンドロス」『驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年10月28日 “A Comparative Study of Mediaeval Marvel Literature in the Middle East and Europe” 第9回日本学術振興会日独先端科学シンポジウム（JGFos）ポツダム（ドイツ）

・展示

本館展示新構築総括

・広報・社会連携活動

『月刊みんぱく』編集委員

この部分は電子媒体による公開の許諾が得られていません

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

2012年10月4日 「涙壺を求めて——ヨーロッパの聖書の東洋観とシーア派儀礼」（1年生ゼミ）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国際日本文化研究所共同研究「文明と身体」共同研究員、人間文化研究機構小型連携研究「画中画の世界」共同研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本学術振興会科学研究費委員会専門員、日本学術振興会日独先端科学シンポジウム（JGFos）Planning Group Member、日本比較文学会関西支部幹事、日本比較文学会国際活動委員会

齋藤玲子 [さいとう れいこ] ————— 助教

1966年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1989）【職歴】北海道教育委員会社会教育課学芸員（1989）、北海道立北方民族博物館学芸員（1990）、北海道立北方民族博物館主任学芸員（2005）、北海道立北方民族博物館学芸主幹（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2011）【専攻・専門】文化人類学・アイヌの文化変容と表象、北アメリカ北西海岸先住民の美術工芸【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[編著]

齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編

2010 『極北と森林の記憶——イヌイットと北西海岸インディアンの版画』京都：昭和堂。

[論文]

齋藤玲子

2006 「極北地域における毛皮革の利用と技術」北海道立北方民族博物館編『環北太平洋の環境と文化』pp. 65-83, 札幌：北海道大学出版会。

2001 「北海道観光案内のなかのアイヌ文化紹介の変遷——昭和期の旅行案内・北海道紹介記事の考察をとおして」『他者像としてのアイヌ民族イメージを検証する——文化人類学におけるアイヌ民族研究の新潮流』（昭和女子大学国際文化研究所紀要6）pp. 29-42, 東京：昭和女子大学国際文化研究所。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌの工芸の変遷に関する研究

・研究の目的

昨年度に引き続き、明治～昭和初期に収集された資料を中心に、アイヌの工芸の変遷について研究を行う。アイヌがつくった生活用具等は、江戸時代から和人（本州以南の日本人）や外国人によって記録や収集品が残され、アイヌ文化が大きく変容する時代の貴重な証左となっている。これまでの素材・製作技術、文様や形状、

使用法、製作の歴史・社会的背景といった個別研究に加え、近年は資料の記録者・収集者とアイヌの人びととの関係やアイヌ文化がどのように表象されてきたかを読みとること、およびアイヌの主体性についての研究が進められつつある。今年度は、本館所蔵資料の収集過程を丹念にたどり、年代や地域、製作者などの情報の再検討をおこないながら、当時の工芸品の製作・販売状況等について明らかにしたい。

・成果

共同研究「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイльта、ニヅフ資料の再検討」をスタートさせ、東京大学理学部人類学教室旧蔵資料と日本民族学会附属民族学博物館（アチック・ミュージアム）旧蔵資料を中心にデータの再検討を始めた。その過程で、これまで不明とされていた原所有者／製作者等が判明したものもあり、当時の研究者らがアイヌたちからどのように民具を収集したかについて研究を進めた。経過等については、『月刊みんぱく』等に紹介した。また、アイヌ文化伝承者で彫刻家・著述家として著名な故・山本多助氏（1904-1993）の調査にも着手した。戦前から帯広や阿寒など北海道東部において、木彫品の製作販売や観光業などの先駆者として活躍した山本氏が、アイヌの民具にどのようなこだわりを持ち、どのような作品をつくっていたかが把握できた。

◎出版物による業績

[その他]

齋藤玲子

2013 「民博の北方先住民コレクションの再検討」『月刊みんぱく』37(2): 10-11.

2013 「旅・いろいろ地球人 贈り物⑥ 入学祝の木彫り」『毎日新聞』2月14日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2012年10月20日 「趣旨および民博所蔵のアイヌ、ウイльта、ニヅフ資料の概要説明」『明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動』

2013年1月18日～19日 「東京大学理学部人類学教室旧蔵のアイヌ、ウイльта、ニヅフ資料とその付随情報に関する検証」『明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動』

2013年2月26日 「民博所蔵の鳥居龍蔵収集アイヌ、ウイльта、ニヅフ資料について」『明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動』徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

・広報・社会連携活動

2012年7月24日 「国立民族学博物館の活動と資料管理」神戸女子大学『博物館実習』

2012年8月17日 「世界の夏を楽しもう！」関連ワークショップ「ステンシル版画ではがきをつくろう」解説

2012年10月7日 「アイヌの織物」第271回みんぱくウィークエンド・サロン

2012年10月19日 「アイヌ民族の歴史と現在」大阪府立茨木西高等学校「教職員人権教育研修」

2012年11月29日 カムイノミ 司会・解説

2013年1月26日 特別陳列「鳥居龍蔵とアイヌ——北方へのまなざし」ギャラリートーク、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

2013年2月2日 「みんぱくコレクションを語る 明治～昭和初期の樺太資料の収集者たち」友の会講演会

2013年2月22日 「総括 博物館——博物館を愛する」大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2013年2月23日 「国立民族学博物館の活動」北海学園大学『日本文化演習』

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

北海道立北方民族博物館研究協力員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

社団法人北海道アイヌ協会「アイヌ工芸品・民芸品の調査」検討委員、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館特別陳列「鳥居龍蔵とアイヌ——北方へのまなざし」監修協力、カナダ国立美術館（National Gallery of Canada）特別展「Sakahàn: International Indigenous Art」諮問委員

・非常勤講師

神戸女子大学「多文化共生論」

1975年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒（1998）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修了（2002）、京都大学大学院人間・環境学研究科環境関連研究専攻博士課程研究指導認定退学（2007）【職歴】日本学術振興会特別研究員（2006）、京都大学大学院人間・環境学研究科研修員（2008）、国立民族学博物館機関研究員（2010）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学大学院人間・環境学研究科 2010）【専攻・専門】文化人類学、中央アジア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本中央アジア学会、アメリカ人類学会、日本中東学会、日本イスラム協会

【主要業績】

[単著]

藤本透子

2011 『よみがえる死者儀礼——現代カザフのイスラーム復興』東京：風響社。

2010 『カザフの子育て——草原と都市のイスラーム文化復興を生きる』（ブックレット《アジアを学ぼう》⑱）東京：風響社。

[論文]

Fujimoto, T.

2011 Kazakh Memorial Services in the Post-Soviet Period: A Case Study of Northern Kazakhstan Villages. In Yamada, Takako & Takashi Irimoto (eds.) *Continuity, Symbiosis, and the Mind in Traditional Cultures of Modern Societies*, pp.117-132, Sapporo: Hokkaido University Press.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中央アジアの宗教動態と社会再編に関する人類学的研究

・研究の目的

中央アジア地域社会の再編過程においてイスラームなどの宗教がもつ意味を、歴史的動態、地域社会の分断と再編、国境を越えた移動の3つの観点から明らかにする。具体的には、カザフ社会に関する人類学データと歴史資料『トルキスタン集成』のデータを比較するほか、広くユーラシア内陸部における社会宗教動態を比較することをとおして、社会主義をへた諸宗教の再構築メカニズムを検討する。

・成果

- 1) 民博共同研究（若手）「内陸アジアの宗教復興——体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開」の成果の中間報告として、文化人類学会分科会で「社会主義をへた宗教の再構築——地域社会の分断／再編と越境からのアプローチ」をオーガナイズした。
- 2) 科学研究費補助金（基盤研究（B））「多文化空間に生きる越境者の共同性再構築に関する地域間比較研究」（代表：山田孝子）の分担者として、アメリカ人類学会で分科会“Regime Change and Border Crossings in Modern Asia: Transnational Politics, Religion and Social Landscapes”の共同オーガナイザーを務め、Revitalizing Religion through Border Crossings in Post-socialist Spaceと題して口頭発表した。また、同科研費により、2013年3月12日から31日までの20日間、モンゴル国のウランバートル市およびバヤンウルギー県ウルギー市で、カザフ人ディアスポラにおけるイスラームの動態と共同性の再構築に関する研究資料の収集及び現地調査を行った。
- 3) カザフスタンにおける宗教的儀礼の歴史動態に関して、ヨーロッパ社会科学歴史会議の分科会“The Revelation of the Forbidden: Presentation and Self-presentations of Religions under the Pressure”で、Religious Landscape and Presentation of Muslimness: A Case Study of Kazakhstan during the Soviet and Post-Soviet Periodsと題して口頭発表した。また、京大地域研共同研究「帝政ロシアの植民地的『知』の中の中央アジア」（代表：帯谷知可）の一環として、19世紀から20世紀初頭の史料『トルキスタン集成』を中心にロシア語・カザフ語資料を読み込み、現地調査結果と照らし合わせて、「カザフ社会の近代化過程における宗教的儀礼へのまなざし——歴史資料への人類学からのアプローチ」『トルキスタン集成が示す世界』（CIAS Discussion Paper 34: 19-34）を執筆した。

◎出版物による業績

〔論文〕

藤本透子

- 2013 「カザフ社会の近代化過程における宗教的儀礼へのまなざし——歴史資料への人類学からのアプローチ」帯谷知可編『トルキスタン集成が拓く世界Ⅰ——データベース化の課題と展望、その資料としての可能性』（CIAS Discussion Paper 34）pp. 19-34, 京都: 京都大学地域研究総合情報センター。

〔その他〕

藤本透子

- 2012 「宗教が再構築されるメカニズムとは？」『民博通信』137: 26-27。
 2012 「研究フォーラム：みんなく公開講演会 ヨーロッパと日本の宗教——問いなおされる救済のかたち」『月刊みんなく』36(7): 10-11。
 2013 「大草原の小さな博物館——カザフスタンにおける博物館活動と教育活動をつなぐ試み」『月刊みんなく』37(3): 14-15。
 2013 「交錯する視点——カザフ社会の内外から伝統と近代を問う」『地域研究』13(2): 387-392。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2013年1月26日 「コメント——中央アジアからの視点」国際シンポジウム『グローバル化における紛争と宗教的社会運動——オセアニアにおける共生の技法』国立民族学博物館

・共同研究会

- 2012年6月9日 「越境空間におけるイスラームの再構築」『内陸アジアの宗教復興——体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開』
 2012年6月9日 「社会主義をへた宗教の再構築」『内陸アジアの宗教復興——体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年4月13日 Religious Landscape and Presentation of Muslimness: A Case Study of Kazakhstan during the Soviet and Post-Soviet Periods. Session “The Revelation of the Forbidden: Presentation and Self-presentations of Religions under the Pressure.” European Social Science History Conference, Glasgow University, Scotland, UK.
 2012年6月23日 「社会主義をへた宗教の再構築——地域社会の分断／再編と越境からのアプローチ」（分科会趣旨説明）日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学
 2012年6月23日 「越境空間におけるイスラームの再構築——カザフ村落社会の再編過程から」日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学
 2012年11月17日 Revitalizing Religion through Border Crossings in Post-socialist Space: Comparative Analysis of Islam in Kazakhstan and Western Mongolia. Session “Regime Change and Border Crossings in Modern Asia: Transnational Politics, Religion and Social Landscapes.” American Anthropological Association 2012 Annual Meeting, San Francisco, USA(査読有)。

・広報・社会連携活動

- 2012年12月13日 「中央アジアの人類学——社会主義を経たイスラームの動態から考える」プレス懇談会
 2013年2月24日 「中央アジアの春の祝祭ナウルズ」第289回みんなくウィークエンド・サロン

・展示

文化資源プロジェクト「中央・北アジア展示新構築事前調査」館内研究員

◎調査活動

・海外調査

- 2012年4月9日～23日—ドイツ、イギリス（中央アジア・ポスト社会主義研究についての動向調査）
 2012年11月13日～20日—アメリカ合衆国（アメリカ人類学会年次大会参加）
 2013年3月12日～31日—モンゴル（カザフ人ディアスポラにおける共同性の再構築と宗教動態に関する調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「多文化空間に生きる越境者の共同性再構築に関する地域間比較研究」（研究代表者：山田孝子）研究分担者、京都大学地域研究統合情報センター共同研究「異宗教・異民族間コミュニケーションにおける共生の枠組と地域の複相性に関する比較研究」（研究代表者：王 柳蘭）共同研究員、京都大学地域研究統合情報センター共同研究「帝政ロシアの植民地的『知』の中の中央アジア」（代表：帯谷知可）共同研究員

先端人類科学研究部

寺田吉孝 [てらだ よしたか] ————— 部長(併) 教授

1954年生。【学歴】ワシントン大学総合学部学士課程修了（1979）、ワシントン大学音楽部修士課程修了（1983）、ワシントン大学音楽部博士課程修了（1992）【職歴】ワシントン大学音楽部講師（1994）、ピッツバーグ大学船上大学プログラム講師（1995）、国立民族学博物館第2研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2008）【学位】Ph.D.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1992）、M.A.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1983）【専攻・専門】民族音楽学 1）南インド音楽文化の研究 2）南フィリピンのゴング音楽の研究 3）北米のアジア系音楽の研究【所属学会】東洋音楽学会、Society for Ethnomusicology、International Council for Traditional Music、Society for Asian Music、British Forum for Ethnomusicology

【主要業績】

[編著]

Terada, Y. (ed.)

2008 *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan* (Senri Ethnological Studies 71). Osaka: National Museum of Ethnology.

2001 *Transcending Boundaries: Asian Musics in North America* (Senri Ethnological Reports 22). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Terada, Y.

2000 T. N. Rajarattinam Pillai and Caste Rivalry in South Indian Classical Music. *Ethnomusicology* 44(3): 460-490.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) マイノリティと音楽
- 2) インド音楽・舞踏のグローバル化

・研究の目的

- 1) 国家や地域は、民族・宗教・言語・階層・カースト・ジェンダー・セクシュアリティなどによって、またはそれらの複合的な組み合わせによって分割されており、そのように分割された集団間には不均衡な力関係が存在することが多い。本研究は、その中で劣位に置かれたあらゆる集団を暫定的にマイノリティと定義し、かれらと彼らが実践する音楽・芸能の関係を具体的な事例にそって検証することを目的とする。
- 2) インドの音楽・舞踏はインド国内だけでなく、欧米・アジアのインド人コミュニティなどにおいても活発に上演されている。本課題は、インド国内外の複数地域で調査を行うことにより、これまで地域ごとに考察されてきたインド音楽・舞踏の実践を、グローバルな人的・経済的ネットワークの枠組みの中で統合的に分析することを目的とする。インド起源の音楽・舞踏が、グローバル化を背景にして、鳴り響く音響や身体の動きとそれらを支える社会関係の両面で、急激に変容している点を明らかにしたい。

・成果

- 1) 2つの事例（クリンタン音楽のフィリピン国内外における受容、沖縄移民コミュニティのエイサー）の研究を並行して進めた。①フィリピンの宗教的マイノリティであるムスリム諸集団によって伝承されてきたクリンタン音楽を軸とした映像番組“The Maranao Culture at Home and in Diaspora”（英語版、マラナオ語版）を制作した。この映画の上映会を、フィリピン大学（ディリマン校、バギオ校）およびマニラ市内のムスリム集住地域において開催し、取材国の研究者や伝統継承者たちから意見を聴取するだけでなく、マイノリティの音楽に関する通文化的な比較に関する議論を行った。フィリピンにおける上映会は科研プロジェクト「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」（代表：福岡正太）の一部として実施されたものである。また、クリンタン音楽の北米における受容に関する英文論文を刊行した。②映像番組『大阪のエイサー——思いの交わる場』を3か国（インドネシア、ネパール、日本）で上映し、その内容について議論を行った。特に、大阪市大正区における上映会では、取材現地の参加者から意見を聞くことができた。
- 2) 今年度も、昨年度に引き続き、カナダとインドにおいて現地調査を行った。カナダでは、オンタリオ州トロント市において、インド系舞踊グループ（チャンダム舞踊団、ジャナク・ケンドゥリ舞踊団）の活動について実態調査を行った（2012年8月）。メンバーへのインタビュー、リハーサル視察から、グループの活動内容、メンバーの経歴・参加動機などを調査した。また、南インド音楽・舞踊の最大のパトロンであるスリランカ系タミル人コミュニティに関する予備調査を行い、集住地域の歴史や現在の労働・生活環境に関する資料を収集した。インドでは、南インド古典音楽・舞踊の中心地であるチェンナイにおいて、インド在住の音楽家と北米在住のインド人やスリランカ系タミル人との間のネットワークについて実態調査を行った（2012年12月～2013年1月）。本研究は人間文化研究機構推進事業「現代インド地域研究」および科学研究費補助金（基盤研究（B））「インド音楽・舞踊のグローバル化に関する総合的研究」に基づいて実施したものである。また、研究成果の一部を国際学会（2012年8月、イスラエル）、国内シンポジウム（2013年1月、東京）で発表した。

◎出版物による業績

[論文]

寺田吉孝

2012 「チャルメラ系楽器の歴史、分布と演奏の場——民博の音楽展示から」笹原亮二編『チャルメラを作る』（人間文化研究機構連携研究報告書）pp.40-60, 大阪：国立民族学博物館。

Terada, Y.

2012 Kulintang Music and Filipino American Identity. In Ursula Hemetek (ed.) *Music and Minorities in Ethnomusicology: Challenges and Discourses from Three Continents*, pp.75-87. Vienna: Institute of Folk Music Research and Ethnomusicology at the University of Music and Performing Arts.

[その他]

寺田吉孝

2012 「音楽がおこす小さな奇跡」総研大学生セミナー実行委員会編『研究者34人に聞く あなたにとって美しいものとは——美しき世界を見る34の異なる視線』pp.58-59。

2012 「旅・いろいろ地球人——ずらりと並べる⑥ ギターか妻か」『毎日新聞』6月14日夕刊。

2012 「私の逸品——ナーガスワラム」『月刊みんぱく』36(7): 21。

2012 「旅・いろいろ地球人——鉄路叙景⑧ インドの爽やかな朝」『毎日新聞』12月20日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年8月9日 研究発表 ‘A circulatory flow of Indian Music and Minority Nationalism’ 国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究グループ、第7回国際大会（ツファット、イスラエル）
- 2012年10月7日 コメンテーター、日本民俗学会第64回年会、分科会『マイノリティ文化の伝承と創造——祭りを通して再生される民族（民俗）芸能』東京学芸大学
- 2012年10月31日 研究発表 ‘Eisa and Okinawan Community in Osaka, Japan.’ 北スマトラ大学（メダン、インドネシア）
- 2012年12月15日 パネリスト・司会、東洋音楽学会西日本支部定例研究会『八代妙見祭のチャルメラの復元をめぐって』国立民族学博物館
- 2013年1月4日 研究発表 ‘The Global Distribution and Performance Contexts of Double-reed Instruments’

- マドラス大学『メディアと社会』セミナーシリーズ (チェンナイ、インド)
- 2013年1月19日 パネリスト、シンポジウム『インドを奏でる人びと——その音楽受容と変容』東京音楽大学
- ・研究講演
 - 2012年7月13日 ‘Minorities in Japan: Buraku and Okinawan communities in Osaka’ The Five College Center for East Asian Studies, 2012 Japan Study Tour, 国立民族学博物館
 - 2012年7月27日 「世界のチャルメラ、チャルメラの世界」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館
 - 2012年8月4日 「『シャンカラバラナム』と南インド古典音楽」インド・クラシック映画特集、国立民族学博物館
 - 2012年12月9日 「インド舞踊の歴史と現代的展開」第279回みんぱくウィークエンド・サロン
 - ・研究公演
 - 2012年10月14日 『遠い記憶、呼びさます声——ダナンマル家の南インド古典音楽』企画、司会、解説
 - ・映像番組
 - 寺田吉孝 [監修]
 - 2012 『みんぱく映像民族誌第8集 怒——大阪浪速の太鼓集団』国立民族学博物館
 - Terada, Y. and Cadar, U. [監修]
 - 2012 『クリンタン音楽の至宝——マイモナ・カダー』(日本語)
 - 2012 Maimona Cadar: A Master Kolintang Player from the Philippines (英語)
 - 2012 Maimona Cadar: Malim sa Kakoolintang a Meranao (マラナオ語)
 - 2012 The Maranao Culture at Home and in Diaspora (英語)
 - 2012 Olaola o Meranao sa Inged a go sa Kiaparakan Kiran (マラナオ語)
 - Terada, Y. and Garfias, R. [監修]
 - 2013 Valencia’s Virgin Mary Festival and the Dolçaina (英語)
 - 2013 El Festival de la Virgen María y la Dolçaina (スペイン語)
- [上映]
- Drumming out a Message: Eisa and the Okinawan Diaspora in Japan (2005年制作)
 - 2012年10月31日 北スマトラ大学 (メダン、インドネシア)
 - 2012年11月23日 第2回国際民俗音楽映画祭 (カトマンズ、ネパール)
 - The Maranao Culture at Home and in Diaspora (2012年制作)
 - 2013年3月5日 フィリピン大学ディリマン校 (マニラ)
 - 2013年3月6日 キアボ・イスラム・センター (マニラ)
 - 2013年3月7日 フィリピン大学バギオ校 (バギオ)
 - 『大阪のエイサー——思いの交わる場』(2003年制作)
 - 2013年3月30日 大阪沖縄会館
- ◎調査活動
 - ・国内調査
 - 2012年9月22日～23日—東京都代々木公園 (在日インド文化祭ナマステ・インドシアの視察)
 - ・海外調査
 - 2012年8月6日～13日—イスラエル (国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究グループ第7回国際研究大会参加)
 - 2012年8月17日～31日—アメリカ合衆国、カナダ (インド音楽・舞踊のグローバル化に関する調査)
 - 2012年10月26日～11月1日—インドネシア (論博研究者に対する研究指導)
 - 2012年11月22日～29日—ネパール (ネパールにおけるインド音楽・舞踊の調査)
 - 2012年12月26日～2013年1月6日—インド (インド音楽・舞踊のグローバル化に関する調査)
 - 2013年3月3日～9日—フィリピン (民博制作映像音響番組の社会還元に関する研究)
 - ◎大学院教育
 - ・指導教員
 - 副指導教員 (2人)
 - ・論文審査
 - 予備審査委員 (1件)

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「インド音楽・舞踊のグローバル化に関する総合的研究」研究代表者、機構連携研究「映像による芸能の人間文化資源的活用」研究分担者、科学研究費「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」研究分担者、民博共同研究「グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究」共同研究員

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

国際伝統音楽評議会 RILM 派遣委員、国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究グループ理事、『アジア音楽』誌（アメリカ合衆国）編集助言委員、『民族音楽学フォーラム』誌（イギリス）編集助言委員、ネパール民俗音楽映画祭国際運営委員（ネパール）、プーゲンビリヤ音楽院理事（インド）、東洋音楽学会西日本支部委員

佐々木史郎 [ささき しろう] ————— 教授

1957年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科第一卒（1981）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1983）、東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1985）【職歴】国立民族学博物館第1研究部助手（1985）、大阪大学言語文化学部助教授（1991）、国立民族学博物館第4研究部助教授（1995）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター長併任（2004-2007）、国立民族学博物館副館長併任（2010-2012）【学位】学術博士（東京大学大学院総合文化研究科 1989）、社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学 1）シベリア、ロシア極東先住民の狩猟文化、トナカイ飼育文化の研究、2）ロシア極東先住民の近世史、近代史の研究【所属学会】日本文化人類学会、言語文化学会

【主要業績】

[単著]

佐々木史郎

1996 『北方から来た交易民——絹と毛皮とサンタン人』（NHK ブックス772）東京：日本放送出版協会。

[編著]

Sasaki, S. (ed.)

2009 *Human-Nature Relation and Historical-Cultural Backgrounds of Hunter-Gatherer Cultures in Northeast Asian Forests: Russian Far East and Northeast Japan* (Senri Ethnological Studies 72). Osaka: National Museum of Ethnology.

[編著]

佐々木史郎・加藤雄三編

2011 『東アジアの民族の世界——境界地域における多文化的状況と相互認識』東京：有志舎。

【受賞歴】

1997 第25回澁澤賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アムール川下流域における近世から近代への転換

・研究の目的

本研究は、これまで継続してきたアムール川下流域の歴史に関する研究の一部であり、各論である。今年度も昨年度に引き続き、ウデへとナーナイという特定の民族を対象にして、支配者が前近代的な中華王朝の清朝から、近代国家ロシア帝国、さらにはソ連へと交替したことによる、アムール川の先住諸民族の社会と文化の変容を、氏族、集落、個人といったより小さい単位に掘り下げていく。本年度はやはり科学研究費補助金（基盤研究（A））「ロシア極東森林地帯における文化の環境適応」による調査を柱に据えた研究活動を行うが、本年

度は、ナーナイやウデへの食文化における食材の種類と獲得方法、獲得場所の変化など各論部分を重点的に調査する。

・成果

本年度は、科学研究費補助金（基盤研究（A））「ロシア極東森林地帯における文化の環境適応」の研究プロジェクトを柱に、アムール川流域における近世から近代への転換に伴う住民の社会の変化に関する資料収集と史料分析を行った。科研のプロジェクトでは中国黒竜江省側にいるナーナイと同系統の民族とされる赫哲族の村落に関する基本的な情報を集める調査と、ロシアハバロフスク地方コンドン村での冬の氷上漁と狩猟に関する調査を行った。そしてこの科研による調査研究の全体の成果を公開するために、ロシア、ウラジオストークで、ロシア連邦極東大学とロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所を会場として国際シンポジウム「ロシア極東森林地帯における文化の環境適応」（2013年3月6日、7日に実施）を実施した。

科研による調査研究活動と並行して、この各個研究のテーマに関係する研究報告として、19世紀末から20世紀初頭に活躍したロシア、ソ連の民族学者L. Ya. シュテルンベルクのニヅフ研究の近代人類学における位置づけ、とりわけレヴィ＝ストロースの構造主義との関係についての以下の論考をロシア語で執筆し、それがサンクトペテルブルクでロシア科学アカデミー人類学民族学博物館が刊行した論集に掲載された。Исследование Л. Я. Штернбергом нивхского общества и структурная антропология, Резван, Е. А. от. ред. Лев Штернберг – гражданин, ученый, педагог. К 150-летию со дня рождения, СПб.: МАЭ РАН, 2012, стр.291-302. (「シュテルンベルクのニヅフ社会研究と構造人類学」E. A. レズヴァン編『市民、学者、教育者としてのレフ・シュテルンベルク——生誕150年を記念して』、サンクトペテルブルク：人類学民族学博物館、2012年、pp.291-302)。

◎出版物による業績

[論文]

佐々木史郎

2013 「近世の環オホーツク海地域南部におけるクロテン、ギンギツネの流通と狩猟方法」『北海道大学総合博物館研究報告』6: 86-102 (江田真毅・天野哲也編『環オホーツク海地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究』)。

Sasaki, S.

2012 Исследование Л. Я. Штернбергом нивхского общества и структурная антропология, Резван, Е. А. от. ред. Лев Штернберг – гражданин, ученый, педагог. К 150 – летию со дня рождения, стр.291-302. СПб.: МАЭ РАН.

[その他]

佐々木史郎

2012 「精霊に捧げ食べる」『月刊みんぱく』編集部編『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』pp.56-57, 東京：丸善出版。

2012 「春の訪れを告げるはえ縄漁」『月刊みんぱく』編集部編『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』pp.60-61, 東京：丸善出版。

2012 「21世紀の民族学博物館の行方——機関研究：民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」『民博通信』13: 8-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年1月27日 「趣旨説明：民族学資料の保存と修復」国際ワークショップ『民族学資料の保存と修復：博物館バックヤードの利用効率向上と自然素材資料の修復』（機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究：ロシア民族学博物館との国際共同研究」）会場：奈良国立博物館・国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年3月6日 「趣旨説明：北東アジアの森林地域における人々の文化的適応」国際シンポジウム『北東アジアの森林地域における人々の文化的適応』（科学研究費補助金基盤研究（A）「ロシア極東森林地帯における文化の環境適応」）会場：ロシア極東連邦大学・ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学考古学民族学研究所（ロシア、ウラジオストーク市）

・みんぱくゼミナール

2012年12月15日 第415回「樹皮舟を復元する——極東ロシアの白樺樹皮文化」

・研究講演

- 2012年10月6日 「アイヌ文化と北方世界」アイヌ文化振興・研究推進機構主催『アイヌ文化フェスティバル東京』東京国際フォーラム
- 2013年2月16日 「日本の先住民族を考える——列島文化の中のアイヌ文化」東海中学校・高等学校主催『第22回サタデープログラム土曜市民公開講座』東海中学校・高等学校
- 2013年2月17日 「鳥居龍蔵が会った北方世界——先住民族の虚像と実像」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館主催特別展『鳥居龍蔵とアイヌ——北方へのまなざし』記念講演、徳島県立博物館

◎調査活動

・海外調査

- 2012年5月12日～17日—ロシア（ロシア極東森林地帯における文化の環境適応に関する事前調査）
- 2012年6月3日～9日—ロシア（ロシア民族学博物館、人類学民族学博物館における民族資料調査）
- 2012年7月4日～8日—中華人民共和国（両大戦間期におけるロシア語新聞掲載記事の調査収集）
- 2012年8月1日～12日—ロシア（ロシア極東森林地帯における文化の環境適応に関する調査）
- 2012年9月9日～19日—中華人民共和国（ロシア極東森林地帯における文化の環境適応に関する調査）
- 2012年11月29日～12月9日—ロシア（ロシア極東森林地帯における文化の環境適応に関する調査）
- 2013年3月3日～8日—ロシア（日ロ共同シンポジウム「北東アジアの森林地域における人々の文化的適応」参加）
- 2013年3月17日～23日—アメリカ合衆国（アイヌ民族資料所蔵海外博物館における所蔵資料、研究・展示等に関する実態調査及び先住民族に関する博物館先進事例調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1名）、副指導教員（1名）

・論文審査

予備審査委員（1件）

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

北海道大学スラブ研究センター共同利用・共同研究拠点運営委員会委員、文化庁「民族共生の象徴となる空間」における博物館の整備・運営に関する調査検討委員会委員、アイヌ文化振興・研究推進機構評議委員、東北大学文学部博士論文審査委員

鈴木七美 [すずき ななみ] ————— 教授

【学歴】 東北大学薬学部薬学科卒（1981）、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1992）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了（1996）**【職歴】** 財団法人仙台複素環化学研究所研究員（1981）、中外製薬株式会社国際開発部（1982）、財団法人相模中央化学研究所第4研究班研究員（1983）、京都文教大学人間学部文化人類学科専任講師（1997）、京都文教大学人間学研究所所員（2000）、国立民族学博物館共同研究員（2000）、京都文教大学人間学部助教授（2000）、京都文教大学人間学研究所兼任研究員（2001）、京都文教大学大学院文化人類学研究科助教授（2002）、マギル大学人類学部客員助教授（2003）、放送大学文化人類学'04分担協力講師（2004）、京都文教大学人間学部文化人類学科専任教授（2005）、京都文教大学大学院文化人類学研究科教授（2005）、京都文教大学人間学研究所兼任研究員（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2007）、放送大学客員教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2009）**【学位】** 博士（学術）（お茶の水女子大学 1996）、修士（人文科学）（お茶の水女子大学 1992）、学士（薬学）（東北大学 1981）**【専攻・専門】** 歴史人類学、医療社会史**【所属学会】** 日本文化人類学会、日本教育学会、日本医史学会、アメリカ学会、日本アメリカ史学会、Association for Anthropology and Gerontology

【主要業績】

[単著]

鈴木七美

2002 『癒しの歴史人類学——ハーブと水のシンボリズムへ』京都：世界思想社。

1997 『出産の歴史人類学——産婆世界の解体から自然出産運動へ』東京：新曜社。

[編著]

鈴木七美・藤原久仁子・岩佐光広編

2010 『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』東京：御茶の水書房。

【受賞歴】

1998 第13回女性史青山なを賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「ヘルシー・エイジング」とその技術開発に関する応用人類学研究

・研究の目的

高齢化する現代社会において、高齢期のウェルビーイングの基盤となる心身の健康の拡充に関わる具体的な方法に関し、情報を整理・蓄積する。また、終末期のケアとしても注目されている「オルタナティブ・メディスン」の適用に関し、実践の場への情報提供を念頭に、情報を蓄積する。さらに、エイジング研究の新しい動向に関し情報を蓄積する。

・成果

- 1) 高齢者のウェルビーイングとテクノロジーの開発について、2011年度東アジア人類学会国際会議（2011 SEAA [Society for East Asian Anthropology]）にてパネル開催した内容を精査し、アメリカ・エイジング学会（The Association of Aging & Gerontology）学会誌（American Aging Quarterly）に執筆した。Suzuki, Nanami, Creating a Community of Resilience: New Meanings of Technologies for Greater Well-being in a Depopulated Town, *Anthropology of Aging Quarterly*, Vol.33, No.3, (Special International Submission on Aging and Materiality in Japan for Special Issue: Anthropology & Aging in East Asia, Part II), pp.87-96 (2012.9)
- 2) 終末期ケアとしても注目されている「オルタナティブ・メディスン」の適用に関し、実践の場への情報提供を念頭に、情報を蓄積した。とくに、オルタナティブ・メディスンが、慢性疾患や高齢期の諸不調に適用されてきたドイツ、スイスに関し、その考え方と実践について、現地調査を念頭に、情報を蓄積すると共に、研究者・実践者のネットワークづくりを行った。これらの研究資源に基づき、2013年度以降、現地調査に着手する。
- 3) エイジング研究の新しい動向に関して情報収集を行った。地域コミュニティとの関係や多世代交流に配慮した高齢者対象住居の開発や、高齢者のライフロング・ラーニングに資する地域教育関連施設の整備をとおして、地域全体の構成を再考する動きやそのためのネットワーク形成について情報を蓄積し、実践者との共同論文（Suzuki, Nanami & Tilda Hui, Development of a Life-care Community as a “Town” Enriched with Diverse Ethnic Cultures: Focusing on the Cooperation of People Having Chinese and Japanese Cultural Background, SES）を執筆した。

◎出版物による業績

[編著]

Suzuki, N.

2013 *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together* (Senri Ethnological Studies 80). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Suzuki, N.

2012 Creating a Community of Resilience: New Meanings of Technologies for Greater Well-being in a Depopulated Town. *Anthropology of Aging Quarterly: The Official Publication of the Association of Aging & Gerontology* 33(3): 87-96 (Special Issue: Anthropology & Aging in East Asia, Part II).

2013 Carrying Out Care: An Exploration of Time and Space in Cooperative Life Design. In N. Suzuki (ed.) *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together* (Senri Ethnological Studies 80), pp.1-19. Osaka: National Museum of Ethnology.

- 2013 A Reflection on Time and Space for Crossing Over in Life: Weaving A Story that Reverberates in the World and Outer Space. In N. Suzuki (ed.) *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together* (Senri Ethnological Studies 80), pp.143-160. Osaka: National Museum of Ethnology.

[その他]

鈴木七美

- 2012 「生への関心と養生の展開」『民博通信』136: 10-11。
2013 「学融合推進センター運営委員からのメッセージ」『学融合推進センター News Letter』11: 1。
2013 「養生と共生の軌跡」『民博通信』140: 12-13。

Suzuki, N.

- 2012 “Living in a Community of Resilience: A Comparative Study on the Search for Well-being in Multicultural Aging Societies,” (Conferences), *Minpaku Anthropology Newsletter*, Number 34, 16-17.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2012年11月11日 “Heal thyself”: Care as Self-fashioning Conducted by Alternative Medicine in Antebellum America’ 国際シンポジウム『ヒーリング・オルタナティヴス——ケアと養生の文化 (Healing Alternatives: Care and Education as a Cultural Life-style)』国立民族学博物館機関研究「包摂と自律の人間学」領域プロジェクト「ケアと育みの人類学」成果公開、国立民族博物館

・研究講演

- 2012年6月22日 「アーミッシュのキルト文化」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館
2012年11月28日 「ケアと育みの人類学」国立民族学博物館みんぱく若手研究者奨励セミナー、国立民族学博物館
2012年12月6日 「ヒーリング・オルタナティヴス——19世紀アメリカにおけるケア・自然・養生」国際理解ゼミナール、宝塚南口会館
2013年1月25日 「アーミッシュのウェルビーイングの思想とケア」兵庫県阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター

◎調査活動

・海外調査

- 2012年3月27日～4月10日—アメリカ合衆国（「アメリカにおけるエイジング会議」においてワークショップ「多文化的高齢化社会の文化の意味を再考」参加、アメリカの高齢化における well-being に関する資料収集及び調査）
2012年9月22日～10月11日—アメリカ合衆国（キリスト教再洗礼派の非暴力・平和主義に基づくフェアトレードの地域実践に関する現地調査）

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

- 大阪地域留学生等交流推進協議会委員、総合研究大学院大学教育研究評議会評議員、総合研究大学院大学学融合推進センター運営委員会委員

竹沢尚一郎 [たけざわ しょういちろう] ————— 教授

1951年生。【学歴】東京大学文学部宗教学専攻卒（1976）、東京大学大学院人文科学研究科宗教学専攻修士課程修了（1978）、フランス社会科学高等研究院社会人類学専攻博士課程修了（1985）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1985）、九州大学文学部助教授（1988）、国立民族学博物館併任助教授（1996）、九州大学大学院人間環境学研究科教授（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（2001）、九州大学大学院併任教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2007）【学位】民族学博士（フランス社会科学高等研究院 1985）、文学修士（東京大学 1978）【専攻・専門】宗教人類学、アフリカ史、人類学学説史【所属学会】日本宗教学会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会

【主要業績】

[単著]

竹沢尚一郎

2010 『社会とは何か——システムからプロセスへ』(中公新書) 東京: 中央公論社。

2008 『サバンナの河の民——記憶と語りのエスノグラフィ』 京都: 世界思想社。

2007 『人類学的思考の歴史』 京都: 世界思想社。

【受賞歴】

1988 日本宗教学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1) アフリカ史研究、2) 被災のコミュニティ研究

・研究の目的

1) 2010年～2012年度の日本学術振興会のアジアアフリカ研究基盤形成事業の資金援助を受けて西アフリカのマリ共和国で考古学発掘調査を実施し、西アフリカ史研究に新たな寄与をなす。また、「世界の中のアフリカ史の再構築」が、2012～2015年度まで、同会の科学研究費補助金(基盤研究(A))に採択されたので、それを実施する。

2) 三井物産環境基金により、岩手県の大槌町、釜石市などで、被災者の被災後の行動を記録し、データとして保存する。その他、津波後の地域社会の復旧・復興のために、各地でおこなわれるまちづくりに協力する。

・成果

1) については、2012年12月に英語論文が、フランスのアフリカ関係学術誌 *Cahiers d'études africaines* に掲載された。また、アメリカのイェール大学出版会から、これまで10年にわたって実施してきたマリ国ガオ市での発掘調査に関して単行本出版の依頼を受けているので、その準備を進めた。

2) 岩手県の大槌町、釜石市などで、被災者の被災後の行動をビデオに記録し、それを活字に起こして保存した。それをもとに、中央公論新社から『被災後を生きる——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』を2013年1月に刊行した。

◎出版物による業績

[単著]

竹沢尚一郎

2013 『被災後を生きる——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』 東京: 中央公論新社。

[論文]

竹沢尚一郎

2012 「津波の破壊に対抗する被災コミュニティ——大槌町の避難所に見る地域原理と他者との関係性」『国立民族学博物館研究報告』37(2): 127-197。

2012 「移民が可能にする世界」『学鏡』109(4): 6-9。

2012 「アフリカの宗教」山折哲雄監修『宗教の事典』pp.185-194, 東京: 朝倉書店。

Takezawa, S.

2012 La fête japonaise : appareil hégémonique de la cité marchande. *Techniques & Culture*. 57 (2011-2): 98-119.

Takezawa, S. and M. Cisse

2012 Discovery of the Earliest Royal Palace in Gao and Its Implications for the History of West Africa. *Cahiers d'études africaines* 208 (2012-4): 813-844.

[書評]

竹沢尚一郎

2012 「宇野重規・伊達聖伸・高山裕二編著『社会統合と宗教的なもの』の書評」『宗教研究』86(1): 136-139。

[その他]

竹沢尚一郎

2012 「被災後を生きる」『月刊みんぱく』36(4): 22-23。

2012 「九州の玄関口」『食品新聞』4月。

2012 「書評へのリプライ」『宗教と社会』18: 93-95。

2013 「民族学博物館の危機」『民博通信』140: 8-9。

Takezawa, S.

2012 Living in the World after the Tsunami. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 35: 11-12.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年1月16日、17日 “Ethnological Museum in the 21st Century”, “Museum of Ethnology As a Hub of Contacts and Exchanges”, 機関研究「マテリアリティの人類学」国際シンポジウム、フランス人間科学館。

2013年3月24日 「博物館は東日本大震災をどう展示するか」機関研究「マテリアリティの人類学」国際シンポジウム、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月23日 「東日本大震災と人類学——人類学は被災地に対して何ができるのか」日本文化人類学会研究大会

2012年9月8日 「東日本大震災後の語り」日本宗教学会研究大会

◎調査活動

・国内調査

2012年4月8日～29日一岩手県大槌町（被災後の生活再建の調査）

2012年5月9日～18日一岩手県大槌町（被災後の生活再建の調査）

2012年5月27日～6月9日一岩手県大槌町（被災後の生活再建の調査）

2012年7月12日～31日一岩手県大槌町（被災後の生活再建の調査）

2012年8月6日～26日一岩手県大槌町（被災後の生活再建の調査）

2012年9月8日～21日一岩手県大槌町（被災後の生活再建の調査）

2012年11月18日～26日一岩手県大槌町（被災後の生活再建の調査）

・海外調査

2012年10月18日～11月4日一フランス、ベルギー（アフリカ史関係の資料収集、研究者の招へいに関する討議及び国際シンポジウム準備）

2012年12月5日～27日一マリ（マリ国での学術交流と考古学発掘調査）

2013年1月1日～18日一フランス（アフリカ史に関する調査研究、機関研究によるシンポジウム参加）

2013年1月22日～2月21日一マリ、フランス（マリ国での学術交流と考古学発掘調査及びフランスでの研修調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（A））「世界の中のアフリカ史の再構築」（2012年～2016年）研究代表者。

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

三井物産環境基金「被災の共同体から地域の復興へ」（2011年～2014年）研究代表者。

関本照夫 [せきもと てるお] ————— 特任教授

1947年生。【学歴】東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1976）【職歴】国立民族学博物館第五研究部助手（1976）、一橋大学社会学部講師（1981）、同学部助教授（1983）、東京大学東洋文化研究所助教授（1987）、同研究所教授（1991）、同研究所長（2006-2009）、東京大学を定年退職（2010）、国立民族学博物館先端人類科学研究部特任教授（2010-2013）【学位】社会学修士（東京大学 1974）【専攻・専門】仕事の人類学、布、工芸、物質文化、東南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、Association for Asian Studies

【主要業績】

[編著]

Sekimoto, T. (ed.)

2000 *Handicrafts and Industrial Development in Southeast Asia* (Toyota Foundation Research Grant Report), Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo.

[共編著]

関本照夫・船曳建夫編

1994 『国民文化が生れる時——アジア・太平洋の現代とその伝統』東京：リプロポート。

Sekimoto, T., Semiarto Aji Purwanto and Hanantiwi Adityasari (eds.)

2003 *Handicrafts in the Age of Global Economy: Indonesia and Japan*. Depok: Center for Japanese Studies, University of Indonesia.

【受賞歴】

1983 第14回澁澤賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

物質性の人類学的研究

・研究の目的

これまで行ってきたインドネシアのバティック業調査をふまえ、布の生産と消費の比較研究を通じて、モノと人の相互関係を研究する。

・成果

機関研究プロジェクト「布と人の人類学的研究」代表者として、民博主催の国際ワークショップ Living with Asian Textiles (2012.11.3)を開催し、国際シンポジウム Human Consumption of Cloth and Humans Wrapped in Clothにおいて、'Opening Remarks' および 'How Cloth Positions People in their Worlds' (2013.2.23) を発表した。さらにこれらの成果を編著書、論文として公刊準備中である。

2012年9月25日～10月4日にインドネシアに渡航し、伝統染織に関する調査を行った。

・バリ島ではブバリ財団を訪れ、インドネシア東部各地の伝統織物について調査した。その結果、各地の伝統織物生産者とブバリ財団の協力状況が明らかになった。財団が古い優れた織物を現在の生産者に見せ、生産の質について協議する状況、コストと手間を省くための新染料導入をめぐる各関係者の対応・議論の状況が明らかになった。

・ジャワ島ではジョクジャカルタ市、チレボン市を訪れ、2009年にインドネシア・バティックがユネスコ無形文化遺産に登録された以降の、バティック生産・販売の状況を調査した。バティックがユネスコ無形文化遺産に登録されたことにより、インドネシア国内にバティック消費ブームが生まれ、生産者が増える一方、価格の高騰、長期的な展望のないブーム便乗など、問題も発生していることが分かった。

◎出版物による業績

[その他]

関本照夫

2012 「今日のインドネシア・バティック産業」窪田幸子・松井 健編『アジア工芸の〈現在〉——工芸の人類学の基礎研究』東京大学東洋文化研究所東洋学研究情報センター公募研究成果報告書, pp. 67-75, 東京大学東洋文化研究所東洋学研究情報センター。

2012 「みんぱくのオタカラ 日本人が好む輪タク」みんぱく e-news 134 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/134otakara>)。

2012 「捨てるもの、捨てられないもの——国際ワークショップから」『民博通信』138: 12-13。

2012 「旅・いろいろ地球人 美味望郷⑥ 確かに、蟻も悪くない」『毎日新聞』10月11日夕刊。

2013 『国際ワークショップ「アジアの布と生きる」プロシーディングス』大阪：国立民族学博物館。

2013 『国際シンポジウム「布を使う人、布に包まれる身体」プロシーディングス』大阪：国立民族学博物館。

Sekimoto, T.

2012 Consuming Textiles Through Their Uses and Reuses: International Workshop, February 7-8, 2012. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 34: 14-15.

2012 Discardable and Undiscardable Textiles and Clothing, *MINPAKU Anthropology Newsletter*, 35: 1-3.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年2月23日 ‘Opening Remarks’ および ‘How Cloth Positions People in their World’ 国際シンポジウム『布を使う人、布に包まれる身体』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月11日 ‘Indonesian Batik as Second-hand Goods’, in a session “Second-hand circulations in world perspective: global transformations in the value of used goods”, organized by Ilja van Damme and Miki Sugiura, of the World Economic History Congress 2012, at Stellenbosh, South Africa.

・研究講演

2012年6月14日 「ジャワ更紗を作る女性たち」まちだ市民大学、神奈川県町田市

2012年10月19日 「ジャワ更紗を作る人たち」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

・広報・社会連携活動

2012年9月9日 「インドネシアの市場（いちば）と商人」第268回みんぱくウィークエンドサロン

◎調査活動

・海外調査

2012年7月7日～14日—南アフリカ共和国（世界経済史学会分科会「グローバルな視座からみる中古品の流通」参加）

2012年9月25日～10月4日—インドネシア（インドネシアの伝統染布バティック業関係者の調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

東京大学東洋文化研究所東洋学研究情報センター公募共同研究「アジアの工芸の〈現在〉——工芸の人類学の基礎研究」分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

財団法人東洋文庫研究員、筑波大学大学院学位論文審査委員、東京大学大学院学位論文審査委員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・外部評価委員、国立大学教育研究評価委員会委員

齋藤 晃 [さいとう あきら] ————— 准教授

1963年生。【学歴】京都大学文学部文学科フランス語学フランス文学専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得退学（1994）【職歴】国立民族学博物館第4研究部助手（1996）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）【学位】学術修士（東京大学大学院総合文化研究科 1991）【専攻・専門】文化人類学、ラテンアメリカ研究【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[共著]

岡田裕成・齋藤 晃

2007 『南米キリスト教美術とコロニアリズム』名古屋：名古屋大学出版会。

[編著]

齋藤 晃編

2009 『テキストと人文学——知の土台を解剖する』 京都：人文書院。

[共編]

Saito, A. et Y. Nakamura (dir.)

2010 *Les outils de la pensée: étude historique et comparative des «textes»*. Paris: Éditions de la Maison des sciences de l'homme.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

スペイン領南米における集住政策の先住民社会への影響

・研究の目的

スペイン統治下のアメリカでは、広い範囲に分散する小規模な集落を西欧式の大きな町に統合する集住政策が、植民地全土で実施された。本研究は、この政策の先住民社会への長期的影響を、南米のさまざまな地域の事例の比較を通じて解明する。

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（B））「旧スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその影響の地域間比較」（2010～2012年度、代表者：齋藤 晃）、および民博の機関研究「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」（2011～2013年度、代表者：齋藤 晃）の一環として実施される。

・成果

7月15日から20日にかけて、ウィーン（オーストリア）のウィーン大学において、第54回国際アメリカニスト会議の一環として、「La política de reducciones y sus impactos sobre la sociedad indígena en los dominios españoles de Sudamérica」（日本語訳：スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその効果）と題する国際シンポジウムを実施した。このシンポジウムでは、数日にわたる集中的な討議を通じて、集住政策の先住民社会への効果について、通説とは異なる新たなモデルを構築することができた。8月23日と9月6日には、リマ（ペルー）の教皇庁立ペルーカトリカ大学において、同大学大学院アンデス研究プログラムとの共催で、「La política de reducciones en la América española」（日本語訳：スペイン領アメリカの集住政策）と題する公開セミナーを実施した。このセミナーでは、ボリビアと米国から専門家を招聘し、最新の研究成果を報告してもらい、議論を交わした。

◎出版物による業績

[論文]

Saito, A.

2012 Cartas de misioneros de Mojos conservadas en la Biblioteca Nacional del Perú. En *Acta de las XIV Jornadas Internacionales sobre las Misiones Jesuíticas*, CD-ROM, simposio 7, pp.1-9. San Ignacio de Velasco: El Comité Organizador de las XIV Jornadas Internacionales sobre las Misiones Jesuíticas.

[その他]

齋藤 晃

2012 「中南米のカトリック伝道団体（修道会）」世界宗教百科事典編集委員会編『世界宗教百科事典』pp.718-721, 東京：丸善出版。

2012 「国際共同研究の枠組みの構築——機関研究：近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」『民博通信』138: 10-11。

Saito, A.

2012 Resettlement Policy and Its Impact on Native Society in Spanish South America. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 35: 14.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年7月20日 “Las reducciones indígenas: ¿instrumento de etnocidio o espacio de etnogénesis?”. 54 Congreso Internacional de Americanistas, simposio 544: La política de reducciones y sus

impactos sobre la sociedad indígena en los dominios españoles de Sudamérica. Viena: Universidad de Viena.

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年8月9日 “Cartas de misioneros de Mojos conservadas en la Biblioteca Nacional del Perú”. XIV Jornadas Internacionales sobre las Misiones Jesuíticas. San Ignacio de Velasco: Universidad Católica Boliviana “San Pablo” – Chiquitos.

2012年10月12日 “Usos del documento entre los indígenas en las misiones de Mojos”. Participación como expositor virtual. Primer Congreso de Historia Religiosa, Educación y Militar de Tierras Bajas de Bolivia. Villa Montes: Metanoia.

◎調査活動

・海外調査

2012年7月13日～9月9日—オーストリア、ブラジル、ボリビア、ペルー（国際シンポジウム「スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその効果」参加、南米辺境地域の集住化とキリスト教宣教に関する資料調査、第14回国際イエズス会ミッション会議参加、機関研究の成果刊行のための会合）

2013年2月27日～3月22日—ドイツ、ポルトガル（機関研究の成果刊行のための会合、イエズス会の海外宣教に関する資料調査、科研費による研究成果刊行のための会合）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・論文審査

博士論文審査委員（1件）、予備審査委員（1件）

鈴木 紀 [すずき もと] ————— 准教授

1959年生。【学歴】 東京大学教養学部教養学科卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1985）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1991）【職歴】 ニューヨーク州立大学ビンガムトン校人類学科教務助手（1992）、千葉大学文学部助教授（1996）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）【学位】 社会学修士（東京大学大学院 1985）【専攻・専門】 開発人類学・ラテンアメリカ文化論 1) 開発援助プロジェクト評価、2) フェアトレード、3) マヤ・ユカテコ民族の社会変化、4) メキシコのナショナリズム 【所属学会】 日本文化人類学会、国際開発学会、日本ラテンアメリカ学会、Society for Applied Anthropology

【主要業績】

[編著]

鈴木 紀・滝村卓司編

2013 『国際開発と協働——NGOの役割とジェンダーの視点』（みんぱく実践人類学シリーズ8）東京：明石書店。

[論文]

鈴木 紀

2011 「開発人類学の展開」佐藤 寛・藤掛洋子編『開発援助と人類学：冷戦・蜜月・パートナーシップ』pp. 45-66, 東京：明石書店。

2008 「プロジェクトからいかに学ぶか——民族誌による教訓抽出」『国際開発研究』17(2): 45-58。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

国際開発のための実践人類学

・研究の目的

本研究の目的は、社会問題の解決に寄与するための文化人類学である実践人類学を、国際開発活動の分野で推進することにある。とくに開発プロジェクトの成果が、プロジェクト対象社会で持続、発展していくための条

件を、プロジェクトのインパクトに関する民族誌的調査を通じて明らかにしていく。

今年度は、市場取引を活用した国際開発のアプローチであるフェアトレードを研究対象とする。貿易業者とフェアトレード契約を結んだ生産者が、いかに経済的成果を拡大していくか、またフェアトレードによって生産者にどのような社会、文化的な影響が生じるかを検討する。そのためラテンアメリカ地域のフェアトレード認証を受けたカカオ生産者団体の現地調査をおこなう。この調査には、科学研究費補助金（基盤研究（B））「社会的包摂のための実践人類学」（研究代表者：鈴木 紀）による。

・成果

科学研究費補助金（基盤研究（B））「社会的包摂のための実践人類学」を活用し、2012年7月28日から8月11日までボリビアで調査をおこなった。同国では、国際フェアトレードラベル認証機構の認証をうけているカカオ生産者団体エル・セイボを訪問し、同団体が開催した第5回有機カカオフェスティバルの様態を参与観察した。フェアトレードによる経済・社会的便益が生産者の文化的創造性に寄与していることと、生産者の世代交代の中で文化の更新が始まっていることが観察された。

前年度からの研究成果および上記の調査に関して、学会発表を2件おこなった。

- 1) 2012年6月23日「フェアトレードの『支援の言説』と人類学的支援」（単独）日本文化人類学会第46回研究大会（広島大学）
- 2) 2013年3月2日「Fair Trade Tourism: From Market-driven Ethical Consumption to Ethical Encounter between Global Citizens. (フェアトレード観光：市場主導の倫理的消費からグローバル市民間の倫理的出会いへ)」（単独）応用人類学会第73回大会（デンバー、アメリカ合衆国）

また、これまでの研究成果を以下の出版物で公表した。

- 1) 鈴木 紀・滝村卓司編『国際開発と協働——NGOの視点とジェンダーの視点』明石書店、2013年。
- 2) 鈴木 紀「国際開発における協働」鈴木 紀・滝村卓司編『国際開発と協働——NGOの視点とジェンダーの視点』pp.13-35, 明石書店、2013年。
- 3) Suzuki, Motoi “Ethnographic Evaluation of a Rural Development Project for Poverty Reduction.” Utagawa, Takuo (ed.) *Social Research and Evaluation of Poverty Reduction Project*. pp.103-121. Tokyo: Harvest, 2013.

◎出版物による業績

[編著]

鈴木 紀・滝村卓司編

2013 『国際開発と協働——NGOの役割とジェンダーの視点』東京：明石書店。

[論文]

鈴木 紀

2013 「国際開発における協働」鈴木 紀・滝村卓司編『国際開発と協働——NGOの役割とジェンダーの視点』pp.13-35, 東京：明石書店。

Suzuki, M.

2013 Ethnographic Evaluation of a Rural Development Project for Poverty Reduction. Utagawa, Takuo (ed.) *Social Research and Evaluation of Poverty Reduction Project*. pp.103-121. Tokyo: Harvest.

[その他]

鈴木 紀

2012 「生きることを大切にしておく」『月刊みんぱく』36(5): 18-19。

2012 「僕たちは世界を変えることができない。But, we wanna build a school in Cambodia.」『社会科NAVI』1: 8。

2012 「機関研究のアウトリーチ——みんぱくワールドシネマの試み」『民博通信』138: 2-7。

2012 「少年と自転車」『社会科NAVI』2: 18-19。

2013 「みんぱくを持ち帰ろう」『月刊みんぱく』37(1): 18-19。

2013 「人類学的支援とは」『民博通信』140: 10-11。

Suzuki, M.

2012 Comments from Commentator. *STEP International Mini-Symposium Record Happiness: An Economic View*, pp.15-19. 関西大学社会的信頼システム創生センター。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年12月15日 「趣旨説明」機関研究国際ワークショップ「グローバル支援のための実践人類学——研究と実践のキャリア・プランニング」国立民族学博物館

・共同研究会

2012年7月22日 「グローバルな互恵性と人類学的支援」『NGO活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座』

2012年10月13日 「嫉妬と妬み——メキシコの参加型農村開発のサステナビリティ（自立発展性）を巡って」『実践と感情——開発人類学の新展開』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月23日 「分科会：グローバル支援の人類学——支援研究から人類学的支援へ 趣旨説明」日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学

2012年6月23日 「フェアトレードの『支援の言説』と人類学的支援」日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学

2013年3月21日 “Introduction: The Anthropology of Global Supporting: How Can We Forge Reciprocal Bonds between Civil Societies?” (趣旨説明：グローバル支援の人類学——市民社会間で互恵的紐帯をいかに形成するか) The 73rd Annual Meeting of the Society for Applied Anthropology, Denver Marriott City Center Hotel, USA.

2013年3月21日 “Fair Trade Tourism: from Market-driven Ethnical Consumption to Ethical Encounter between Global Citizens” (フェアトレード・ツーリズムー市場型倫理的消費からグローバル市民間の倫理的出会いへ) The 73rd Annual Meeting of the Society for Applied Anthropology, Denver Marriott City Center Hotel, USA.

・研究講演

2012年6月28日 「グローバルな支援とはなにか——フェアトレードの仕組み」第22回 研究者と実務者による国際協力セミナー (JICA 関西・みんぱく・阪大GLOCOL 共催)、JICA 関西

・広報・社会連携活動

2012年7月13日 「フェアトレード」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2012年10月28日 「チョコレート・ジャーニー」第43回 One Village One Earth 遊と講、西宮男女共同参加センター・ウェイブ

・映像番組

鈴木 紀・伊藤敦規 [監修]

2012 「アメリカ先住民のホピの銀細工づくり——銀板に重ねあわせる伝統」国立民族学博物館ビデオテーク

◎調査活動

・海外調査

2012年7月28日～8月11日—ボリビア (フェアトレードの社会的インパクト調査)

2012年3月27日～4月2日—アメリカ合衆国 (第72回応用人類学会参加、社会的包摂に関する文化人類学的研究についての情報収集および調査研究)

2013年3月19日～25日—アメリカ合衆国 (第73回応用人類学会の年次大会参加)

・指導教員

副指導教員 (1人)

・大学院ゼミでの活動

「研究の社会的意義——開発人類学の視点」(1年生ゼミ；テーマシリーズ)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

国際開発学会常任理事 (学会誌『国際開発研究』編集長)、博士論文審査委員 (早稲田大学大学院文学研究科)

・非常勤講師

大阪大学「ボランティア論」

1971年生。【学歴】筑波大学第三学群国際関係学類卒（1994）、香港中文大学国際交流計画学部修了（1995）、筑波大学大学院国際政治経済学研究科博士前期課程修了（1996）、筑波大学大学院国際政治経済学研究科博士後期課程修了（2000）【職歴】ハーバード大学フェアバンクスセンター東アジア研究所客員研究員（1997）、筑波大学社会科学系日本学術振興会特別研究員（1999）、ハーバード大学法学部東アジア法律研究所客員研究員（1999）、東京大学総合文化研究科日本学術振興会特別研究員（2001）、杏林大学社会学科非常勤講師（2001）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2010）【学位】国際政治経済学博士（筑波大学大学院博士課程国際政治経済学研究科 2000）【専攻・専門】文化人類学、移民・移動者研究【所属学会】移民政策学会、日本華僑華人学会、American Anthropology Association、日本文化人類学会、アジア政経学会

【主要業績】

[単著]

陳 天璽

2011 『無国籍』（新潮文庫）東京：新潮文庫。

[編著]

陳 天璽・近藤 敦・小森宏美・佐々木てる編

2012 『越境とアイデンティフィケーション——国籍・パスポート・IDカード』東京：新曜社。

陳 天璽編

2010 『忘れられた人々——日本の「無国籍」者』東京：明石書店。

【受賞歴】

2002 第1回井植記念「アジア太平洋研究奨励賞」

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

越境時代における身分証明・パスポートの再考

・研究の目的

人が頻繁に移動する現代社会における、パスポートや在留カードなど各種の身分証明書が有する機能、そしてそれらの身分証明書の有無が個人の越境、アイデンティティ、日常生活などに与える影響について考察する。

・成果

- 1) 科学研究費助成事業「グローバル時代の国籍とパスポートに関する文化人類学」（若手研究（A））のもと、アメリカにおける重国籍の子供たちが、国籍・パスポート、そしてアイデンティティをいかに使い分けているのか、そして家族はどのような対応を行っているのかについて調査した。その研究成果は、2012年11月サンフランシスコで行われたアメリカ人類学会において発表した。
- 2) 科学研究費助成事業「東・東南アジアにおける地域間越境移住の人類学——結婚（離婚）移住ネットワークにみる文化・エスニシティとアイデンティティ」（基盤研究（B））では、日本とインドネシアで遠距離生活をしている無国籍者の家族を事例として、無国籍者をめぐる結婚と離婚の問題について調査した。
- 3) 機関研究「支援の人類学」の館内メンバーとして、日本における無国籍者の支援活動について調査を行い、その成果を第46回文化人類学会、JICA・GLOCOL・民博共催のワークショップ、アメリカ実践人類学会などにおいて報告した。
- 4) 共同研究「移動と身分証明の人類学」の成果の一部として、タイのマヒドン大学で行われた国際シンポジウムにおいて無国籍者の身分証明書に関する発表を行った。また、移民政策学会において日本における無国籍者の類型に関する発表を行った。2013年2月には、小笠原返還と欧米系民の身分証明書に関する研究会を開き、当事者（欧米系島民、当時の法務省事務官など）を交えて、返還当時の身分証明の調査、発行、アイデンティティの揺れなどについて議論を行った。なお、小笠原の事例については、成果の一部を日本展示新構築に活用する予定である。

◎出版物による業績

[論文]

Chen, T.

- 2012 Statelessness in Japan: Management and Challenges. In C. Podhisita and K. Richter (eds.) *Journal of Population and Social Studies* 21(1): 70-81.
- 2013 Stateless or Belonging to Taiwan or PRC? Nationality and Passport of Overseas Chinese. In Tan C-Beng (ed.) *Routledge Handbook of the Chinese Diaspora*, pp.310-322. Routledge.

[その他]

陳 天璽

- 2012 「『国籍』と『人権』どちらが重要か?」『であい(全同教機関誌月刊「同和教育」)』608: 14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年4月24日 ‘The Stateless in Japan: Management and Policy.’ “Migrants, Minorities and Refugees: Integration and Well-being” 2nd MMC Regional Consultative Meeting, Mahidol University, Salaya, Nakhon Pathom, Thailand.
- 2012年5月14日 「移民・難民と無国籍問題」AA研共同研究会「移民／難民のシティズンシップ——国家からの包摂と排除をめぐる制度と実践」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 2012年6月23日 「日本における無国籍者をめぐる支援活動」『グローバル支援の人類学：支援研究から人類学的支援へ』第46回日本文化人類学会、広島大学
- 2012年7月7日 ‘Being Stateless: An Anthropologist of Stateless’ “Twisted Souls, Estranged Minds: Living Anthropologically in East Asia” East Asian Anthropology Association, Chinese University of Hong Kong.
- 2012年9月29日 「国際結婚と無国籍——その原因と結果」東京大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究『東・東南アジアにおける地域間越境移住の人類学——結婚(離婚)移住ネットワークにみる文化・エスニシティとアイデンティティ』東京外国語大学 アジア・アフリカ研究所
- 2012年11月15日 ‘What Does Nationality Mean to Us? Families with Multiple Nationalities between US and Japan.’ Panel Chaired by A. Takamori and S. Yamashita, Invited Session: “Hybridity in Transnational Japan: Beyond the Multi-ethnic Frame” American Anthropological Association, San Francisco.
- 2012年12月8日 「はざまに生きる人々——国籍、民族への問い」国際常民文化研究機構主催 第4回国際シンポジウム『二つのミンゾク学——多文化共生のための人類文化研究』神奈川大学
- 2013年12月15日 ‘Transnational Marriage and Stateless People.’ International Conference on Dynamics of Marriage/Divorce-related Migration in Asia, ILCAA Joint Research, Tokyo University of Foreign Studies.
- 2013年3月20日 ‘Research and Support of Stateless People: the Role of Anthropology’ in Panel Chaired by M. Suzuki, “Anthropology of Global Supporting.” Society for Applied Anthropology, Denver, USA.

・研究講演

- 2012年10月26日 「グローバルな支援とはなにか——無国籍者の支援活動」第24回研究者と実務者による国際協力セミナー、JICA 大阪・国立民族学博物館・大阪大学グローバルコラボレーションセンター(GLOCOL)、JICA 関西
- 2012年12月9日 「世界のパスポート——パスポートの世界」、JICA 横浜海外移住資料館・財団法人千里文化財団「国立民族学博物館友の会」主催、国立民族学博物館友の会東京講演会、JICA 横浜海外移住資料館。
- 2013年1月12日 「無国籍者——日本でどう暮らしているのか」一般公開ワークショップ『難民ってなんだろう——アジア・アフリカの国からはみだした人々』静岡県立大学国際関係研究科附属グローバル・スタディーズ研究センター、静岡県コンベンションアーツセンター
- 2013年1月26日 「無国籍と入管行政」大阪国際行政書士入管手続き研究会、スイスホテル南海大阪
- 2013年3月13日 「日本に暮らす無国籍の人々」千里高校特別講座、大阪府立千里高校

・研究公演

2012年6月9日～10日 『忘れない絆、絶やさない伝統——震災復興と文化継承を願って』国立民族学博物館および若松公園鉄人28号広場

・広報・社会連携活動

2012年9月29日 「僕らの国際関係論」『ニッポンのジレンマ』NHK Eテレ

2013年2月26日 「日本で暮らす無国籍たち」『ハートネットTV』NHK Eテレ

◎調査活動

・海外調査

2012年4月22日～27日—タイ（マヒドン大学にて「移民・マイノリティ・難民、統合と包摂」会議参加）

2012年7月4日～13日—中華人民共和国（香港中文大学において東アジア人類学会出席及び華僑華人の身分証明に関する調査）

2012年7月25日～8月7日—台湾（国際結婚のもとに生まれる子どもたちの国籍、言語習得、アイデンティティ調査）

2012年8月10日～25日—アメリカ合衆国（無国籍者、重国籍者に関する情報収集）

2012年11月11日～19日—アメリカ合衆国（アメリカ人類学会参加）

2012年11月21日～26日—台湾（日台エリート青年サミット会議参加及び中国展示場の新構築に関する資料収集）

2013年2月4日～10日—インドネシア（無国籍者の国際結婚、離婚に関するインタビュー調査及び資料収集）

2013年2月27日～3月7日—インドネシア、中華人民共和国（無国籍者の国際結婚・離婚における情報収集及びインドネシア華人の国際結婚に関する資料収集）

2013年3月19日～23日—アメリカ合衆国（アメリカ応用人類学会の年次大会参加）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究会『東・東南アジアにおける地域間越境移住の人類学——結婚（離婚）移住ネットワークにみる文化・エスニシティとアイデンティティ』共同研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究会「移民／難民のシティズンシップ——国家からの包摂と排除をめぐる制度と実践」共同研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

NPO 法人無国籍ネットワーク代表理事、日本華僑華人学会理事、移民政策学会理事

・非常勤講師

同志社大学大学院「アジアの移民とディアスポラ」

研究戦略センター

岸上伸啓 [きしがみ のぶひろ] ————— センター長(併)教授

1958年生。【学歴】早稲田大学第一文学部社会学科卒（1981）、早稲田大学大学院文学研究科社会学専修修士課程修了（1983）、マッギル大学博士課程中退（1989）【職歴】早稲田大学文学部助手（1989）、北海道教育大学教育学部函館校専任講師（1990）、北海道教育大学助教授（1992）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1996）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1997）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長（2006）、国立民族学博物館館長補佐（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部長（2009）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科 2006）、文学修士（早稲田大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学 1) カナダ・イヌイットの社会変化 2) 都市在住のイヌイットの民族誌的研究 3) 先住民による海洋資源の利用と管理【所属学会】日本文化人類学会、日本カナダ学会、国際極北社会科学学会、民族芸術学会

【主要業績】

[単著]

岸上伸啓

2007 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』 京都: 世界思想社。

[編著]

Kishigami, N. and J. Savelle (eds.)

2005 *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Studies 67). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Kishigami, N.

2004 A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.

【受賞歴】

2007 第18回カナダ首相出版賞

1998 第9回カナダ首相出版賞（審査員特別賞）

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北アメリカにおける現代の先住民捕鯨に関する民族誌的研究

・研究の目的

アメリカ合衆国アラスカ州の北西海岸地域に居住するイヌピアットの人びとは、国際捕鯨委員会の認可のもとでホッキョククジラ猟に従事している。一方、カナダ極北地域のイヌイットやイヌビアルイットは、国際捕鯨委員会の枠外で1990年代以降にホッキョククジラ猟を復活させ、現在に至っている。本年度は、この2か国における先住民の捕鯨について下記のような調査を実施する。

- 1) アラスカ地域の現地調査は2006年から継続して実施しているが、本年は、アメリカ合衆国アラスカ州バロー村の捕鯨祭であるナルカタック祭において、祝宴や食物分配がどのように社会的に組織され、実践されているか、それらの特徴や背後にある世界観について現地調査を実施し、データを収集する。また、これまで収集してきたホッキョククジラの解体と分配に関するデータを分析し、現地に還元用の英文報告書の準備を進める。さらに捕鯨民イヌピアットに関する現代民族誌の作成のための準備を行う。
- 2) カナダにおける先住民捕鯨の実態についてヌナヴィク地域における捕鯨活動を事例として復活の経緯や準備、実施、影響、問題点などについての調査を行う。その上で、アラスカの先住民捕鯨と比較し、共通性や差異について検討を加える。

なお、本研究は、2012年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権」（代表者：岸上伸啓）の一部として実施する予定である。

・成果

2012年度は、2012年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権」（代表者：岸上伸啓）および2012年度科学研究費補助金（基盤研究（A））「フード・セキュリティの人類学」（代表者：栗本英世・阪大）を活用して、カナダ国オタワ（2012.5.20-5.27）および米国アラスカ州バロー（2012.6.25-7.4および2013.2.4-2.17）において現地調査を実施した。

オタワでは1990年代に復活したカナダ・イヌイットのホッキョククジラ猟と先住権との関係、捕鯨復活の経緯や準備、実施、影響、問題点などについて調査を行った。その結果、現在の捕鯨にはさまざまな問題が付随していることや、復活した捕鯨は生存のためというよりも、文化的および政治的により大きな意義を持つことが判明した。

バローでは、捕鯨祭「ナルカタック」における祝宴と食物分配に関する現地調査と複数の村からドラム・ダンサーや親戚、友人を招待して実施される「使者祭」に関する現地調査を実施した。「ナルカタック」祭には捕鯨の成果を村人全員に分配する社会的機能があり、「使者祭」にはアラスカ北西地域のイヌピアットやユピートの村々を横断して食料やモノを贈与したり、交換したり、友好関係を確認・維持・促進させる社会的効果があることが判明した。

ナルカタク祭については、研究ノート「米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの捕鯨祭ナルカタクについて——宴会における共食と鯨肉の分配を中心に」を『国立民族学博物館研究報告』（2013年、37巻3号）から出版した。また、過去4年のバロー村での捕鯨に関する現地調査報告書として *Sharing and Distribution of Whale meat and other Edible Whale Parts by the Inupiat Whalers in Barrow, Alaska, USA* を作成し、バロー村の関係者に提出し、研究成果を地元に戻すとともに、民博のホームページから公開した (http://www.minpaku.ac.jp/sites/default/files/research/activity/organization/staff/kishigami/pdf/Research_Report2013.pdf)。カナダ・イヌイットの捕鯨と先住権については、論文「カナダ・イヌイットのホッキョククジラ鯨の復活と先住権」を『カナダ研究年報』に投稿した。

◎出版物による業績

[翻訳]

岸上伸啓訳

2012 Ben Crow and Suresh K. Lodha 著『格差の世界地図』 (*The Atlas of Global Inequalities*) 東京: 丸善出版。

[論文]

岸上伸啓

2012 「イヌイット」山折哲雄監修、川村邦光ほか編『宗教の事典』 pp. 404-412, 東京: 朝倉書店。

2012 「米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの捕鯨祭ナルカタクについて——祝宴における共食と鯨肉の分配を中心に」『国立民族学博物館研究報告』 37(3): 393-419。

Kishigami, N.

2013 (Research Report) *Sharing and Distribution of Whale Meat and Other Edible Whale Parts by the Inupiat Whalers in Barrow, Alaska, USA*. Osaka: Kishigami's Office, National Museum of Ethnology.

2013 「On Sharing of Bowhead Whale Meat and Maktak in an Inupiat Community of Barrow, Alaska, USA.」『北海道立北方民族博物館研究紀要』 22: 1-19。

2013 「What Is A Susistence Activity?: With a Special Focus on Beluga Whale Hunt by Inuit in Arctic Canada.」『人文論究』 82: 79-90。

[その他]

岸上伸啓

2012 「『格差』に関する訳者あとがき」 Ben Crow and Suresh K. Lodha 著、岸上伸啓訳『格差の世界地図』 pp. 124-125, 東京: 丸善出版。

2012 「カナダにおける都市先住民イヌイットをめぐる支援活動」日本文化人類学会第46回研究大会準備委員会編『日本文化人類学会第46回研究大会発表要旨集』 p. 257, 広島: 広島大学大学院総合科学研究科。

2012 「イヌイットの暮らしをささえる——ワモンアザラシ」『月刊みんぱく』編集部編『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』 pp. 48-49, 東京: 丸善出版。

2012 「世界の捕鯨の歴史と現状」『食生活』 106(8): 50-53。

2012 「カナダにおけるイヌイットのホッキョククジラ鯨と先住権」日本カナダ学会第37回年次研究大会実行委員会編『日本カナダ学会第37回年次研究大会プログラム・要旨』 p. 14. 大阪: 日本カナダ学会。

2012 「イエローナイフ」日本カナダ学会カナダ豆事典編集委員会編『カナダ豆事典』 p. 11, 大阪: 日本カナダ学会。

2012 「イヌイット」日本カナダ学会カナダ豆事典編集委員会編『カナダ豆事典』 p. 11, 大阪: 日本カナダ学会。

2012 「準州」日本カナダ学会カナダ豆事典編集委員会編『カナダ豆事典』 p. 70, 大阪: 日本カナダ学会。

2012 「先住民アート」日本カナダ学会カナダ豆事典編集委員会編『カナダ豆事典』 pp. 78-79, 大阪: 日本カナダ学会。

2012 「ノースウエスト準州」日本カナダ学会カナダ豆事典編集委員会編『カナダ豆事典』 pp. 103-104, 大阪: 日本カナダ学会。

2012 「バフィン島」日本カナダ学会カナダ豆事典編集委員会編『カナダ豆事典』 p. 108, 大阪: 日本カナダ学会。

- 2012 「ファースト・ネーションズ」日本カナダ学会カナダ豆事典編集委員会編『カナダ豆事典』p.113, 大阪: 日本カナダ学会。
- 2012 「World Watching from the Arctic 岐路に立つ先住民生存捕鯨」『みんぱく e-news』135 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/135>)
- 2012 「旅・いろいろ地球人 美味望郷① 北極海のクジラ料理」『毎日新聞』9月6日夕刊。
- 2012 「先住民の生活舞台——極北、北西海岸、そして都市」飯野正子・竹中 豊編『カナダを旅する37章』pp.132-139, 東京: 明石書店。
- 2012 「先住民アート——イヌイットと北西海岸先住民の美」飯野正子・竹中 豊編『カナダを旅する37章』pp.286-292, 東京: 明石書店。
- 2012 「PROJECT なぜ人は他の人にモノを与えるのか?」『民博通信』139: 16-17。
- 2013 「コラム 変わるカナダ北部に住むイヌイットの生活——民族学者岸上伸啓さんのお話」東京法令出版教育出版部編『ニュースタイル ビジュアル 地理 世界・日本』p.16, 東京: 東京法令出版。
- 2013 「シンポジウムの成果」北海道立北方民族博物館編『第27回北方民族文化シンポジウム 網走 環境変化と先住民の生業——海洋生態系における適応』pp.47-48, 網走: 北方文化振興協会。

Kishigami, N.

- 2012 The Inuit's Migration Patterns and Drastic Increase in Urban Centers of Canada. ICCS (International Council for Canadian Studies) (ed.) ICCS International Conference Abstracts/Resumes/Biographies, p.19, Ottawa: International Council for Canadian Studies.
- 2012 The Inuit's Bowhead Whale Hunt and Indigenous Rights in Canada. The Program and Summary of the 37th Annual Conference of the Japanese Association for Canadian Studies p.15, Osaka: The Japanese Association for Canadian Studies.
- 2013 Homeless Inuit of Urban Centers in Canada: Results from Montreal Research. In The Society for Applied Anthropology 2013 Program Committee(ed.) Program and Abstracts of SFAA 2013 Annual Meeting, pp.106, Denver: Society for Applied Anthropology.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年5月23日 The Inuit's Migration Patterns and Drastic Increase in Urban Centers of Canada. ICCS (International Council for Canadian Studies) International Conference, University of Ottawa.
- 2012年6月23日 「カナダにおける都市先住民イヌイットをめぐる支援活動」分科会『グローバル支援の人類学』（代表者：鈴木 紀）日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学
- 2012年9月13日 「カナダにおけるイヌイットのホッキョククジラ猟と先住民権」日本カナダ学会第37回年次研究大会セッションIII、関西大学
- 2012年10月14日 「全体のまとめ (concluding remarks)」第27回北方民族文化シンポジウム網走「環境変化と先住民の生業文化——海洋生態系における適応」網走市オホーツク／文化交流センター大会議室
- 2013年3月21日 “Homeless Inuit of Urban Centers in Canada: Results from Montreal Research. Paper read at the 73rd Annual Meeting of the Society for Applied Anthropology”, Denver Marriott City Center Hotel, Denver, Colorado, USA.

・研究講演

- 2012年11月10日 「アラスカ先住民イヌピアットの捕鯨と捕鯨祭」日本文化人類学会公開シンポジウム『食と儀礼をめぐる地球の旅——先住民文化からみたシベリアとアメリカ』東北大学片平さくらホール
- 2013年2月9日 “Sharing and Distribution of Bowhead Whale Meat and Maktak in an Inupiat Community of Barrow, Alaska, USA.” Public Lecture delivered at UIC Science Center, Barrow, Alaska, USA.

◎調査活動

・海外調査

- 2012年6月25日～7月4日—アメリカ合衆国（米国アラスカ州バロー村の捕鯨祭「ナルカタック」）における祝宴と食物分配に関する調査

- 2012年 8月19日～9月3日—カナダ（ホームレスイミットの社会的包摂と自立に関する調査）
2013年 2月4日～17日—アメリカ合衆国（アラスカ先住民社会におけるフード・セキュリティ問題の調査）
2013年 3月18日～24日—アメリカ合衆国（アメリカ応用人類学会の年次大会参加）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（3人）、副指導教員（2人）

・大学院ゼミでの活動

比較社会研究特論II、比較社会演習II、「先住民生存捕鯨再考——政治生態学とアクターネットワーク論の視点から」（1年生ゼミ）

・論文審査

予備審査委員（1件）

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

第22期日本学術会議連携会員（地域研究）、第25期日本文化人類学会理事、日本カナダ学会理事、地域研究コンソーシアム理事、民族芸術学会理事、北海道立北方民族博物館研究協力員、大阪大学 GLOCOL 外部評価委員、東北大学東北アジア研究センタープロジェクト外部評価委員

笹原亮二 [ささはら りょうじ] ————— 教授

1959年生。【学歴】早稲田大学第一文学部卒（1982）、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士課程前期修了（1995）、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士課程後期退学（1995）【職歴】相模原市立博物館学芸員（1982）、国立民族学博物館第1研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）【学位】博士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 2001）、修士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 1995）【専攻・専門】民俗学、民俗芸能研究 1) 日本の獅子舞の民俗学的研究 2) 日本の民俗芸能の近代～現代における伝承の研究 3) 民俗学における資料論【所属学会】日本民俗学会、民俗芸能学会、芸能史研究会

【主要業績】

[単著]

笹原亮二

2003 『三匹獅子舞の研究』京都：思文閣出版。

[編著]

笹原亮二編

2009 『口頭伝承と文字文化——文字の民俗学 声の歴史学』京都：思文閣出版。

[論文]

笹原亮二

2005 「用と美——柳田国男の民俗学と柳宗悦の民藝を巡って」熊倉功夫・吉田憲司共編『柳宗悦と民藝運動』pp. 273-294, 京都：思文閣出版。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

西日本における島々の民俗芸能の諸相

・研究の目的

西日本各地には、瀬戸内海や五島灘・玄海灘等、多くの島々が存在する多島海海域がある。そこでは古来、漁業・商業・交通等を生業とする海の民と、彼らを保護・支配する海の領主の活動圏として、島・海・沿岸地域から成る「領域」が形成されてきた。また、各海域は国内外を巡る航路上に位置し、人・物・情報が往来する「道」として外部と頻繁な交流・交渉が見られた。一方、個々の島は地理的制約から、自然状況や政治的・社会的要因により外部と隔絶し易く、個性や自律性を有する「コミュニティ」が形成された。更に、瀬戸内海は平家等の強大な政治勢力の活躍の場となり、玄界灘は「異国」との境界となる等、それぞれ独自の地域性が

形作られた。こうした「領域」「道」「コミュニティ」という特質と各々の地域性が相俟って、各々の海域独自の歴史や社会が展開していった。本研究では、こうした海域の島々で行われている民俗芸能を、「領域」「道」「コミュニティ」の特質と地域性の中で歴史的に形成・伝承されてきた多様性に富む島嶼世界の民俗文化として注目し、その実態を解明する。

・成果

瀬戸内海域・天草諸島とその周辺地域・五島列島とその周辺地域などの各地の民俗芸能や祭について現地調査を行ったほか、それらの地域の民俗芸能に関する論文調査報告映像記録その他の関連資料を各地の図書館博物館資料館等において調査収集した。また、同様の多島海海域の事例として、奄美群島においても同様の研究を行った。

それらの成果は、笹原亮二「チャルメラと『民俗芸能を巡る諸相』」（国立民族学博物館音楽展示プロジェクトチーム・人間文化研究機構連携研究プロジェクト「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」『チャルメラを作る』2012所収）、短編映像番組『夏日踊りを踊るシマ——徳之島井之川集落誌』作成、日本展示新構築などを通じて公開した。

本研究は、笹原が研究代表者の科学研究費補助金（基盤研究（C））「九州とその周辺における島の芸能の研究——開放性・自律性境界性の中の民俗文化の諸相」のほか、人間文化研究機構連携研究プロジェクト「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」・日本展示新構築に関わる資料収集によって実施した。

◎出版物による業績

[編著]

笹原亮二編

2012 『チャルメラを作る』国立民族学博物館音楽展示プロジェクトチーム・人間文化研究機構連携研究プロジェクト「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」。

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

京都市立芸術大学伝統音楽研究センタープロジェクト研究「音楽・芸能史における芸術化の諸問題」（代表：後藤静男）共同研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

島根県古代文化センター資料評価委員・同客員研究員

・非常勤講師

関西学院大学文学部「地理学地域文化学特殊講義」、阪南大学国際コミュニケーション学部「民俗学概説」

關 雄二 [せき ゆうじ] ————— 教授

1956年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科文化人類学専攻卒（1979）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1982）、東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1983）【職歴】東京大学教養学部助手（1983）、東京大学総合研究資料館助手（1986）、天理大学国際文化学部助教授（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2001）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部長（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2009）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1982）【専攻・専門】アンデス考古学、文化人類学 1）古代アンデス文明の形成過程、2）現代ペルーの文化行政、3）考古学と国民国家形成、4）世界遺産と国別の文化遺産との相互関係【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for American Archaeology

【主要業績】

[単著]

關 雄二

2010 『アンデスの考古学 改訂版』東京：同成社。

2006 『古代アンデス——権力の考古学』京都：京都大学学術出版会。

[共編]

大貫良夫・加藤泰建・関 雄二編

2010 『古代アンデス——神殿から始まる文明』（朝日選書863）東京：朝日新聞出版。

【受賞歴】

2008 濱田青陵賞

2008 科学分野の功績に対する表彰（ペルー国立サン・マルコス大学）

2008 クントゥル・ワシ賞（ペルー文化庁カハマルカ支局）

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代アンデスにおける権力生成過程の研究

・研究の目的

南米の太平洋沿岸部、とくに今日のペルー共和国を中心に成立した古代アンデス文明に焦点をあて、権力の形成について理論的な解釈をおこなう。具体的には、ペルー北部山中パコパンバ遺跡を調査し、文明の基礎が築かれた形成期（B. C. 2500～紀元前後）における経済やイデオロギーの様相を検出する。なお上記の調査部分は、科学研究費補助金（基盤研究（S））をあてた。

・成果

2011年度から科学研究費補助金（基盤研究（S））を取得し、フィールドワークを含め、研究を推進した。成果としては、発掘の概報として欧文論文を1点発表したほか、2009年に発見された貴人墓の被葬者を含む人骨分析の欧文論文を1本、被葬者に関する和文論文1本を出版した。このほか内外の国際学会、研究集会、シンポジウムにおいて8本の研究発表をおこなった。

◎出版物による業績

[編著]

染田秀藤・関 雄二・網野徹哉編

2012 『アンデス世界——交渉と創造の力学』、京都：世界思想社。

[論文]

関 雄二

2012 「翼を持つ女性——ペルー、パコパンバ遺跡におけるシンボリズムとイデオロギー」『共生の文化』7: 66-72, 愛知：愛知県立大学多文化共生研究所。

2012 「戦うことの意味——アンデス文明初期における戦争と世界観」染田秀藤・関 雄二・網野徹哉編『アンデス世界——交渉と創造の力学』pp. 275-299, 京都：世界思想社。

2012 「遺跡管理における住民参加の意味を問う——国際協力の現場から」『平成24年度 遺跡等マネジメント研究集会（第2回）パブリックな存在としての遺跡・遺産 講演・報告資料集』pp. 6-9, 奈良：奈良文化財研究所 文化遺産部遺跡整備研究室。

Nagaoka, T., Y. Seki, W. Morita, K. Uzawa, D. A. Paredes and D. M. Chocano

2012 A case study of a high-status human skeleton from Pacopampa in Formative Period Peru. *Anatomical Science International* 87: 234-237, DOI 10.1007/s12565-011-0120-z.

[その他]

関 雄二

2012 「復興と文化遺産」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』45: 3, 東京：アムプロモーション。

2012 「南米ペルーにおける文化財としての魚食」『vesta』88: 37-39, 東京：味の素食の文化センター。

2012 「3000年ぶりの神殿間の交流」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』46: 3, 東京：アムプロモーション。

2012 「神官の墓の発見——ペルー北高地パコパンバ遺跡における権力の萌芽」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』46: 4-7, 東京：アムプロモーション。

2013 「旅・いろいろ地球人 贈り物⑧ 王と庶民は相身互い」『毎日新聞』2月28日夕刊。

2013 「チリパからティワナクへ——古代文明の変遷」真鍋周三編『ボリビアを知るための73章 [第2版]』pp. 204-207, 東京：明石書店。

2013 「インカ帝国の進出——年代記に残るティティカカ湖地方の創世神話」真鍋周三編『ボリビアを知るための73章 [第2版]』 pp. 208-211, 東京: 明石書店。

2013 「ティワナク遺跡」真鍋周三編『ボリビアを知るための73章 [第2版]』 pp. 212-213, 東京: 明石書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月19日 Yuji Seki, Diana Aleman y Daniel Morales “La doncella alada: Simbolismo e ideología en el sitio arqueológico Pacopampa, Perú”. 54 Congreso Internacional de Americanistas, University of Vienna, Austria.

2012年7月19日 Juan Pablo Villanueva, Masato Sakai and Yuji Seki “Arquitectura, Paisaje y Cosmovisión en el centro ceremonial Formativo de Pacopampa”. 54 Congreso Internacional de Americanistas, University of Vienna, Austria.

2012年8月21日 “Formación de la sociedad compleja y la memoria social en el sitio arqueológico Pacopampa, Perú”. XX Congreso Nacional de Estudiantes de Arqueología, Universidad Nacional de Trujillo, Perú.

2012年12月1日 鶴澤和宏、関 雄二、マウロ・オールドーニェス、ディアナ・アレマン、ファン・パブロ・ビジャヌエバ「ペルー北部高地パコパンバ遺跡における偶蹄類利用」古代アメリカ学会第17回研究大会、国立民族学博物館

2012年12月1日 関 雄二、ファン・パブロ・ビジャヌエバ「ペルー北高地パコパンバ遺跡における金製品を副葬した墓の発見」古代アメリカ学会第17回研究大会、国立民族学博物館

2012年12月21日 「遺跡管理における住民参加の意味を問う——国際協力の現場から」奈良文化財研究所 平成24年度遺跡等マネジメント研究集会 (第2回) 「パブリックな存在としての遺跡・遺産」、奈良文化財研究所平城宮跡資料館

2013年1月26日 「アンデス形成期社会の経済基盤と神殿建設」ワークショップ「古代文明における経済基盤と祭祀——マヤとアンデスの比較」、東京大学総合研究博物館ミュージアムホール

2013年1月27日 「アンデス文明における権力の発生——最新成果報告」公開フォーラム「古代文明の生成過程——マヤとアンデスの比較」、キャンパス・イノベーションセンター東京

2013年2月16日 “Simposio Internacional: Diversidad y Uniformidad en el Horizonte Medio” (国際シンポジウム: 中期ホライズンの多様性と共通性) を渡部森哉とともに組織・開催、国立民族学博物館第6セミナー室

2013年2月19日 フォーラム「古代アンデスにおける国家の成立と展開」を渡部森哉とともに組織・開催、南山大学名古屋キャンパス教室 R31

2013年3月23日 「パコパンバ遺跡2012年度発掘報告」『権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築』2012年度研究会、山形大学人文学部

・広報・社会連携活動

2012年10月15日 “Patrimonio Arqueológico y Turismo Responsable”. Dirección Regional de Cultura-Cajamarca (DRCC), Sala “Kazuo Terada” – Conjunto Monumental de Belén (Jr. Belén cdra. 6), Cajamarca, Perú.

2012年10月26日 「最初のアメリカー人の足あと」国立民族学博物館公開講演会、日経ホール

2012年12月7日 「アンデスの自然と人々の暮らし」大阪府高齢者大学校

2012年12月15日 「パコパンバ遺跡2012年調査報告」アンデス文明研究会、東京外国語大学本郷サテライト

2013年2月18日 「インカの発見——マチュ・ピチュ発見史」芦屋川カレッジ大学院、芦屋市民センター

◎調査活動

・海外調査

2012年7月14日～22日—オーストリア (第54回国際アメリカニスト会議参加)

2012年7月29日～9月19日—ペルー (中央アンデス地帯における発掘調査)

2012年9月22日～10月21日—ペルー (中央アンデス地帯における発掘調査)

2013年1月4日～16日—ペルー (ペルー国アマソナス州文化局組織強化及びクエラップ地方開発プロジェクト参加)

2013年2月26日～3月17日—ペルー、エクアドル (ペルーとエクアドルの遺跡の考古学的調査)

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（4人）

・論文審査

博士論文審査委員（2件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（S））「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、日本学術会議連携委員、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援検討専門分科会委員、ペルー全国学長会議編集局理事、ペルー国クントウル・ワシ文化協会（NPO）クントウル・ワシ博物館監査役、アンデス文明研究会顧問、金沢大学国際文化資源学研究所センターアドバイザー

◎学会の開催

2012年12月1日 古代アメリカ学会、国立民族学博物館第4セミナー室

西尾哲夫 [にしお てつお]—————副館長（研究・国際交流担当）、教授

野林厚志 [のばやし あつし]—————教授

1967年生。【学歴】東京大学理学部生物学科卒（1992）、東京大学大学院理学系研究科修士課程修了（1994）、東京大学大学院理学系研究科博士課程中退（1996）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2000）、総合研究大学院大学先導科学研究科併任（2000）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）【学位】学術博士（総合研究大学院大学 2003）【専攻・専門】人類学、民族考古学 1）人間と動物との関係史、2）生業文化論【所属学会】日本台湾学会、日本文化人類学会、国際動物考古学協議会（ICAZ）

【主要業績】

[単著]

野林厚志

2008 『イノシシ狩猟の民族考古学——台湾原住民の生業文化』東京：御茶の水書房。

[編著]

野林厚志編

2009 『百年來の凝視』台北：順益台湾原住民博物館（日本語／中国語）。

[論文]

野林厚志

2010 「文化資源としての博物館資料——日本統治時代に収集された台湾原住民族の資料が有する現地社会での意義」『国立民族学博物館研究報告』34(4): 623-679。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究——学術、制度、当事者の相互作用

・研究の目的

本研究の目的は、1) 台湾のオーストロネシア系先住諸民族（「原住民族」）が台湾の日本統治期（1895-1945年）に複数の民族集団へと分類されてきた歴史的背景を明らかにする、2) 現在の台湾社会における民族認定の様相

とそれにもとづく民族集団の再編に、従前の歴史的背景がどのような影響を与えているかを現地調査によって明らかにする、3) 1)と2)の結果にもとづき、民族の分類という営為をめぐる先住民族、先住民族含む現地社会、および分類を行ってきた施政者や研究者の関係についての人類学的モデルを引き出す、以上の3点である。

・成果

本年度は研究計画にしたがい、台湾より原住民族の工芸作家を招聘し、民博の収蔵資料の分析を共同で行い、民族ごとによる物質文化の諸相の相違について検討を行った。具体的には、タイヤル族の工芸家とともに、民博に収蔵されている約150件の衣類資料の熟覧と詳細な分析、ならびに歴史的、民族誌的背景について文献資料を中心に検討した。資料の大半は日本統治時代に収集されたものであり、それらの形態や制作技術の変化が社会的な要因と結びついていることがいくつかの資料のデータから明らかとなった。例えば、帯状の織物の幅が日本統治時代の後半になると大きくなることや、それまでは単なる装飾紋様だと解釈されていた織紋や刺繍紋が、母親と娘への織物技術の継承時に伝えられるものであり、技術伝承が母系で伝えられていく尺度になりうるといった新たな知見が得られた。また、年度下半期には、台湾から原住民族も含めた研究者を科研費で招聘し、ワークショップを開催し、原住民族文化の歴史的形成過程に関する最新の研究の紹介とそれに関する討論を行った。これらの成果は、本館研究報告等で随時発表していく予定である。なお、本研究は、科学研究費補助金基盤研究（B・海外）「台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究：学術、制度、当事者の相互作用」（課題番号22401046）と連動して行った。

◎出版物による業績

[論文]

野林厚志

2012 「『佐久間財団蕃族参考品』の収集活動』『台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究——学術、制度、当事者の相互作用（科学研究費補助金中間報告書）』 pp. 65-119。

2013 「国立民族学博物館収蔵の平埔族資料——収集された背景と物質文化の特徴』『族群歴史文化與認同 台湾平埔原住民』（Proceedings）国立台湾歴史博物館、台南。

[その他]

野林厚志

2012 「肉食行為の研究」『月刊みんぱく』36(12): 10-11。

2012 「人間はなぜ肉食を行うのかを考える」『民博通信』139: 22-23。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2012年11月10日 「時空間と物質に対する人間の認識（解釈）との関係」『物質性の人類学』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年3月21日～22日 「国立民族学博物館収蔵の平埔族資料——収集された背景と物質文化の特徴」『族群歴史文化與認同 台湾平埔原住民国際学術検討会』国立台湾歴史博物館

・展示

本館常設展示「日本地域の文化・山のくらし」新構築

・広報・社会連携活動

2012年11月17日 「大学共同利用期間シンポジウム2012」東京国際フォーラム

2013年1月20日 「すいたんと行こう！みんぱく学校で世界のくらし大発見」

◎調査活動

・国内調査

2012年11月19日～20日—富山県滑川市（総合研究大学院大学学融合推進センター学融合研究事業「資源利用と環境に関する学融合的研究——狩猟採取から食料生産への生業の変化と社会」に関する調査）

2012年12月17日～19日—富山県滑川市（総合研究大学院大学学融合推進センター学融合研究事業「資源利用と環境に関する学融合的研究——狩猟採取から食料生産への生業の変化と社会」に関する調査）

・海外調査

2012年4月25日～28日—台湾（奨学寄付金による研究活動（2011年度）の報告と2012年度研究活動計画に関する調査研究）

2012年8月20日～30日—台湾（「台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究——学術、制度、当事者

の相互作用」にかかる野外調査ならびに情報収集)

2013年3月8日～13日—台湾(総合研究大学院大学学融合推進センター学融合研究事業「資源利用と環境に関する学融合的研究——狩猟採取から食料生産への生業の変化と社会」に関する調査)

2013年3月20日～27日—台湾(国立台湾歴史博物館特別展示「看見平埔」開幕式参加、記念国際シンポジウム参加及び国際連携展示の準備会合参加)

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員(2人)、副指導教員(1人)

・論文審査

博士論文審査委員(1件)

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金(基盤研究(B)海外学術)「台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究:学術、制度、当事者の相互作用」研究代表者、科学研究費補助金(基盤研究(C))「博物館空間におけるユーザー視点からの展示評価の実践的研究」研究分担者、総合研究大学院大学学融合推進センタープロジェクト「資源利用と環境に関する学融合的研究:狩猟採取から食料生産への生業の変化と社会」研究分担者

- ・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

台湾原住民族の文化と歴史に関する研究(奨学寄付金「順益台湾原住民博物館研究賛助金」)

平井京之介 [ひらい きょうのすけ] ————— 教授

【学歴】東北大学文学部社会学科社会学専攻卒(1988)、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部社会人類学修士課程修了(1992)、ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部博士課程修了(1998)【職歴】花王株式会社本社チェーンストア部(1988)、国立民族学博物館第1研究部助手(1995)、国立民族学博物館民族文化研究部助手(1998)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授(2001)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(2006)、国立民族学博物館研究戦略センター教授(2013)【学位】Ph. D.(ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部1998)、M. Sc.(ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部1992)【専攻・専門】社会人類学1)アジア産業労働者の人類学的研究2)ラオス仏教の人類学的研究3)コミュニティの政治人類学的研究【所属学会】日本文化人類学会、The Royal Anthropological Institute、組織学会

【主要業績】

[単著]

平井京之介

2011『村から工場へ——東南アジア女性の近代化経歴』東京:NTT出版。

[編著]

平井京之介

2012『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』京都:京都大学学術出版会。

[論文]

Hirai, K.

2008 The Romantic Ethic and the Notion of Modern Society: Imagining Communities among Northern Thai Factory Women. In S. Tanabe(ed.) *Imagining Communities in Thailand: Ethnographic Approaches*, pp.135-160, Chiang Mai: Silkworm Books.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

タイ・ラオスにおける仏教僧コミュニティの民族誌的研究

・研究の目的

本研究の目的は、急速に変化の進むタイとラオスの社会において、僧コミュニティの実践と社会変容との接合

関係を明らかにすることである。僧コミュニティは一種の教育装置であり、そこには近代的言説や国家行政などが強力に作用している。こうした作用は弾圧や禁止といった形を取るだけでなく、慣習的な行為や知識との競争といった形によっても進められる。本研究は、都市化や資本主義化、消費社会化、国際化が急速に進み、人々の伝統的な価値観や生活様式が大きく揺さぶられている東南アジア大陸部において、こうした知識をめぐる競争の実態を明らかにすることを試みる。

・成果

2013年1月および2～3月に、科学研究費補助金（基盤研究（B））「東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動」（研究代表者：田辺繁治）の研究分担者として、タイ北部において、コミュニティ博物館の文化復興運動についての現地調査をおこなった。そして、これまでの研究成果をもとに、3月8日にチェンマイ大学社会科学部でおこなわれた国際ワークショップ「東南アジアのコミュニティ運動」において、「The Development of Community Museums in Thailand since the Late 1980s」と題する研究発表をおこなった。また、『国立民族学博物館研究報告』にて、「タイのコミュニティ博物館についての一考察——博物館か、寺院か？」を論文として発表した。

◎出版物による業績

[論文]

平井京之介

2013 「タイのコミュニティ博物館についての一考察——博物館か、寺院か？」『国立民族学博物館研究報告』37(3): 281-310。

[その他]

平井京之介

2012 「威信財」大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編『現代社会学事典』p. 48, 東京: 弘文堂。

2012 「経済人類学」大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編『現代社会学事典』pp. 340-341, 東京: 弘文堂。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年3月8日 ‘The Development of Community Museums in Thailand since the Late 1980s’, “Community Movements in South East Asia”, Chiang Mai: Faculty of Social Science, Chiang Mai University.

◎調査活動

・海外調査

2012年7月14日～22日—モンゴル（モンゴルの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

2013年1月15日～24日—タイ（東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動の研究）

2013年2月10日～3月11日—タイ（東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動の研究）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

樫永真佐夫 [かしなが まさお] ————— 准教授

1971年生。【学歴】早稲田大学第一文学部日本文学専修卒（1994）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士課程修了（1997）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻（文化人類学コース）博士課程単位取得退学（2001）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1997）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2010）、総合研究大学院大学准教授併任（2012）【学位】学術博士（東京大学 2006）、学術修士（東京大学 1997）【専攻・専門】文化人類学（東南アジアにおけるタイ系民族の民族誌的研究）【所属学会】日本文化人類学会、早稲田大学文化人類学会

【主要業績】

[単著]

樫永真佐夫

2013 『黒タイ歌謡<ソン・チュー・ソン・サオ>——村のくらしと恋』東京: 雄山閣。

2011 『黒タイ年代記——「タイ・プー・サック」』東京: 雄山閣。

2009 『ベトナムの祖先祭祀——家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』東京：風響社。

【受賞歴】

2010 第6回日本学術振興会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ベトナム、ラオスにおける黒タイの伝統文化

・研究の目的

今年度も昨年に引き続き、ベトナム西北地方からラオス北部にかけて居住している盆地民、黒タイの伝統文化の継承に焦点を当て、現地調査を基軸とする研究を継続する。今年度は、黒タイのあいだでよく知られている叙情歌『ソン・チュー・ソン・サオ』を翻訳し、黒タイの生活、伝統文化、歴史にかんする解説を付す。そのために、ベトナムとラオスにおける黒タイ村落を中心に現地調査を行い、また可能な限り各国における文献調査もおこなう。この各個研究に関連して、研究分担者として参加している科研プロジェクト（科学研究費補助金（基盤研究（B））「中国の『国境文化』の人類学的研究」研究代表者：塚田誠之）の研究を継続して実施する。そのために、グローバル化の中で黒タイ村落における暮らしぶりについて調査する。また人類学的視点からの格闘技研究のために、日本、タイ、ラオスなどで現地調査と文献調査を行う。

・成果

2012年度は、ベトナムとラオスにおける黒タイ村落を中心に現地調査と文献調査もおこなった。その成果から、『黒タイ歌謡<ソン・チュー・ソン・サオ>——村のくらしと恋』（雄山閣）ほか、「国境貿易と在地性——ベトナムとラオスの黒タイの事例」をはじめとする論文やエッセーを刊行した。またボクシングを中心とする格闘技の文化史的研究のために、中国北京を訪問し、『月刊みんぱく』などにエッセーを発表した。

◎出版物による業績

[単著]

樫永真佐夫

2013 『黒タイ歌謡<ソン・チュー・ソン・サオ>——村のくらしと恋』東京：雄山閣。

[論文]

樫永真佐夫

2013 「国境貿易と在地性——ベトナムとラオスの黒タイの事例」塚田誠之編『中国の「国境文化」の人類学的研究』（科学研究費補助金（基盤研究（B））「中国の『国境文化』の人類学的研究」成果報告書）pp. 99-112。

[その他]

樫永真佐夫

2012 「おれは最高だ！」『月刊みんぱく』36(5): 16-17。

2012 「ゴング」『月刊みんぱく』36(6): 16-17。

2012 「暴力の採点」『月刊みんぱく』36(10): 6-7。

2012 「盆地の生活と変化——ターイ族の暮らし、民族雑居」今井昭夫、岩井美佐紀編『現代ベトナムを知るための60章（第2版）』pp. 100-103, 東京：明石書店。

2012 「西北地方の町の市場」今井昭夫、岩井美佐紀編『現代ベトナムを知るための60章（第2版）』pp. 132-134, 東京：明石書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2012年4月7日 「ベトナム北部山地における盆地民と山地民」第406回国立民族学博物館友の会講演会

2012年5月11日 「昆虫を食べる」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2012年6月22日 「こんなものも、あんなものも食べてみた」大阪成蹊女子高等学校美術・イラスト・アニメーションコース進路講演、大阪成蹊女子高等学校

2012年6月14日 「ベトナム、黒タイの村の生活と伝承」イナンナ関西支部6月例会、イナンナ関西支部主催、国立民族学博物館

2012年7月17日 「ムコはつらいよ——ベトナム、黒タイの村から」『猫町西村トークショー』、フリースペース

猫町西村

2012年12月1日 「樫永真佐夫&谷 由起子トークショー 少数民族の暮らしと手仕事」展覧会『H. P. E. 谷由起子の仕事 ラオス少数民族との布づくり (2012年11月14日～12月3日)』OUTBOUND (東京都武蔵野市)

・ 広報・社会連携活動

2012年7月24日 「チャン家の跡取り」『世界の夏を楽しもう!』真夏サロン

2012年10月14日 「ベトナム、黒タイ村落の機織り文化」第272回みんなくウィークエンドサロン

◎調査活動

・ 海外調査

2012年4月19日～22日—中華人民共和国 (国境地域のタイ族に関する資料調査および中国における格闘技動向調査)

2012年11月7日～14日—ベトナム (ベトナム西北部における国境文化の研究)

2013年2月5日～13日—ベトナム、ラオス (ラオス北部における国境文化の研究)

2013年2月12日～19日—ラオス (ラオス北部における国境文化の研究)

◎大学院教育

・ 大学院ゼミでの活動

担当授業「東南アジア文化研究演習II」

2012年12月6日 「フィールドワークと、書くこと」(テーマシリーズ)

三尾 稔 [みお みのる] ————— 准教授

1962年生。【学歴】東京大学教養学部卒 (1986)、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了 (1988)、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程退学 (1992) 【職歴】東京大学教養学部助手 (1992)、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師 (1995)、東洋英和女学院大学社会科学部助教授 (1999)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授 (2003)、国立民族学博物館民族社会研究部助教授 (2004)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任 (2004)、国立民族学博物館研究戦略センター准教授 (2008) 【学位】社会学修士 (東京大学大学院社会学研究科 1988) 【専攻・専門】社会人類学・インドの宗教と社会 【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会

【主要業績】

[編著]

三尾 稔編

2011 『インド ポピュラー・アートの世界——近代西欧との出会いと展開』大阪：千里文化財団。

[共編]

出口 顯・三尾 稔編

2010 『人類学的比較再考』(国立民族学博物館調査報告90) 大阪：国立民族学博物館。

[論文]

Mio, M.

2009 Young Men's Public Activities and Hindu Nationalism: Naviyuvak Mandals and the Sangh Parivar in a western Indian town. In David Gellner(ed.) *Ethnic Activism and Civil Society in South Asia*, pp. 27-56. New Delhi: Sage.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・ 研究課題

インド西部における宗教と文化の変容に関する人類学的研究

・ 研究の目的

世界市場への直接的な連結や情報テクノロジーの広範な浸透などを背景に、1990年代以降のインドの文化や宗教は地域外の動向と共振しつつ基層的な部分から大きな変容を遂げている。三尾が20年あまりにわたってフィールド調査を続けてきたインド西部の都市や村落においても、それは例外ではない。そこで、本年度の各個

研究においては、特に情報テクノロジーの浸透や宗教の政治化・商品化といった全インド規模で見られる宗教や文化の変容動向が、地方のサバルタンの宗教実践をどのように変容させているかという点に注目し、フィールド調査や文献調査をもとに、変容の諸相を実証的に解明し、これが政治・経済・社会の動向とどのように関連するのかを明らかにする。

人間文化研究機構地域研究推進事業の一環である「現代インド地域研究」は、第3年度目に入る。三尾は、この研究プロジェクトにおいて国立民族学博物館拠点の拠点代表を引き続きつとめ、拠点構成員や研究分担者とともに国際的な連携協力のもとでインド研究を推進する。この研究プロジェクトの国立民族学博物館拠点におけるテーマは、「現代インドの文化と宗教の動態」である。各個研究のテーマは、この大テーマに密接に関連するものであり、拠点予算も活用しつつ拠点の研究テーマの本での1つの実証的研究として各個研究を遂行する。

また、文化資源プロジェクト予算を獲得した標本・映像音響資料収集作成プロジェクト「インド・ラージャスターン州における社会変容と婚礼」も、重要な人生儀礼である婚礼がこの地域の文化・社会変化の下でどのように変容を遂げているのかという点を映像取材を通じて研究することを目的としており、各個研究のテーマとも関連させながら映像の編集を実行する。

・成果

上記テーマに関して、「現代インド地域研究」推進経費に基づき2012年7月から8月にインドに赴き民衆的で地域限定的なヒンドゥー教の信仰実践のサイバー空間利用に関して短期間の現地調査を行った。この成果は、これまで数年間の調査の成果と合わせて、2012年10月18日英国エジンバラ大学南アジア研究センターで開催された同センターのセミナーで、“Enchantment of the Past: Nature of ‘Faith through Things’ in the Worrier Spirit’s Cults of Southeastern Rajasthan.”として口頭発表し、同センターの研究者らと、この課題に関して意見交換を行った。

またインド西部の社会変化と宗教伝統の変容に関して「インド西北部」立川武藏・杉本良男・海津正倫編『朝倉世界地理講座——大地と人間の物語 4 南アジア』（pp. 183-192, 東京: 朝倉書店, 2012年）を発表し、ラージャスターンの社会変化に関して社会構成の基盤であるカーストの動態という観点から、金基淑編『カーストから現代インドを知るための30章』（東京: 明石書店, 2012年）に、3編の小論「ネットワークとしてのカースト」（同書 pp. 24-25）、「クマーワット<ラージャスターン州>——カーストの『生成』」（同書 pp. 48-58）、「ラージプート<ラージャスターン州>——『伝統』を生きる人びと」（同書 pp. 157-165）を発表した。

「現代インド地域研究」推進事業に関しては、国立民族学博物館拠点の代表として、研究会やシンポジウムの開催、研究資料の受け入れなど拠点事業の推進を主導した。拠点の研究はグループ1「現代インドの宗教——運動と変容」及びグループ2「環流する現代インド文化」から組織される。今年度は両グループ合同の研究会を5回開催した。報告者はこれらの国内研究会の企画立案に関与し、研究会を主宰した。また、1970年代後半から30年あまりにわたりインドの宗教祭礼、民俗芸能、生業、建造物等の文化遺産の写真撮影を続けてきた写真家 沖 守弘氏の写真および関連文書資料を本館アーカイブとして受け入れるプロジェクトを主導し、同資料の仮受け入れと内容調査、沖氏への聞き取り調査を行った。アーカイブ資料は本館に受け入れる計画であるが、内容調査や聞き取り調査にあたっては「現代インド地域研究」推進経費を活用した。

「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点は、研究ネットワークの国際化の推進にも積極的に取り組んでいる。2010年度に研究交流に関する覚書を交わしたエジンバラ大学南アジア研究センターとの間では日本の南アジア研究の成果の英文叢書としての刊行事業を進めている。本年度は、原稿の取りまとめ等の編集作業を進め、来年度中に刊行が開始される見込みである。また、「現代インド地域研究」ネットワークに参加する若手研究者を海外に派遣し、国際的研究ネットワークの構築を行うため日本学術振興会から「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣」事業の資金を今年度も継続して受託し（研究プロジェクト名「現代南アジア研究の国際的ネットワークの構築」）、このプロジェクトの主担当研究者として今年度も総計6名の若手研究者をインドとイギリスに長期派遣した。また、その研究成果の一環として2012年10月17日にエジンバラ大学で国際研究ワークショップ“Social Movements and the Subaltern in Postcolonial South Asia”を、また同12月21日、22日の2日間インド・ナガランド州コヒマ市において国際シンポジウム“Looking Beyond The State: The Changing Forms of Inclusion and Exclusion in India”を開催した。三尾はこの2つの国際研究集会の企画立案、研究者の招聘・派遣にあたり、基調報告と司会を行った。後者のシンポジウム開催にあたっては、本館館長リーダーシップ支援経費（研究成果公開プログラム）も活用した。

文化資源プロジェクトによる標本・映像音響資料収集プロジェクト「インド・ラージャスターン州における社会変容と婚礼」においては、2011年度に実施した映像音響資料取材に基づき、長編番組1本（前編・後編で1

本)、短編番組1本の計2本の番組の制作・監修を行った。これらの番組は2013年度中に公開される予定である。

2011年度までに文化資源プロジェクトの一環として実施したインド西部の女神祭礼の変容に関する映像音響資料収集と取材の成果公開として、2012年11月8日、9日にドイツのハイデルベルク大学で開催された研究ワークショップ“Navaratri in South Asia: Transformation, Innovation and Regional Varieties.”に招待されて参加し、“Transformation of Navaratri in Western India and Its Socio-political Implications.”と題して招待講演を行った。また、この映像資料収集プロジェクトの成果は、『みんなく映像民族誌第9集 インド西部の女神祭礼』として刊行された。

◎出版物による業績

[論文]

三尾 稔

2012 「インド西北部」立川武蔵・杉本良男・海津正倫編『朝倉世界地理講座——大地と人間の物語4 南アジア』pp.183-192, 東京: 朝倉書店。

[その他]

三尾 稔

2012 「ネットワークとしてのカースト」金 基淑編『カーストから現代インドを知るための30章』pp.24-25, 東京: 明石書店。

2012 「クマールワット<ラージャスターン州>——カーストの『生成』」金 基淑編『カーストから現代インドを知るための30章』pp.48-58, 東京: 明石書店。

2012 「ラーム・レワリ——カースト・アイデンティティの誇示の場」金 基淑編『カーストから現代インドを知るための30章』pp.155-156, 東京: 明石書店。

2012 「ラージプート<ラージャスターン州>——『伝統』を生きる人びと」金 基淑編『カーストから現代インドを知るための30章』pp.157-165, 東京: 明石書店。

2012 「旅・いろいろ地球人 伝統と電灯⑦ ポンプの功罪」『毎日新聞』4月19日夕刊。

2013 「旅・いろいろ地球人 たちこめる① 牛糞燃料」『毎日新聞』3月7日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年10月17日 “Opening Address”, Social Movements and the Subaltern in Postcolonial South Asia. University of Edinburgh (Edinburgh, UK)

2012年12月21日 “Opening Address”, Looking Beyond The State: The Changing Forms of Inclusion and Exclusion in India. Japhu Christian College (Kohima, Nagaland, India)

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年10月18日 “Enchantment of the Past: Nature of ‘Faith through Things’ in the Worrier Spirit’s Cults of Southeastern Rajasthan.” Centre for South Asian Studies Seminar. University of Edinburgh (Edinburgh, UK)

2012年11月8日 “Transformation of Navaratri in Western India and Its Socio-political Implications.” Workshop “Navaratri in South Asia: Transformation, Innovation and Regional Varieties.” University of Heidelberg (Heidelberg, Germany) 招待講演

・研究講演

2012年11月3日 「祭礼の変容を映像で見る——インド・グジャラートの女神祭礼」国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・映像番組

三尾 稔 [制作・監修]

長編番組 『ラージャスターンの結婚式』(前編・後編)

短編番組 『ウダイプルの婚礼』、『ウダイプルのホーリー祭』

みんなく映像民族誌 『第9集 インド西部の女神祭礼』

◎調査活動

・海外調査

2012年7月24日～8月13日—インド(現代インドにおける宗教の動態に関する調査)

2012年10月15日～22日—イギリス(国際研究ワークショップ参加、エジンバラ大学南アジア研究セミナー参加および資料調査)

2012年11月6日～12日ドイツ（国際研究ワークショップ参加）

2012年12月17日～26日インド（国際シンポジウム参加及びシンポジウム研究成果についての討議）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・論文審査

予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点 拠点代表、日本学術振興会「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」『現代南アジア研究の国際的ネットワークの形成』 主担当研究者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

京都大学地域研究統合情報センター運営委員

伊藤敦規 [いとう あつのり] ————— 助教

1976年生。【学歴】東京都立大学人文学部卒（社会学学士）（2000）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（社会人類学修士）（2003）、国立民族学博物館平成19年度特別共同利用研究員修了（2008）、国立民族学博物館平成20年度特別共同利用研究員修了（2009）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得満期退学（2009）【職歴】三重大学人文学部非常勤講師（2008）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター研究員（2008）、A:shiwi A:wan Museum and Heritage Center Visiting Researcher（2009）、日本学術振興会特別研究員PD（2009）、立教大学兼任講師（2009）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員研究員（2010）、国立民族学博物館平成22年度文化資源プロジェクト共同研究員（2010）、東北大学東北アジア研究センター共同研究員（2010）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2011）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 2011）、修士（社会人類学）（東京都立大学 2003）【専攻・専門】社会人類学・米国先住民研究、先住民の知的財産権問題、博物館人類学【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、民族藝術学会、西洋史学会、アメリカ学会、日本知財学会、American Anthropological Association

【主要業績】

[編著]

山崎幸治・伊藤敦規編著

2012 『世界のなかのアイヌ・アート』北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

[論文]

伊藤敦規

2013 「民族誌資料の制作者名廻り調査——『ホピ製』木彫人形資料を事例として」『国立民族学博物館研究報告』37(4): 495-633。

2011 「博物館標本資料の情報と知識の協働管理に向けて——米国南西部先住民ズニによる国立民族学博物館所蔵標本資料へのアプローチ」『国立民族学博物館研究報告』35(3): 471-526。

2008 「協働作品としての『ホピ・ズニ作家展』——北米先住民の知的財産保護に向けた日本での実践」岸上伸啓編『北アメリカ先住民の社会経済開発』（みんぱく実践人類学シリーズ4）pp. 103-136, 東京: 明石書店。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本国内博物館等所蔵アメリカ南西部先住民資料の協働管理に向けた調査研究

・研究の目的

本研究は5年計画で実施される。その目的は、第1に日本国内の博物館等が所蔵しているアメリカ先住民資料(物質文化)の来歴や情報管理や保存状況を総合的に把握することである。第2の目的は日本国内での調査結果をアメリカ先住民コミュニティと共有し、将来的な管理に向けた要望等を聞き取り調査することである。第3の目的は、先住民コミュニティから寄せられる声を博物館等と共有することによって、今後の資料管理に反映されるだろう協働の制度的な枠組みを整理・検討することである。なお、具体的な調査対象機関は、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館(宮城)、豊島みみずく資料館(東京)、静岡市立芹沢銈介美術館(静岡)、柏木博物館(長野)、リトルワールド(愛知)、天理参考館(奈良)、国立民族学博物館(大阪)、日本郷土玩具博物館(広島)、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館(香川)、の9機関とする。また、資料調査対象とする民族集団は、約20のプエブロ諸民族、ナバホ、アパッチ、ヤキなどである。なお、必要な場合はアイヌ民族も対象に含める。

・成果

2012年度は、民博とA:shiwí A:wán Museum and Heritage Centerとの間で学術協定を結び、日本国内研究機関等が所蔵する米国西部先住民資料の協働調査に向けて制度固めを行った。また、本調査成果の一部は、『国立民族学博物館研究報告』37巻4号、『民博通信』139号、*MINPAKU Anthropology Newsletter* No. 35などにまとめた。海外調査時にそれらを制作者コミュニティ成員に閲覧させたところ非常に高い関心を得た。マスコミからも関心が寄せられ(『中国新聞』2013年3月29日)、結果として社会還元にも努めた。

◎出版物による業績

[論文]

伊藤敦規

2013 「民族誌資料の制作者名廻及調査——『ホピ製』木彫人形資料を事例として」『国立民族学博物館研究報告』37(4): 495-633。

2013 「評論・展望 研究公演『ホピの踊りと音楽』の交渉過程で得られた民族誌的知見」『民博通信』139: 2-7。

[監修]

伊藤敦規

2012 『週刊 一度は行きたい世界の博物館48 世界の民族博物館——ビショップ博物館・ハード博物館・カナダ文明博物館』東京: 朝日新聞出版。

[その他]

伊藤敦規

2012 「旅・いろいろ地球人 風を求めて② 保留地から都市へ」『毎日新聞』7月12日夕刊。

2012 「異聞逸聞 走ることの理由」『月刊みんぱく』36(10): 20。

2012 Agreement of Academic Co-operation between Minpaku and the A:shiwí A:wán Museum and Heritage Center. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 35: 12-13.

2013 「旅・いろいろ地球人 贈り物④ 祈りの羽根」『毎日新聞』1月31日夕刊。

2013 「コレクション再発見⑥——カチナ人形(日本郷土玩具博物館)」『中国新聞』3月29日13面。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2013年2月18日 「民族誌資料情報のデジタル共有——ズニ博物館によるフォーラム型データベース構築の取組」『交錯する態度への民族誌的接近——連辞符人類学の再考、そしてその先へ』

・みんぱく研究懇談会

2012年6月27日 「民族学博物館とソース・コミュニティとの標本資料情報協働管理について」第240回研究懇談会

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月22日 「協働展示実践が顕在化させる主客不可分状況について」東北大学東北アジア研究センター共同研究会『協働による展示実践を通した人類学方法論の探求』(代表: 高倉浩樹) 2012年度第1回研究会、広島YMCA学園

2012年6月23日 「協働展示実践が顕在化させる主客不可分状況について」第46回日本文化人類学会研究大会(代表: 高倉浩樹) 分科会『展示による社会的関与は人類学に何をもたらすか——日本・ロシア・北米の先住民調査研究の視座から』広島大学

2012年11月2日 「民族学資料の利用に関する著作権処理と孤児著作物化防止のプロセスについて」地域研究コ

ンソーシウム運営委員研究会、北海道大学スラブ研究センター小会議場

・展示

2012年5月29日 “Report on Minpaku and Hopi Relationship: Collection in 2010 and Renewal Event in 2012”, Shungopavi Community Center, Second Mesa, AZ.

・映像番組

2012 『アメリカ先住民ホピの銀細工づくり——銀板に重ね合わせる伝統』国立民族学博物館ビデオテーク

2013 『米国南西部先住民の宝飾品制作場の変遷』国立民族学博物館電子ガイド

2013 『ホピのホールマーク』国立民族学博物館電子ガイド

2013 『宝飾品制作の技法』国立民族学博物館電子ガイド

・広報・社会連携活動

2012年11月20日 「民族学資料を文化的に活かすために——ソースコミュニティとの協働資料管理」北海道アイヌ協会・国立民族学博物館、第2回研修生講義、国立民族学博物館。

◎調査活動

・海外調査

2012年4月12日～23日—アメリカ合衆国（ズニ博物館で開催されるワークショップ参加、ソーシャルダンスに関する聞き取り調査および民族学資料の情報管理に関する研究）

2012年5月24日～6月7日—アメリカ合衆国（在アメリカ合衆国南西部の先住民博物館等文化施設の調査および博物館資料情報の協働カタログ制作調査）

2013年2月28日～3月7日—アメリカ合衆国（ハード博物館での博物館資料情報の協働カタログ制作に関する調査）

2013年3月21日～31日—アメリカ合衆国（ズニ博物館などでの博物館資料情報の協働カタログ制作に関する調査）

小川さやか [おがわ さやか]————— 助教

1978年生。【学歴】信州大学人文学部人間情報学科卒（2000）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫制博士課程研究指導認定退学（2007）【職歴】日本学術振興会特別研究員PD（2007）、京都光華女子大学非常勤講師（2009）、大阪大学外国語学部非常勤講師（2009）、国立民族学博物館機関研究員（2010）、京都精華大学非常勤講師（2010）、甲南大学非常勤講師（2011）【学位】博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2009）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2007）【専攻・専門】アフリカ地域研究、文化人類学、都市研究【所属学会】生態人類学会、日本アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

小川さやか

2011 『都市を生きぬくための狡知——タンザニアの零細商人マチングの民族誌』京都：世界思想社。

[論文]

小川さやか

2012 「もう一つの使い捨て文化——東アフリカにおける古着の流通・消費」『アスティオン』（サントリー文化財団）77: 116-133。

2012 「タンザニア都市零細商人の瀬戸際の狡知——ウソと時間をめぐる一考察」『歴史と民俗』（神奈川大学常民文化研究所論集28 特集「騙り——不幸なる芸術」）pp. 97-125, 東京：平凡社。

【受賞歴】

2011 第33回サントリー学芸賞（社会・風俗部門）

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中古品と非正規品の越境交易にみる現代アフリカの消費文化に関する研究

・研究の目的

アフリカでは、衣料品や家電製品をはじめ輸入消費財の多くを先進諸国からの中古品でまかかってきた。近年では、アジア製の非正規品が中古品と市場を二分するようになった。これらの中古品・非正規品は、日本をふくむ先進諸国の消費文化（使い捨て文化や、イメージや記号の消費にもとづく消費文化）とふかく関連して生みだされた特別な商品である。本研究の目的は、欧米やアジア諸国で廃棄／生産され、アフリカ諸国に輸出されているこの2つの商品が、東アフリカ諸国間を越境交易で循環し消費される過程と、この「モノの履歴」における価値変化の実態を、現地調査を通じて明らかにすることにある。また、そこから従来の西欧中心的な消費文化論を、「廃棄から再消費」あるいは「コピーから消費」の世界から再考し、文化人類学の立場から新たな消費文化論を構想することを目指している。なお、本研究は、科学研究費補助金（若手研究（B））の助成を受けて実施する。

・成果

『民博通信』および学術雑誌『アスティオン』（サントリー文化財団）に古着の流通のしくみとアフリカにおける古着の消費について考察した小論を提出した。また、アジア経済研究所の研究会『発展途上国とリユース』報告書（小島道一・福西隆弘編・アジア経済研究所、2013年3月）に、タンザニアの消費者による中古衣料品と中国・東南アジア製衣料品の購買行動を、両製品の品質面や供給システムの違いに着目して比較分析した論文を発表した。また国際学会・シンポジウム等での発表として、7月に南アフリカで開かれた世界史学会において「セカンド・ハンド品の歴史」に関する分科会をおこない、中古衣料品の流通システムの変容について発表したほか、2月に国立民族学博物館において国際シンポジウム『布を使う人、布に包まれる身体』（機関研究プロジェクト『布と人間の人類学的研究』（代表：関本照夫））において、アフリカにおける中古衣料品と非正規品（ぱちもん）の流通・消費に関する研究発表をおこなった。そのほかに、2012年10月より、民博共同研究会（若手）『現代消費文化に関する人類学的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して』の研究代表者を務め、消費文化の人類学的な研究の新たな可能性を模索している。

◎出版物による業績

[論文]

小川さやか

2012 「もう一つの使い捨て文化——東アフリカにおける古着の流通・消費」『アスティオン』（サントリー文化財団）77: 116-133。

[その他]

小川さやか

2012 書評「上半期の収穫から」『週刊読書人』7月27日。

2012 「使い捨て文化の裏側から新たな消費文化論へ——アフリカにおける中古品・非正規品の流通・消費から」『民博通信』137: 1-10。

2013 「第3章タンザニアにおける衣料品の消費行動に関する考察——中古衣料品と中国・東南アジア製衣料品の供給システムの違いに着目して」小島道一・福西隆弘編『「国際リユースと発展途上国」調査研究報告書』pp. 35-53, 千葉: アジア経済研究所。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年2月23日 「古着とぱちもんの消費に見るタンザニアの現代消費文化」国際シンポジウム『布を使う人、布に包まれる身体』（機関研究プロジェクト「布と人間の人類学的研究」（代表：関本照夫））、国立民族学博物館

・共同研究会

2012年12月23日 「(趣旨説明) 現代消費文化をめぐる人類学的研究」『現代消費文化に関する人類学的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して』

2013年2月16日 「現代消費文化をめぐる人類学的アプローチの検討——消費社会論との違いに着目して」「非正規品の世界からみる現代アフリカの消費文化」『現代消費文化に関する人類学的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年5月26日 「政治のストリート化とストリートの政治化」日本アフリカ学会第49回学術大会、国立民族学博物館

2012年6月8日 「瀬戸際の狡知とウジャンジャ——タンザニアの都市零細商人マチングの商実践を事例に」第

61回神戸人類学研究会、神戸大学

- 2012年 6月25日 「ぱちもの世界からみる現代アフリカの消費文化」京都人類学研究会 6月例会、京都大学
2012年 6月30日 「都市世界の流動性・匿名性を捉える——タンザニアでの調査を事例に」2012年度海外学術調査フォーラム『フィールドで「採る」——フィールドサイエンスの可能性』東京外国語大学
2012年 7月11日 ‘Trans-Border Trade of Second-hand Clothing in East Africa.’ “World Economic History Congress”, Stellenbosch, South Africa.

・研究講演

- 2012年 4月20日 「タンザニアの零細商人マチングの研究から」高齢者大学研究フォーラム『タンザニア』、大阪
2012年 8月24日 「逞しきタンザニアの路上商人」『廿日会』益田市の企業家の集まり（島根）
2012年11月16日 「異文化にみるコミュニティ結合原理」『21世紀文明研究セミナー』ひょうご震災記念21世紀研究機構

・広報・社会連携活動

- 2012年 5月19日 「逞しき路上商人」『ラジオ深夜便』NHK 大阪放送局
2012年 5月26日 「アフリカの都市」『茂山童司のおとぎの暇』大阪 ABC ラジオ放送局
2012年 8月20日 「アフリカ都市の恐怖体験」『夏休み企画』国立民族学博物館
2012年 8月21日 「働くって何？」『夏休みこども企画』国立民族学博物館
2013年 1月27日 「路上空間は誰のもの？——路上商人による暴動を事例に」第285回ウィークエンドサロン

◎調査活動

・海外調査

- 2012年 7月7日～14日—南アフリカ共和国（世界経済史学会分科会「グローバルな視座からみる中古品の流通」参加）
2012年 9月6日～23日—タンザニア、ケニア、ウガンダ（東アフリカにおける中古品および非正規品の消費行動に関する調査）
2013年 3月17日～20日—中華人民共和国（中国におけるアフリカ人街の形成とアフリカ系商人による商品買い付けの調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（若手研究（B））「中古品と非正規品の越境交易にみる現代アフリカの消費文化に関する研究」研究代表者、国立民族学博物館共同研究若手「交錯する態度への民族誌的接近——一連結符人類学の再考、そしてその先へ」（研究代表者：岩佐光広）共同研究員、国立民族学博物館共同研究若手「現代消費文化に関する人類学的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「贈与論再考——『贈与』・『交換』・『分配』に関する学際的比較研究」（研究代表者：岸上伸啓）共同研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

アジア経済研究所研究会「国際リユースと発展途上国」委員

・非常勤講師

甲南大学「アフリカ研究」、神戸大学「開発運営論特論」（集中講義）

・学会の開催

2012年 5月26日 日本アフリカ学会大49回学術大会

文化資源研究センター

朝倉敏夫 [あさくら としお]—————センター長(併)教授

1950年生。【学歴】武蔵大学人文学部社会学科卒（1974）、明治大学大学院政治経済学研究科修士課程修了（1977）、明治大学大学院政治経済学研究科博士後期課程満期退学（1985）【職歴】国立民族学博物館第4研究部助手（1988）、

国立民族学博物館第1研究部助教授（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部長（2006）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2008）国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2010）【学位】政治学修士（明治大学大学院政治経済学研究科 1977）【専攻・専門】社会人類学、韓国社会論【所属学会】日本文化人類学会、日本民俗学会、比較家族史学会、韓国文化人類学会

【主要業績】

[単著]

朝倉敏夫

2005 『世界の食文化1 韓国』東京：社団法人農山漁村文化協会。

[編著]

朝倉敏夫編

2003 『「もの」から見た朝鮮民俗文化』東京：新幹社。

[共編]

朝倉敏夫・嶋 陸奥彦編

1998 『変貌する韓国社会——1970～80年代の人類学調査の現場から』東京：第一書房。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

海外コリアンの人類学的研究

・研究の目的

海外に居住する韓国人は700万人を数えるが、なかでも日本、中国、沿海州、サハリンといった東アジア地域には、20世紀以前から移住したオールドカマーズとともに、近年に韓国から移住したニューカマーズが生活している。また、近年はベトナム、タイをはじめ東南アジア地域にも、韓国人が多く移住している。これらの海外コリアンの生活文化を比較研究するための基礎的資料を収集し、それらを分析していきたい

2009年度から「東アジアにおけるコリアン・ネットワークの人類学的研究」（代表：朝倉敏夫）という研究課題で科学研究費補助金の交付を受けている。今年度は最終年度であり、韓国、サハリン、ベトナムなどで補充の現地調査を行い、成果を公開していく。

・成果

今年度は、韓国、中国昆明において調査を行った。また、これまでの研究の中間報告として科学研究費補助金の一部を利用して、韓国において外部出版した。

아사쿠라 도시오・오타 심페이 엮음 『한민족 해외동포의 현주소——단사자와 일본 연구자의 목소리』학연문화사, 2012년（朝倉敏夫・太田心平編著 『韓民族海外同胞の現住所——当事者と日本の研究者の声』、学研文化社、2012年）である。

◎出版物による業績

[編著]

朝倉敏夫編

2012 『火と食』（食の文化フォーラム30）東京：ドメス出版。

朝倉敏夫・太田心平編著

2012 『韓民族海外同胞の現住所——当事者と日本の研究者の声』ソウル：学研文化社（韓国語）。

[論文]

朝倉敏夫

2012 「はじめに」朝倉敏夫・太田心平編著 『韓民族海外同胞の現住所——当事者と日本の研究者の声』 pp. 5-8, ソウル：学研文化社（韓国語）。

2012 「日本から見た海外コリアン」朝倉敏夫・太田心平編著 『韓民族海外同胞の現住所——当事者と日本の研究者の声』 pp. 11-27, ソウル：学研文化社（韓国語）。

2012 『「火と食」のフォーラムに向けて』朝倉敏夫編 『火と食』（食の文化フォーラム30） pp. 9-18, 東京：ドメス出版。

2012 「火と食を考える」朝倉敏夫編 『火と食』（食の文化フォーラム30） pp. 195-219, 東京：ドメス出版。

2012 「あとがき」朝倉敏夫編『火と食』（食の文化フォーラム30）pp.267-275, 東京：ドメス出版。

[監修]

朝倉敏夫

2012 NHK 韓国ドラマ・ガイド『王女の男』東京：NHK 出版。

[編集協力]

朝倉敏夫

2013 NHK 韓国ドラマ・ガイド『太陽を抱く月』東京：NHK 出版。

[その他]

朝倉敏夫

2012 「二兎を追う」『民博通信』137: 10-11

2012 「旅・いろいろ地球人 美味望郷⑧ おかずはないけど」『毎日新聞』10月25日夕刊。

2012 「韓流時代劇に見る『薬食同源』」『食物と健康』156: 3-5。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくゼミナール

2012年4月21日 「サハリンのキムチ」第407回みんぱくゼミナール

・研究講演

2012年8月8日 「日韓比較文化——食を通して」第5回教職員韓国文化研修、大阪韓国文化院

2012年9月13日 「日韓比較文化考——義理・人情を中心に」洋書協会

2012年10月6日 「한국인의 생활문화와 정체성——식과 정을 키워드로 해서」韓国円光デジタル大学

2012年11月22日 「민족학에서 김치를 생각한다」韓国慶熙大学

2012年12月14日 「食から見る韓国：Identity, Acculturation, Nationalism, Globalization, etc.」『朝鮮半島問題研究会』富山大学

2013年2月3日 「韓国の生活文化と色」金沢21世紀美術館

・広報・社会連携活動

2012年4月27日 「韓国の食文化」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2012年5月13日 「『済州島の民家』の調査と模型」第253回みんぱくウィークエンド・サロン

2012年8月7日 「『すごろく教材』で異文化理解」（恵庭市立若草小学校：東峰宏紀、中部大学：宇治谷 恵、国立民族学博物館：朝倉敏夫）博学連携教員研修ワークショップ2012 in みんぱく『学校と博物館でつくる国際理解教育——新しい学びをデザインする』

2012年8月10日 「韓国人の消夏法」『世界の夏を楽しもう！』真夏サロン

2012年9月20日 「ようこそ、みんぱくへ！——モノの見方」智辯学園奈良カレッジ中学部

2013年1月20日 「漢字語は日本と韓国では同じ？ちがう？」『すいたんと行こう！みんぱく学校で世界のくらし大発見』吹田にぎわい観光協会

2013年3月25日 「みんぱくの国際理解教育の概要」大阪府教職員組合ルーツネット学習会

◎調査活動

・海外調査

2012年6月14日～16日一大韓民国（韓国国立民俗博物館との交流協定更新）

2012年7月12日～17日一大韓民国（「朝鮮半島の文化」に関する映像資料の開発と収集）

2012年8月27日～9月6日一大韓民国（植民地における朝鮮半島の文化に関する標本資料の収集及びみんぱく「韓国」制作に関する調査）

2012年10月6日～8日一大韓民国（円光デジタル大学開校10周年記念シンポジウム参加）

2012年11月21日～25日一大韓民国（慶熙大学「アジア研究」講座での講義及び全羅北道での植民地期文化の調査）

2013年1月10日～15日一大韓民国、中華人民共和国（海外コリアンの人類学的研究のための資料収集と現地調査）

2013年2月14日～18日一大韓民国（韓国における海外コリアン研究の調査及び「朝鮮半島の文化」展示新構築の資料収集）

2013年3月20日～24日一台湾（国立台湾歴史博物館特別展示「看見平埔」開幕式ならびに記念国際シンポジウム参加）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

神戸女子大学「世界の食文化」

久保正敏 [くほ まさとし] 教授

1949年生。【学歴】京都大学工学部電気工学科卒（1972）、京都大学大学院工学研究科修士課程電気工学第二専攻修了（1974）【職歴】京都大学工学部情報工学科助手（1974）、国立民族学博物館第5研究部助手（1983）、京都大学大型計算機センター助教授（1990）、京都大学学術情報ネットワーク機構兼務学術資料情報担当（1990）、国立民族学博物館第5研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（1998）、国立民族学博物館情報管理施設長（2000～2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）【学位】工学博士（京都大学 1986）、工学修士（京都大学大学院工学研究科 1974）【専攻・専門】コンピュータ民族学（情報組織化論、博物館情報論）、民族情報学（先住民とメディア文化論）【所属学会】情報処理学会、日本文化人類学会、民族藝術学会、日本産業技術史学会、アートドキュメンテーション学会

【主要業績】

[単著]

久保正敏

1996 『マルチメディア時代の起点——イメージからみるメディア』（NHK ブックス779）東京：日本放送出版協会。

[論文]

久保正敏

2003 「模倣と創造——エスニック・アートとファイン・アート」山田奨治編『模倣と創造のダイナミズム』pp.215-239, 東京：勉誠出版。

久保正敏・堀江保範

2006 「オーストラリア交通事情——アウトバックの距離を克服する」『季刊民族学』118: 3-41。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

映像アーカイブズ構築のための諸課題の検討と指針策定——倫理・知的財産権・保存と利用の両立を目指して

・研究の目的

国立民族学博物館所蔵の映像資料は、国内外共有の文化資源として極めて貴重である。しかし、その長期保存と利用の両立を図るためには、媒体変換など技術問題の背後にある、知的財産権保護と共同利用性の両立をいかに解決するかが必要となる。本研究では、素材の世代管理を含む映像アーカイブズの構造設計とともに、知的財産権保護と利用の両立を実現できる媒体管理手法を図る手法を検討する。映像アーカイブズを運用する諸機関の実態調査を行いながら、当館にとって現実的・具体的な指針を設計する。

・成果

業務委託で製作してきた民博の映像制作体制が変化し、映像機器の普及とともに研究者自身が撮影・編集した映像資料を民博が受け入れる状況も生まれ、映像資料の再定義（研究用資料、活動記録資料、公開可能な資料、資産化できない資料）が必要となっている。これらに関わる諸課題の検討を進めるとともに、日本写真学会主催「画像保存セミナー」、人間文化研究機構連携研究「人間文化資源の総合的研究」研究班「人間文化資源の保存環境研究」、民博共同研究「映像の共有人類学——映像をわかちあうことの方法と理論」などに参加し、意見交換を踏まえた結果を下記にて発表した。

〈論文等〉

- 1) 「シンポジウム・博物館の役割——集める・保つ・伝える・究める」『総合研究大学院大学文化科学研究科学術交流フォーラム2012 報告書（ウェブ版）』総合研究大学院大学（2013年3月12日，仁藤敦史・落合博志・近藤智嗣・小島道裕・荒木浩・紅林健志・門脇朋裕との共著）。
- 2) 「写真のある美術館・博物館・資料館 国立民族学博物館」『日本写真学会誌』76(1): 3-4, 日本写真学会

(2013年2月25日)。

〈口頭発表〉

- 3) 'Public Information in Museums: Rights and Ethics.' "International Workshop on Asian Museums and Museology in Mongolia", Mongolian National University of Science and Technology (2012年7月19日)。

◎出版物による業績

[共編]

『月刊みんぱく』編集部編／久保正敏・庄司博史責任編集

2012 『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』東京：丸善出版。

[その他]

久保正敏

2012 「考現学と民博」『月刊みんぱく』36(4): 2-3。

2012 「みんぱくのオタカラ 大村しげの長火鉢」『みんぱく e-news』130 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/130otakara>)。

2012 「特別展 今和次郎 採集講義——考現学の今」『国立民族学博物館友の会ニュース』205: 1。

2012 コメント「庶民の暮らし広く細かく——カフェ店員の制服、茶わんの欠け方…」『考現学』始祖・今和次郎 みんぱく』『大阪日々新聞』5月9日朝刊。

2012 コメント「身近な生活 記録する意味 民博『今和次郎 考現学の今』」『朝日新聞』5月15日夕刊。

2012 コメント「暮らしの諸相 観察し尽くす 大正・昭和を切り取った『今和次郎展』」『日本経済新聞』5月17日夕刊。

2012 コメント「今も息づく『考現学』創始者の業績——人、物、暮らしを考察 大阪・民博で『今和次郎展』」『神戸新聞』5月25日朝刊。

2012 「旅・いろいろ地球人 ずらりと並べる⑤ 考現学的な展示」『毎日新聞』6月7日夕刊。

2012 コメント「暮らし観察 考現学に再評価 昭和の京町家 家財道具も並ぶ 民博で『今和次郎展』」『京都新聞』6月12日朝刊。

2012 「友の会講演会要旨 第407回 考現学と民族学」『国立民族学博物館友の会ニュース』206: 4。

2012 「おわりに」『月刊みんぱく』編集部編 『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』東京：丸善出版。

2012 「友の会講演会要旨 第408回 タイムカプセルとしての民家模型——なぜ縮尺が1/10なのか」『国立民族学博物館友の会ニュース』207: 4。

2012 「旅・いろいろ地球人 鉄路叙景④ 南北縦断 100年の夢」『毎日新聞』11月22日夕刊。

2012 「私鉄王国の文化」『月刊みんぱく』36(12): 7-8。

2012 「虹へび」『年末年始展示イベント へび 解説パネル』国立民族学博物館。

2013 「考現学の遺伝子を受け継ぐ」『今和次郎と考現学——暮らしの“今”をとらえた〈目〉と〈手〉道の手帖』pp. 74-78, 東京：河出書房新社。

2013 「写真のある美術館・博物館・資料館 国立民族学博物館」『日本写真学会誌』76(1): 3-4。

久保正敏・仁藤敦史・落合博志・近藤智嗣・小島道裕・荒木 浩・紅林健志・門脇朋裕

2013 「シンポジウム・博物館の役割——集める・保つ・伝える・究める」『総合研究大学院大学文化科学研究科 学術交流フォーラム2012 報告書 (ウェブ版)』(http://www.initiative.soken.ac.jp/forum_2012/symposium/index.html)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年9月1日 “General Guide to the National Museum of Ethnology.” Post-Retreat Excursion of 4th iCeMS Retreat by Kyoto University, 国立民族学博物館

2012年10月22日 ディスカッション「シンポジウム・博物館の役割——集める・保つ・伝える・究める」『総合研究大学院大学文化科学研究科 学術交流フォーラム2012』国立歴史民俗博物館

・研究講演

2012年5月6日 「考現学と民族学」国立民族学博物館友の会第407回講演会、国立民族学博物館

2012年6月2日 「タイムカプセルとしての民家模型——なぜ縮尺が1/10なのか」国立民族学博物館友の会第408回講演会、国立民族学博物館

2012年7月19日 ‘Public Information in Museums: Rights and Ethics.’ “International Workshop on Asian

Museums and Museology in Mongolia”, Mongolian National University of Science and Technology

- 2012年11月5日 特別講義「科学から見るオーストラリア——時空の広さを知ろう 気候・進化・天体・先住民文化」『SPP事業 洛北サイエンス3年——オーストラリアの自然現象を探求する』京都府立洛北高等学校附属中学校
- 2012年11月25日 「民族学・文化人類学と民博の概要」『総研大学生セミナー第1回 総研大基盤機関見学——民博と日文研で学ぶ』国立民族学博物館
- 2013年1月21日 「エアーズロック（ウルル）とアボリジニ文化」『芦屋川カレッジ大学院講座 世界遺産への旅——知的冒険に出かけましょう』芦屋市民センター
- 2013年3月2日 「フィールドワークの方法① 民族学調査と考現学」『阪神間モダニズム調査隊ボランティア養成講座』芦屋市立美術博物館
- 2013年3月9日 「フィールドワークの方法② 社会調査法概略と調査の留意点」『阪神間モダニズム調査隊ボランティア養成講座』芦屋市立美術博物館

・広報・社会連携活動

- 2012年5月5日 「みんなばくで考現学的パワースポットを探そう」『特別展開連ワークショップ』国立民族学博物館
- 2012年5月19日 「コレいく？ 今和次郎 採集講義 考現学の今」『ぐるっと関西おひるまえ』NHK総合テレビ
- 2012年6月3日 「みんなばくの考現学遺伝子」第256回みんなばくウィークエンド・サロン

◎調査活動

2012年7月14日～22日——モンゴル（モンゴルの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長、京都大学地域研究統合情報センター共同研究員、国際協力機構技術協力専門家（遺物の取り扱いワークショップ）

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など
ボランティア組織「Multimedia Educational Forum」代表、特定非営利活動法人MEF (Multimedia Educational Forum) 理事長
- ・非常勤講師
大阪教育大学「博物館情報・メディア論」

小林繁樹 [こばやし しげき]——教授

1949年生。【学歴】南山大学文学部人類学科卒（1973）、南山大学大学院文学研究科文化人類学専攻修士課程修了（1976）【職歴】野外民族博物館リトルワールド学芸研究員（1976）、東京造形大学造形学部助教授（1992）、東京造形大学学芸員課程室室長（1994）、東京造形大学造形学部教授（1997）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2005）、国立民族学博物館館長補佐併任（2005）、国立民族学博物館情報管理施設長併任（2006）、国立民族学博物館文化資源研究センター長併任（2009）【学位】文学修士（南山大学大学院文学研究科 1976）【専攻・専門】道具人類学、文化人類学、博物館学【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、民族藝術学会、道具学会、日本展示学会

【主要業績】

[単著]

小林繁樹

2004 『世界一周道具パズル これ、なんに使うのかな？』電子書店 mm 文庫，東京：光文社。

[論文]

小林繁樹

2011 「次世代展示はモノコミだ！」（特集10のキーワードで語る“博物館展示の未来”6 モノ：情報集合）『展示学』49: 36-39。

2009 「世界のものづくり——創造のキッカケを動詞で試みる」国立民族学博物館編『茶の湯のものづくりと世界のわざ——千家十職×みんなく』pp. 154-157, 東京: 河出書房新社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化資源の活用に関する研究

諸文化における道具人類学的研究

・研究の目的

文化資源の活用に関する研究においては、人類が生み出し、育み、築いてきている人類文化を文化資源としてとらえ、その活用に関する一連の過程（認識し、理解し、留め、さらには伝え、促進し、より有効な利用へと展開させる）を全般的に調査研究するが、特に研究組織間や博物館同士の連携のあり方やその具体的方策の検討と文化人類学・民族学博物館における文化資源の有効な活用についての考察や実験的研究に重点をおく。

諸文化における道具人類学的研究においては、ことに身体の動きと道具との関連の考察を進める。

・成果

文化資源の活用に関する研究においては、標記課題を引続き考察、研究するなかで、日本展示学会（会長：高橋 貴）主催、国立民族学博物館、地域博物館活性化実行委員会共催による「日本展示学会創立30周年記念国際シンポジウム 博物館展示と地域活性化」の実行委員会委員として本館を会場にした実施に携わり、パネルディスカッションのコーディネーターを担当した。また、国立歴史民俗博物館、国立民族学博物館、ICOM-CECA（国際博物館会議 教育と文化活動委員会）主催による「国際シンポジウム ICOM-CECA アジア太平洋地区研究集会」の実行委員会委員として国立歴史民俗博物館を会場にした実施に携わり、第3セッション「社会とのつながり」の司会を担当した。これらの討議を通して文化資源の効果的な提示に関して認識を深めた。さらに、国際協力機構からの委託集団研修事業である「博物館学コース」に運営委員会委員長として携わり、講義を担当し、ニューズレターを編集するなど外国人受託研修員の研修に当たり、博物館社会連携専門部会長として民博のサポート団体である「みんなくミュージアム・パートナーズ」の会員養成研修を実施するなど、民博の文化資源の有効活用に関する実践的研究を試みた。学会誌『展示学』50号の編集長も務め、博物館資料の理解の仕方やこれからの展示の在り方を展望した。

また、恒例で9回目となる年末年始展示イベント「へび」のプロジェクトチーム・リーダーとして計画、実施を担当し、あわせてこれに伴う展示活動研修会を主催した。

諸文化における道具人類学的研究においては、標記課題を引続き考察、研究するなかで、創造のための工夫に関する研究講演や講義を重ねた。

◎出版物による業績

[共編]

Kobayashi, S., N. Sonoda and I. Hayashi (eds.)

2013 *Museum Co-operation 2012 Newsletter of the Comprehensive Museology Course*. Osaka: National Museum of Ethnology.

[その他]

小林繁樹

2012 「後書」『展示学』50: 151。

2012 「国立民族学博物館本館展示新構築『オセアニア』『アメリカ』2011年の展示」『展示学』50: 72。

2012 「貨幣経済を問う視点—オセアニアの島と島をつなぐ交易活動から、私たちの暮らしを考える」『国立民族学博物館友の会ニュース』206: 3。

2012 「美味なるかな、カメの甲羅焼き（再録）」『月刊みんなく』編集部編『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』pp. 72-73 東京: 丸善出版。

2012 「空きカンを使った、街角の鍼灸治療」『道具学への招待』89 (<http://dougology.exblog.jp/17850989/>) 道具学会。

2012 「旅・いろいろ地球人 美味望郷⑤ 亀鍋」『毎日新聞』10月4日夕刊。

2013 「地球ミュージアム紀行 エルデニ・ゾー博物館 モンゴル最古のチベット仏教僧院」『月刊みんなく』37(1): 14-15。

2013 「暮らしに息づく世界のへび」『神戸新聞』1月5日朝刊。

2013 「国立民族学博物館 世界各地の標本や写真展示 えとの『へび』がテーマ」『大阪日日新聞』1月7日朝刊。

2013 「ひとと抄 かばんに『世界』詰めて」『読売新聞』2月2日夕刊。

Kobayashi, S.

2013 Preface. In S. Kobayashi, N. Sonoda and I. Hayashi(eds.) *Museum Co-operation 2012 Newsletter of the Comprehensive Museology Course*, pp.4-5, Osaka: National Museum of Ethnology.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年12月1日 <司会>国際シンポジウム ICOM-CECA アジア太平洋地区研究集会 第3セッション「社会とのつながり」国立歴史民俗博物館・国立民族学博物館・ICOM-CECA(国際博物館会議教育と文化活動委員会)主催、国立歴史民俗博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年11月17日 <実行委員、パネル・ディスカッション コーディネータ>「日本展示学会創立30周年記念国際シンポジウム 博物館展示と地域活性化」日本展示学会主催、国立民族学博物館・地域博物館活性化実行委員会共催、国立民族学博物館

・共同研究会

2013年1月20日 「贈物交換活動と地域社会」『贈与論再考——「贈与」・「交換」・「分配」に関する学際的比較研究』

・研究講演

2012年6月9日 「貨幣経済を問う視点——オセアニアの島と島をつなぐ交易活動から、私たちの暮らしを考える」第102回国立民族学博物館友の会東京講演会、江戸東京博物館

2012年6月17日 「世界の文化を博物館展示で表象する」2012年度リトルワールドカレッジ・マスターコース第3回、野外民族博物館リトルワールド

2012年10月12日 「世界の道具をみる」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2012年12月10日 「交易を支える歌と踊り——ニューギニアの経済、生活、平和」伊丹市文化振興財団主催2012年度後期講座文化サロン『話題探訪』、伊丹アイフォニックホール

2013年3月2日 「フィールドワークを語る——ヨソモノが感じ、考えたこと」第417回国立民族学博物館友の会講演会

・展示

特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」実行委員会(委員長:久保正敏)委員、夏期無料観覧期間企画「世界の夏を楽しもう」実行委員会(委員長:八杉佳穂)委員、「年末年始展示イベント『へび』」プロジェクト責任者

・映像番組

小林繁樹[監修]

2012 「交易」みんなく電子ガイド

・広報・社会連携活動

2012年6月10日 「国立民族学博物館とは」2012年度みんなくミュージアムパートナーズ新規募集研修

2012年8月3日 「ニューギニアの夏」『世界の夏を楽しもう!』真夏サロン

2012年8月6日 「国立民族学博物館の紹介」大阪府教育センター『平成24年度初任者研修における社会体験研修』、国立民族学博物館

2012年8月7日 <司会>「博学連携教員研修ワークショップ2012 in みんなく 学校と博物館でつくる国際理解教育——新しい学びをデザインする」国立民族学博物館・日本国際理解教育学会共催、国立民族学博物館

2012年8月16日 「アフリカ仮面のモビールを作ろう」『世界の夏を楽しもう!』関連ワークショップ(講師:田主 誠)担当教員

2012年9月27日 「民博の展示活動」博物館学コース、国立民族学博物館

2012年11月7日~12月12日 2012年度展示活動研修会/年末年始展示イベント「へび」責任者

2012年11月24日 「人物表現あれこれ 十顔身という仏の見方—チベット仏教の仏画のしかけ」2012年度前期MMP・地球おはなし村合同継続研修、国立民族学博物館

2012年12月23日 「年末年始展示イベント『へび』と教職員研修会」第281回みんなくウィークエンド・サロン

2012年12月26日 「年末年始展示イベント『へび』について』『とっておきの11時「みんなのみんなく』」FM千里

2013年1月14日 「へび」年始年末展示イベント『へび』関連イベント みんなく教員によるギャラリートーク

2013年1月14日 「カルタを作って世界の『へび』をみてみよう！」年始年末展示イベント『へび』関連イベントワークショップ

◎調査活動

・海外調査

2012年7月14日～22日一モンゴル（モンゴルの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

野外民族博物館リトルワールド客員研究員、人間文化研究連携共同推進事業『国際シンポジウム ICOM-CECA アジア太平洋地区研究集会』（代表：小島道裕）人間文化研究機構連携研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

道具学会理事、日本展示学会副会長、日本展示学会理事、日本展示学会学会誌『展示学』50 編集長、「国際シンポジウム ICOM-CECA アジア太平洋地区研究集会」実行委員、日本展示学会創立30周年記念国際シンポジウム「博物館展示と地域活性化」実行委員会委員

・非常勤講師

川崎医療福祉大学「道具文化特論」、愛知県立芸術大学「陶磁論」、宝塚大学「博物館経営論」（集中講義）、金沢大学人間社会学域「物質文化論」（集中講義）

園田直子 [そのだ なおこ] ————— 教授

【学歴】パリ第1大学文学部卒（1980）、パリ第1大学科学技術修士課程修了（1982）、エコール・ド・ルーブル卒（1983）、パリ第1大学博士課程修了（1987）【職歴】フランス博物館科学研究所研究員（1987）、国立美術館絵画修復研究所（フランス）研究員（1989）、国立歴史民俗博物館助手（1991）、国立民族学博物館第5研究部助手（1993）、国立民族学博物館第5研究部助教授（1997）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2007）、国立民族学博物館情報管理施設長（2009）、館長補佐（2010）【学位】Doctorat de 3^{ème} cycle (Histoire de l'art) 博士（美術史）（Université de Paris I, 1987）、Maîtrise des Sciences et Techniques (Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques) 科学技術修士（Université de Paris I, 1982）【専攻・専門】保存科学【所属学会】ICOM（国際博物館会議）、IIC（国際文化財保存学会）、文化財保存修復学会、IIC-Japan（国際文化財保存学会日本支部）

【主要業績】

[編著]

園田直子編

2010 『紙と本の保存科学（第2版）』東京：岩田書院。

日高真吾・園田直子編

2008 『博物館への挑戦——何がどこまでできたのか』千葉：三好企画。

[学位論文]

Sonoda, N.

1987 Identification des matériaux synthétiques dans les peintures fines pour artistes par pyrolyse couplée avec la chromatographie en phase gazeuse. Application à l'étude de quelques tableaux d'art contemporain, Thèse de Doctorat de 3^{ème} cycle, Université de Paris I, Panthéon-Sorbonne.

【受賞歴】

2010 文化財保存修復学会第4回業績賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

環境問題に配慮した資料保存環境の構築

・研究の目的

21世紀の博物館には環境への配慮が求められる。20世紀後半のオゾン層保護に関わる問題は、日本の博物館における防虫・殺虫方針を根本から見直す契機となった。近年は地球温暖化の問題に加えて、東日本大震災を受けて全国規模で節電の動きが起きている。これまでに研究開発してきた保存環境分析システム（生物生息調査分析システム、温度・湿度分析システム）を最大限に活用し、省エネを考慮しつつ、適切な資料保存環境の条件を見いだす。

・成果

人間文化研究機構・連携研究の一環として研究開発した保存環境分析システム（生物生息調査分析システム、温度・湿度分析システム）を活用し、平常時と節電時のデータを年間にわたり総合分析した。結果、節電対策による温度・湿度の変動は、最低限に抑えられていたことを明らかにした。また、日単位での稼働時間制限のほうが、週単位での稼働時間制限よりも、温度や湿度の暴れを小さく抑えられることが実証できた。平常時と節電時の実測データを長期間にわたり比較検証した事例は殆どないため、本研究で得られた知見は、国内外の学会で研究成果として発表する。

◎出版物による業績

[論文]

Sonoda, N.

2012 Preventive Conservation for Museum Collection. In N. Kamba and M. Menu (eds.) *French-Japanese Workshop "Science for Conservation of Cultural Heritage"*, pp.143-150. Paris: Hermann.

[その他]

園田直子

2012 「資料の公開・活用をささえる予防保存——国立民族学博物館での取組みから」『博物館研究』（特集「資料の公開と保存」）47(1): 5-9。

2012 「第2章 博物館資料の保存環境2.4. 生物被害」石崎武志編著『博物館資料保存論』pp.54-70, 東京: 講談社。

2012 「民俗・民族資料」財団法人日本博物館協会編『博物館資料取扱いガイドブック——文化財、美術品等梱包・輸送の手引き』pp.185-197, 東京: ぎょうせい。

2013 「特集 はじめに光ありき——資料保存と展示と光」『月刊みんぱく』37(2): 9。

園田直子・日高真吾・橋本沙知

2012 「露出展示における資料の事故分析——国立民族学博物館の事例から」『文化財保存修復学会第34回大会 in 東京研究発表要旨集』pp.278-279, 日本大学文理学部百周年記念館（6月29～30日）。

園田直子・日高真吾・和高智美

2012 「過去20年間の生物生息調査からみる捕獲虫の推移と傾向——国立民族学博物館でのゾーニング別分析」『文化財保存修復学会第34回大会 in 東京研究発表要旨集』pp.296-297, 日本大学文理学部百周年記念館（6月29～30日）。

日高真吾・園田直子・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・雨森久晃・二俣 賢・木川りか

2012 「二酸化炭素処理における梱包材の物理的変化について」『文化財保存修復学会第34回大会 in 東京研究発表要旨集』pp.304-305, 日本大学文理学部百周年記念館（6月29～30日）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年1月27日 「予防保存と資料管理——国立民族学博物館の事例から」、国際ワークショップ「民族学資料の保存と修復——博物館バックヤードの利用効率向上と自然素材資料の修復」、「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」、機関研究「マテリアリティの人間学」、国立民族学博物館

・機構の連携研究会での報告

2012年6月25日 「人間文化資源の保存環境研究 2012年度研究状況中間報告」「人間文化資源」の総合的研究 総括班会議 人間文化研究機構

2012年11月12日 「2012年度版 温度・湿度分析システムの概略」「人間文化資源」の総合的研究：「人間文化資源の保存環境研究」東京国立博物館平成館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月1日 (ポスター発表)「過去20年間の生物生息調査からみる捕獲虫の推移と傾向——国立民族学博物館でのゾーニング別分析」(園田直子・日高真吾・和高智美)文化財保存修復学会第34回大会、日本大学文理学部百周年記念館

2012年7月1日 (ポスター発表)「露出展示における資料の事故分析——国立民族学博物館の事例から」(園田直子・日高真吾・橋本沙知)文化財保存修復学会第34回大会、日本大学文理学部百周年記念館

2012年7月1日 (ポスター発表)「二酸化炭素処理における梱包材の物理的変化について」(日高真吾・園田直子・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・雨森久晃・二俣賢・木川りか)文化財保存修復学会第34回大会、日本大学文理学部百周年記念館

2012年7月16日「持続的な資料管理に向けた収蔵庫『再』編成」、日本とモンゴルにおける博物館・博物館学の比較研究(ミュージアム・クリルタイ)、日本学術振興会研究拠点形成事業——B.アジア・アフリカ学術基盤形成型『アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流』、カラコルム博物館(モンゴル)

2012年10月7日「国立民族学博物館におけるIPMの実践とその協力体制」(園田直子、和高智美)平成24年度文化庁文化芸術振興費補助金(文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業)公開シンポジウム「市民とともにミュージアムIPM」、一橋大学一橋講堂

・広報・社会連携活動

2012年8月5日「資料の保存・取り扱いについて」MMP2012年度新規メンバー養成研修⑤

2012年11月2日「みんなの舞台裏」NPO法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2012年11月21日「標本資料の保存と活用」文化資源プロジェクト2012年度年末年始展示イベント『へび』

2012年12月16日「資料の公開・活用のためのひとくふう」第280回みんなのウィークエンド・サロン

◎調査活動

・国内調査

2012年5月25～26日—九州国立博物館(資料保存に関する意見交換ならびに情報収集)

2012年6月25日—人間文化研究機構(「人間文化資源」の総合的研究第1回総括班会議出席)

2012年8月28～29日—高知県立紙産業技術センター(紙資料の強化処理実験に関する研究会)

2012年10月13日—一橋大学一橋講堂(絵画資料の保存修復に係わる情報収集)

2012年11月12日—東京国立博物館(「人間文化資源の保存環境研究」研究会開催と発表)

2012年12月5日—東京文化財研究所(文化財の微生物劣化とその対策に関する情報収集)

2013年2月13日—情報システム研究機構(「人間文化資源」の総合的研究第2回総括班会議出席)

・海外調査

2012年6月3日～11日—ロシア(ロシア民族学博物館、人類学民族学博物館において調査研究)

2012年7月14日～22日—モンゴル(モンゴルの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査)

2013年2月20日～28日—ミャンマー(ミャンマーの博物館・博物館学に関する共同研究実施に向けた予備調査)

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員(1人)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究：「人間文化資源の保存環境研究」(研究代表者)、科学研究費補助金(研究基盤(B)(一般))「劣化の進んだ図書・文書資料の長期保存に向けた大量強化法の開発(課題番号：24300307)(研究代表者)、日本学術振興会研究拠点形成事業——B.アジア・アフリカ学術基盤形成型「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」(日本側コーディネータ)

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

国立歴史民俗博物館資料保存環境検討委員会委員、独立行政法人文化財研究所自己点検評価・外部評価委員、IIC(International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works) Council member(～2013年1月)

・非常勤講師

東京藝術大学大学院美術研究科「博物館における予防保存」(集中講義)

吉田憲司 [よしだ けんじ] 教授

1955年生。【学歴】京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒(1980)、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士前期課程修了(1983)、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程単位取得退学(1987)【職歴】ザンビア大学アフリカ研究所共同研究員(1984)、大阪大学文学部助手(1987)、国立民族学博物館助手(1988)、国立民族学博物館助教授(1992)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(1993)、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授(2000)、国立民族学博物館文化資源研究センター教授(2004)、国立民族学博物館文化資源研究センター長(2006)、放送大学客員教授(2010)【学位】学術博士(大阪大学大学院文学研究科1989)、文学修士(大阪大学大学院文学研究科1983)【専攻・専門】文化人類学、博物館人類学【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、民族芸術学会、王立人類学協会(Royal Anthropological Institute イギリス)、アフリカ学会美術協議会(The Arts Council of the African Studies Association アメリカ)

【主要業績】

[単著]

吉田憲司

1999 『文化の「発見」』東京：岩波書店。

1992 『仮面の森——アフリカ・チェワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』東京：講談社。

[共編]

吉田憲司・熊倉功夫編

2005 『柳 宗悦と民藝運動』京都：思文閣出版。

【受賞歴】

2004 第1回木村重信民族芸術学会賞

2000 第22回サントリー学芸賞(芸術・文学部門)

1993 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化遺産の管理と表象に関する博物館人類学的研究

・研究の目的

ユネスコによる無形文化遺産条約の成立に伴い、有形と無形を含めた文化遺産の管理・継承における博物館・美術館の役割に改めて注目が集まっている。文化遺産をいかに管理・継承し、いかなる形で自文化と異文化を含む文化の表象に結び付けていくのか。その作業に、博物館・美術館はいかなる形で関与するのか。文化遺産の管理と表象にかかわる博物館・美術館のありかたを歴史的に検証し、その問題点を洗い出すとともに、その将来に向けての新たな可能性を考究するのが、本研究の目的である。

本年度は、筆者を代表とする科学研究費補助金による基盤研究(A)「物質文化を通じた新たなアフリカ像の構築——国際協働による在来知と外来知の体系的検証」によって、アフリカにおける文化遺産の管理と表象に関する現地調査を実施するとともに、国内外の博物館の動向調査とその成果とりまとめを通じて、ネットワーク型ミュージオロジーの提言につなげた。

・成果

1997年の特別展「異文化へのまなざし」から2008年の特別展「アジアとヨーロッパの肖像」を経て、現在に至る筆者の博物館をめぐる一連の活動を、20世紀末から21世紀にかけての世界の博物館の動向の中に位置づける作業を行い、『文化の「肖像」——ネットワーク型ミュージオロジーの試み』(刊行は2013年4月)と題する著書にまとめた。同書は、ネットワーク型ミュージオロジーについての提言となっている。

また、「物質文化を通じた新たなアフリカ像の構築」については、その成果を同タイトルの報告書にまとめ、あわせて英文による出版の準備を進めた。

◎出版物による業績

[共編]

吉田憲司・水沢 勉・池谷和信編

2012 『ビーズ・イン・アフリカ』葉山: 神奈川県立近代美術館。

[監修]

吉田憲司

2012 『旅する仮面』中里なぎさ・金城美奈子編, 那覇: 沖縄文化の杜。

[論文]

吉田憲司

2012 「記憶の継承——津波災害と文化遺産」日高真吾編『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.140-165, 大阪: 千里文化財団。

2012 「ビーズに見るアフリカの文化」吉田憲司・水沢 勉・池谷和信編『ビーズ・イン・アフリカ』pp.98-105, 葉山: 神奈川県立近代美術館。

2012 「仮面という装置・再考——人はなぜ、もうひとつの顔をつくるのか」中里なぎさ・金城美奈子編『旅する仮面』pp.90-93, 那覇: 沖縄文化の杜。

2012 「人はなぜ仮面をかぶるのか——仮面という装置が明かす人類の普遍性」『嗜み』17: 64-69。

2013 「フォーラムとしてのミュージアム、その後」『民博通信』140: 2-7。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年5月26日 ‘Opening Remarks: Can Art and Museums Contribute to the Renaissance of Society?’ at International Symposium 2012 “Can Art and Museums Contribute to the Renaissance of Society?”, National Museum of Ethnology.

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月20日 「記憶の継承——津波災害と文化遺産」日本学術振興会研究拠点形成事業公開セミナー『災害と文化遺産——東日本大震災の事例から』モンゴル科学技術大学、ウランバートル(モンゴル)

2012年8月28日 ‘The Museum, a Platform for the Intangible Cultural Heritage.’ at the International Research Symposium “Museums and Intangible Heritage” National Folk Museum of Korea.

2012年11月2日 “Museum Exhibitions in the World”, Museum Workshop 2011, Lusaka: National Museum of Lusaka.

2012年11月19日 〈対談、荒俣 宏氏と〉「シンポジウム 東日本大震災から考える——地域の再生・文化の継承」産経新聞社主催、エルセラーンホール(大阪)

2013年3月17日 「万博からみんぱくへ」特別シンポジウム『Energy of EXPO——万国博のちから』関西環境開発センター主催、国立民族学博物館

・研究講演

2012年8月4日 「アフリカ、ビーズの世界」神奈川県立近代美術館主催、神奈川県立近代美術館

2012年8月12日 「世界の仮面、仮面の世界」沖縄文化の杜主催、沖縄県立博物館・美術館

・展示

『国立民族学博物館コレクション ビーズ・イン・アフリカ』(2012年8月4日～10月21日) 主催: 神奈川県立近代美術館、共催: 国立民族学博物館、神奈川県立近代美術館、企画展『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』(2012年9月27日～12月27日) プロジェクト・メンバー

◎調査活動

・海外調査

2012年7月14日～21日—モンゴル(モンゴルの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査)

2012年10月1日～11月4日—モザンビーク、ザンビア(モザンビークとザンビアにおける物質文化の現代的展開に関する研究および「武器を農具に」プロジェクトに関わる立体造形作品ならびに関連民族誌標本資料の収集)

2013年2月11日～25日—ドイツ、トルコ、ポルトガル、イギリス(ヨーロッパに所蔵されるアフリカに関する初期コレクションの資料調査)

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

文化遺産国際協力コンソーシアム アフリカ分科会 会長、UCLA African Arts Consulting Editor

・非常勤講師

放送大学「博物館概論」、お茶の水女子大学「文化情報論」（集中講義）、大阪芸術大学「藝術行動学特論」（集中講義）

・学会の開催

2012年5月26日～27日 日本アフリカ学会第49回学術大会（実行委員長）、国立民族学博物館

林 勲男 〔はやし いさお〕 ————— 准教授

【学歴】立教大学文学部史学科卒（1980）、立教大学大学院文学研究科地理学修士課程修了（1983）、一橋大学大学院社会学研究科地域社会研究専攻博士課程単位取得退学（1992）【職歴】シドニー大学人類学科客員研究員（1992）、国立民族学博物館第4研究部助手（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2001）【学位】文学修士（立教大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】社会人類学 1) パプアニューギニアにおける社会組織と世界観に関する研究 2) オセアニア近代史の人類学的研究 3) 自然災害への対応に関する人類学的研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、地域安全学会、日本災害復興学会

【主要業績】

〔編著〕

林 勲男編

2010 『自然災害と復興支援』（みんぱく実践人類学シリーズ9）東京：明石書店。

〔共編著〕

岩崎信彦・田中泰雄・林 勲男・村井雅清編

2008 『災害と共に生きる文化と教育——〈大震災〉からの伝言（メッセージ）』京都：昭和堂。

〔論文〕

林 勲男

2006 「意識の変容、多次元的な自己——ベダムニにおける夢と交霊をめぐって」田中雅一・松田素二編『ミクロ人類学の実践——エイジェンシー／ネットワーク／身体』pp.351-378, 京都：世界思想社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

災害研究における民族誌的方法に関する研究

・研究の目的

災害研究の分野では、被災地調査を含め、短期ではあるが頻繁に同じ調査地に足を運び、フィールドワークを行う研究者が増えてきている。本研究では、実態の正確な把握と、人類学が育んできたエスノグラフィの災害研究における可能性を、その問題点を踏まえた上で検討する。昨年度に引き続き、国内外の調査報告書や論文等の文献調査と、昭和東南海・南海地震津波被災地となった紀伊半島南部における被害想定見直しによる防災の変化に関する調査と、2011年3月に発生した東日本大震災被災地での地域コミュニティ再建に関するフィールドワークを継続する。調査は、私が代表者となっている科研費補助金と館外のプロジェクトによる予定である。

・成果

東日本大震災に関しては2012年11月22日～23日にシンガポール国立大学アジア研究所主催による国際シンポジウム Salvage and Salvation: Religion, Disaster Relief, and Reconstruction in Asia に出席し、Edifications 1のパネルにて、The Bereaved and the Folk Performing Arts in the East Japan Earthquake Disaster 2011のタイトルで発表した。また、Folk Performing Art in the Aftermath of the Great East Japan EarthquakeがAsian Anthropology Vol.11に掲載された。「民俗芸能の再生——鹿踊りへの支援から」が人間文化研究機構監修の『HUMAN』Vol.3（平凡社）に掲載された。

◎出版物による業績

[論文]

林 勲男

- 2012 「仮のすまいとコミュニティ——その連続と断絶」『建築雑誌』127(1633): 4-5。
- 2012 「伝統文化の振興と観光資源化——パプアニューギニア、ナショナル・マスク・フェスティバルをめぐって」須藤健一編『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』pp.303-325, 東京: 風響社。
- 2012 「防災の英知を海外に——津波防災教材としての『稲むらの火』」『月刊みんぱく』36(9): 8-9。
- 2012 「文化遺産支援を通じたネットワークづくり——鹿踊りの研究公演を例に」日高真吾編『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.134-138, 大阪: 千里文化財団。
- 2012 「災害を伝える——記憶と記録をこえて」日高真吾編『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.173-181, 大阪: 千里文化財団。
- 2012 「鹿の涙、人の涙——笹崎鹿踊りの復活」『月刊みんぱく』36(11): 22-23。
- 2012 Folk Performing Art in the Aftermath of the Great East Japan Earthquake. *Asian Anthropology* 11: 75-87。
- 2012 「民俗芸能の再生——鹿踊りへの支援から」『HUMAN ——知の森へのいざない』3: 83-90。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年11月16~17日 「災害の記憶を残す」国際シンポジウム『大規模災害とコミュニティの再生』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年6月23日 分科会(代表)「復校・教育・地域社会——3.11と人類学」文化人類学会、広島大学
- 2012年7月20日 「東日本大震災における無形文化遺産の被害と支援」公開セミナー『東日本大震災と文化遺産の保存』モンゴル国立科学技術大学
- 2012年11月22~23日 ‘The Bereaved and the Folk Performing Arts in the East Japan Earthquake Disaster 2011’. 国際シンポジウム“Salvage and Salvation: Religion, Disaster Relief, and Reconstruction in Asia”シンガポール国立大学アジア研究所

・研究講演

- 2012年7月6日 「災害からの復興」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館
- 2012年7月20日 ‘Preservation of intangible cultural properties.’ 国立民族学博物館主催、モンゴル国立科学技術大学

・研究公演

- 2012年6月9日~10日 「忘れない絆、絶やさない伝統——震災復興と文化継承を願って」国立民族学博物館(9日)、神戸市長田区若松公園(10日)共催: ジョイプラザ名店会・株式会社神戸ながたTMO
- 2012年11月18日 みんぱく公演「南部藩壽松院年行事支配太神楽」国立民族学博物館

・展示

企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」実行委員

・広報・社会連携活動

2011年7月24日 「南太平洋の宣教師」第214回みんぱくウィークエンドサロン

◎調査活動

・国内調査

- 2012年6月26日~31日—岩手県普代村、大船渡市、宮城県南三陸町(連携展示に関する資料調査)
- 2012年7月7日~9日—岩手県遠野市、大船渡市、花巻市、宮城県南三陸町(収集資料に関する調査)
- 2012年8月18日~20日—奥州市、大船渡市、花巻市(民俗芸能に関する情報収集)
- 2012年8月31日—東京国立博物館(特集陳列「地震研究と歴史資料」展の情報収集)
- 2012年10月25日~27日—東京文化財研究所(「第7回無形民俗文化財研究協議会」に出席)
- 2012年12月22日~25日—宮城県南三陸町(宮城県南三陸町の無形民俗文化の伝承者・伝承団体・関連施設の支援と活動の現状に関する調査)
- 2013年1月10日~12日—山寺芭蕉記念館、仙台国際センター、せんだいメディアテーク(シシ踊りに関する調査、シンポジウム「東日本大震災アーカイブ——過去と現在の記憶・記録を未来へ伝

えるために」参加、協議)

2013年3月6日～7日—東京文化財研究所（第1回無形文化遺産情報ネットワーク協議会に出席）

2013年3月17日～18日—日本学術会議（日本学術会議公開シンポジウム「災害と環境教育——内発的なESDからの復興の道筋の展望」への参加と、国立国会図書館東日本大震災アーカイブに関する調査）

2013年3月26日～30日—釜石市郷土資料館。大船渡市郷土芸能協会、遠野市立博物館、えさし藤原の郷、春日流八幡鹿踊り保存会（岩手県被災地およびその支援地域における博物館を通じた復興支援活動に関する調査）

・海外調査

2012年7月14日～22日—モンゴル（モンゴルの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

2012年10月29日～11月5日—インドネシア、シンガポール（アチェ津波博物館、シアクアラ大学津波防災研究センター、シンガポール国立博物館での研究会）

2012年11月21日～25日—シンガポール（シンガポール大学での研究会及び国際シンポジウム参加）

2013年2月3日～11日—パプアニューギニア、オーストラリア（「大規模災害被災地における環境変化と脆弱性克服に関する研究」に関わる文献調査ならびに聞き取り調査）

日高真吾 [ひだか しんご] ————— 准教授

1971年生。【学歴】東海大学文学部史学科日本史学専攻卒（1995）【職歴】財団法人元興寺文化財研究所研究員（1995）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（2002）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助手（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）【学位】文学博士（東海大学 2005）【専攻・専門】保存科学、保存修復【所属学会】文化財保存修復学会、文化財科学会、日本民具学会、近畿民具学会

【主要業績】

[単著]

日高真吾

2008 『女乗物——その発生経緯と装飾性』神奈川：東海大学出版会。

[編著]

日高真吾編

2012 『記憶をつなぐ——津波被害と文化遺産』大阪：千里文化財団。

日高真吾・園田直子編

2008 『博物館への挑戦——何がどこまでできたのか』千葉：三好企画。

【受賞歴】

2009 日本文化財科学会第4回ポスター賞

2008 文化財保存修復学会第2回奨励賞

【2012年度の活動報告】

◎各個人研究

・研究課題

加温二酸化炭素処理法の開発

・研究の目的

本研究は、二酸化炭素を利用した殺虫処理のシステムを利用して、効率的な博物館の殺虫処理法のシステムを開発することを目的とするものである。

二酸化炭素による殺虫処理は、化学薬品を用いない殺虫処理法として、国内外の博物館で積極的に導入されている。しかし、殺虫処理条件として25℃以上の温度を要するということから冬季の博物館環境では実施できない点と2週間という処理期間が長いという問題点の指摘があり、2011年度の研究ではこれらの問題を解決するための加温二酸化炭素処理システムをほぼ完成することができた。一方、梱包材の中で特に発泡体について二酸化炭素による変形等が生じることが確認された。以上のことから、2012年度は二酸化炭素処理による梱包

材の影響試験を実施する。

・成果

通常の美術梱包で使用する材料のうち、特に発泡体を抽出し、試験体とし、重量、寸法、顕微鏡による発泡体の形状について、二酸化炭素処理と未処理のものを1年間観察し、両者の違いを比較検証した。その結果、二酸化炭素処理後において、若干の寸法変化、形状変化がみられたものの、その後、大きな変化は見られなかった。このことから、梱包材そのものを処理することは問題ないものの、若干の変化があることを認識した上で、その後の取り扱いを考える必要があることを明らかにした。

◎出版物による業績

[論文]

日高真吾

2012 「国立民族学博物館の活動」『東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会平成23年度活動報告書』 pp. 131-135, 東京: 東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会。

2012 「東日本大震災における文化財レスキューについて——民俗資料を中心に」文化財保存修復学会編『災害から文化財をまもる』 pp. 81-89, 東京: 文化財保存修復学会。

2012 「博物館資料の被災防止と救援活動」石崎武士編『博物館資料保存論』 pp. 84-98, 東京: 講談社。

日高真吾・岡田 健

2012 「被災した文化遺産のレスキュー活動——東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会と国立民族学博物館」日高真吾編『記憶をつなぐ——津波被害と文化遺産』 pp. 56-67, 大阪: 千里文化財団。

[その他]

日高真吾ほか5名

2012 「東日本大震災における民俗文化財のレスキューと将来への課題」『日本文化財科学会第29回大会発表要旨』 pp. 414-415, 東京: 文化財保存修復学会。

日高真吾・園田直子ほか7名

2012 「二酸化炭素処理における梱包材の物理的変化について」『文化財保存修復学会第34回大会発表要旨』 pp. 304-305, 東京: 文化財保存修復学会。

2012 「震災と保存科学」『月刊みんぱく』 36(9): 6-7。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年11月17日 「東日本大震災で被災した有形文化遺産の復興支援」国際シンポジウム『大規模災害とコミュニティの再生』(加藤幸治・沼田 愛(東北学院大学)との合同報告)、国立民族学博物館

2013年1月27日 「東日本大震災における民俗資料の修復」国際ワークショップ『民族学資料の保存と修復——博物館バックヤードの利用効率向上と自然素材資料の修復』(民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究 代表: 佐々木史郎)、国文学研究資料館

2013年3月8日 「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産 被災地を展示するということ」人間文化研究機構災害連携研究報告会、国文学研究資料館

2013年3月17日 「日本における日本の文化の展示」国際シンポジウム“Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe”、国立民族学博物館

2013年3月21日 「東日本大震災での文化財レスキュー」人間文化研究機構連携研究シンポジウム『大規模災害と人間文化研究』フクラシア東京

2013年3月24日 「文化財レスキュー事業で救出した文化財の現状と課題」シンポジウム『大規模災害と人間文化研究』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月23日～24日 「東日本大震災における民俗文化財のレスキューと将来への課題」(日高真吾他5名による合同報告)『日本文化財科学会第29回大会』京都大学

2012年6月30日～7月1日 「災害対策調査部会の2011年度の活動」(内田俊秀・日高真吾・中村晋也・村上 隆・森田 稔による合同報告)『文化財保存修復学会第34回大会』日本大学

2012年7月1日 「二酸化炭素処理における梱包材の物理的変化について」(日高真吾他7名による合同報告)『文化財保存修復学会第34回大会』日本大学

2012年7月20日 ‘Preservation of the Tangible Cultural Heritage’ 公開セミナー “The Great East Japan

Earthquake and the Preservation of Cultural Heritage” (日本学術振興会研究拠点形成事業 (B, アジア・アフリカ学術基盤形成型) 「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」 (代表: 園田直子))

・展示

企画展 (人間文化研究機構連携展示) 「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」、企画展関連写真展 「写真で見る東日本大震災と被災文化遺産のレスキュー」

・広報・社会連携活動

2012年10月21日 「鶴鳥神楽」 みんぱく公演 (企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」関連)

◎調査活動

・海外調査

2012年6月3日～11日—ロシア (ロシア民族学博物館、人類学民族学博物館において調査研究)

2012年7月17日～22日—モンゴル (モンゴルの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査)

2012年11月30日～12月15日—エジプト (大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト (フェーズ2) における遺物管理データベースの策定と収蔵方法の策定のための技術指導)

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

文化財保存修復学会理事、日本民具学会理事、文化財虫害研究所総合的防除対策検討委員会委員

福岡正太 [ふくおか しょうた] ————— 准教授

1962年生。【学歴】東京藝術大学音楽学部楽理科卒 (1986)、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了 (1991)、東京藝術大学大学院博士課程単位取得退学 (1994) 【職歴】国立民族学博物館第2研究部助手 (1994)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手 (1998)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授 (2003)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授 (2004) 【学位】芸術学修士 (東京藝術大学大学院 1991) 【専攻・専門】民族音楽学 東南アジア、とくにインドネシア、西ジャワのスダ伝統音楽について研究 【所属学会】東洋音楽学会、日本音楽学会、日本ポピュラー音楽学会

【主要業績】

[論文]

福岡正太

2003 「音楽からみた『インドネシア民族』の形成」 端 信行編『民族の二〇世紀』(二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容9) pp.144-160, 東京: ドメス出版。

2003 「小泉文夫の日本伝統音楽研究——民族音楽学研究の出発点として」『国立民族学博物館研究報告』28(2): 257-295。

Fukuoka, S.

2003 Gamelan Degung: Traditional Music in Contemporary West Java. In S. Yamashita and J. S. Eades (eds.) *Globalization in Southeast Asia: Local, National, and Transnational Perspectives*, pp.95-110. New York and Oxford: Berghahn Books.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジア伝統音楽の近代史

・研究の目的

この研究は、録音技術の発展とマスメディアの普及、国民国家の成立とナショナリズムに基づく文化政策、楽器の製作流通を含む音楽産業の成立などの中で、東南アジアの伝統音楽がどのように変化したのかを明らかにすることを目的としている。主な研究対象の1つとして西ジャワの伝統音楽を取り上げるが、同時に東南アジア諸地域間の関連をさぐり、近代東南アジア世界における伝統音楽の動態を明らかにする。具体的には、1) 1930年代から50年代にかけて、レコードやラジオとともに、西ジャワ伝統音楽がどのように変化したのかを明らかにする。2) 東南アジア各地におけるゴングの製作と流通について調査し、そこにどのような変化が見られ

るのかを明らかにする。

・成果

1) マスメディアの発展とともに急速に新しいレパートリーが形成されたカウイとよばれるジャンルについて分析を進めた。2) 科学研究費補助金（基盤（B））「映像を用いた東南アジアゴング文化の音楽人類学的研究」（代表者：福岡正太）により、インドネシアおよびベトナム、ラオスにてゴングの製作と流通およびゴング演奏について調査撮影をおこなった。

◎出版物による業績

[単著]

福岡正太

2012 『東南アジアの人形芝居——舞台の小さな主役たち』大阪：堺市博物館。

[書評]

福岡正太

2013 「書評 細川周平編『民謡からみた世界音楽：うたの地脈を探る』」『ポピュラー音楽研究』16: 38-42。

[その他]

福岡正太

2012 「みんぱくと映像」『月刊みんぱく』36(5): 6-7。

2012 「芸能の映像記録とその活用について」笹原亮二編『チャンメラを作る』国立民族学博物館音楽展示プロジェクトチーム，人間文化研究機構連携研究プロジェクト「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」pp. 87-94。

2013 「旅・いろいろ地球人 たちこめる③ 祖先にささげる歌」『毎日新聞』3月21日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年12月15日 「芸能の映像記録とその活用について」パネルディスカッション『八代妙見祭のチャンメラ復元製作をめぐる』東洋音楽学会西日本支部第258回定例研究会、国立民族学博物館。

2012年8月8日 “Audio-Visual Documentation of Performing Arts in Minpaku”, 2012 International Field School Alumni Seminar on Safeguarding Intangible Cultural Heritage in Asia Pacific (co-hosted by International Research Centre for Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region, Japan and Princess Maha Chakri Sirindhorn Anthropology Centre, Thailand), Lamphun Province, Thailand.

・広報・社会連携活動

2012年7月15日 「みんぱくの展示と映像」第261回みんぱくウィークエンドサロン

・展示

情報展示新構築

◎調査活動

・国内調査

2012年8月13日～16日一鹿児島県硫黄島（三島村硫黄島の盆行事に関する調査撮影）

2012年10月22日～25日一鹿児島県硫黄島（三島村硫黄島の民俗芸能に関する調査撮影）

2012年12月1日～3日一鹿児島県徳之島（徳之島の民俗芸能の調査・保存・伝承への映像の活用に関する資料収集）

2013年2月23日～25日一鹿児島県徳之島（徳之島の民俗芸能の調査・保存・伝承への映像の活用に関する資料収集）

・海外調査

2012年8月5日～11日一タイ（無形文化遺産と博物館に関する国際研究会参加）

2013年1月5日～10日一インドネシア（インドネシアのゴングの製造と流通に関する調査）

2013年3月1日～10日一ベトナム、ラオス（ベトナムとラオスのゴング文化に関する調査）

2013年3月14日～22日一インドネシア（インドネシアのゴングを用いる芸能に関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

東洋音楽学会理事、堺市博物館スポット展示「東南アジアの人形芝居——舞台の小さな主役たち」監修（2012年10月2日～11月4日）

- ・非常勤講師

大谷大学「民族誌講義」「社会学研究」、同志社大学「芸術学特論」、京都文教大学「音楽人類学」

南 真木人 [みなみ まきと] ————— 准教授

1961年生。【学歴】弘前大学人文学部人文学科卒（1985）、筑波大学大学院修士課程環境科学研究科修了（1989）、筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科中退（1991）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1991）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2007）、文化資源研究センター准教授（2011）【学位】学術修士（筑波大学大学院修士課程環境科学研究科 1989）【専攻・専門】人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、生態人類学会

【主要業績】

[共編]

Yamashita, S., M. Minami, D. W. Haines and J. S. Eades (eds.)

2008 *Transnational Migration in East Asia: Japan in a Comparative Focus* (Senri Ethnological Reports 77), Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Minami, M.

2008 Overstaying Undocumented Workers on the Decrease in Japan: The Case of Nepali Immigrant Workers. In S. Yamashita, M. Minami, D. W. Haines and J. S. Eades (eds.) *Transnational Migration in East Asia: Japan in a Comparative Focus* (Senri Ethnological Reports 77), pp.89-99. Osaka: National Museum of Ethnology.

2007 From Tika to Kata?: Ethnic Movements among the Magars in an Age of Globalization. In H. Ishii, D. N. Gellner and K. Nawa (eds.) *Social Dynamics in Northern South Asia Vol.1: Nepalis Inside and Outside Nepal*, pp.443-466. New Delhi: Manohar.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

社会的包摂の「表現型」——エスニシティに基づく連邦制の議論から

- ・研究の目的

本研究の目的は、新しいネパール連邦民主共和国の連邦制の議論において、その鍵となる社会的包摂という概念がいかに利用ないしは流用され、民族（とくにマガル）およびカースト（とくにダリット）、地域（とくにマデシ）の自治の議論や運動に影響を与え、表出しているのかを明らかにするものである。具体的には、運動をリードする人びとの包摂に対する認識と戦略、運動に直接は関わらない人びとの認識や選択を現地調査によって探る。

- ・成果

制憲議会は、連邦制の内容の議論に立ち入る以前に、エスニシティに基づく連邦（民族名を冠した州。以下、民族州）は国家の統合にとって脅威になるのではないかという根源的な議論と対立に終始し、2012年5月、憲法を制定できずに期限切れで失効した。この疑義を提出するバフンやチェトリという「ドミナント・カースト」

集団は、ネパールはマジョリティと呼べるような集団がない、自らもその一つとするマイノリティーズの国家であり、ネパール人という共通のアイデンティティに基づく連邦を採用すべきだと主張する。他方、民族出身の政治家の一部は、民族州の採用を躊躇する既存の政党を離党し、民族州と民族自治を求める民族のための新たな政党を立ちあげはじめた。ただし、民族も一枚岩ではなく、同調者は必ずしも多くはない。もとよりネパールでは、特定の民族やカースト、地域の人々が自らの利益を追求するために組織する民族/カースト/地域単位の政党は、政党要件に抵触するとして選挙管理委員会が認めてこなかった。だが、2008年の制憲議会選挙において「マデシ人民の権利フォーラム」というマデシ地域政党を公認せざるを得ず（一連の暴動による）、同党が選挙で第4党になったことにより、なし崩し的にこの要件が緩和した背景がある。社会的包摂の議論はアイデンティティ・ポリティクスに結びつき、ネパールの場合それが実際の政治に大きな影響を与えているのである。

他方で、国家アカデミーが「国際母語デー」に合わせて大統領の臨席の元、各民族の母語による詩の朗読会を開催するなど、多様な民族の文化の維持、発展を支援する文化的な「包摂」の施策のほうは少しずつだが確実に増加している。社会的包摂の一つの契機と位置づけられる留保制度に関しては、さまざまな分野で法制化され始まっているが、その実効性の担保についての追跡調査はできず課題として残った。

◎出版物による業績

[その他]

南 真木人

- 2012 「みんなのオタカラ ネパールのビーズ “ジー”」『みんな e-news』132 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/132otakara>)。
- 2012 「旅・いろいろ地球人 ずらりと並べる② つながるビーズ」『毎日新聞』5月17日夕刊。
- 2012 「『幸せの国』のあやうさ」『月刊みんな』36(4): 20。
- 2013 <情報提供協力> 『在留外国人の宗教事情に関する資料集——東南アジア・南アジア編』文化庁文化庁宗務課。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

- 2012年10月4日 「カースト社会を読み解く——ネパールの事例から」国際理解ゼミナール、宝塚南口会館
- 2012年12月1日 「みんなコレクションを語る——ネパールの金（きん）のはなし」第414回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

- 2013年1月20日 「1 + 1 は2ではない!! (算数)」『すいたんと行こう！——みんな学校で世界のくらし大発見』吹田にぎわい観光協会主催、国立民族学博物館
- 2013年1月26日 コメンテーター「第64回関西ネパールロビー——ネパールの平和と民主化への道」日本ネパール協会関西支部、京都私学会館

・展示

- 2012年7月14日～9月2日 巡回展「マンダラ展——チベット・ネパールの仏たち」石川県立歴史博物館

◎調査活動

・海外調査

- 2012年12月6日～21日—カタル、アラブ首長国連邦（中東におけるネパール移民の生活調査）
- 2013年3月18日～31日—ネパール（労働移民経験が社会的包摂に与える影響についての調査）

◎大学院教育

・論文審査

- 博士論文予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点（代表者：三尾 稔）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））体制転換期ネパールにおける「包摂」を巡る社会動態の展開に関する比較民族誌的研究（研究代表者：名和克郎）研究分担者

山本泰則 [やまもと やすのり] ————— 准教授

【学歴】大阪大学基礎工学部生物工学科卒（1978）、大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了（1980）、大阪大学大学院基礎工学研究科博士後期課程退学（1983）【職歴】国立民族学博物館第5研究部助手（1983）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）【学位】工学修士（大阪大学大学院基礎工学研究科 1980）【専攻・専門】文化資源情報学【所属学会】情報処理学会、電子情報通信学会

【主要業績】

[論文]

山本泰則

2011 「国立国会図書館 PORTA と人間文化研究機構 統合検索システムの連携について」『人間文化情報資源共有化研究会報告集』2: 53-68。

山本泰則・安達文夫

2009 「博物館資料情報統合検索のためのコアメタデータ」『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』（情報処理学会シンポジウムシリーズ）2009(16): 287-294。

宇陀則彦・山田太造・村田良二・山本泰則

2012 「転写資料記述のための概念モデルの特徴と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』176: 239-266。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

人文系博物館資料のコアメタデータに関する研究

・研究の目的

博物館に収蔵されている資料のうち、いわゆる「もの」資料がもつ情報は、文書や書籍、絵画、写真などと比べて著しく異なった特質をもつ。というのは、ふつう情報はその内容とそれを保持する入れ物（媒体、メディア、キャリア）から構成されるが、もの資料の場合は内容と入れ物の区別があいまいで、資料の存在そのものが情報を表現しているためである。

本研究では、国立民族学博物館の民族誌資料（標本資料）を中心として、人が製作に関与して博物館に所蔵され、人文科学の研究対象となるもの資料について、それらを記述するために必要不可欠で最小限の共通属性（コアメタデータ）を抽出する。また、それを応用したものの資料情報の記述と蓄積、所蔵機関を超えた情報交換、横断検索の方法についての研究をおこなう。

・成果

昨年度抽出したコアメタデータの有用性を検証する方法のひとつとして、すでに提案されている博物館資料記述のための標準的なメタデータを本コアメタデータに変換できることを示すという方法をとった。国際博物館会議が提案する「博物館資料情報のための国際ガイドライン」および東京国立博物館が提案する「ミュージアム資料情報構造化モデル」のメタデータを分析し、これらで記述された情報を本コアメタデータへうまく変換できることを示した。

◎出版物による業績

[論文]

山田太造・山本泰則・古瀬 蔵・安達文夫

2012 「人文科学データベース統合検索のためのメタデータとその応用」『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』（情報処理学会シンポジウムシリーズ）2012(7): 71-78。

宇陀則彦・山田太造・村田良二・山本泰則

2012 「転写資料記述のための概念モデルの特徴と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』176: 239-266。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年11月17日 「人文科学データベース統合検索のためのメタデータとその応用」『人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2012」：つながるデジタルアーカイブ——分野・組織・地域を越えて』情報処理学会、北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟。

・広報・社会連携活動

2012年7月22日 「あたらしくなったビデオテーク——みんぱく最後のビデオテーク???'」第262回みんぱくウィークエンド・サロン

上羽陽子 [うえば ようこ]————— 助教

1974年生。【学歴】大阪芸術大学芸術学部工芸学科染織コース卒（1997）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程前期修了（1999）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程後期修了（2002）【職歴】大阪芸術大学大学院芸術文化研究科研究員（2002）、大阪芸術大学通信教育部工芸学科ファイバーコース非常勤講師（2003）、大阪市立クラフトパーク織物工房非常勤指導員（2003）、京都精華大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2008）【学位】博士（芸術文化学）（大阪芸術大学 2002）、修士（芸術文化学）（大阪芸術大学 1999）【専攻・専門】民族芸術学、染織研究、手工芸研究【所属学会】民族芸術学会、意匠学会、日本風俗史学会、日本南アジア学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

上羽陽子

2006 『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼——ラクダとともに生きる人びと』京都：昭和堂。

[論文]

上羽陽子

2010 「NGO 商品を作らないという選択——インド西部ラバーリー社会における開発と社会変化」『地域研究』10(2): 204-223。

2008 「インドの手工芸と振興活動——ラバーリー社会を事例に」デザイン史フォーラム編、藤田治彦責任編集『近代工芸運動とデザイン史』pp. 292-299, 京都：思文閣出版。

【受賞歴】

2010 意匠学会作品賞

2007 第4回木村重信民族芸術学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究

・研究の目的

現代インドにおいて、ものづくりの作り手の創意工夫や、手工芸技術の継承法について実践的にアプローチし、製作者が伝統的形態の継承と現代的な要素の採用をいかに選択しているかを明らかにすることを目的とする。同時に、文化資源である現地の人びとのものづくりに関する知識を、どのように活用することができるか、さらに共同利用や社会還元への可能性を展示やワークショップを通じて実践的研究を行なう。なお、本研究は、科学研究費補助金（若手研究（B）「伝統的技術の戦略的継承法——現代インドの手工芸文化を中心とした民族芸術学的研究」）の課題として2010年～2012年にわたって実施した。

・成果

2012年度は、民族芸術学会で東ネパールの羊毛織物を対象とした学術報告をおこなう一方で、科学研究費補助金（若手研究（B）「伝統的技術の戦略的継承法——現代インドの手工芸文化を中心とした民族芸術学的研究」）に関わる研究論文（「インド・グジャラート州アーメダバード市における女神儀礼用染色布の製作技術の現状」『国立民族学博物館研究報告』37-1）を刊行した。また、実践的研究として、手工芸文化の理解を目的としたものづくりワークショップを特別展『世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見』、『マダガスカル 霧の森のくらし』などで、企画・実施した。

◎出版物による業績

〔論文〕

上羽陽子

- 2012 「インド・グジャラート州アーメダバード市における女神儀礼用染色布の製作技術の現状」『国立民族学博物館研究報告』37(1): 1-51。

〔その他〕

上羽陽子

- 2012 「糸づくりから織物まで」『国立民族学博物館カレンダー2013』。
 2012 「飾り紐」『国立民族学博物館カレンダー2013』。
 2012 「女性用巻衣 サリー」『国立民族学博物館カレンダー2013』。
 2012 「夜着」『国立民族学博物館カレンダー2013』。
 2012 「旅・いろいろ地球人 ずらりと並べる⑦ 組み合わせは無限大」『毎日新聞』6月21日夕刊。
 2012 「(特集・座談会)世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」『月刊みんぱく』36(8): 2-9。
 2012 「触ってみる！感じてみる！——織物再発見」『月刊みんぱく』36(8): 8-9。
 2012 「みんぱくのオタカラ インドのパトラ布団」『みんぱく e-news』135 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/135otakara>)。
 2012 「つくり手の『勘どころ』を記録する(私の研究と出会い)」人間文化研究機構監修『HUMAN』3: 142-146。
 2013 「衣装デザインと光」『月刊みんぱく』37(2): 4。
 2013 「みんぱく私の逸品 ザフィマニリの女性用帽子」『月刊みんぱく』37(3): 21。
 2013 「みんぱくのオタカラ 育児用寝台」『みんぱく e-news』141 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/141otakara>)。
 2013 「旅・いろいろ地球人 たちこめる② 『香ばしい』帽子」『毎日新聞』3月14日夕刊。
 2013 「くらしに生きる造形と装飾」国立民族学博物館編『霧の森の叡智 マダガスカル、無形文化遺産のものづくり』pp. 86-93, 大阪: 国立民族学博物館。

Ueba, Y.

- 2013 Art and Decoration in Daily Life. In National Museum of Ethnology (ed.) *Handicrafting the Intangible: Zafimaniry Heritage in Madagascar*, pp. 86-93. Osaka: National Museum of Ethnology.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

- 2013年3月28日 「ラバーリーのからだ機について」『手織機と織物の通文化的研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年4月22日 「東ネパール・ルムジャタル村における羊毛織物のフェルト化について」『第28回民族藝術学会大会』大阪歴史博物館

・研究講演

- 2012年6月5日、12日、26日 「模写実践による異文化理解——インド西部刺繍布の製作技術から考える」川島テキスタイルスクール主催、川島テキスタイルスクール(3回連続講座)
 2012年6月18日 「手織り絨毯の織技術について」『シルクロード絨毯塾』株式会社絨毯ギャラリー主催、神戸ファッションマート
 2012年8月22日 「インド、ラバーリーの刺繍布と通過儀礼——牧畜社会にみる伝統的形態の継承を考える」『第72回月例会——歴史・文化に親しむ会』NPO Klub Zukunft主催、梅田エステート・ビル5階
 2012年9月21日 「インドの刺繍」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館
 2012年11月6日 「インドの手工芸文化について」『群馬県立前橋高等学校(学外研修)』国立民族学博物館第5セミナー室
 2013年1月20日 「世界の糸、大集合！」『すいたんと行こう！みんぱく学校で世界のくらし大発見(技術・家庭)』一般社団法人吹田にぎわい観光協会主催・国立民族学博物館共催、国立民族学博物館第3セミナー室
 2013年2月23日 「一枚布をまとう世界——南アジアの女性たちのくらしと布」ふろしき研究会主催『第83回ふ

ろしきトーク』法然院

・ 広報・社会連携活動

- 2012年 8月 7日 「織機のカラクリ大発見」『博学連携教員研究ワークショップ2012 in みんなく「学校と博物館でつくる国際理解教育——新しい学びをデザインする」』関連ワークショップ、国立民族学博物館セミナー室・本館展示場内
- 2012年 9月 23日 「南アジアの衣装と文様表現」『第269回みんなくウィークエンド・サロン』
- 2012年10月 7日 「インド、牧畜民のからだ機について——ラバーリーを事例に」『世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見』関連ミニレクチャー、国立民族学博物館特別展示場内
- 2012年10月21日 「見方を発見——染織資料と出会ってみよう」第273回みんなくウィークエンド・サロン
- 2012年10月23日、11月24日 「(機織りの実演) ジャカード織機の実演」特別展『世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見 (実行委員長：吉本 忍)』関連ワークショップ、国立民族学博物館
- 2012年10月28日 「インド、ラバーリーのからだ機に挑戦！」特別展『世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見 (実行委員長：吉本 忍)』関連ワークショップ、国立民族学博物館特別展示場内
- 2012年11月23日 「My 織機を作って裂織に挑戦！」大阪日本民芸館主催、秋季特別展『芹沢銈介と日本の染織』関連ワークショップ、大阪日本民芸館
- 2012年11月25日 「ヤギ毛の繊維利用について」第277回みんなくウィークエンド・サロン
- 2013年 3月 17日 「くらしに生きる編みもの」特別展『マダガスカル 霧の森のくらし』関連催し『ザフィマニリの敷物を編もう (おはなしの時間)』(7回連続講座の第1回目)、国立民族学博物館特別展示場内

・ 展示

特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」実行委員、特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」実行委員

◎調査活動

・ 海外調査

- 2012年 7月24日～8月 4日—マダガスカル (ザフィマニリ地域の森林資源利用に関する調査)
- 2013年 1月23日～2月14日—インド (伝統的技術の戦略的継承法—現代インドの手工芸文化を中心とした民族芸術学的研究の現地調査)

◎上記以外の研究活動

- ・ 人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
- 「国際シンポジウム ICOM-CECA アジア太平洋地区研究集会」『人間文化研究連携共同推進事業』(代表：小島道裕) 連携研究員

◎社会活動・館外活動

- ・ 他の機関から委嘱された委員など
民族芸術学会編集 (学会誌) 委員
- ・ 非常勤講師
京都精華大学「文様史1」、京都嵯峨芸術大学「工芸概論」、「工芸研究」

川瀬 慈 [かわせ いっし]————— 助教

1977年生。【学歴】京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了(2010)【職歴】日本学術振興会PD(2007)、マンチェスター大学研究員(2010)、ベルギー SoundImageCulture 客員講師(2011)【学位】博士(地域研究)(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2010)【専攻・専門】映像人類学、民族誌映画制作【所属学会】英国王立人類学協会、日本映像民俗学の会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会

【主要業績】

[編著]

北村皆雄・新井一寛・川瀬 慈編

2006 『見る・撮る・魅せるアジア・アフリカ！——映像人類学の新天地』東京：新宿書房。

[論文]

Kawase, I.

2012 The Azmari Performance During Zar Ceremonies in Northern Gondär, Ethiopia-Challenges and Prospects for the Documentation-. In J. Kawada (ed.) *Cultures Sonores d'Afrique V*, pp.65-80, Institut de Recherches sur les Cultures Populaires du Japon. Yokohama: Universite Kanagawa.

[映像作品]

川瀬 慈

2012 『精霊の馬/When Spirits Ride Their Horses』

【受賞歴】

[国際映画祭入選]

2013 第10回 Worldfilm Festival of Visual Culture (エストニア)

2012 第6回モスクワ国際映像人類学祭

2012 第32回北欧人類学映画協会主催映画祭 (ノルウェー)

2012 第9回スラヴォニア国際民族映画祭 (クロアチア)

2008 最も革新的な映画賞 Premio per il film più innovativo イタリア・サルデーニャ国際民族誌映画祭

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アフリカの無形文化の保護と継承に資する民族誌映画制作

・研究の目的

今日消滅ないしは著しい変容を強いられているアフリカの地域社会の無形文化の保護と継承に資する民族誌映画の制作と活用の指針を示し、研究機関、国際機関、現地行政、現地社会等の中で議論を促進させる。

・成果

2012年度は第18回国際エチオピア学会（10月、ディレデワ大学、エチオピア）において、フィルムセッションを企画・実行し、エチオピア人研究者や報告者を含む6名が制作した民族誌映画の上映を行った。本セッションには研究関心を共有する学者や国際機関のスタッフ等が多数参加し、民族誌映画作品の制作方法論とその活用の在り方をめぐって活発な議論を行うことができた。2012年度、報告者の作品は、第6回モスクワ国際映像人類学祭、第32回北欧人類学映画協会主催映画祭（ノルウェー）、第9回スラヴォニア国際民族映画祭（クロアチア）、第10回 Worldfilm Festival of Visual Culture（エストニア）等の審査付の国際学術映画祭に入選し、公表された。

◎出版物による業績

[共著]

坂本龍一・塚田健一・分藤大翼・川瀬 慈ほか

2012 『Traditional Music in Africa』(commons: schola vol.11) 東京: Commons.

[論文]

Kawase, I.

2012 The Azmari Performance During Zar Ceremonies in Northern Gondär, Ethiopia: Challenges and Prospects for the Documentation. In J. Kawada (ed.) *Cultures Sonores d'Afrique V*, pp.65-80, Institut de Recherches sur les Cultures Populaires du Japon. Yokohama: Universite Kanagawa.

2013 「文化の記録と映像表現——ブリュッセルの映像制作実習コース見聞記」『フィールドプラス』9: 24-25。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・映像番組

川瀬 慈 [映画制作]

2012 『精霊の馬—— When Spirits Ride Their Horses』 Hi-Vision、28分、アムハラ語（日本語・英語字幕）

2013 『春駒——群馬県川場村門前地区のまつり』 Hi-Vision、40分、日本語

2013 『ザフィマニリストイル』 Hi-Vision、35分、マダガスカル語（日本語字幕）

[映画公開]

2013年3月9日 『春駒——群馬県川場村門前地区のまつり』（Hi-Vision、40分、日本語）、第35回日本映像民俗学の会大会、福島県立博物館

・広報・社会連携活動

2013年3月1日 テレビ出演「アフリカの音楽（3）」『スコラ——坂本龍一 音楽の学校』NHK Eテレ

2013年3月8日 テレビ出演「アフリカの音楽（4）」『スコラ——坂本龍一 音楽の学校』NHK Eテレ

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年1月7日 “The Azmari Performance During Zar Ceremonies in Northern Gondar” First International Conference on Azmari, Centre for World Music, Hildesheim University.

◎調査活動

・海外調査

2012年5月7日～16日—ドイツ（第11回ゲッティンゲン国際民族誌映画祭において審査員として参加）

2012年8月25日～9月11日—マダガスカル（特別展「マダガスカル 霧の森の暮らし」に関わる映像取材）

2012年10月13日～11月23日—ドイツ、エチオピア（エチオピア北部の音楽職能に関する調査と資料収集）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

第11回ゲッティンゲン国際民族誌映画祭審査員

・非常勤講師

ベルリン自由大学メディア・映像人類学修士課程（集中講義）

国際学術交流室

西尾哲夫 [にしお てつお]————— 室長 兼：副館長（研究・国際交流担当）、研究戦略センター

印東道子 [いんとう みちこ]————— 兼：民族社会研究部教授

菊澤律子 [きくさわ りつこ]————— 兼：民族文化研究部准教授

陳 天璽 [チェン ティエンシ]————— 兼：民族社会研究部教授

信田敏宏 [のぶた としひろ]————— 兼：民族文化研究部准教授

MATTHEWS, Peter Joseph [マシウス、ピーター・ジョセフ]————— 兼：民族社会研究部准教授

山中由里子 [やまなか ゆりこ]————— 兼：民族文化研究部准教授

機関研究員

相島葉月 [あいしま はつき] 研究員

1977年生。【学歴】上智大学比較文化学部卒（2000）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫性博士課程修士号取得退学（2002）、オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科修士課程修了（2005）、オクスフォード大学大学院東洋学研究科博士課程修了（2011）【職歴】有限会社美誠社（2002）、現代東洋学研究所客員研究員（2009）、現代東洋学研究所研究員及びベルリン自由大学ムスリム文化・社会研究科ポストドク研究員（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、マンチェスター大学人文学部中東研究学科講師（2012）【学位】博士（東洋学）（オクスフォード大学大学院東洋学研究科・セントアントニーズカレッジ 2011）、科学修士（社会人類学）（オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科・グリーンカレッジ 2005）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2002）【専攻・専門】社会人類学、イスラーム学、中東研究【所属学会】日本中東学会、北米中東学会、アメリカ人類学会、英国中東学会

【主要業績】

[論文]

Aishima, H.

2013 “Nicht nur Not Just for Fun”: Sport und Gesellschaftsschicht im neoliberalen Ägypten. In T. G. Schneiders (trans. and ed.) *Die Araber im 21. Jahrhundert: Politik, Gesellschaft, Kultur*, pp. 353-364. Wiesbaden: Springer VS.

2012 Contesting Public Images of ‘Abd al - Halim Mahmud (1910-78): Who is an Authentic Scholar? In P. Pinto et al. (eds.) *Ethnographies of Islam: Ritual Performances and Everyday Practices*, pp. 170-178. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Aishima, H. and A. Salvatore

2010 Doubt, Faith and Knowledge: The Reconfiguration of the Intellectual Field in Post-Nasserist Cairo. In F. Osella and B. Soares (eds.) *Islam, Politics, Anthropology*, pp. 39-53. London: Wiley-Blackwell.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代エジプトの空手家コミュニティに関する社会人類学的研究

・研究の目的

本研究の目的は、エジプトを代表する大衆的スポーツである空手家コミュニティ（競技者、指導者、父兄）の事例より、中流層的な倫理観とモダニティの関係性を再考することにある。中東におけるモダニティの系譜を探究するに際し、「社会階層」は最も有用な切り口の1つである。近年、新自由主義経済の広がりにより、学歴や所得で中流層と下流層を差異化することがより困難になる中、「教養」の有無を指標とする新たな「階層観」が構築されつつある。この文脈において本研究は、エジプトのスポーツ実践に象徴された「身体化された教養」をめぐるポリティクスを、西洋的近代性に代わる、独自のモダニティを創出する試みとして考察する。

・成果

今年度の目標は、エジプトで空手道が「大衆的スポーツ」として受容された歴史的経緯の把握し、空手家コミュニティの形成と発展の過程を考察することであった。国営日刊紙アル＝アハラーム新聞で空手を紹介する記事が初めて掲載されたのが1972年3月に遡ることから、1960年代後半もしくは1970年代初頭から空手の稽古が行われてきたのではないかと仮説のもとに調査を始めた。

60歳代のエジプト人空手家への聞き取り調査を行った結果、1969年頃より上流階級向けの会員制スポーツクラブにて日本大使館職員による空手道の稽古が細々と行われていたことが判明した。エジプトはボクシングやレスリングなどの格闘技が盛んな国とはいえ、カラテの知名度は低く、稽古は体育館や道場ではなく屋外で行われていた。しかし、1971年にブルース・リー主演のカンフー映画『ビッグ・ボス』が大流行したのをきっかけに、自己防衛を目的としたスポーツとしてカラテ人気が一気に高まったという。1967年の第三次中東戦争でイスラエルに大敗を期して以来、軍事力の向上のため取り入れられた空手道が「大衆的スポーツ」として認識されるようになった背景には、中国拳法などの格闘シーンを取り入れた香港のアクション映画の流行が深く関

わっていたようだ。カンフー映画を鑑賞した上で空手を始めたとはいえ、「東洋」をひとくりにし、日本と中国の格闘技を混同していた様子は見られなかった。カンフー映画の流行が空手の普及に貢献した過程については今後の調査で明らかにしたい。

また、エジプト・オリンピック委員会の資料室で収集した文献より、空手の大衆化には政府の青少年教育政策も関わっていたことを裏付ける資料も見つかった。カンフー映画の流行により空手の知名度が向上したとはいえ、空手道の競技者は軍人か高級スポーツクラブの会員である富裕層に限られていた。しかし、1980年代以降に空手が青年及びスポーツ省の推奨スポーツに指定され、公営の文化施設で空手教室が開かれたことが大衆化につながったと言える。エジプトの学校教育についての先行研究は多数存在するものの、福祉政策の一環としてのスポーツ教育についての研究は皆無である。今後はエジプト政府が青少年教育や福祉政策の一環として空手道にどのような期待を持ち普及させたかを考察していきたい。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月27日 “Between ‘Public’ Islam and ‘Private’ Sufism: Producing a National Icon through Mass Mediated Hagiography.” 現代中東イスラーム世界・フィールド研究会、京都大学。

2013年3月7～8日 “Round Table.” Religion, Secularity, and the Public Sphere in East and Southeast Asia. アジア研究所、シンガポール国立大学。

◎調査活動

・海外調査

2013年3月25日～4月11日—エジプト（首都カイロの空手家コミュニティについての臨地調査および資料収集）

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

英国イスラーム研究学会（BRAIS）諮問委員

岩谷洋史 [いわたに ひろふみ] ————— 研究員

1970年生。【学歴】鳥取大学教育学部総合科学課程卒（1995）、京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程修了（1999）、京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程単位取得満期退学（2005）【職歴】神戸学院大学地域研究センターポストドクトラルフェロー（2005）、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2008）、国立民族学博物館文化資源研究センター（2010）【学位】修士（京都大学 1999）【専攻・専門】文化人類学、認識人類学、メディア論【所属学会】日本文化人類学会、日本民俗学会、日本記号学会、日本認知科学会

【主要業績】

[論文]

岩谷洋史

2008 「仕事場における資源としてのインスクリプションの役割——酒蔵を事例として」『ソシオロジ』53(1): 55-72。

岩谷洋史・川村清志・星野次郎・大崎雅一・森下淳也

2008 「人類学研究支援環境DWBを用いた調査資料の再構成——多様な人類学的視点を内包するシステム構築」情報処理学会編『サービス指向のデジタル技術へ——人文科学のポテンシャル 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』（情報処理学会シンポジウムシリーズ）15: 129-136。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

人類学的調査資料のデジタルアーカイブ化に関する研究

・研究の目的

本研究の目的は、コンピュータなどのデジタルメディアを利用した人類学的な研究方法のあり方を模索し、主に調査によって収集された資料のデジタルアーカイブ化に関して考察することである。大学教育教材や文化資源として利用など社会的な還元を射程に入れた上で、収集された調査資料を映像民族誌として、あるいはデータベースとして、デジタルアーカイブ化していく方法を研究すると同時に、専門家でない一般の人においても

手軽に映像などを作成できることを前提に、コンテンツの作成や編集に関する手法や作成に際しての技術的な諸問題の検討を行う。簡素で効果的な作成プロセスを研究し、地域住民の手で地域文化を手軽に記録・編集・発信できるようなモデルを探究する。

・成果

人類学的な調査で収集された静止画像を用いて、ユーザ間で共有を目的とする双方向的なデータベースを構築し、試験的な運用を重ねた。

◎調査活動

・海外調査

2012年2月26日～3月12日—ウガンダ（ミエル・アグワラ儀礼にかかわる映像撮影・音声記録の情報収集）

加賀谷真梨 [かがや まり] ————— 研究員

1977年生。【学歴】お茶の水女子大学文教育学部卒（2001）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科発達社会科学専攻（博士前期課程）修了（2003）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較社会文化学専攻（博士後期課程）修了（2006）【職歴】放送大学非常勤講師（2005-現在）、法政大学非常勤講師（2006-2011）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科附属人間文化研究所研究院研究員（2006-2009）、札幌医科大学非常勤講師（2008-現在）、日本学術振興会特別研究員PD（2009-2011）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2012）【学位】博士（社会科学）（お茶の水女子大学 2006）【専攻・専門】文化人類学、民俗学南西諸島研究、ジェンダー研究【所属学会】日本文化人類学会、日本民俗学会、比較家族史学会、American Folklore Society

【主要業績】

[学位論文]

加賀谷真梨

2006 「小浜島と竹富島の生存戦略にみる女性の実践——沖縄におけるジェンダー関係の再検討」お茶の水女子大学。

[論文]

加賀谷真梨

2011 「『新しい公共』という概念への批判的一考察——沖縄の高齢者福祉の現場に見られる人々の〈間〉に着目して」『九州人類学会報』38: 63-70。

2005 「沖縄県・小浜島における生涯教育システムとしての年中行事」『日本民俗学』242: 35-63。

【受賞歴】

2006 第26回日本民俗学会研究奨励賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) 沖縄の離島社会における高齢者ケアを通じた〈共同体〉の再生に関する研究
- 2) 離島の子どもの身体観・健康観・医療観に関する研究

・研究の目的

- 1) 2000年の介護保険法施行に伴い、沖縄の離島社会に内発的に形成された高齢者にケアを提供する住民団体とその活動が家族介護を代替する可能性、及び、その活動を軸に地域社会が《共同体（親密さや紐帯をもたらす感情や身体経験が産み出される場）》として刷新する可能性を検証する。
- 2) 「離島医療離れ」が生じている離島社会における子どもの身体観・健康観・医療観と親世代のそれとの比較を通じて、その連続性／不連続性とそうした現象が生じる要因、及び、「離島医療離れ」が子どもの身体と健康にもたらしている現象を明らかにする。

・成果

- 1) 2012年度は、高齢者福祉の推進を目的に結成された住民団体を擁する沖縄のある離島に関して、既に入手していたデータを整理分析した。高齢化率が30%を超えるこの離島において、介護予防事業を担う同活動の重要性は多くの島民に認識されている。にも関わらず、管見の限り、同団体の活動は島民全体が与するような

大きなうねりには至っていない。この背景として、〈イエ〉規範、〈近代家族〉規範、個人主義等、価値観や規範の輻輳の状況が島民を分化させたままに止め置いていることを具体的な事例から明らかにした。他方で、積極的に高齢者ケアに携わっている同団体の職員に目を転じると、彼らは伝統的な司祭者の家筋の者か本土出身者のいずれかに二分できる。前者の理由として、島民の生活の安定に深く関与してきた彼らの属性がケアの授受関係と合致し、またそうした役割期待をケアの実践過程で再帰的に強化していることを挙げた。後者は、福祉という旧来的な島の社会構造と分離した実践だからこそ、そうした構造に組み入れられていない本土出身者が参画しやすいためだと分析した。この住民団体のように、新たな共同性を創出し継続させていくには、理念だけでは不十分であり、旧来的な社会構造やそれに付随する役職が暗に陽に牽引要因になっていることを国立民族学博物館第246回研究懇談会で発表した。この成果については目下執筆中であるが、共同性の立ち現れ方に関する考察の一端を第46回文化人類学会研究大会で発表し、その発表内容を東京大学東洋文化研究所の雑誌『東洋文化』に寄稿した。

- 2) 2012年度は、沖縄・八重山諸島のある離島で3度に亘りフィールドワークを行った。調査協力を得た親と子それぞれに行ったインタビュー調査から、子どもの身体観・健康観・医療観が、小学校での教育指導の影響よりも、親の世界観に大きな影響を受けていることが明らかになった。沖縄の離島には当該社会を自然の宝庫としてまなざすと同時に、管理社会への批判的意識を持つ本土出身の母親が少なくない。そうした意識が強い親の子どもの方が、より自分の身体や動物の生命に対して自然主義的観念を持つことが明らかになった。また、小学校での参与観察から、幼少期から少人数で長く付き合っている環境が、肥満や痩せといった身体的特徴やジェンダー規範を形骸化させている一方で、そうした環境下にあっても子ども同士の差異の有徴化は行われていることが明らかになった。この研究成果については、2013年度中に論文にまとめ寄稿する予定である。

◎出版物による業績

[論文]

加賀谷真梨

2012 「プロセスとしての〈共同体〉——沖縄・波照間島の『戦争マラリア』をめぐる語りを事例に」『東洋文化』93: 79-97。

[その他]

加賀谷真梨

2012 「『なんくるないさ〜』とはいかない沖縄離島の高齢者福祉」『月刊みんぱく』36(10): 22-23。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2013年1月27日 「人類学でいじめを読む」『現代の保健・医療・福祉の現場における「子どものいのち」』

・みんぱく研究懇談会

2013年1月23日 「〈地域共同体〉の再定位に挑む——沖縄離島社会における高齢者福祉の展開に着目して」第246回みんぱく研究懇談会

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月23日 「『戦争マラリア』の記憶に見透かせる〈共同性〉と〈絶対矛盾的自己同一〉」日本文化人類学会第46回年会、広島大学

・広報・社会連携活動

2012年8月12日 「沖縄の離島社会における高齢者福祉」第265回みんぱくウィークエンド・サロン
2012年6月16日 神奈川県民間支援団体等スタッフ研修事業 講師

◎調査活動

・国内調査

2012年5月7日～5月13日—沖縄県竹富町（離島の子ども身体観・健康観・医療観に関する調査）

2012年8月24日～9月1日—沖縄県竹富町（小浜島の盆行事及び親族構成に関する調査）

2012年11月11日～20日—沖縄県竹富町（離島の子ども身体観・健康観・医療観に関する調査）

2013年3月6日～17日—沖縄県竹富町（離島の子ども身体観・健康観・医療観に関する調査）

2013年3月23日～29日—沖縄県竹富町（小浜島の婚姻習俗に関する研究）

・海外調査

2013年2月3日～18日—フランス（フランス国内の家族・親族研究の動向調査）

◎社会活動・館外活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
法政大学沖縄文化研究所研究員、科学研究費補助金（基盤研究（A））「沖縄近代法の構造とその歴史的 성격」（代表者：田里 修）研究協力者、科学研究費補助金（基盤研究（C））「離島の子どもの身体観・健康観・医療観と医療環境とのかかわりに関する人類学的研究」（代表者：道信良子）研究分担者
- ・他の機関から委嘱された委員など
比較家族史学会編『追補版 新修事典家族』（仮題）編集委員
- ・非常勤講師
お茶の水女子大学「地域文化論」、放送大学「家族の人類学」、札幌医科大学「21世紀問題群」

河合洋尚 [かわい ひろなお] ————— 研究員

1977年生。【学歴】関西学院大学社会学部卒業（2001）、東京都立大学大学院社会科学研究科（修士課程）修了（2003）、東京都立大学大学院社会科学研究科（博士課程）修了（2009）【職歴】嘉応大学客家研究院講師（2008）、中山大学社会学・人類学学院助理研究員（講師）（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 2009）【専攻・専門】社会人類学、都市人類学、漢族研究【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、日本華僑華人学会、中国広東民族学会

【主要業績】

[論文]

河合洋尚

- 2012 「広東省東江流域における客家文化の創造と景観建設」瀬川昌久・飯島典子編『客家の創生と再生——歴史と空間からの総合的検討』pp.135-166, 東京：風響社。
- 2010 「客家文化を再考する——エスニック空間の生産とその景観化の視点から」『贛南師範学院学報』（中国江西省贛南師範学院編集部）31(2): 3-9（中国語）。

Kawai, H.

- 2011 The Making of the Hakka Culture: The Social Production of Space and Landscape in Global Era. *Asian Culture* (Singapore Society of Asian Studies) 35: 50-68.

【受賞歴】

2001 安田三郎賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) 中国漢族地域の都市景観形成にまつわる人類学的研究
- 2) 環南シナ海における客家の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌
- 3) 客家研究にまつわる先行研究の整理

・研究の目的

- 1) 日本では萌芽的な段階にある景観人類学を理論的に整理するとともに、その視点と手法をもって中国華南地方の漢族社会における景観形成を解読する。
- 2) 漢族のサブ・エスニック集団である客家に特に着目し、その国境を超えた文化的ネットワークを明らかにする。華南地方の客家に対する理解を深めるとともに、中国西南地方および東南アジアの華人社会における客家とのつながりを考察する。
- 3) 国際的な対話に欠ける客家研究の現状を脱するべく、とりわけ日本やアメリカで蓄積された客家の人類学的研究を再読し、それを中国客家学に紹介する。

・成果

- 1) 景観人類学的手法から、華南客家社会における空間／景観の形成過程について明らかにした。その結果、客家というエスニシティは、自然発展的なものではなく、市場経済化政策採択以降の空間政策と関連した、空

間の生産の産物であることを明らかにした。この研究成果は、国外の雑誌だけでなく、『国立民族学博物館研究報告』でも整理した。

- 2) フィールドワークおよび文献調査を通し、中国広東省、広西チワン族自治区、四川省の客家についての研究を継続させた。また、東南アジアの客家をめぐるフィールドワークも促進させた。空間的ネットワークから客家を捉える視点は、国際シンポジウムおよび日本の学会にて発表した。
- 3) 国内外の客家研究の動向を学会誌にて発表した。他方、日本の客家研究について1冊の本にまとめる機会を得ることができ、原稿を出版社に提出した。目下、出版待ちである。

◎出版物による業績

[論文]

河合洋尚

- 2012 「囲龍屋の多角的分析に向けて——広東省河源市の伝統民居をめぐる一考察」房 学嘉・鄔 観林・冷 剣波・宋 徳剣編『客家河源』pp. 344-352, 広州: 華南理工大学出版社 (中国語)。
- 2012 「『民系』から『族群』へ——1990年代以降の客家研究におけるパラダイム転換」『華僑華人研究』(日本華僑華人学会) 9: 138-148。
- 2012 「囲龍屋の伝統的知識とその重層性について——景観人類学のアプローチによる客家建築文化研究の再考」『嘉応学院学報』(中国嘉応大学) 153: 5-11 (中国語)。
- 2012 「客家地区における風水とその動態性——景観人類学のアプローチから」『客家研究輯刊』(中国嘉応大学客家研究所) 40: 14-22 (中国語)。
- 2012 「広西省玉林市における客家意識と客家文化——土着住民と帰国華僑を対象とする予備的考察」『客家と多元文化』(亜州文化総合研究所出版会) 9: 28-47。
- 2012 「風水範疇の可変性について——客家囲龍屋をめぐる景観人類学的考察」『アリーナ』(中部大学国際人間学研究所) 14: 159-168。
- 2013 「空間概念としての客家——『客家の故郷』建設活動をめぐって」『国立民族学博物館研究報告』(国立民族学博物館) 37(2): 199-244。
- 2013 「中国客家地域における『霊性』と宗教景観の再生」『唯物論研究』(唯物論研究会) 122: 110-120。
- 2013 「中国客家地域におけるインドネシア帰国移民の再統合」伊藤 眞編『東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究』2010~2012年度科学研究費補助金(基盤研究(B))報告書(課題番号22320175) pp. 89-105。

Kawai, H

- 2012 Creating Multiculturalism among the Han Chinese: Production of Cultural Landscape in Urban Guangzhou. *Asia Pacific World* 3(1): 39-56.

[その他]

河合洋尚

- 2012 「World Watching from South China 変わりゆく清明の節句の墓参り」『みんぱく e-news』130 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/130>)。
- 2012 「覚醒する自己——四川省郊外の客家意識」『月刊みんぱく』36(9): 22-23。
- 2013 「瀬川昌久編『近現代中国における民族認識の人類学』」『中国21』(愛知大学現代中国学会) 38: 227-232。
- 2013 「景観人類学の新たな可能性を探る」『民博通信』140: 28-29。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2012年11月3日 「客家都市の建設——梅州市における華僑ネットワークと景観創造」国際フォーラム『漢族社会におけるヒト、文化、空間の移動——人類学的アプローチ』国立民族学博物館
- 2012年11月25日 「エスニック・ディスコースと社会空間——広西と四川における客家空間の生産」国立民族学博物館機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」第1回国際シンポジウム「中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究」国立民族学博物館

・共同研究会

- 2012年10月14日 「景観人類学の理論と射程」『ランドスケープの人類学——視覚化と身体化の視点から』

・みんぱく研究懇談会

- 2012年9月26日 「中国人類学における漢族研究の動向」第242回みんぱく研究懇談会

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月22日 「趣旨説明」、「『客家らしい』景観の創造と再解釈——広東省梅州市の都市部の事例より」日本文化人類学会東アジア公共人類学懇談会・東アジア人類学研究会共催シンポジウム『文化のフロー——東／東南アジアにおける言説・モノの流動と摩擦』早稲田大学

2012年11月10日 「客家ディスコースと文化産業——梅州、玉林、成都を例として」2012年中台湾客家文化學術研討会（台中市政府客家事務委員会・橋光科技大学主催）、東勢高級工業職業学校（中国語）

2013年3月10日 「趣旨説明——公共人類学について」日本文化人類学会東アジア公共人類学懇談会・東アジア人類学研究会・仙人の会共催シンポジウム『公共人類学と東アジア——日本での経験から』法政大学

- ・広報・社会連携活動

2013年3月3日 「客家建築の世界」第290回みんなくウィークエンドサロン

- ◎調査活動

- ・海外調査

2012年6月27日～7月7日—シンガポール、マレーシア（東南アジアにおける漢族研究の動向調査）

2012年8月7日～21日—マレーシア（マレーシア・サバ州における華人の移動と適応に関する社会人類学的研究調査）

2012年12月18日～21日—中華人民共和国（中国教育部青年科学研究費プロジェクト成果報告会参加）

2013年1月10日～20日—中華人民共和国（広東省の客家華僑文化に関する調査）

2013年2月4日～18日—オーストラリア、フィジー（オセアニアにおける華僑華人研究の動向調査）

- ◎社会活動・館外活動

- ・非常勤講師

流通科学大学「民族文化誌」

呉屋淳子 [ごや じゅんこ] ————— 研究員

1978年生。【学歴】沖縄国際大学法学部卒（2001）、ソウル大学大学院人類学科修士課程修了（2007）、名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻博士後期課程単位取得退学（2012）【職歴】ソウル大学大学院人類学科ティーチングアシスタント（2005）、日本学術振興会特別研究員（DC2）（2010）、国立民族学博物館文化資源研究センター機関研究員（2012）【学位】修士（人類学）（ソウル大学大学院 2007）【専攻・専門】教育人類学【所属学会】日本文化人類学会、韓国教育人類学会、日本比較教育学会

【主要業績】

[論文]

呉屋淳子

2011 「学校教育における郷土芸能の実践様相と教師の役割——沖縄八重山諸島の事例を中心に」韓国教育人類学会編『教育人類学研究』14(2): 184-208。

2007 「音楽をやる（musicking）」を通して見る国楽教育——小学校音楽教科時間を中心に」韓国教育人類学会編『教育人類学研究』10(2): 171-195。

Goya, J.

2011 “Tanedori” of Taketomi Island: Education of Performing Arts and Interrogational Transmission. *International Journal of Intangible Heritage* 6: 86-94.

【2012年度の活動報告】

- ◎各個研究

- ・研究課題

現代沖縄の高等教育機関における伝統芸能の継承と創生に関する研究

- ・研究の目的

本研究は、高等教育機関に設けられた伝統芸能の教授形態に注目し、伝統芸能が創生されるメカニズムを明らかにすることを目的とする。現代沖縄の若手芸能実演家たちは、徒弟制の中で芸能を身につけることに加え、高等教育機関でも琉球芸能を修練し、実践的活動を展開している。こうした新しい教授基盤の登場は、従来に

はなかった「流派」を越えた美意識とパフォーマンスを身につけた新しい琉球芸能の担い手を創出し、琉球芸能の発展と創造に繋がっている。そこで、若手芸能実演家からの聞き取り、高等教育機関で目指される〈教授システム〉、行政文書の分析から 1) 高等教育機関で「琉球芸能」が創生される様相、2) 「伝統」と「創造」のはざままで揺れ動く彼らの琉球芸能の継承をめぐる取り組みと実践の再帰的關係を考察する。これらを通して、公的な教育機関で伝統芸能を「教育する」という行為が与える影響を明らかにする。

・成果

- 1) 沖縄県の高等教育機関に設けられた伝統芸能コースで教授を受けた若手実演家を対象に、2012年10月から2013年2月までインタビュー調査を行い、彼らのライフストーリーの収集・分析を行った。その結果、二重的な教授過程に見られる両者の関係（高等教育機関と従来の徒弟制のなかでの教授）が明らかになった。
- 2) 2013年1月に国立歴史民俗博物館で行われた『平成22年度共同研究：人の移動とその動態に関する民俗学的研究』において琉球芸能の流派をめぐる教授の実態に着目して明らかにした研究を発表した。また、この成果については、2013年度中に『国立歴史民俗博物館研究報告』で成果論集を出版予定である。
- 3) 若手芸能実演家のライフストーリーをもとに、二重的な教授過程に見られる両者の関係（高等教育機関と従来の徒弟制のなかでの教授）に着目し明らかにした研究は、2013年4月に米国・サンディエゴで開催される“2013 Biennial Meeting of the Society for Psychological Anthropology”において発表予定（2013年4月5日）である。

◎出版物による業績

[その他]

呉屋淳子

2013 「わたしの芸能三番口説（くどうち）」『月刊みんぱく』37(1): 22-23。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年7月15日 「学校教育における伝統芸能の技の継承と『流派』——八重山の高等学校を事例に」沖縄文化協会2012年度公開発表会、沖縄国際大学
- 2013年1月26日 「人の移動の八重山芸能の誕生」『平成22年度共同研究：人の移動とその動態に関する民俗学的研究』国立歴史民俗博物館
- 2013年1月30日 「学校教育のなかの伝統芸能——沖縄県八重山諸島の事例から」『2013年国際学術大会・日本の文化と芸能』中央大学（韓国）

・広報・社会連携活動

- 2012年度学習キット「みんぱく ソウルの子ども時間」制作担当
- 2012年7月1日 「音楽の祭日2012 in みんぱく」プロジェクトメンバー、国立民族学博物館
- 2012年8月7日 「仮面をつくって語って異文化理解」プロジェクトメンバー、博学連携教員研修ワークショップ2012 in みんぱく『学校と博物館でつくる国際理解教育——新しい学びをデザインする』国立民族学博物館
- 2013年3月17日 「学校の中の八重山芸能」第291回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

この部分は電子媒体による公開の許諾が得られていません

・海外調査

- 2012年5月7日～9日—大韓民国（海外コリアン研究のための資料収集）
- 2012年6月14日～20日—大韓民国（みんぱく韓国版制作のための調査）

- 2012年9月3日～16日—大韓民国（みんぱっく制作および共同研究）
 2012年10月4日～8日—大韓民国（海外の高等教育機関における琉球芸能の教育実践に関する現地調査）
 2012年11月7日～11日—大韓民国（韓国総合芸術大学における琉球芸能の教育に関する聞き取り調査）
 2012年12月6日～10日—大韓民国（韓国総合芸術大学における琉球芸能の教育に関する聞き取り調査）
 2013年1月28日～30日—大韓民国（中央大学日本研究所2013年国際学術大会参加）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
- 科学研究費補助金（研究活動スタート支援）「現代沖縄の高等教育機関における琉球芸能の継承と創生に関する研究」研究代表者

松本雄一 [まつもと ゆういち] ————— 研究員

1976年生。【学歴】東京大学文学部歴史文化学科卒（1999）、東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻修士課程修了（2001）、東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻博士課程単位取得退学（2006）、イェール大学大学院人類学部修士課程修了（2007）、イェール大学大学院人類学部博士課程修了（2010）【職歴】イェール大学人類学部教授付アシスタント（2010）、南山大学人類学研究所非常勤研究員（2011）、東京医科歯科大学教養部非常勤講師（2011）、埼玉大学教養学部非常勤講師（2011）、ハーバード大学附属ダンバートンオークス研究所研究員（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2012）【学位】Ph. D. (Anthropology)（イェール大学大学院人類学部 2010）、M. Phil. (Anthropology)（イェール大学大学院人類学部 2007）、修士（考古学）（東京大学大学院 2001）【専攻・専門】アンデスの考古学及び人類学、特にアンデス文明の初期形成過程の研究【所属学会】古代アメリカ学会、Society for American Archaeology

【主要業績】

[博士論文]

Matsumoto, Y.

- 2010 The Prehistoric Ceremonial Center of Campanayuc Rumi: Interregional Interactions in The Peruvian South-central Highlands. Ph. D Dissertation, Department of Anthropology, Yale University.

[論文]

松本雄一

- 2013 「神殿における儀礼と廃棄——中央アンデス形成期の事例から」『年報人類学研究』3: 1-4。

Matsumoto, Y.

- 2012 Recognizing Ritual: The Case of Campanayuc Rumi. *Antiquity* 86: 746-759.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

周縁から見たアンデス文明の形成過程

・研究の目的

従来の研究で、“周縁”社会とされて重視されていなかった社会の考古学的研究からアンデス文明の形成過程を問い直す。

・成果

2007年から2008年にペルー中央高地で行った考古学調査の成果を元に論文を執筆し、英文・和文計4本が査読誌に掲載された（下記業績参照）。

◎出版物による業績

[論文]

松本雄一

- 2013 「神殿における儀礼と廃棄——中央アンデス形成期の事例から」『年報人類学研究』3: 1-41。

Matsumoto, Y.

- 2012 Recognizing Ritual: The Case of Campanayuc Rumi. *Antiquity* 86: 746-759.

Matsumoto, Y. and Y. C. Palomino

2012 Early Horizon Gold Metallurgy from Campanayuq Rumi in The Peruvian South-central Highlands. *Ñawpa Pacha: Journal of Andean Archaeology* 32(1): 115-130.

Matsumoto, Y., J. Nesbitt, and D. Paracios

2012 Mitomarca: a possible fortification in the Upper Huallaga Basin. *Andean Past* 10: 272-277.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年1月27日 「遠隔地交流と複雑社会の形成——アンデス中央高地の事例から」 民ぱく公開フォーラム 『古代文明の生成過程——マヤとアンデスの比較』 キャンパス・イノベーションセンター東京

・民ぱく研究懇談会

2013年2月27日 「“周縁”社会における文明の初期形成——アンデス形成期の事例から」 第247回民ぱく研究懇談会

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月19日 ‘Al sur de Chavín: interacción interregional entre la sierra central y la costa sur del Perú durante el Periodo Formativo.’ Symposium “La complejidad social del periodo Formativo en los Andes Centrales” at 54th International Congress of Americanists, University of Vienna, Austria.

2012年12月1日 「ペルー、カンパナユック・ルミ遺跡における神殿の再利用に関する考察」(ユリ・カベロ・パロミーノ、エディソン・メンドーサと合同報告) 古代アメリカ学会第17回研究大会、国立民族学博物館

・研究講演

2012年9月15日 「考古学理論とアンデス形成期研究」アンデス文明研究会定例講座。

・広報・社会連携活動

2013年1月20日 「アンデスの神殿とその魅力」第284回民ぱくウィークエンドサロン

◎調査活動

・海外調査

2012年6月27日～7月7日—シンガポール、マレーシア（研究戦略センター研究動向調査）

2012年7月14日～22日—オーストリア（第54回国際アメリカニスト会議参加）

2012年8月7日～21日—マレーシア（科学研究費補助金調査）

2013年1月10日～20日—中国（中国広東省科学研究費補助金調査）

2013年2月4日～18日—オーストラリア、フィジー（研究戦略センター研究動向調査）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

愛知県立大学（特殊講義）

吉田ゆか子 [よしだ ゆかこ] ————— 研究員

1976年生。【学歴】国際基督教大学教養学部卒（2000）、筑波大学地域研究研究科東南アジアコース（修士課程）修了（2002）筑波大学人文社会科学研究科現代文化・公共政策専攻（博士課程）修了（2012）【職歴】株式会社インテージ マーケティング事業部（2002-2004）、日本学術振興会 特別研究員（DC2）（2009-2010）、筑波大学人文社会系博士特別研究員（2012）、国立民族学博物館 研究戦略センター研究部機関研究員（2012）【学位】博士（学術）（筑波大学 2012）、修士（地域研究）（筑波大学 2002）【専攻・専門】文化人類学 インドネシア（バリ）地域研究 芸能研究【所属学会】日本文化人類学会、東方学会、「宗教と社会」学会

【主要業績】

[論文]

吉田ゆか子

2011 「仮の面と仮の胴——バリ島仮面舞踊劇にみる人とモノのアッサンブラージュ」『文化人類学』76(1): 11-32。

2011 「仮面が芸能を育む——バリ島トベン舞踊劇に注目して」床呂郁哉・河合香吏編『ものの人類学』pp. 191-

210, 京都: 京都大学学術出版会。

2009 「バリ島仮面舞踊劇トベン・ワリと『観客』——シアターと儀礼の狭間で」『東方学』117: 156-139。

【受賞歴】

- 2011 みんなく若手セミナー賞
- 2009 東方学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) バリ島仮面舞踊劇トベンの人類学的研究
- 2) バリ島天女の舞におけるレプリカの仮面の利用に関する研究
- 3) 観光ショーにおける仮面の利用に関する研究

・研究の目的

- 1) 儀礼の一部でありかつ人々を楽しませる芸能でもある仮面舞踊劇トベン・ワリ。仮面を取り換えながら巧みに役を演じ分ける演者の名人芸としてとらえられてきたこの演目を、非演者中心的な視点から再考する。上演を生み出す主体は社会か演者個人かと問うのではなく、仮面や伴奏曲や観客の反応に身をゆだねながら、「自分ではない何者か」になろうとする演者の受動性や、仮面のエージェンシーや、仮面が媒介する他の人々と神格の働き、仮面を与えたり助言や批評をくわえたりして演者を育てる周囲の人々に着目しながら、人・モノ・神格の動的な複合体としてのトベン・ワリの姿を解明する。
- 2) ケテウェル村の仮面舞踊「天女の舞 (*topeng legong*)」は長い歴史と際立った神聖性においてバリ社会で特別な価値を置かれている奉納芸であり、そこに使われる一連の仮面はご神体としてパヨガン・アグン寺院にて祀られている。この演目は芸術祭などの世俗のイベントに招かれることがあるが、仮面の神聖性を守るため、寺院はレプリカの仮面を作成しそちらで代用している。本研究は、このレプリカの仮面の位置づけがしばしば曖昧であり、かつオリジナルとの境界をかく乱するような側面を有していることに着目する。そして、このレプリカの仮面が天女の舞の実践や地元共同体にどのような影響をもたらしているのかを明らかにし、レプリカや類似品の制作や利用といった営みが有している豊かな可能性について考える。
- 3) バリの村落ではバロンの仮面がご神体として祀られている。バリでは、観光芸能ショーなど世俗の上演にはこれらご神体ではなく、神聖でない仮面を用いることが法令で定められている。しかし実際には、この観光用の仮面が、次第に神聖性を帯びたり、儀礼で地元のご神体の仮面と共演したりというケースがある。本研究は、観光ショー用に生み出された仮面が引き起こす様々な出来事や、人々と仮面の関わり合いを分析し、これまで人間中心的に論じられてきた観光化という現象をモノ（仮面）の側からとらえなおす。

・成果

- 1) 本年度は特に、トベン演者が70年代と比較して非常に増加している現象に焦点をあてた。近年の宗教儀礼の活性化による上演頻度の上昇、学校教育機関における育成や印刷メディアの発達による知識の流通など学習チャネルの多様化がこの現象の背景にあることがあきらかになった。またその中で、村の外からやってくる専門家によって担われていたトベンは現在観客にとっての身近な隣人によって上演されることが多く、そのなかで演者と観客の関係も変化しつつあるということが理解された。この分析結果は6月に「宗教と社会」学会で発表した。また前年度までの研究成果を合わせ、博士論文を筑波大学に提出し、日本人類学会の近畿地区懇談会で口頭発表をおこなった。
- 2) 1年半に一度巡ってくるパヨガン・アグン寺院の大祭を調査し、この儀礼においてオリジナルとレプリカの仮面がそれぞれどのように扱われ、どのように使い分けられているのか、仮面を取り巻く人々の振る舞いを比較した。またレプリカが作られた時代の踊り子たちから、当時の様子についてインタビューした。さらに、天女の舞を収録したテレビ番組やDVD、ネット上の動画を収集・分析した。前年度までの研究成果を合わせ、『国立民族学博物館研究報告』に投稿すべく執筆を開始した。
- 3) 現在活動中あるいは過去に活動していた7つのバロン・ダンス観光ショーの上演劇団に対してインタビューをおこない、設立の経緯や、仮面の入手、手入れ、活動履歴や現在の活動状況等を明らかにした。また、それらのうちのいくつかの劇団の地元で祀るご神体のバロンの履歴や儀礼実践に関する観察および情報収集をおこなった。調査の中で、ご神体のバロンと、観光ショー用のバロンのほかに、門付け芸 (*lawang*) に用いられる数々のバロンがあること、それらのバロンも、観光ショーの仮面と類似して、非神聖なものとして

生み出されながら、次第にご神体になってゆく事例が数多いことも明らかになった。この調査の結果を踏まえ、より対象劇団をしばり、観光ショーや儀礼実践のほか門付け芸も視野に入れた形での重点的な次回の調査を計画中である。

◎出版物による業績

[博士論文]

吉田ゆか子

2012 『バリ島仮面舞踊劇トベンの人類学的研究——名人芸からネクサスへ』筑波大学大学院人文社会科学研究科。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月18日 「バリ島仮面舞踊劇トベンの演者増加とその背景——1970年代との比較から」『宗教と社会学会第20回学術大会、長崎国際大学

2013年3月30日 「バリ島仮面舞踊劇トベンの人類学的研究——名人芸からネクサスへ」日本文化人類学会近畿地区研究懇談会 2012年度博士論文・修士論文発表会、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2013年2月2日 「バリ島の仮面文化——トペン舞踊劇を中心に」レクチャーと仮面舞踊デモンストラーション、ガネシャ&ヘリテイジOB会、ジュンバタンメラ赤坂（東京）

◎調査活動

・海外調査

2012年6月18日～7月7日—インドネシア共和国（バリ島天女の舞におけるレプリカの仮面に関する調査）

2013年2月25日～3月12日—インドネシア共和国（観光芸能ショー用の仮面に関する人類学的研究調査）

◎社会活動・館外活動

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

2012年7月～2013年6月 「観光芸能ショー用の仮面の人類学的研究——バリ島バロン・ダンスの事例から」平成24年度三島海雲記念財団学術研究奨励金（人文）

拠点研究員

■人間文化研究機構地域研究推進センター・「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点

宮本万里 [みやもと まり]——— 研究員

1977年生。【学歴】山口大学人文学部卒（2000）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫制博士課程研究指導認定退学（2006）【職歴】日本学術振興会特別研究員（PD）（2006）、京都大学東南アジア研究所研究員（2009）、北海道大学スラブ研究センター学術研究員（2009）、人間文化研究機構地域研究推進センター・現代インド地域研究国立民族学博物館拠点拠点研究員（2011）【学位】博士（地域研究）（京都大学 2009）、修士（地域研究）（京都大学 2006）、学士（文学）（山口大学 2000）【専攻・専門】南アジア地域研究、現代ブータン研究、政治人類学、国民形成と環境政治【所属学会】日本南アジア学会、日本文化人類学会、American Anthropological Association

【主要業績】

[単著]

宮本万里

2009 『自然保護をめぐる文化の政治——ブータン牧畜民の生活・信仰・環境政策』東京：風響社。

[論文]

宮本万里

2008 「森林放牧と牛の屠殺をめぐる文化の政治——現代ブータンの国立公園における環境政策と牧畜民」『南アジア研究』20: 77-99, 日本南アジア学会。

2007 「現代ブータンにおけるネイション形成——文化・環境政策からみた自画像のポリティクス」『人文学報』94: 77-100, 京都大学人文科学研究所。

【受賞歴】

2009 日本南アジア学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ブータンにおける環境主体の形成と村落の価値体系の再編に関する政治人類学的研究

・研究の目的

行政システムの精緻化に伴い様々な制度が急速に農村に入り込みつつある近年のブータンにおいて、人々が偏在する国家や制度をいかに引き受けようとしているのかを、特に環境保護にかかわる統治と主体化のプロセスに注目しながら考察する。

・成果

今年度は研究課題に関してブータンでの2度のフィールド調査および英国での1度の資料調査を行った。ブータン国立ウゲンワンチュック環境研究所との連携のもと、ブータンの村落社会における価値体系の変容を、開発と民主化そして森林資源の利用の変化を手掛かりに考察した。また、ブータンの民主化プロセスをより多面的に理解するために、ブータン国外で居住する人々への調査の可能性について、英国でブータン難民の第三国移住者の政治意識に関しての予備調査を実施した。

◎出版物による業績

[論文]

宮本万里

2012 「チャンからみたブータンの村落社会と国家」松本 淳・横山 智・荒木一視編『モンスーンアジアのフードと風土』pp.204-220, 東京: 明石書店。

2013 「現代ブータンの祭りと儀礼——顔のない踊り「テル・チャム」」細井尚子編『ユーラシアにおける仮頭の研究』pp.49-57, 東京: 立教大学アジア研究研究所。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム・研究集会などでの報告

2012年6月24日 「現代ブータンにおける制度と民主化をめぐる政治人類学的研究」日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学

2012年7月4日 「ブータン——『幸福社会』という国づくり」東洋大学国際哲学研究センター第3ユニット第2回研究会、東洋大学

2012年8月18日 「現代不丹の聖俗界线——查姆舞の参与者及其变迁」中国湖南临武侗文化国际学术研讨会、临武县临武国际大酒店一楼大厅

・みんぱく研究懇談会

2012年11月21日 「『環境にやさしい我々』という自画像および主体をめぐる文化の政治について——現代ブータンの国立公園の事例から」第244回みんぱく研究懇談会

◎調査活動

・海外調査

2012年8月26日～9月5日—ブータン（体制転換期ブータンにおける自然保護体制の変化と国立公園下の村落の社会変容に関する政治人類学的調査）

2013年2月11日～25日—イギリス（19世紀ヒマラヤ地域の社会と文化に関する資料収集および、英国移住者に関する資料収集と聞き取り調査）

2013年3月10日～26日—ブータン（自然国立公園における自然保護体制と人々の資源利用の変化に関する聞き取り調査および植物採集）

◎社会活動・館外活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進センター「現代インド地域研究」国立民族学拠点拠点研究員、北海道大学スラブ研究センターGCOEプログラム「境界研究の拠点形成」共同研究員、科学研究費補助金（若手研究（B））「ブータンにおける環境保護行政と村落社会の価値体系の再編に関する政治人類学的研究」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「コミュニティで支える高齢者ヘルスケア・デザ、イン——国際地域比較研究」

(研究代表者：松林公蔵) 研究分担者、科学研究費補助金(基盤研究(B))「体制転換期ネパールにおける「包摂」を巡る社会動態の展開に関する比較民族誌的研究」(研究代表者：名和克郎) 研究分担者、立教大学学術推進特別重点資金(SFR)「ユーラシアにおける反文化圏的な世界認知の研究——仮頭・仮面に注目して」(代表者：細井尚子) 研究分担者

・非常勤講師

大阪大学外国語学部「南アジア文化演習Ⅱ」、立命館大学国際関係学部「南アジア研究Ⅱ」、神戸大学国際文化学部「南アジア社会文化論」

客員教員

■先端人類科学研究部・文化動態研究部門

STIRK, Ian Christopher [スターク、イアン・クリストファー]——教授

1946年生。【学歴】ケンブリッジ大学卒(1967)、北ウェールズ大学教職専門課程修了(1969)、エセックス大学言語学部博士課程単位取得(1978)【職歴】アンカラ大学講師、トリポリ大学(リビア)講師、エセックス大学講師を経て大阪外国語大学外国人教師(1980)、国立民族学博物館併任助教授(1994)、国立民族学博物館先端人類科学研究部客員助教授(2004)【学位】M. A.(エセックス大学 1976)

【主要業績】

[論文]

Stirk, I. C.

2005 「Restoring the naturalness of deduction」『大阪外国語大学英米研究』29: 43-61。

2004 「Naturally ad absurdum」『大阪外国語大学英米研究』28: 99-109。

2003 「On the Welsh verb system」『大阪外国語大学英米研究』27: 19-32。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

対照言語学の研究

・研究の目的

自然言語の統語論的解析をすすめ、類推(analogy)にもとづく構文文法の成立過程を考察する

・成果

本年度は以下の覚書や論文を記した。これらはホームページ(<http://www.iancstirk.com/Language/>)にて参照することができる。

1) 個人言語について(Something from my idiolect? 2012年10月31日)

「編集された、～による導入(edited and with an introduction by …)」の表現についてのまとめを行った。非常に非文法的だが、私が出会ったすべてのネイティブスピーカーは、それを許容している。個人言語からなにか発見があるかは疑問である。

2) 類推の理論(A theory of analogies? 2012年11月5日)

類推は、基本的にかなり曖昧な概念であるので、ここで私は、言語学习上、私の仕事に採用する予定の類推の種類を規定することで、それを少し強化してみた。そのアイデアはやや独断的であるが、それらが許容可能な結果につながるように今後もそれを用い続けることにした。

3) ラテン語の別視点(Another look at Latin 2012年12月1日)

屈折言語として、ラテン語は、人間が母国語を学ぶ方法論として類推の非常に良い用例である。本論文では、実際に英語の意味とラテンの文章の集合を取り、その統語構造が類推することによって決定すること可能かどうかを実証することを試みた。

4) 単語の境界と類推(Word boundaries and analogy 2013年3月26日)

明らかに単語の境界は書き言葉において最も明白であるが、ネイティブスピーカーは話し言葉によっても、

自然に特定の単語の境界がある。ここでは、これらの境界も類推によって定めることができること、およびネイティブスピーカーの記憶に効率的に語彙を保存することを可能にすることを示そうとした。本論文では、再びサンプルを提供するために屈折言語であるラテン語を使用している。私は彼らがその言語でのネイティブスピーカーと同じ境界を作るかどうかを調査するために、今後、トルコの膠着語で同じ類推の方法を使用したいと考えている。

■先端人類科学研究部・応用民族学研究部門

山内直樹 [やまうち なおき]————— 教授

1947年生。【学歴】早稲田大学第二文学部卒業（1977）【職歴】山内編集事務所設立（1984）、季刊文化誌『is』編集長（1984）【所属学会】文化資源学会

【主要業績】

[共著]

山内直樹・辛島 昇・坂田貞二他
1981 『インド』東京：実業之日本社。

[編著]

山内直樹編
1998 『ぬっとあったものと、ぬっとあるもの』東京：ポラ文化研究所。

[論文]

山内直樹
1976 「中部インド・ビームベトカの岩壁画群Ⅰ～Ⅲ」『考古学ジャーナル』121, 124, 125。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

広報誌のあり方に関する研究

・研究の目的

みんぱくの広報誌は研究活動・博物館活動を市民に伝え、文化人類学・民族学および関連諸分野に係る活動を広く社会に還元することを目的とする。そのために、これらの分野に関する出版、放送、ネットなど各種メディアの発信と受容の社会的動向を把握しながら、広報誌研究の事例として民博に焦点をあて、比較分析する。

・成果

みんぱくの活動を市民に伝え、かつ研究の社会的還元媒体である広報誌のあり方、またその内容のテーマ性、現在の意義について検討を重ね、比較分析の結果として特集テーマの内容、連載記事（新企画）等に反映させた。

中山京子 [なかやま きょうこ]————— 准教授

1972年生。【学歴】東京学芸大学教育学部卒（1990）、東京学芸大学教育学研究科修士課程修了（1997）【職歴】静岡県公立小学校教諭（1994）、東京学芸大学附属世田谷小学校教諭（1998）、京都ノートルダム女子大学講師（2005）、京都ノートルダム女子大学准教授（2009）、帝京大学准教授（2010）【学位】学術博士（総合研究大学院大学 2010）【専攻・専門】社会科教育 国際理解教育【所属学会】日本国際理解教育学会、日本社会科教育学会、全国社会科教育学会、日本移民学会、異文化間教育学会

【主要業績】

[単著]

中山京子
2012 『先住民学習とポストコロニアル人類学』東京：御茶の水書房。

【編著】

中山京子編著

2012 『ガム・サイパン・マリアナ諸島を知るための54章』東京：明石書店。

森茂岳雄・中山京子編著

2008 『日系移民学習の理論と実践——グローバル教育と多文化教育をつなぐ』東京：明石書店。

【受賞歴】

2012 沖永壮一文化学術奨励賞

【2012年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

文化人類学と教育をつなぐ国際理解教育

・研究の目的

本研究では、以下の2つを目的とする。

- 1) 文化人類学と教育が重なる領域「教育人類学」に関する文献を収集し、これまで内外で示されてきた概念および領域の整理をする。その検討をふまえて、現代の「教育人類学」の定義、整理を試みる。
- 2) 1)の中から特に国際理解教育に関わる方法論・内容論に着目し、具体的な教材開発やワークショップを行う。

以上の研究の目的の達成にむけて、まず、5月にリニューアルが進んでいる本館展示を本研究の視点から調査する他、民博研究者へのヒアリングを行う。

7月には、日本国際理解教育学会研究大会にて、スタディーツアーを検討する分科会を組織し、教師のフィールドワークの在り方や教材の選択について議論を行う。

8月7日開催予定の国立民族学博物館と日本国際理解教育学会共催による「博学連携教員ワークショップ in 民博——学校と博物館でつくる国際理解教育」（文化資源プロジェクト）においては、ワークショップ「歌と踊りで語り継ぐ南の島の物語」を行い、マリアナ諸島チャモロダンスを事例に、チャモロダンスが「創られた」経緯やスパニッシュステップが組み込まれているというコロニアル／ポストコロニアルな背景などを参加者と共有し、「伝統や文化」に関する教育のあり方を国際理解教育の視点から考える。

夏から秋にかけて、日本と歴史的、経済的に関わりが深いものの、学校教育ではほとんど取り上げられていない太平洋島嶼で、教育人類学の視点からフィールドワークを行う。特に、学校教育現場の観察を通して、教育人類学に関する資料収集を行う。

今年度後半には、民博のオセアニア展示を中心に展示の構成や内容を再度分析し、文化人類学と教育をつなぐ「国際理解教育」として、どのように展示を活用することが可能か、教育現場でどのように太平洋島嶼をテーマに教材開発や授業をすることができるか、検討をする。また、民博にある教育人類学に関する資料を調査、解読したい。

・成果

リニューアルが進んでいる本館展示を本研究の視点から見学をし、教材開発や教員研修の素材としての可能性を検討した。

7月に埼玉大学で開催された日本国際理解教育学会研究大会では、スタディーツアーを検討する分科会にて、教師の海外フィールドワークの在り方やフィールドワーク後の教材開発について議論を行った。教師の海外フィールドワークに関しては、近年開発教育の視点が強く反映されるが、文化人類学の視点を取り入れることの意義を主張し、日本国際理解教育学会の課題研究の中で引き続き検討されている。

8月に開催された「博学連携教員ワークショップ in 民博——学校と博物館でつくる国際理解教育」では、ワークショップ「歌と踊りで語り継ぐ南の島の物語」を行い、マリアナ諸島チャモロダンスを事例に、チャモロダンスが「創られた」経緯やスパニッシュステップが組み込まれているというコロニアル／ポストコロニアルな背景などを参加者と共有し、「伝統や文化」に関する教育のあり方を国際理解教育の視点から考えた。参加教員が秋以降の学校現場での実践に取り入れるなどの普及成果がみられた。

外部資金（科学研究費補助金「ポストコロニアルの視点にたった太平洋地域学習の教材開発」（代表：中山京子、2011～2013年度））を活用し、文献収集およびフィールドワークを本研究と連携して研究を進めた。

◎出版物による業績

〔論文〕

中山京子

- 2012 「社会科における多文化教育の再構築——ポストコロニアルの視点から先住民学習を考える」『社会科教育研究』116: 35-44。
- 2013 「英米のドラマ教育の視点からみる低学年における劇活動——『へんしん！おはなしくろう！ごっこ遊びからお話づくり、劇づくりへ』の検討」『帝京大学教育学部紀要』1: 87-96。
- 2013 「グローバル・ヒストリーにおける太平洋地域の意義と歴史教育——マリアナ諸島を中心に」『グローバル教育学会編『グローバル教育』15: 76-88。

〔その他〕

中山京子

- 2012 「多文化社会と博物館」日本メディア教育学会編『博物館情報・メディア論』pp.150-152, 東京: ぎょうせい。
- 2012 「文化人類学と社会科」日本社会科教育学会編『新版社会科教育学事典』pp.390-391, 東京: ぎょうせい。
- 2012 「エスノセントリズム」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.30, 東京: 明石書店。
- 2012 「人種・エスニシティ・民族」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.31, 東京: 明石書店。
- 2012 「本質主義／構築主義」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.32, 東京: 明石書店。
- 2012 「ポストコロニアル」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.38, 東京: 明石書店。
- 2012 「伝統と文化」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.44, 東京: 明石書店。
- 2012 「先住民(族)」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.114, 東京: 明石書店。
- 2012 「生活科と国際理解教育」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.149, 東京: 明石書店。
- 2012 「フィールドワーク」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.175, 東京: 明石書店。
- 2012 「国際理解教育の実践史」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.188, 東京: 明石書店。
- 2012 「ワールドカルチャー」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.199, 東京: 明石書店。
- 2012 「パールハーバー教員ワークショップ」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.205, 東京: 明石書店。
- 2012 「太平洋島嶼国の国際理解教育」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.265, 東京: 明石書店。

■文化資源研究センター

前川啓治 [まえがわ けいじ] ————— 教授

【学歴】大阪大学文学部卒（1980）、大阪大学人間科学研究科博士前期課程修了（1983）、大阪大学人間科学研究科博士後期課程単位取得退学（1989）【職歴】筑波大学歴史・人類学系講師（1992）、静岡大学人文学部准教授（1996）、筑波大学人文社会科学研究科准教授（2000）、筑波大学人文社会科学研究科教授（2004）【学位】博士（文学）（筑波大学 1993）【専攻・専門】文化人類学・民俗学【所属学会】日本オセアニア学会、日本文化人類学会

【主要業績】

〔単著〕

前川啓治

- 2004 『グローカリゼーションの人類学——国際文化・開発・移民』東京: 新曜社。
- 2000 『開発の人類学——文化接合から翻訳的適応へ』東京: 新曜社。

〔共編著〕

綾部恒雄監修, 前川啓治・棚橋 訓編

- 2005 『オセアニア（講座世界の先住民民族 ファースト・ピープルの現在09）』東京: 新曜社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

グローバルゼーションから見る組織文化の比較研究

・研究の目的

地域づくりの過程における組織作りの成否は、地域づくりの成否につながるといっても過言ではない。筑波山麓の地域づくりのための主体の組織化は、「筑波山麓地域づくり団体連絡協議会」という5地区連合という形の中域連合によってなされており、新たに構築した「秋祭り」などのイベントに関しては、協力体制により、かなりの成果を上げている一方、竜巻被害からの復興などの点では、たとえばコミュニティ・レストランのような持続的な地域づくりの拠点形成に時間がかかっている。こうした問題における原因の1つを地域づくりの組織化の問題に求め、組織化の現状を分析するとともに、たとえば、大学など外部組織のかかわりが地域の人々による組織化にどのような影響を与えてきたのか、また今後与えるのかを、フィールドワークによる理解と組織化への参与という実践から取り組んでゆく。

・成果

筑波大学人文社会系プロジェクト資金により、映像アーカイブの作成を行った、筑波山麓地区にある神社2か所において、神社にまつわる伝承、地域の歴史解説からはじめ、地域の変化に関するパーセプションに基づく地域づくりへの展開・組織化について、氏子総代による語りの映像記録を作成した。また、(大学関係者が支援する)国登録有形文化財保存運動を行うNPO法人の理事による建築的・文化財の特徴の解説をガイドという形式で映像に記録し、保存活動に参加する地元住民による地域の昔話、活動への取り組みと、地域づくりの組織化に関する見解などを、同時に記録した。

また、筑波大学社会連携費の資金により、報告書『筑波山から学ぶ』を刊行した。編著の形式であるが、筑波山麓地域の歴史や文化への理解が、具体的な地域づくりやその組織化の過程とどのように結びついているのかという点も明らかにしている。

◎出版物による業績

[単著]

前川啓治

2012 『カルチュラル・インターフェースの人類学——「読み換え」から「書き換え」の実践へ』東京：新曜社。

[共著]

前川啓治

2012 『会社神話の経営人類学』大阪：東方出版。

中村嘉志 [なかむら よしゆき] ————— 准教授

1971年生。【学歴】神奈川大学理学部情報科学科卒(1994)、電気通信大学大学院情報システム学研究科博士前期課程修了(1996)、電気通信大学大学院情報システム学研究科博士後期課程退学(1997)【職歴】電気通信大学大学院情報システム学研究科助手(1997)、独立行政法人産業技術総合研究所特別研究員(2002)、独立行政法人産業技術総合研究所研究員(2005)、芝浦工業大学大学院連携大学院客員助教授・客員准教授(2006)、独立行政法人産業技術総合研究所技術研究員(2010)、電気通信大学大学院情報システム学研究科非常勤講師(2010)、国立民族学博物館文化資源研究センター客員准教授(2010)【学位】博士(工学)(電気通信大学2005)【専攻・専門】情報システム学、情報通信工学、メディア情報学【所属学会】情報処理学会、電子情報通信学会、人工知能学会、IEEE、ACM

【主要業績】

[論文]

中村嘉志・濱崎雅弘・石田啓介・松尾 豊・西村拓一

2008 「個人端末をWeb支援システムIDへリンクする一手法の提案」『日本知能情報ファジィ学会誌』20(4): 130-141。

中村嘉志・並松祐子・宮崎伸夫・松尾 豊・西村拓一

2007 「複数の赤外線タグを用いた相対位置関係からのトポロジカルな位置および方向の推定」『情報処理学会論文誌』48(3): 1349-1360。

中村嘉志・多田好克

2003 「ATMのセル廃棄を許容するソフトウェア DSM向け一貫性プロトコル」『情報処理学会論文誌』44(9): 2299-2307。

【受賞歴】

2003 Best Presentation Award, The 29th Annual Conference of the IEEE Industrial Electronics Society (IECON2003)

2003 優秀論文賞, 情報処理学会マルチメディア, 分散, 協調とモバイルシンポジウム (DICOMO2003)

2002 野口賞 (優秀デモンストレーション賞), 情報処理学会マルチメディア, 分散, 協調とモバイルシンポジウム (DICOMO2002)

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インタラクティブセンシングのアプローチによる学術資料の情報提供に関する方法論的研究

・研究の目的

情報展示新構築を推進するため、学術資料の情報提供を来館者に行うためのインタラクティブな情報支援システムの方法論および設計法について、情報工学の側面から実践的に研究する。具体的には、資料情報のデータ整備、資料の研究情報の抽出、そして、情報提供のためのインタフェースそれぞれを対象とする。

・成果

2012年度では、情報展示新構築のための情報支援システムの運用、主に学術資料のデータベースと情報提供インタフェースについてのシステム運用を開始させた。具体的には、本館2階のインフォメーション・ゾーンに探究ひろばを設置し、机（リサーチデスク）に埋め込み式のみんなく資料と展示に関する情報支援システム：インフォメーション・ファインダーの運用を行った。また、第411回みんなくゼミナールにおいて、この探究ひろばやインフォメーション・ファインダーに関する学術的な解説を行った。これにより来館者へのサービス提供の一助とした。

◎出版物による業績

[その他]

中村嘉志

「探究広場の情報化」『月刊みんなく』36(5): 8-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

2012年8月18日 「ソーシャルメディアに見る人とモノの関係」第411回みんなくゼミナール（企画および聞き手）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

情報処理学会ヒューマンコンピュータインタラクション研究会幹事、日本ソフトウェア科学会インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ（WISS）運営委員

・非常勤講師

電気通信大学大学院情報システム学研究科「情報システム学特別講義4」

平井康之 [ひらい やすゆき] ————— 准教授

1961年生。【学歴】京都市立芸術大学デザインコース卒（1983）、英国王立芸術大学院修士課程修了（1992）【職歴】コクヨ株式会社本社設計部（1983）、コクヨ株式会社家具事業本部オフィス家具部商品開発課（1988）、コクヨ株式会社人事部長（1990）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品開発室主任（1992）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長補佐（1995）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長（1997）、IDEO Product Development Senior Designer（1997）、IDEO Product Development Grand Rapids Studio（米国）Senior Designer（1998）、九州芸術工科大学芸術工学部助教授（2000）、九州大学大学院芸術工学研究院助教授（2003）、九州大学大学院芸術工学研究院准教授（2007）【学位】修士（英国王立芸術大学院 1992）【専攻・専門】デザイン専攻【所属学会】日本インテリア学会、日本デザイン学会、

【主要業績】

[監修]

平井康之

2006 『インクルーシブデザインハンドブック』財団法人たんぽぽの家編, 奈良: 財団法人たんぽぽの家。

[論文]

Elokla, N., Y. Hirai and Y. Morita

2010 Emotion Measurement: A Proposal for Measuring User's Kansei. *Journal of Kansei Engineering and Emotional Research International Conference*, pp.2281-2292.

平井康之

2009 「共感を得られる新世代オフィスを実現するアプローチ」新世代オフィス研究センター編『オフィスの夢集合知——100人が語る新世代のオフィス』pp.186-187, 東京: 彰国社。

【受賞歴】

- 2010 第4回キッズデザイン賞 (ソーシャルキッズサポート部門)
- 2009 2009年度グッドデザイン賞 (パブリックコミュニケーションデザイン部門)
- 2009 第3回キッズデザイン賞 (コミュニケーションデザイン部門)
- 2008 2008年度グッドデザイン賞 (子どもの服薬に関するデザイン研究、こども+くすり+デザイン)
- 2008 第2回キッズデザイン賞 (リサーチ部門、子どもの服薬に関するデザイン研究、こども+くすり+デザイン)
- 2003 三菱オスラム LED デザインコンテスト審査員奨励賞
- 2002 富山プロダクトデザインコンペティション入選
- 2002 2002年度国際デザイン年鑑 (英国) 掲載 (審査付、Full Metal Jacket Chair)
- 1996 1996年度グッドデザイン賞 (シナジアシリーズ)
- 1996 海南デザインコンペティション大賞 (健康器具バンボレオ)
- 1996 1996年度レッド・ドット賞<ドイツ・エッセンデザインセンター> (インタープレイスシリーズ)
- 1994 1994年度グッドデザイン賞 (インタープレイスシリーズ)
- 1993 第2回旭川国際家具デザインコンペティション入選 (インタープレイスシリーズ)
- 1993 コクヨ株式会社功労賞 (インタープレイスシリーズ)
- 1992 1992年度国際デザイン年鑑 (英国) 掲載 (審査付、Perch Chair, Stacking Table)
- 1991 1991 Office Design Competition, EIMU, Milano, Italy 入選

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

博物館を中心とした公共空間におけるインクルーシブデザインの理論と方法に関わる実践的研究

・研究の目的

ユニバーサルミュージアム実現のために、館の入り口から展示スペースまで、ユーザーの視点から調査を行い、現状の物品や空間の物理量、ユーザーの気づきの分析をもとに、インクルーシブデザインの手法を用いて展示デザインに関わる館内外の関係者にわかりやすい指針を確立することを目的とする。

・成果

全体の館内マップと触地図を融合したデジタル触地図のプロトタイプを制作し、視覚障がい者によるユーザー評価を実施した。その結果触地図の課題をあきらかにすることができた。また、展示デザインに関わる館内外の関係者のヒアリングとフォーマットへのフィードバックについては、1月から3月まで企画連携係、広報企画室、情報企画課、新構築チームメンバーの参加で合計3回の打合せを開催し、アクセスデザインについての基本計画策定を成果としてまとめることができた。この研究内容はアクセスデザインワーキングとして2013年度に向けて継続し、実現を図ることとなった。

特別客員教員

■先端人類科学研究部・社会環境研究部門

末成道男 [すえなり みちお] 教授

1938年生。【学歴】東京大学教養学部卒（1962）、東京大学大学院生物系研究修士課程修了（1964）、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻博士課程単位取得満期退学（1970）【職歴】聖心女子大学文学部専任講師（1972）、北京外国語学院日本学研究中心客員教授（1987）、ピッツバーグ大学フルブライト派遣客員教授（1990）、東京大学東洋文化研究所教授（1990）、東洋大学社会学部教授（1998）、同定年退職（2005）【学位】社会学博士（東京大学社会学系大学院 1971）【専攻・専門】社会人類学・東アジアの社会と祖先祭祀【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

末成道男

1998 『ベトナムの祖先祭祀——潮曲の社会生活』東京：風響社。

1983 『台湾アミ族の社会組織と変化』東京：東京大学出版会。

[責任編集]

末成道男

1995 『中国文化人類学文献解題』東京：東京大学出版会。

【受賞歴】

1975 第8回澁澤賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東アジアにおける祖先祭祀の変動に関する人類学的研究

・研究の目的

- 1) 東アジア人類学フォーラム「人類学と‘歴史’」のまとめ。
- 2) 中部ベトナムにおける祖先祭祀現地調査。

・成果

- 1) 報告書作成 報告書の題目：人類学と歴史。すでに、原稿を収集、日中両文への翻訳も終えており、中国中山大学人類学部において、出版申請中である。
- 2) 中部ベトナムにおける祖先祭祀現地調査。2013年1月24日～4月24日の3か月間、ベトナムフエ市近郊農村において実施している。その成果は、帰国後順次まとめ、研究会の口頭発表や論文執筆で発表してゆく予定である。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年11月23日 「中華漢族の家族と家——東アジアの人類学的調査から見えるもの」(A Family of Han Chinese: Viewed from My Social Anthropological Research in East Asia) 機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」シンポジウム『中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究』

古谷嘉章 [ふるや よしあき] 教授

1956年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科卒（1980）、東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学（1986）【職歴】東京大学助手（1988）、九州大学助教授（1989）、九州大学教授（2002）【学位】博士（学術）（東京大学大学院総合文化研究科 1992）、社会学修士（1982、東京大学大学院）【専攻・専門】文化人類学【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、American Anthropological Association

【主要業績】

[単著]

古谷嘉章

2003 『憑依と語り』福岡：九州大学出版会。

2001 『異種混淆の近代と人類学』京都：人文書院。

[論文]

古谷嘉章

2010 「物質性的人类学に向けて」『社会人類学年報』36: 1-23。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代社会における先史文化の物質性についての研究

・研究の目的

過去の時代に生きた人々の生活の営みは、現在でも物質的に存在しているが、その様態は様々である。本研究は、先史文化すなわち歴史資料の存在しない過去の社会に生きていた人々の文化が、現代社会において物質的に存在している（あるいは存在しなくなっている）様態について、人類学的に分析することを目的とする。具体的には、一方で、考古学的調査研究を対象として、他方で、現代の世界各地の社会において「先史文化がどのように物質的に存在しているか」を対象として、人類学的に研究する。

・成果

国立民族学博物館共同研究「物質性的人类学——物性・感性・存在論を焦点として」を組織し、4回の研究会を主宰した（内容の一部は「ゴミと物質性」『民博通信』139号、「物質文化を文化人類学する」『月刊みんぱく』第36巻10号に掲載した）。船橋市立船橋飛ノ台史跡公園博物館における「縄文国際コンテンポラリーアート展」に協力し、その一部をなす座談会において講師を勤めた。科学研究費補助金・基盤研究C「先史土器復興を中心とするブラジル・アマゾン先史文化の現代的利用の人類学的研究」の研究代表者として、ブラジル・アマゾン地域において、先史土器復興について調査を行うとともに、サンパウロ州立大学（UNESP）において調査結果について口頭発表を行った。

森山 工 [もりやま たくみ]————— 教授

【学歴】 東京大学教養学部教養学科卒（1984）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1986）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了（1994）【職歴】 広島市立大学国際学部講師（1994）、広島市立大学国際学部助教授（1997）、東京大学大学院総合文化研究科助教授（2000）、東京大学大学院総合文化研究科教授（2012）【学位】 博士（学術）（東京大学大学院、1994）、修士（社会学）（東京大学大学院、1986）【専攻・専門】 文化人類学、マダガスカル地域文化研究【所属学会】 日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本オセアニア学会

【主要業績】

[単著]

森山 工

1996 『墓を生きる人々——マダガスカル、シハナカにおける社会的実践』東京：東京大学出版会。

[編著]

森山 工・鏡味治也・関根康正・橋本和也編著

2011 『フィールドワーカーズ・ハンドブック』日本文化人類学会監修，京都：世界思想社。

[博士論文]

森山 工

1994 『マダガスカル、シハナカにおける墓と社会関係の諸相——情緒・ことば・実践』東京大学大学院総合文化研究科。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

葬送と遺体の「所有」に関する人類学的研究

・研究の目的

本研究計画は、マダガスカル中央高地北東部の農村地域における現地調査にもとづき、国家独立後の農村開発事業の影響によって変化しつつある葬送の実態を明らかにするとともに、そこにおいて遺体を「所有する」ということが持つようになった社会的意義を解明するものである。遺体の「所有」をめぐるのは、当該の死者に連なる過去、および当該の死者から連なる過去によって現在を正当化するという観点から、その「所有」のあり方を考察する。マダガスカルについては、1988年以来断続的に行っている現地調査を継続するとともに、マダガスカル以外の他地域についても歴史学的・人類学的な文献を精査することにより、比較論的な視角から考察をほどこす。

・成果

2012年度は、マダガスカル側の政情が前年度に引き続いて不安定であり、現地調査を行うことができなかった。それを補うべく、上記の「研究の目的、内容」に応じた文献による調査を鋭意実施し、本研究課題に関連する業績として、以下の研究成果を発表した。

◎出版物による業績

[論文]

森山 工

2013 「墓が刻むクロノロジー——マダガスカル、シハナカにおける祖先観の変化と〈家〉」小池 誠・信田敏宏編『生をつなぐ家——親族研究の新たな地平』pp. 267-289, 東京：風響社。

山本直美 [やまもと なおみ] ————— 准教授

【学歴】お茶の水女子大学文教育学部教育学科卒（1990）、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1992）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了（2003）【職歴】お茶の水女子大学文教育学部教育学科助手（1992）、放送大学非常勤講師（2001）、お茶の水女子大学人間文化研究所特別研究員（2003）、関東学院大学キリスト教と文化研究所客員研究員（2005）、自治医科大学非常勤講師（2005）、関東学院大学非常勤講師（2006）、専修大学非常勤講師（2006）、同志社大学非常勤講師（2008）、大阪医専非常勤講師（2009）、立命館大学非常勤講師（2010）【学位】博士（人文科学）（お茶の水女子大学 2003）、教育学修士（お茶の水女子大学1992）【専攻・専門】文化人類学、社会学、対抗文化運動、共同体論【所属学会】日本文化人類学会、日本社会学会、関東社会学会

【主要業績】

[単著]

山本直美

2007 『「居場所のない人びと」の共同体の民族誌——障害者・外国人の織りなす対抗文化』東京：明石書店。

[論文]

山本直美

2007 「コミュニケーション不全を介して成立する〈つながり〉」浮ヶ谷幸代・井口高志編『病いと〈つながり〉の場の民族誌』pp. 47-67, 東京：明石書店。

2009 「リサーチクエスションを変えていく」箕浦康子編『フィールドワークの技法と実際Ⅱ——分析・解釈編』pp. 175-192, 京都：ミネルヴァ書房。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代日本におけるマイノリティの共同性と個人のライフデザイン

・研究の目的

本研究は、現代日本の共同性の希求される場面において、多様な個々人の欲求や困難がいかにして調整されるかの検討を目的とする。本研究の内容は、特定の共同体をフィールドとして、その成立と存続、成員の参入

と離脱の過程をめぐって考察を行うものである。

・成果

社会的弱者をめぐり、国家やNGOが行う「上から」の包摂と、個々人の生の形式に発する「下から」の包摂とがせめぎ合うという観点を踏まえた上で、一方の包摂が他方の包摂を絡め取るような複雑な状況を分析する必要性を認識し、次のように現代日本の具体的フィールドをめぐり調査研究を進めた。

1) 外国人の精神障害者を含む共同体（群馬県）、2) 知的障害者を含む共同体（静岡県）、3) 宗教的信念を共有する世代継承のある共同体（京都府）。

特に3)の事例については、100余年の集団小史に伴い独自の儀礼を成立させてきた過程を検討し、2012年6月の日本文化人類学会において発表、その後所属する関東学院大学キリスト教と文化研究所の『所報』（2013年3月）において論考としてまとめた。集団外部者をも巻き込む儀礼のあり方を描き、「下から」の包摂として生まれたものが、「上から」の包摂として絡め取られる過程、なおも「下から」の包摂としての底力を示す過程に関連して検討を行った。

◎出版物による業績

[論文]

山本直美

2012 「小集団の維持における儀礼と共同性——宗教的小集団『一燈園』の場合』『関東学院大学キリスト教と文化研究所所報』11: 219-230。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月23日 「『もうひとつの生き方』一燈園における共同性と人間観」日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

立命館大学大学院「応用人間科学研究法」、同志社大学「社会学演習」「ファーストイヤーセミナー」、大阪医専「文化人類学」

■先端人類科学研究部・文化動態研究部門

佐々木利和 [ささき としかず] ————— 教授

1948年生。【学歴】國學院大學文学部文学科卒（1976）、法政大学大学院人文科学研究科日本史学修士課程修了（1979）【職歴】東京国立博物館（1969）、文化庁（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2006）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授（2010）【学位】博士（文学）（早稲田大学 2000）【専攻・専門】日本近世史、アイヌ民族史【所属学会】日本文化人類学会、日本考古学会

【主要業績】

[単著]

佐々木利和

2004 『アイヌ絵誌の研究』千葉：草風館。

[共編]

佐々木利和・ビルギト・マヤ編

2003-2006 『在独日本文化財総合目録1～3』東京：国書刊行会。

[学位論文]

佐々木利和

2000 「アイヌ絵誌の研究」早稲田大学。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民族学博物館におけるアイヌ文化展示の研究

- ・研究の目的

民博の展示改定計画のなかで、アイヌ文化に関するそれをいかに行うかを検討する。

- ・成果

直接の展示改定計画とはつながらないが、民博外関連事業として、アイヌの現代アートの特別展（北海道立近代美術館など）に関与し、アイヌ展示の新しい視点や意義等について得るものは多かった。

鈴木裕之 [すずき ひろゆき] ————— 教授

【学歴】 慶應義塾大学法学部政治学科卒（1987）、慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了（1989）、慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程単位取得満期退学（1995）**【職歴】** 国士舘大学教養部専任講師（1995）、国士舘大学法学部助教授（1998）、国士舘大学法学部教授（2000）**【学位】** 社会学修士（慶應義塾大学大学院社会学研究科1989）**【専攻・専門】** 文化人類学・アフリカ音楽**【所属学会】** 日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本ポピュラー音楽学会、ICTM

【主要業績】

[単著]

鈴木裕之

2000 『ストリートの歌——現代アフリカの若者文化』京都：世界思想社。

[論文]

鈴木裕之

2006 「アビジャン・レゲエと政治の関係——アルファ・ブロンディの歌詞に表現される政治的視点の変化」『社会人類学年報』32: 25-6。

1996 「コミュニケーション様式の創造過程としての都市化——アビジャン・レゲエとストリート文化」『アフリカ研究』48: 1-18。

【受賞歴】

2000 渋沢クロード賞・現代フランス・エッセイ特別賞（毎日新聞社・日仏会館共催）

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

グローバル化時代のアフリカ音楽

- ・研究の目的

現代アフリカ音楽の世界的展開について、そのプロセスを研究する。とくに西アフリカ仏語圏諸国の音楽家が旧植民地宗主国フランスのパリに移住し、最先端のテクノロジーを利用しながら世界マーケットを視野に入れた音楽を制作するプロセスに注目しながら、世界システムとアフリカ音楽との関連をあきらかにする。

- ・成果

ギニアおよびコート・ジヴォワールにおいて、ポピュラー音楽のマーケットが欧米、とくにフランスのショウ・ビジネスとどう関わり合っているのか、両国のショウ・ビジネスの中心地であるコナクリとアビジャンにおいて関係者への聞き取り調査をおこなった。そこで、1980年代にアーティストがパリに移住してゆく社会的背景を理解することができた。成果の一部は、国立民族学博物館で開催された日本アフリカ学会第49回学術大会（2012年5月27日）、および日仏研究フォーラム「人口学から世界を理解する」（2012年11月30日）において発表した。

◎出版物による業績

[論文]

鈴木裕之

2012 「アフリカ音楽事情② メッセージを伝える音と声」『音楽文化の創造』64: 26-27。

2012 「アフリカ音楽事情③ ストリートから生まれる新しい音楽」『音楽文化の創造』65: 34-35。

2013 「アフリカ音楽事情④ ワールド・ミュージックの時代」『音楽文化の創造』66: 26-27。

◎口頭発表・展示・その他の業績

2012年5月27日 「アビジャンの音楽産業とグリオの伝統的技芸——近代化の中で継承される〈誉め歌〉の伝統」日本アフリカ学会第49回学術大会、国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「アフリカ無形文化遺産存続の条件を探る」（代表者：川田順造）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など

外務省「アフリカンフェスタ2011」プログラム委員、文化遺産国際協力コンソーシアムアフリカ分科会委員、日本アフリカ学会評議委員

- ・他大学の非常勤講師

日本女子大学「比較社会論」、聖心女子大学「文化人類学特講」、東京外国語大学「アフリカ文化論」、沖縄県立芸術大学「アフリカ音楽論」

大貫美佐子 [おおぬき みさこ] ————— 准教授

【学歴】東京外国語大学外国語学部インドシナ科卒（1986）【職歴】文部省学術国際局（1986）、ユネスコ・アジア文化センター（1987）、ユネスコ・アジア文化センター文化協力課長（1999）、金沢大学客員准教授（2013）、国立文化財機構アソシエイト・フェロー（2010）、ユネスコ無形文化遺産研究センター副所長（2011）【学位】文学士（東京外国語大学 1986）【専攻・専門】無形文化遺産の保護に関するユネスコの条約におけるコミュニティ活性化の研究及び地域還元型プロジェクトの開発研究、アジア・太平洋地域文化遺産マネジメントに関わるキャパシティ・ビルディング【所属学会】日本文化政策学会、日本 ICOMOS 学会

【主要業績】

[論文]

Ohnuki, M.

2009 Challenges of the ACCU's Community-based Project for the Promotion of the Convention for the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage: Some practices of Asia's communities' safeguarding approaches. *Le Patrimoine Culturel Immatériel à la Lumière de l'Extrême-Orient (Internationale de l'imaginaire Nouvelle 24)* pp.81-89, Paris: Maison des Cultures du Monde.

2008 Safeguarding of Intangible Cultural Heritage and the Capacity Building of the Community. *International Symposium on International Cooperation and Role of Japan for the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage 2008*, pp.117-122, Tokyo: National Research Institute of Cultural Properties.

大貫美佐子

2002 「アジアのユネスコ加盟国における子どもの本の共同制作の評価と課題——ユネスコ・アジア文化センターの共同出版事業を通して」『子ども社会研究』8: 107-119。

【受賞歴】

2009 ベトナム文化省国際協力貢献賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

「無形文化遺産の保護に関する条約」の課題とインパクトに関する研究

- ・研究の目的

ユネスコの「無形文化遺産の保護に関する条約」に関するこれまでの研究のまとめとして、この条約の17条の「危機に瀕する無形文化遺産の一覧表」が具体的に締約国にとって役割を果たすために必要な要素と内容を研究

成果から引き出し、次の視点において海外の専門家と議論をし、提案書を含め最終報告書にまとめる。さらに、無形遺産条約を継承するコミュニティへの研究成果の還元方法として、危機に瀕する無形遺産の保護措置の1つとして、具体的な提案（ガイドライン）とその効果の実証プログラムを実施する。

・成果

2013年1月に同条約のリスト記載に関する基準をテーマにした研究会を企画し、条約の起草に関わった国内外の専門家（6名）と、2つのリストの記載基準の分析と課題について総合的な議論を行い提案書としてまとめた。提案書において、記載基準の主要な問題は、1) 基準のあいまいな目的設定、2) 2つのリストの基準に類似した文言があること 3) 基準の曖昧な言語の選択などの問題点を明らかにした。さらにリスト記載に関しては、法的措置が要請されないため、無形文化遺産条約が提供する基準の枠組みは、世界遺産条約に比べて弱い。このため調査と提案書を作成し、2013年3月にIRCIより出版した。また議論の内容をプロシーディングスにまとめて共有した。

無形遺産条約は、無形遺産の保護においてコミュニティの関与の必要性を強調している。そのため過去の研究において、17条の基準のみならず、保護措置のプランニングが最も重要であり、そのためには危機に瀕する無形遺産を抱えるコミュニティとともに、危機の要因の特定要素の分析を調査し、問題点を共有し、復興に向けたプランニングを実施することが必要なプロセスである。このため、インド、ベトナム、タイにおいて、コミュニティ主導で保護にあたるためのメソッド開発WSを日本で企画・実施し実践的な研究会を実施した。その成果について、2013年9月にユネスコ主催の無形文化遺産条約の専門家会合にて発表予定。

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

Consortium on Training in Language Documentation and Conservation 専門員メンバー（研究グループ：Resource Network for Linguistic Diversity Australia）、文化審議会文化財分科会無形文化遺産保護条約に関する特別委員会委員

■先端人類科学研究部・応用民族学研究部門

池田光穂 [いけだ みつほ] ————— 教授

1956年生。【学歴】大阪大学大学院医学研究科博士課程単位取得済退学（1989）【職歴】東日本学園大学助教授（1992）、熊本大学文学部助教授（1994）、熊本大学文学部教授（2000）、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授（2005）【学位】医科学修士（大阪大学大学院医学研究科 1982）【専攻・専門】医療人類学、中米民族誌学、ヒューマンコミュニケーション研究【所属学会】日本文化人類学会、American Anthropological Association、日本ラテンアメリカ学会、日本保健医療社会学会

【主要業績】

[単著]

池田光穂

2010 『看護人類学入門』東京：文化書房博文社。

2001 『実践の医療人類学——中央アメリカ・ヘルスケアシステムにおける医療の地政学的展開』京都：世界思想社。

[共著]

阿保順子・池田光穂・西川 勝・西村ユミ

2010 『認知症ケアの創造——その人らしさの看護へ』東京：雲母書房。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

医療労働市場と医療労働者の国際移動に関する研究

・研究の目的

医療労働市場と医療労働者の国際移動に関する研究、とりわけ国際間の医療労働者の移民に関する国際規約の整備ならびに、トランスナショナルな移動の現状を理解することで、各国の医療労働の現場で生起しているさ

まざまな「医療と保健に関する文化的問題」を考える基礎とすることを目的とする。

・成果

日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B））「東南アジア医療福祉にみる看護・介護人材送出実態の実証研究対日EPA問題を中心に」（研究代表者：奥島美夏・天理大学国際学部准教授）の研究分担者となっており、2012年度はインドネシア共和国ジョグジャカルタ特別州において、現地の高齢化ケアの実態ならびに、近年成長をとげつつある介護ケア人材の育成に関する視察をおこなった。旧年度（2011）から先行研究の検討を通して明らかになりつつあるが、移住先の専門職独占という事情があり、医療労働者の国際移動には、それに先行する家事労働者や介護労働者の移動とは異なった経路と定着過程があることが明らかになった。

小池 誠 [こいけ まこと] ————— 教授

1956年生。【学歴】東京都立大学人文学部卒（1979）、埼玉大学大学院文化学研究科社会文化論専攻修士課程修了（1983）、東京都立大学社会科学部研究科社会人類学専攻博士課程単位修得退学（1991）【職歴】広島大学総合科学部（社会人類学）助教授（1991）、桃山学院大学文学部（文化人類学）助教授（1996）、桃山学院大学文学部教授（2000）、桃山学院大学国際教養学部教授（2008）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学大学院 2004）、文学修士（埼玉大学大学院 1983）【専攻・専門】社会人類学・インドネシア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、比較家族史学会、日本民俗学会、日本オセアニア学会、日本国際文化学会

【主要業績】

[単著]

小池 誠

2005 『東インドネシアの家社会——スンバの親族と儀礼』京都：晃洋書房。

1998 『インドネシア——島々に織りこまれた歴史と文化』（新アジア生活文化読本）東京：三修社。

[論文]

小池 誠

1989 「イエとムラ——インドネシア、東スンバにおけるイデオロギーと現実」『民族学研究』54(2): 137-165。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

人類学における家族・親族研究の現代的意義

・研究の目的

人類学における家族・親族研究を再検討し、社会学などで研究が進んでいる「現代家族の揺らぎ」という問題に対して、人類学の立場から如何なる貢献が理論と民族誌の点から可能か、検討していく。とくに、定住する家族に焦点を当てるだけでなく、移住労働など移動の相にある家族に着目し、その特徴を明らかにしたい。その研究の一環として、科学研究費補助金（基盤研究（C））「変動するインドネシアの農村社会における家族・親族の人類学的研究」（研究代表者：小池 誠）によって、インドネシア・スンバの家族と親族の変容について調査・研究を進める。また、科学研究費補助金（基盤研究（B）一般）「東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究」（研究代表者：伊藤 眞）によって、台湾在住のインドネシア人労働者とその家族に関する調査を実施し、さらに調査データの整理、分析を進める。なお、本各個研究は国立民族学博物館共同研究「人類学における家族研究の新たな可能性」と関連させて進めて行く。

・成果

第1に、科学研究費補助金（基盤研究（C））「変動するインドネシアの農村社会における家族・親族の人類学的研究」によって継続してインドネシアの東スンバ県で家族と親族に関する社会人類学的調査を実施した。これまでの調査成果を「インドネシア・スンバ島における世帯と家計の人類学的研究」（『桃山学院大学総合研究所紀要』38-1）と「インドネシア・スンバの父系社会における家族の多様性——『家族圏』再考」（『比較家族史研究』27）という論文にまとめた。第2に、連携研究者として参加する科学研究費補助金（基盤研究（B）一般）「東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究」（研究代表者：伊藤 眞）によって、台湾在住のインドネシア人労働者を対象として社会人類学的調査を実施し、グローバルな人の移動と家族の変容に関する調査研究を進めた。その研究成果を「台湾におけるエスニック・メディアが作り出すイン

ドネシア女性労働者のネットワーク」（『国際文化論集』46）と「インドネシア人帰還移民の社会福祉活動——台湾からインドネシアへ」（科研報告書）として発表した。第3に、研究代表者を務める国立民族学博物館共同研究「人類学における家族研究の新たな可能性」において、人類学における新しい家族研究の構築に向けて4回の研究会を開催した。

◎出版物による業績

[編著]

小池 誠・信田敏弘編

2013 『生をつなぐ家——親族研究の新たな地平』東京：風響社。

[論文]

小池 誠

2012 「『家』の存続と生命観——レヴィ=ストロース以後の家社会論」河合利光編『家族と生命継承——文化人類学的研究の現在』pp.101-122, 東京：時潮社。

2012 「インドネシア・スンバ島における世帯と家計の人類学的研究」『桃山学院大学総合研究所紀要』38(1): 27-48。

2012 「台湾におけるエスニック・メディアが作り出すインドネシア女性労働者のネットワーク」『国際文化論集』（桃山学院大学総合研究所）46: 1-31。

2013 「家族なき時代の『家』」小池 誠・信田敏弘編『生をつなぐ家——親族研究の新たな地平』pp.319-328, 東京：風響社。

2013 「インドネシア人帰還移民の社会福祉活動——台湾からインドネシアへ」伊藤 眞編『東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究』（2010年度～2012年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書）pp.25-43, 首都大学東京社会人類学研究室。

2013 「インドネシア・スンバの父系社会における家族の多様性——『家族圏』再考」『比較家族史研究』27: 7-26。

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（C））「変動するインドネシアの農村社会における家族・親族の人類学的研究」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B）一般）「東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究」（研究代表者：伊藤 眞）連携研究者

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など
比較家族史学会理事

沢山美果子 [さわやま みかこ]——教授

【学歴】 福島大学教育学部卒（1973）、お茶の水女子大学大学院教育学研究科修士課程修了（1976）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達学専攻単位修得満期退学（1979）**【職歴】** 東京都婦人情報センター専門員（1979）、順正短期大学講師（1982）、順正短期大学助教授（1986）、順正短期大学教授（1987）、順正短期大学退職（2008）、岡山大学大学院客員研究員（2008）**【学位】** 学術博士（お茶の水女子大学 1998）、教育学修士（お茶の水女子大学 1978）、教育学士（福島大学 1973）**【専攻・専門】** 日本教育思想史、女性史**【所属学会】** 日本教育学会、比較家族史学会、日本人口学会、歴史学会

【主要業績】

[単著]

沢山美果子

2008 『江戸の捨て子たち——その肖像』東京：吉川弘文館。

2005 『性と生殖の近世』東京：勁草書房。

1998 『出産と身体の近世』東京：勁草書房。

【受賞歴】

- 2006 岡山市出版文化賞
- 1999 第14回女性史青山なを賞
- 1989 両備聖園記念賞

【2012年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

近世における「家」と女の身体・子どものいのちの社会史

・研究の目的

本研究の目的は、「家」の維持・存続のために、子どもを産む女の身体と子どものいのちが着目されていく近世社会を対象に、女の身体と子どものいのちの結節点にある「乳」に焦点を当て、近世社会における女の身体と子どものいのちをめぐる問題を多様な側面から明らかにすることにある。とくに大阪の捨て子関係史料の解説・分析を進めることで、農村と都市の関係性の中で捨て子養育の問題を深めるとともに、近世人のライフコースという視点から女の身体と子どものいのちの関係史に焦点をあてる。

・成果

今年度の研究成果として、2012年度科学研究費補助金（基盤研究（C））の交付も受け、1) 「妊娠・出産を通してみた女・子どものいのちと医療——一関藩領内を中心に」（一関市博物館『江戸時代の病と医療』（2012年9月、pp.78-89）をまとめ、女の身体と子どものいのちの関係史を深める作業をおこない、2) 科研報告書『「乳」からみた近世社会の女の身体・子どものいのち』（2013年3月、p.297）を刊行するとともに、3) 近代の女の身体と子どものいのちの問題を考察した論考も含む『近代家族と子育て』（吉川弘文館、2013年3月、p.269）を刊行した。また口頭発表としては、1) 日本科学史生物学会分科会主催「いのちの」歴史学にむけてで「乳からみた近世社会の胎児・赤子のいのち」と題する報告（2012年8月4日、東京大学駒場キャンパス）、2) 一関市博物館シンポジウム「つながる命」での報告（2012年10月14日、一関市市役所）、3) 国立民族学博物館公開国際シンポジウム「ヒーリング・オルタナティヴス——ケアと養生の文化」で、「赤子と母のいのちを守るための江戸時代の民間療法」と題する報告（2012年11月11日）国立民族学博物館）をおこなった。

関根久雄 [せきね ひさお] ————— 教授

1962年生。【学歴】法政大学文学部卒（1985）、広島大学大学院社会科学科博士課程前期（社会人類学）修了（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程中退（1996）【職歴】名古屋大学大学院国際開発研究科助手（1996）、筑波大学社会科学系専任講師（2000）、筑波大学社会科学系助教授（2003）、筑波大学大学院人文社会科学研究科准教授（2004）、筑波大学大学院人文社会科学研究科教授（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部特別客員教授（2010）、筑波大学人文社会系教授（2011）【学位】博士（文学）（1998、総合研究大学院大学）【専攻・専門】文化人類学、地域開発論、オセアニア島嶼研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、国際開発学会、太平洋諸島学会、日本国際文化学会、日本社会学会、日本国際地域開発学会

【主要業績】

【単著】

関根久雄

2001 『開発と向き合う人びと——ソロモン諸島における「開発」概念とリーダーシップ』東京：東洋出版。

【論文】

関根久雄

2012 「疎外される州民——ソロモン諸島における『開発的公共圏』」須藤健一編『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』pp.257-274、東京：風響社。

2012 「国家からの離脱と『市民社会』——ソロモン諸島における開発的公共圏の伸縮」柄木田康之・須藤健一編『オセアニアと公共圏——フィールドワークからみた重層性』pp.35-52、京都：昭和堂。

【受賞歴】

- 2001 国際開発学会賞奨励賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「感情」からみるオセアニア島嶼国の近代化——ソロモン諸島における開発の事例から

・研究の目的

ソロモン諸島では、1998～2003年に発生した国内紛争を機に、州レベルの大規模開発の模索、州への政治的権限の委譲（連邦制移行）という社会情勢の変化に加え、村落における現金収入源の確保やサブシステムの維持を指向した生業活動の安定化のための活動（社会開発）がNGOや援助共与国のODAなどによって試みられている。これらの動きには、いずれもその起点および実施過程において人々の感情とそれに基づく様々な行為の束が関与し、それらが同国の近代化に関わる事柄の動向を左右し、実質的に近代化の姿を形作っているともいえる。本研究では、ソロモン諸島における有機農法普及プロジェクトや観光開発プロジェクトの実施プロセス、州社会から国家に向けられる低開発の語りなどに現れる人々の感情に注目し、ソロモン諸島民にとっての近代化あるいは開発の意味を再考する。

・成果

2011年度に研究代表者として立ち上げた国立民族学博物館共同研究会「実践と感情——開発人類学の新展開」の研究会を4回開催し、その2012年度第1回研究会（2012年9月29日）において、ソロモン諸島における有機農法普及プロジェクトや観光開発プロジェクトを事例に、開発実践に関わる人々の感情の「管理」とそれに基づく開発実践との連続性に関する報告を行った。

また、それに関連する継続的な現地調査を、2012年11月に、科学研究費助成事業基盤研究（B）「感情と実践——開発人類学の新たな地平」（研究代表者・関根久雄）、および同基盤研究（B）「社会的包摂のための実践人類学的研究」（研究代表者・鈴木 紀）を通して行った。

本研究課題に関連する成果の公表として、共著書『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』（須藤健一編、風響社、2012年8月）、『オセアニアと公共圏——フィールドワークからみた重層性』（柄木田康之・須藤健一編、昭和堂、2012年12月）を刊行した。また、日本文化人類学会第46回研究大会（2012年6月23日、広島大学）における分科会「グローバル支援の人類学——支援研究から人類学的支援へ」（代表・鈴木 紀）において、研究発表「人類学的評価という協働——ある『支援』の試み」を行った。さらに、国際開発学会第23回全国大会（2012年12月1日、神戸大学）において研究発表「可能性としての人類学的評価——線的視点による叙事的解釈の応用」を行った。

◎出版物による業績

[論文・その他]

関根久雄

2012 「『感情』から開発実践を考える」『月刊みんぱく』36(6): 12-13。

2012 「疎外される州民——ソロモン諸島における『開発的公共圏』」須藤健一編『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』pp.257-274, 東京: 風響社。

2012 「忘却のかなたのエヴァンズ＝プリチャード——『共犯』の人類学」風間計博・中野麻衣子・山口裕子・吉田匡眞編『共在の論理と倫理——家族・民・まなごしの人類学』pp.399-421, 東京: はる書房。

2012 「国家からの離脱と『市民社会』——ソロモン諸島における開発的公共圏の伸縮」柄木田康之・須藤健一編『オセアニアと公共圏——フィールドワークからみた重層性』pp.35-52, 京都: 昭和堂。

2013 「感情経験・感情文化・『怒り』の管理」『民博通信』140: 18-19。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2012年9月29日 「『怒り』を管理する——ソロモン諸島における開発実践と感情経験」『実践と感情——開発人類学の新展開』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月23日 「人類学的評価という協働——ある『支援』の試み」日本文化人類学会第46回研究大会における分科会『グローバル支援の人類学——支援研究から人類学的支援へ』（代表者: 鈴木 紀）広島大学

2012年12月1日 「可能性としての人類学的評価——線的視点による叙事的解釈の応用」国際開発学会第23回全国大会、神戸大学。

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「感情と実践——開発人類学の新たな地平」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「社会的包摂のための実践人類学的研究」研究分担者、国際開発学会「地域社会と開発」研究部会、研究代表者、国立民族学博物館共同研究員「実践と感情——開発人類学の展開」研究代表者、国立民族学博物館共同研究員「NGO活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座」研究分担者

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など

日本オセアニア学会理事・評議員、太平洋諸島学会理事・学会誌編集委員長、茨城県つくば市北条まちづくり振興会相談役

関根政美 [せきね まさみ] ————— 教授

1951年生。【学歴】慶應義塾大学法学部卒（1974）、慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻前期博士課程修了（1976）、慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻後期博士課程修了（1979）【職歴】慶應義塾大学法学部専任講師（1979）、慶應義塾大学法学部助教授（1984）、慶應義塾大学法学部教授（1989）、豪州NSW州立大学経済・商学部訪問研究員（1980）、在豪日本大使館専門調査員（1989）【学位】社会学博士（慶應義塾大学 1989）、法学修士（慶應義塾大学 1976）【専攻・専門】社会学、国際社会学、人口移動と人種・民族・エスニシティの国際社会学、現代オーストラリア論、多文化共生・競生論【所属学会】オーストラリア学会、日本国際政治学会、日本社会学会、日本政治学会

【主要業績】

[単著]

関根政美

- 1989 『マルチカルチュラル・オーストラリア——多文化社会オーストラリアの社会変動』東京：成文堂。
- 1994 『エスニシティの政治社会学——民族紛争の制度化のために』愛知：名古屋大学出版会。
- 2000 『多文化主義時代の到来』東京：朝日新聞社。

【受賞歴】

- 2000 義塾賞
- 1990 桜田会奨励賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

多文化主義の実践と現代的問題に関する国際社会的研究

- ・研究の目的

従来より、関根はオーストラリア研究者として、オーストラリアにおける多文化共生についての研究を行ってきた。2012年度も「多文化主義の実践と現代的問題に関する国際社会学的研究」と題する課題のもとに、多文化主義の現状に関する国際社会学的研究を行った。具体的には2010年10月のメルケル独首相と2011年2月のキャメロン英首相の多文化主義失敗発言と、2011年7月のノルウェーにおいて生じた、移民制限・多文化主義反対を唱える極右テロリストによる大量殺戮事件の関係を考察し、多文化主義（多文化共生）を巡る現在の社会状況に加え、多文化主義とテロの活動との関係をより詳しく検討しようとした。多文化「凶生」時代の到来を防ぎたいと考えたからである。

- ・成果

上記研究の成果を、以下の形で既に報告している。

関根政美 「第1章 多文化社会の将来に向けて——ノルウェー事件と日本」吉原和男編著『現代における人の国際移動——アジアの中の日本』慶應義塾大学出版会（2013年3月）。

本研究からの知見は、グローバリゼーションのもとで生活不安を感じているノルウェー国民にとり、ムスリム系移民の増大は、生活不安に文化不安を追加するものであり、反多文化主義・反移民の雰囲気、移民推進・多文化主義支持者国民や政党への右翼保守主義者の反感を増幅し、さらに、多文化主義失敗というヨーロッパ首脳の高率な発言は、凶行の引き金になったのではないかということである。移民マイノリティ支援と同時に、国民への生活支援を忘れてはいけないということである。疎外感を感じている国民への配慮は必要ではないのか。

◎出版物による業績

関根政美

2013 「第26章 アジアのなかのオーストラリア——アジア・太平洋の白豪主義国家から多文化主義国家へ」松浦正孝編『アジア主義は何を語るのか——記憶・権力・価値』pp. 598-623, 京都: ミネルヴァ書房。

2013 「第1章 多文化社会の将来に向けて——ノルウェー事件と日本」吉原和男編『現代における人の国際移動——アジアの中の日本』pp. 19-39, 東京: 慶應義塾大学出版会。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年12月9日 <司会とまとめ>ジェラルド・ブシャー（ケベック大学シクチミ校教授）「基調講演：インターカルチュラリズムとは何か——ケベック、そしてグローバルの視点から」青山学院大学国際交流共同研究センター主催国際シンポジウム『多文化社会の課題と挑戦——インターカルチュラリズムの可能性』青山キャンパス総研ビル12階大会議室

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

慶應義塾大学グローバルCOE「市民社会のガバナンスに関する教育・研究」拠点推進委員

・非常勤講師

駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部『グローバルシティズンシップ』2013年春季

・学会の開催

2012年7月7日 三田社会学会2012年度大会（会長）、慶應義塾大学三田キャンパス南校舎445教室

曾我 亨 [そが とおる]————— 教授

【学歴】名古屋大学理学部卒（1988）、京都大学大学院理学研究科後期博士課程修了（1994）【職歴】京都大学理学部助手（1994）、弘前大学人文学部助手（1995）、同助教授（2000）、同教授（2010）【学位】理学博士（京都大学1999）【専攻・専門】生態人類学 1) 北東アフリカの牧畜社会を対象とした生業・社会に関する研究 2) エスニシティと稀少資源に関する研究 3) 難民の生存戦略に関する研究 4) 人類進化論的研究【所属学会】日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会、生態人類学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[共著]

高倉浩樹・曾我 亨

2011 『シベリアとアフリカの遊牧民』宮城: 東北大学出版会。

[論文]

曾我 亨

2011 「国家に抗する拠点としての生業——牧畜民ガブラ・ミゴの難民戦術」松井 健・名和克郎・野林厚志編、『生業と生産の社会的布置』pp. 389-426, 京都: 昭和堂。

曾我 亨

2007 「<稀少資源>をめぐる競合という神話——資源をめぐる民族関係の複雑性をめぐって」松井 健編『資源人類学06 自然の資源化』pp. 205-249, 東京: 弘文堂。

【受賞歴】

1999 高島賞（日本ナイル・エチオピア学会）

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

グローバル化する現代社会における生業の意義

・研究の目的

本研究の目的は、グローバル化する社会において、生業がいかなる意味をもつかを考察することである。南部エチオピアに住む牧畜民ガブラ・ミゴを題材にとり、彼らが厳しい環境のなかで生み出してきた生業に関する技術に焦点をあてる。20世紀後半、ガブラ・ミゴは何度も難民となり、他国に逃げている。その要因を探ると、国際政治の影響に加え、近年においてはグローバル化した低強度の紛争、すなわちカルドーの言う「新しい戦争」の影響が認められる。こうした困難な状況において、ガブラ・ミゴの人々が、生業を活用しながらいかに生き延びようとしているのかを明らかにするのが本研究の目的である。なお、本研究は科学研究費・基盤研究(C)「難民となった牧畜民の生存にかかわる経済活動の人類学的研究」(代表者：曾我 亨)などによる。

・成果

昨年度は、科学研究費補助金を用いて約2週間の現地調査を実施した。2011年度の調査から、2006年に南部エチオピアで起きた民族紛争に牧畜民ガブラ・ミゴも巻き込まれ、一部は難民化して都市に暮らし、一部は家畜を連れて牧野に残って暮らしていることが判明している。また都市と牧野をつなぐようにして新たな生業活動が形成されていることも明らかになっている。

そこで2012年度は、ラクダの売買を中心に調査を行った。この数年、北ケニアでは相次ぐ旱魃によって家畜が疲弊しているが、エチオピアは比較的降雨に恵まれている。ケニアとの国境の都市に暮らす難民たちは、北ケニアから痩せ衰えたラクダを購入し、南エチオピアの牧野に暮らす親族や友人を通して市場で売却して利益をえていた。さらに南エチオピア地域のガブラ・ミゴの人々は、肥育したラクダをアラブ諸国に輸出する仕事に係ることで、利益を得ていることが判明した。

このラクダ取引には、ガブラ・ミゴだけでなく近隣の半農半牧民グジも参加している。ガブラ・ミゴはラクダの放牧や移動に係っていたのに対し、グジはガブラ・ミゴ商人から痩せたラクダを購入し、収穫後の畑を利用して肥育を行っていた。これは、各民族の生業経済を生かした係わり方であり、経済学のいう比較優位論にあてはまる事例であると考えられ、この取引は、難民化したガブラ・ミゴの生存を経済的に保障するだけでなく、異民族との共存を保障するものにもなっている可能性がある。

以上の知見の一部は、国立民族学博物館で開催された日本アフリカ学会で発表した。

大杉 豊 [おおすぎ ゆたか] ————— 准教授

【学歴】 University of Rochester (米国ロチェスター大学) 大学院言語研究科博士課程修了 (1997) 【職歴】 人形劇団「デフパペットシアターひとみ」団員 (1983)、学校法人名古屋文化学園言語訓練専門職員養成学校教員 (1989)、米国ロチェスター大学アメリカ手話学科客員教員 (1997)、財団法人全日本ろうあ連盟本部事務所長 (2000)、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター障害者基礎教育研究部准教授 (2007) 【学位】 Ph. D (ロチェスター大学 1997) 【専攻・専門】 手話学、ろう者学 【所属学会】 日本特殊教育学会、日本手話学会、日本聾史学会

【主要業績】

[単著]

大杉 豊

2005 『聾に生きる——海を渡ったろう者山地彪の生活史』東京：財団法人全日本ろうあ連盟出版局。

[編著]

大杉 豊編

2002 『国際手話ハンドブック』東京：三省堂。

[共編]

金沢貴之・大杉 豊編

2010 『一歩進んだ聴覚障害学生支援——組織で支える』東京：生活書院。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話言語学に関する研究ネットワーク拠点の形成に向けての現状調査

・研究の目的

学術的により堅固な基盤をもって手話言語学研究を推進するための研究ネットワーク拠点を形成することを長期的な目標とし、今年度は国内外の手話言語学研究の現状及び課題、その背景的要因の整理を行うことを目的とする。方法としては、人間文化研究機構連携研究として「手話言語と音声言語のシンポジウム 1)『言語の記述・記録・保存』」を7月末に実施する過程で研究者との情報・意見交換を行う。また、筑波技術大学の「情報保障のための情報・技術・人材拠点の整備」事業にて実施する言語学分野に対応した手話通訳の研究会にて問題点を明確にする等を中心に調査をすすめる。

・成果

人間文化研究機構連携研究として、「言語の記述・記録・保存」をテーマとする「手話言語と音声言語のシンポジウム」1)のコーディネートを菊澤律子准教授と共同で担当する中で、国内外の手話言語学研究の現状及び課題、その背景的要因について情報・意見交換を行った。その結果を踏まえて、手話言語学研究ネットワーク拠点構想を、9月開催（於：米国ハワイ大学）の「アジア・太平洋地域の手話言語の記録・保存に関するミーティング」及び、2013年1月開催（於：香港中文大学）の「アジア・太平洋手話言語教育プログラムに関する地域会議」において報告し、同ネットワーク拠点構想に関する議論をもつ機会を得られた。とくにハワイ大学でのミーティングの直接的な成果として、同大学言語学部及びカピオラニカレッジにおいてハワイ手話に関する記述取組みが開始されたことがあげられるものの、それらの成果を出版物としてまとめるには至らなかった。執筆については、来年度の課題としたい。なお、成果の一部は国立大学法人筑波技術大学で2014年度開設が予定されている大学院情報アクセシビリティ専攻（仮称）手話教育研究領域のカリキュラム設計に活かされている。

一方、筑波技術大学の「情報保障のための情報・技術・人材拠点の整備」事業では、言語学分野に対応した手話通訳の研究会を6回開催する中で、1) 言語学知識を有する手話通訳者の不足、2) 言語学用語に対応する手話語彙の未整備、3) 言語学分野の手話通訳知識と経験を蓄積する機能の不在の3点を課題として明確にした。1)については、2013年度より手話通訳者を対象とする言語学講座を実施することを決定した。2)については、総合研究大学大学院学融合推進センタープロジェクト「手話言語学を世界へつなぐ——メディア発信とe-learning 開発に向けて（研究代表者：菊澤律子）」により、SNSを活用しての手話語彙の検討を進めた。3)については、手話通訳を行った言語学分野の学術発表を素材に言語学的な情報を付与したコーパス試作版を作成して2013年度以降の継続につなげた。

・他の機関から委嘱された委員など

社会福祉法人全国手話研修センター日本手話研究所事務局長、NPO 法人日本 ASL 協会会長、財団法人現代人形劇センター理事

清水郁郎 [しみず いくろう] ————— 准教授

1966年生。【学歴】 芝浦工業大学工学部（1990）、芝浦工業大学大学院建設工学専攻修了（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻修了（2001）【職歴】 大同工業大学工学部建築学科助教授（2005）、芝浦工業大学工学部建築工学科准教授（2009）、芝浦工業大学工学部建築工学科教授（2013）【学位】 博士（文学）（総合研究大学院大学 2001）【専攻・専門】 建築学（計画）、東南アジア研究、物質文化研究【所属学会】 日本文化人類学会、日本建築学会

【主要業績】

[単著]

清水郁郎

2005 『家屋とひとの民族誌——北タイ山地民アカと住まいの相互構築誌』東京：風響社。

[編著]

日本建築学会編

2012 『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』東京：風響社。

[論文]

清水郁郎、蟹澤宏剛、木本健二、畑 聰一、増田千次郎、パタナー・ポンティップ、トンワン・テップカイソン
2011 「ラオス深南部山地のロングハウスに関する統合的研究——『高密度居住』を可能にする木造長大家屋の特質と居住文化」『住宅総合研究財団研究論文集』37: 121-132。

【受賞歴】

1992 第3回日本建築学会優秀修士論文賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジアにおける木造建築建設にかかわる比較研究

・研究の目的

本研究は、東南アジア大陸部と島嶼部を対象に、木造建築、とくに住居の建設にかかわる比較研究をおこなうことを目的とする。研究においては、国立民族学博物館に収蔵、展示されている資料を適宜利用し、かつ文献資料とあわせて、当該地域の建築生産の分類をおこなう。そのさいには、建設にかかわる道具の伝播や材料の加工方法に留意し、またそれらによって産み出される建築構法に着目する。さらに、物質の側面のみならず、建築生産にかかわる職能や社会組織の把握もおこなう。これらを統合して、当該地域における木造建築生産の整理・分類と理解に一定の貢献をしたい。

・成果

2012年度は、科学研究費補助金（基盤研究（B））（代表：清水郁郎）により、東南アジア大陸部ラオス人民民主共和国において、木造住居を対象とした2週間程度の調査をおこなった。具体的な調査地は、同国ルアンパバーン県ナムバック郡近郊に住むルーの村落である。そこにおいて、住居と村落の実測、建設道具の把握、建築生産の様態について以下の諸点に着目して調査を進めた。

- ・住居の構造：住居型式は高床式が主流だが、近年は工場産品の建築部材を利用した平屋に加え、高床の床下部分に壁をつくり居室化している住居が増えつつある。
- ・構法：住居の構造は棟持ち柱構造だが、棟木を支えるのは床上長手方向端部から立ち上がる二本の柱のみで、他は梁上から束を立て、棟木を受けている。そのために、屋内は一室の大空間として利用可能となる。
- ・間取り：妻入りがもっとも多く、階段が上がった踏み込みを経て屋内に至る。内部にはもともと炊事用と出産用のふたつの炉があったが、現在は炊事棟を別棟にしていることが多い。屋内の最奥に壁を仕切りとした寝室がある。
- ・方位観：住居の建設に際しては、伝統的な方位観、柱の末口と元口の向きといった位置関係が尊重され、加えて宗教的観念とも結びつき、多様な空間概念が並存している。
- ・建設手順：地面で構造材を組み立て、それに縄をかけて引き立てる方法をとる。そのさいに、垂直や水平の取り方に独特の方法を使う。
- ・大工道具：大鋸を使うことで、大寸法の部材を得ることができる。細かい作業には、手斧、鑿、山刀などを駆使する。
- ・職能：専門職の大工はいない。かつては、農閑期に村人の住居建設を監督する能力を持ついわゆる棟梁が数名いた。村内に現存する古民家の建設は、すべてそれら棟梁の指図により村人が協働で建設したものである。書籍等の成果、また、発表等の成果としては、以下が該当する。

◎出版物による業績

[編著]

日本建築学会編

2012 『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』東京：風響社。

[論文その他]

清水郁郎

2012 「住まいと暮らしのフィールドワークに出かけよう！」日本建築学会編『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』pp.13-22, 東京：風響社。

2012 「フィールドワークのおもしろさ——なぜフィールドに向かうのか？」日本建築学会編『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』pp.43-54, 東京：風響社。

- 2012 「実測のしかた」日本建築学会編『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』pp.206-209, 東京：風響社。
- 2012 「画像と映像の撮影のしかた」日本建築学会編『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』pp.210-213, 東京：風響社。
- 2012 「フィールドワークのための新しい道具」日本建築学会編『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』pp.224-226, 東京：風響社。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年9月12日 「村落における近年の住居形式の変化に関する考察——東南アジア大陸部低湿地帯の居住空間にかかわる研究 その1」日本建築学会学術講演梗概集E-1（中部）：1135-1138
- 2012年9月12日 「各種オーダーからみる住まい方の特質——東南アジア大陸部低湿地帯の居住空間にかかわる研究——その2」日本建築学会学術講演梗概集E-1（中部）：1137-1138
- 2012年9月14日 「信仰体系からみた村落の空間構成——来間島を事例として」日本建築学会学術講演梗概集E-1（中部）：1437-1438
- 2012年9月12日 「こどもとこども部屋の関係——モノに着目した空間の分析」日本建築学会学術講演梗概集E-1（中部）：1189-1190

・共同研究会

- 2012年7月8日 「研究成果発表——映画をめぐる空間」『映像の共有人類学——映像をわかちあうための方法と理論』

◎社会活動・館外活動等

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

日本建築学会建築計画委員会比較居住文化小委員会委員・同出版ワーキンググループ主査、国立民族学博物館共同研究『映像の共有人類学——映像をわかちあうための方法と理論』共同研究員、神奈川大学国際常民文化研究機構共同研究『アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象』共同研究員、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B））「東南アジア大陸部低湿地帯社会における生態環境と居住空間の相互環」研究代表者

外国人研究員 客員

■研究戦略センター・超領域研究部門

CAO Jiannan (曹 建南) [ツァオ、ジエンナン]——准教授

任期：2012年1月25日～2013年1月24日

研究課題：茶文化の日中比較——ものとアートの視点から

【学歴】南京師範学院中文科卒（1980）、東京学芸大学大学院修士課程修了（1991）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了（1996）【職歴】上海師範大学外国語学院講師（1996）、上海師範大学人文学院講師（2001）、上海師範大学人文学院副教授（2003）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程 1996）【専攻・専門】民俗学、民族学

【主要業績】

[博士論文]

曹 建南

1996 「中国杭嘉湖地方における養蚕伝承の研究」総合研究大学院大学文化科学研究科。

[論文]

曹 建南

2010 「日本禅院茶礼瑣議」『茶禅東伝寧波縁——第五届世界禅茶文化交流大会文集』pp.205-213, 北京：中国農業出版社。

2010 「従飲茶習俗看中日民俗觀念的差異」『日本語言文化研究論集（第2輯）』pp.25-37, 上海：華東理工大学

出版社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東京学芸大学の修士課程で「おしらさま」を典型とする養蚕信仰の日中比較に関する論文をまとめ、総合研究大学院大学博士課程では中国の養蚕伝承を学位論文「中国杭嘉湖地方における養蚕伝承の研究」に結実させた。これは養蚕地帯のフィールドワークにもとづき、養蚕の歴史の変遷と生産技術、経営体制、儀礼・信仰の側面を明らかにした着実な研究であった。この論文の中国語での出版を滞在期間中に準備する。

私の茶文化研究は、2003年サントリー文化財団助成の「17世紀における茶文化の日中比較研究」に加わったことから始まった。これまで、茶にかかわる文化に見られる中日両国の異なったとらえ方や、両国共通の朝茶の習慣、婚姻儀礼の結納茶、新年祈願の大福茶などにおける茶の象徴性の相違について考察してきた。とくに中国における「茶徳観」、茶堂（中国では「茶亭」）にまつわる民俗、茶道と茶芸、茶道具の美意識などについて論文を発表している。

招聘期間中は日本の茶文化についての資料調査と実地調査に従事し、茶文化の日中比較を研究課題とし、物質文化（もの）と芸事（アート）の視点から研究をすすめる。とりわけ、四国の茶堂や九州の結納茶などの調査を予定している。

・成果

茶文化事象には日中両国の民族文化にさまざまな相違がみられ、比較研究として非常に有意義な成果があった。国立民族学博物館には日本の茶文化に関する文献が豊富にあり、熊倉功夫氏（名誉教授）をはじめ人脈もひろげることができた。

物質文化研究については国立民族学博物館の機関研究「マテリアリティの人間学」（代表：岸上伸啓）のなかの「モノの崇拝——所有・収集・表象研究の新展開」（代表：竹沢尚一郎）において研究発表を行った。また、近畿民具学会で「上海万博で展示された茶の道具」を報告し、AJJ第15回年次大会において「中国と日本の茶文化」を発表した。国立民族学博物館の研究部が主催する研究懇談会でも報告し、国立民族学博物館研究報告に論文を寄稿する。

1年間の研究成果を単行本にまとめ、『茶文化の日中比較』（仮題）として刊行する予定である。

Chuluun Sampildondov [チョローン サンピルドンドフ]————— 教授

任期：2012年4月2日～2013年3月29日

研究課題：モンゴル・ロシア関係に関する歴史人類学的研究

【学歴】モンゴル国立大学卒（1999）、モンゴル国立大学修士課程修了（2001）モスクワ国立教育大学博士課程修了（2004）

【職歴】モンゴル科学アカデミー歴史研究所研究員（1999）、モンゴル国立大学歴史学部助教授（2004）、ケンブリッジ大学モンゴル内陸アジア研究所・客員研究員（2008-2009）、モンゴル科学アカデミー歴史研究所長・教授（2009）

【学位】文学博士（モスクワ国立教育大学 2004）、歴史学修士（モスクワ国立教育大学 2001）

【専攻・専門】歴史学・民族学

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴル・ロシア関係に関する歴史人類学的研究

・研究の目的

近年あらたに現地調査を実施して発見された資料類と、ロシアのアルヒーブで保存されている資料類を照合して、17世紀から20世紀にかけてのモンゴル史について歴史人類学的観点から研究をおこなってきた。招へい期間中は、ロシアとの関係が飛躍的に展開する17世紀と20世紀に焦点をあてる。

17世紀については、これまでの史料調査の成果を生かし、主として民族間関係の変遷ならびに地域集団の形成過程を明らかにする。

20世紀については、これまでの写真資料の収集成果を生かし、主として図像による歴史の視覚化をおこなう。写真資料の解読については、さまざまな関係者の視点を再構成することによって人類学的考察の意義を明示する。

・成果

17世紀についての研究成果は、国立民族学博物館調査報告（SER）に論文集として投稿を準備中である。

20世紀の写真資料のうち寺院関係については *Монголын Бурханы Шашины Соёл: Хэнтий, Хангайн Сүм, Хийдийн Судалгаа* (Senri Ethnological Reports113) として刊行し、グローバルな記録資料の蓄積と発信という役割を果たした。また、「社会主義的近代化」というテーマで本館において実施してきた継続的な研究成果とその発信の一環として『モンゴル国営農場資料集』（国立民族学博物館調査報告110）を刊行した。

来日後、直ちに共同で整理作業を開始し、滞在期間中に校正までを終えたい。

2011年度下半期から実施される予定の共同研究「梅棹忠夫モンゴル研究資料の学術的利用」に参加し、民族誌的記述の解説に関して、地域間比較ならびに時代比較の観点から助言をあたえる。滞在中に実施する予定の、本件に関する国際シンポジウム（2012年2月）に参加し、発表する。

【主要業績】

[博士論文]

Chuluun, S.

2004 History of Ethnic and Social-Economical Development of Khotgoid People in Mongolia. State Pedagogical University of Moscow, Russian Federation.

[単著]

Chuluun, S.

2010 *Stalin and Mongolia* (Documents of Archives). Ulaanbaatar.

2010 *Study of Mongolian History XVII-XIX Century*. Ulaanbaatar.

◎出版物による業績

[共著]

小長谷有紀・S.チョローン

2013 『モンゴル国営農場資料集』（国立民族学博物館調査報告110）大阪：国立民族学博物館。

[共編]

М.И. Клягина-Кондратьева, Хэвлэлд бэлтгэж, хянасан С.Чулуун Т.И.Юсупова

2013 *Монголын Бурханы Шашины Соёл: Хэнтий, Хангайн Сүм, Хийдийн Судалгаа* (Senri Ethnological Reports113) Osaka, National Museum of Ethnology (in Mongolian and Russian).

CREIGHTON, Millie Rosetta [クレイトン、ミリー ロゼッタ] ————— 教授

任期：2012年9月20日～2013年8月30日

研究課題：日本におけるデパートとアジア系小売商の文化人類学研究——消費主義と日本社会の変貌

【学歴】 ミネソタ大学卒（1977）、ワシントン大学修士課程修了（1983）、ワシントン大学博士課程修了（1988）【職

歴】 ハーバード大学ポスドク研究員（1988）、プリティッシュ・コロンビア大学助教授（1989）、プリティッシュ・コロンビア大学准教授（1995）【学位】 博士（人類学／日本学）（ワシントン大学 1988）、修士（人類学／日本学）（ワシントン大学 1983）【専攻・専門】 文化人類学

【主要業績】

[論文]

Creighton, M. R.

2010 Taiko, Selves, Japan; Travels with My Garbage Can, World Connecting Drums. *Asia Pacific World* 1(2): 109-127.

2009 Japanese Surfing the Korean Wave: Drama Tourism, Nationalism and Gender via Ethnic Eroticisms. *Southeast Review of Asian Studies* (SERAS) 31: 10-38.

2008 Fu shi hui: cong gudai riben de dazhong wenhua meixue dao dandai riben liuxing wenhua shenfen xisanzheng ["Ukiyoe from Historic Japanese Mass Culture Aesthetic to Contemporary Popular Culture Identity Icon"] *Journal of Jinan University* 18(1): 63-69.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本におけるデパートとアジア系小売商の文化人類学研究——消費主義と日本社会の変貌

・研究の目的

本研究では、文化と消費主義との相互作用を日本のデパートと日本の韓人系・南アジア系小売商を事例として研究したいと考えている。20世紀の初めに日本では大規模なデパートが出現する。それは、当初、日本人の欧米への関心を反映した商品を守る場であった。デパートの販売戦略や商品の変化は、大正期や昭和初期のモダン化、第2次世界大戦、戦後の復興、経済的繁栄、バブルの崩壊を経験した日本社会の変化を反映している。21世紀に入ると日本人の消費者の関心やショッピングの内容が多様化し、その変化に関連して在日韓国・朝鮮系や南アジア系の小売商が日本において活発に商売を展開している。本研究では、関西のデパートや、大阪の韓国・朝鮮系小売商、神戸の南アジア系小売商について調査を実施、日本社会の変化を消費の展開との関係から解明する。

・成果

デパートを日本社会の変化を象徴的に示す窓口であると仮定し、通時的視点から調査研究した結果、20年の間に日本のデパートでは、韓国や南アジアの商品を物産展や常設コーナーで販売するようになり、経営戦略が西欧志向からアジア志向の販売へと明確に移行してきたことが判明した。

デパート調査の成果の一部は、7月10日開催のみんぱく研究懇談会で報告した。また、このテーマに関連するエッセイを *MINPAKU Anthropology Newsletter* に寄稿した。さらに、デパートの広告に関する論文を、同志社大学の Bruce White 教授が編者を務める商業本に寄稿するとともに、多文化主義からみたデパートに関する論文を *Social Science Japan Journal* (SSJJ) に投稿した。

DANIELS, Inge Maria [ダニエルズ、インゲ マリア] ————— 准教授

任期：2013年3月15日～2013年5月8日

研究課題：フォトグラフィーの民族誌——現代日本の商業・宗教・社会生活

【学歴】 ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン人類学部博士課程修了（2001）【職歴】 オックスフォード大学インスティテュート・オブ・ソーシャル・エンド・カルチュラル・アンソロポロジー講師（2006）【専攻・専門】 文化人類学・社会人類学

【主要業績】

[モノグラフ]

Daniels, I. M.

2010 *The Japanese House: Material Culture in the Modern Home*. Oxford: Berg.

[論文]

Daniels, I. M.

2012 Beneficial Bonds: Luck and the Lived Experience of Relatedness in Contemporary Japan. *Social Analysis* 56 (1 & 2) special issue: Economies of Fortune.

2009 The Social Death of Unused Gifts: Loss and value in contemporary Japan. *Journal of Material Culture* 14(3): 385-408.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

これまで日本をフィールドとする社会人類学、贈り物交換、宗教的なものの商品化、地元写真、モノの廃棄過程、家内空間などのテーマについて研究している。2009年からは“Photography beyond the Frame: An Ethnography of the Japanese Ritual Economy”プロジェクトを開始した。日本人が日常的に撮影する写真を、民族誌をなすものとしてとらえ、現代日本の贈り物交換や宗教のかたちをあぶりだしていこうとする研究で、成果は展示という形でも公開する。現代日本の商業、宗教、社会生活の相互依存的な関係を明らかにし、写真の新しいテクノロジーによって新しいソーシャリティのかたちがあらわれていることに注目する。

招へい期間中は、このプロジェクトに関連して、館内および館外の研究者と意見交換し、関連する資料も収集して、さらなる批判的検討を重ねて研究を遂行する。研究の遂行にあたっては、民族文化研究部 森 明子教授がカウンターパートとなっている。

・成果

- 1) 国際シンポジウムへの参加（3月15日～18日）：本館で開催した国際シンポジウム（代表者：森 明子）において、ヨーロッパで行う日本展示という立場から、研究報告と議論を行った。
- 2) フィールドワークと資料収集：大阪、京都、神戸、奈良での調査研究と資料収集（モノ、写真、サウンド）を行った。
- 3) アーカイブおよび図書館での調査：本館の図書および標本資料をはじめ、東京都写真美術館でも短期の調査を行った。
- 4) 研究者との意見交換：本館の機関研究（マテリアリティの人間学）をはじめとして、関連する研究者との情報交換、意見交換を行った。
- 5) 研究成果を、研究報告論文として公開することを計画している。

DENG Xiaohua (鄧 曉華) [ドン、シャオホア] ————— 教授

任期：2011年12月15日～2012年6月14日

研究課題：東南中国におけるエスニック・グループと地域文化との相互関係についての研究

【学歴】中国龍岩師範学校中文学科卒（1980）、中国華中科技大学言語学研究所修士課程修了（1987）、中国華中科技大学言語学研究所博士課程修了（2006）【職歴】中国龍岩師範学校教師（1980）、中国厦門大学人類学部講師（1987）、中国厦門大学人類学部准教授（1993）、中国厦門大学人類学研究所書記（1994）、中国厦門大学人類博物館館長（2000）、国立民族学博物館外国人研究員（2000）、香港城市大学中国言語学研究所客員研究員（2001）、中国厦門大学人類学部教授（2003）【学位】博士（文学）（中国華中科技大学 2003）【専攻・専門】文化人類学・言語学・文化遺産研究

【主要業績】

[単著]

鄧 曉華

2005 『汉语方言研究与语言演变理论的建构（漢語方言研究と言語の変化に関する理論の構築）』香港靄明出版社。

[編著]

鄧 曉華編

2002 『中国人類学の理論と実践（中国人類学の理論と実践）』香港華星出版社。

[共編]

鄧 曉華・李 如龍編

2009 『客家語研究』鄧 曉華、李 如龍（主編）福建人民出版社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南中国におけるエスニック・グループと地域文化との相互関係についての研究

・研究の目的

多元的な文化をもつ東南中国では漢族、チュワン・トン語およびミャオ・ヤオ語系の民族等の多くのエスニック・グループが共存している複雑社会である。とくに福建省では、漢族の閩語系および客家語系のサブ・エスニック・グループ、少数民族である畬族、回族、蛋民など、言語文化の多様性がみられる。ここ10年にわたって現代化の波が押し寄せる中、これらのエスニック・グループがもつ言語文化やその関係性にも大きな変化が起きている。

これまで長期にわたって中国南部の人類学研究に従事しており、主に東南中国の諸エスニック・グループの言語文化における歴史的な関係の構築、各民族の“文化遺産運動”の分析研究において、多くの研究成果を得ている。本研究では、日本における研究者と協力して、近年の現地調査で得られた資料の分析作業を行い、さらに一歩踏み込んだ研究を行う。その概要として、近年、現地調査で収集した豊富な一次的な資料に基づき、各

エスニック・グループと地域文化の相互関係、及びエスニック・アイデンティティとエスニック・グループ間の関係性の再構築過程に注目し、その変容状況および社会的な役割を究明する。

・成果

華僑華人学会で「閩西南客家村落の経済変化と華僑——福建省南靖県書洋鎮塔下村を例に」と題する講演を行うとともに、論文「従身体部位名称看客的認知模型」を *Journal of Chinese Linguistics* に発表した。また機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」の第1回研究会において発表「地域から読み解く『世界遺産』のもたらした影響——福建省永定県の初溪楼群を事例として」を行った。それをもとにした論文を『国立民族学博物館研究報告』に投稿予定である。さらに、研究公開プログラム「漢族社会におけるヒト、文化、空間の移動——人類学のアプローチ」(2012年11月)において基調講演を行った。

GARFIAS, Robert [ガルフィアス、ロベルト]—————教授

任期：2013年1月7日～2013年3月29日

研究課題：民博映像番組の有効利用に関する研究

【学歴】 サンフランシスコ州立大学卒 (1956)、カリフォルニア大学ロサンゼルス校修士課程修了 (1958)、カリフォルニア大学ロサンゼルス校博士課程修了 (1965) 【職歴】 ワシントン大学音楽部助教授 (1965)、ワシントン大学民族音楽学大学院プログラム所長 (1965-1975)、ワシントン大学音楽部准教授 (1968)、カリフォルニア大学パークレー校客員准教授 (1969)、ワシントン大学音楽部教授 (1973)、ワシントン大学副学長 (1977)、カリフォルニア大学アーヴァイン校芸術部部長 (1982-1987)、カリフォルニア大学アーヴァイン校人類学部教授 (1987-現在)、カリフォルニア大学国際教育プログラム、コスタリカ研究センター所長 (1992-1993)、カリフォルニア大学アーヴァイン校チカノ・ラティーノ研究センター所長 (1997-2000) 【学位】 Ph. D. (カリフォルニア大学ロサンゼルス校 1965)、M. A. (カリフォルニア大学ロサンゼルス校 1958) 【専攻・専門】 民族音楽学

【主要業績】

[単著]

Garfias, R.

2004 *Music: The Cultural Context* (Senri Ethnological Reports 47). Osaka: National Museum of Ethnology.

1976 *Music of a Thousand Autumns, The Togaku style of Japanese Court Music: an analysis of Theory in Practice*. Berkeley: University of California Press.

[共著]

Garfias, R. with A. D. Firtgau

1976 *Spanish-American Music and Its Roots..* Morristown: Silver Burdett.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民博映像番組の有効利用に関する研究

・研究の目的

民博ではこれまで数多くの映像番組を制作してきた。これらの番組は世界各地の文化を紹介することを目的にしており、現地で収集した映像音響資料を編集し番組化したものである。民博が映像メディアを用いて蓄積してきた情報はすでに膨大な量に達しており、その資料的価値は高い。しかし、活発な収集・制作活動に比べ、映像音響資料の活用に関する議論はこれまで十分に行われてこなかった。完成した番組は館内のビデオテーク・ブースなどで公開され来館者に好評を博しているが、それ以外では十分に活用されているとはいえず、館外での利用、特に取材対象国・地域においての利用は極めて限定的である。本研究は、取材対象国・地域における民博映像番組の有効利用のための具体的な方法と問題点を整理・検討することを目的とする。

・成果

民博の映像音響資料収集プロジェクトに海外協力者として参加し、スペイン、ポルトガル (2006年)、プエルトリコ (2007年) において調査と映像取材を行った。今回の在任中には、これらの調査で収集した映像資料のすべてを精査し、すでに完成していた日本語版番組「バレンシアの聖母マリア誕生祭と管楽器ドゥルサイナ」の英語版、スペイン語版を完成させた。また、ポルトガルとプエルトリコのギター音楽に関する番組を各1本制

作するため、英文による解説台本の執筆および収録、インタビューの翻訳、キャプションの執筆などの作業をおこなった。これら2番組には、これまで見るができなかった貴重な映像が含まれており、完成後には、取材国だけでなくより広い地域で上映する価値がある。

GUARNÉ CABELLO, Blai [ガルネー カベロ、ブライ] 教授

任期：2012年11月26日～2013年4月25日

研究課題：日本社会における「過去」の見せ物化：アイデンティティ、マテリアリティ、表象に焦点をあてて

【学歴】 バルセロナ大学（スペイン）地理歴史学部人類学科卒（1995）、バルセロナ大学（スペイン）地理歴史学部人類学科修士課程修了（1998）、バルセロナ自治大学（スペイン）大学院政治科学・社会学部政治科学・公法学科修士課程修了（2000）、東京大学大学院総合文化研究科外国人研究生（日本政府留学生）（2004-2006）、バルセロナ大学（スペイン）地理歴史学部人類学科博士課程修了 **【職歴】** 国立ミッション大学（アルゼンチン）人文社会学部文化人類学科客員研究員（1995）、バルセロナ大学（スペイン）地理歴史学部社会人類学科講師（1995）、エーテボス・ローランド大学（ハンガリー）社会人類学科客員研究員（1997）、カタルーニャ自由大学（スペイン）人文学部心理学・教育科学科講師（2000）、東京大学大学院総合文化研究科（文化人類学）客員研究員（2004）、カタルーニャ自由大学（スペイン）人文学部東アジア学科講師（2006）、バルセロナ大学（スペイン）地理歴史学部社会人類学科助教授（2007）、ボンバウ・ファブラ大学（スペイン）人文学部人文学科助教授（2007）、スタンフォード大学（米国）社会科学部文化人類学科ポスドクリサーチフェロー（2008）、バルセロナ自治大学（スペイン）翻訳学部翻訳学科東アジア研究プログラム（ファン・デ・シエルバ・ポスドクフェロー）専任講師（2010） **【学位】** 社会人類学博士（バルセロナ大学（スペイン）地理歴史学部人類学科 2007）、社会法学修士（バルセロナ自治大学（スペイン）大学院政治科学・社会学部政治科学・公法学科 2000）、社会人類学修士（バルセロナ大学（スペイン）地理歴史学部人類学科 1998） **【専攻・専門】** 文化人類学

【主要業績】

〔編著〕

Guarné, Blai (ed.)

2006 *Identitat i representació cultural: perspectives des del Japó*. Revista d'Etnologia de Catalunya (Catalan Review of Ethnology 29).

〔論文〕

Guarné, Blai

2011 Shall We Westernize? Cultura popular y representación orientalista en la interpretación del Japón contemporáneo. In Elena Barlés and David Almazán (eds.) *Japón y el mundo actual*. Zaragoza: AEJE (Spanish Association of Japanese Studies) pp. 721-743, Zaragoza: Universidad de Zaragoza.

2010 The Japanese Oxymoron: A Historical Approach to the Orientalist Representation of Japan. In Ignacio Lopez-Calvo (ed.) *One World Periphery Reads the Other: Knowing the "Oriental" in the Americas and the Iberian Peninsula*. pp. 309-329, Cambridge: Cambridge Scholars Publishing.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本社会における「過去」の見せ物化——アイデンティティ、マテリアリティ、表象に焦点をあてて

・研究の目的

本研究の目的は、日本文化の表象について「過去」の商品化および見せ物化という点に焦点を合わせ文化人類学的に分析することにある。とくに理想的な「過去」を郷愁的に構築していく概念として「故郷（ふるさと）」をとりあげ、その物質化、視覚化の様相を多角的に分析する予定である。この「故郷」という概念は、人やモノの越境などグローバル化する日本社会の脈絡において近年ますます重要になりつつあり、日本人のアイデンティティ構築を考える上で最適の研究対象と考えられる。さらにこの分析を「日本人論」の脈絡に置き直し、そこにおいて登場するステレオタイプ化された日本文化の表象と比較考察を行っていくつもりである。こうした一連の日本および日本イメージの相対化ともいべき作業は、世界各地で見られるアイデンティティ、文化そして国家などの概念生成過程を分析する際に重要な視座を提供するものと考えられる。

・成果

- 1) 研究テーマである「ふるさと」のイメージがどのように物質文化に体现され、それ自体が逆に「ふるさと」のイメージを生成、増殖させていくのかについて、グローバル化の進む現代社会のなかで考察するため、日本人論をテーマにした研究書の分析を行い、日本人研究者との交流を図った。とくに第4回アジア人文科学会議や、EU主催の科学者ネットワーク会議などの国際会議に出席し、日本を対象とした人類学的研究と地中海域を対象とした人類学的研との比較をオリエンタリズムの概念を用いて分析した。
- 2) 来日以前にアメリカ人類学会年次大会において組織した「グローバル循環における文化資源と移住のポリテイクス」シンポジウムの成果を論集としてまとめるべく編集を行った。民博の研究報告として発表する予定である。
- 3) 現代日本社会において使用されるカタカナ言葉の分析を通じたアイデンティティ形成論を単著（スペイン語）として書き上げた。この著作については、現在、印刷段階にあるが、スペイン語で著された数少ない現代日本文化論であり、今後、スペイン語圏の国際学界からの反応が期待される。
- 4) 人類学を含む日本の代表的な人文科学、社会科学の著作をスペイン語に翻訳するプロジェクトにも積極的に関わり、国際交流基金への申請をとりまとめた。

◎出版物による業績

[単著]

Guarné, Blai

2012 *La escritura de lo ajeno. Representación e identidad cultural en el katakana japonés*. Madrid: CSIC (Spanish National Research Council), Government of Spain.

[編著]

Guarné, Blai (ed.)

2012 *Antropología de Japón: Globalización e Identidad Cultural en Asia Oriental*. Barcelona: Edicions Bellaterra – Casa Asia (Government of Spain).

[共編]

Guarné Blai and Paul Hansen (eds.)

2012 “Escaping Japan: Inside and Outside (Volume I).” *PAN-JAPAN: The International Journal of Japanese Diaspora*.

2012 “Escaping Japan: Inside and Outside (Volume II).” *PAN-JAPAN: The International Journal of Japanese Diaspora*.

HUANG Jan-yen (黄 貞燕) [ホワン、ジェンイエン]————— 教授

任期：2012年7月2日～2012年9月19日

研究課題：博物館、知識の生産と市民参加——知識観と知識の公共性から考える

【学歴】国立台湾大学歴史学科卒（1990）、国立台湾大学芸術史研究所修士課程修了（1994）、京都大学美学美術史学研究科修士課程修了（2000）、京都工芸繊維大学修士課程修了（2005）【職歴】国立台北芸術大学博物館研究所助理教授（非常勤）（2005）、国立台湾芸術大学芸術と文化政策管理研究所助理教授（非常勤）（2007）、国立台北芸術大学博物館研究所助理教授（2009）【学位】博士（学術）（京都工芸繊維大学 2005）【専攻・専門】日本博物館史、地域博物館、博物館政策、無形文化遺産保護制度

【主要業績】

[単著]

黄 貞燕

2008 『日韓無形の文化財保護制度』（日韓における無形の文化財保護制度）。宜蘭：国立伝統芸術総処籌備處。

[編著]

黄 貞燕編

2011 『民俗／民族文化的蒐藏與博物館』（民俗・民族文化の収集と博物館）。台北：国立台北芸術大学。

2003 『日本現代美術館学（日本現代美術館学）』。台北：五観芸術管理会社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

博物館、知識の生産と市民参加——知識観と知識の公共性から考える

・研究の目的

本研究は、現在、民博が、博物館学関係の様々な研究プロジェクトや本館展示新構築、「博物館学集中コース」の実施を通じて実践的な形で構築しようとしている新たな博物館学の構築の一助となるとともに、台湾における博物館学の確立にも寄与するものと期待される。

・成果

- 1) 日本における地域コミュニティと連携した博物館の実践例を出来る限り収集し、その評価を行った。
- 2) とくに社会的課題の中から「環境」の問題を取り上げ、日本の環境問題における専門家知識の役割の変化や博物館における知識の取り上げ方の変化について具体的事例に即しながら分析を行った。
- 3) 滋賀県立琵琶湖博物館や神奈川県平塚市博物館など、市民参加型調査を通じて地域コミュニティの活性化に大きく貢献している博物館の実地調査を実施し、特にローカルな知識の誘出方法や集積方法、提示の方法に焦点を当てて検討し、より創造的な博物館と市民の協働の在り方を抽出した。
- 4) 民博との学術協力協定に基づき過去3年間にわたって台北・大阪で実施してきた「民族/民族文化に関する博物館学ワークショップ」の評価と成果取りまとめを進める一方、とくにコミュニティと博物館に焦点を当てた向こう3年間のプログラムの策定に当たった。

LIAO Guoyi (廖 国一) [リャオ、グォイー] ————— 教授

任期：2012年5月1日～2012年8月1日

研究課題：壮（チワン）族の伝統文化の観光人類学的研究

【学歴】 四川大学歴史系考古学専攻卒（1986）、四川大学大学院修士課程歴史系考古学専攻修了（1988）、中央民族大学大学院博士課程歴史文化学院歴史学専攻修了（2011）【職歴】 広西師範大学歴史文化与旅游学院助理研究員・同大学広西地方民族史研究所助理研究員兼任（1988）、広西師範大学歴史文化与旅游学院副研究員・同大学広西地方民族史研究所副研究員兼任（1997）、広西師範大学歴史文化与旅游学院研究員・同大学広西地方民族史研究所研究員兼任（2003－現在）、広西師範大学歴史文化与旅游学院教授（2007－現在）、同大学旅游研究所副所長兼任（2005－現在）、日本東洋大学国際地域学部国際観光学科外国人研究員（2005－2006）、東洋大学アジア文化研究所客員研究員（2005－現在）【学位】 歴史学博士（中央民族大学大学院 2011）【専攻・専門】 民族史学

【主要業績】

[編著]

廖 国一編

2004 『歴史教学与田野調査』南寧：広西民族出版社。

1998 『広西史稿』桂林：広西師範大学出版社。

[論文]

廖 国一

2010 「郷村博物館の建設与郷村旅游業的發展——以海南島五指山冲山鎮歴史文化名村番茅村為例」広西壮族自治区博物館・広西文物考古研究所編『博物館与旅游』南寧：広西科学技術出版社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

壮（チワン）族の伝統文化の観光人類学的研究

・研究の目的

これまで広西の壮族・瑶族・苗族・京族・漢族、海南島の黎族等の民族の現地調査を通じた文化面の研究や、環北部湾（トンキン湾）地域を中心とした考古学・歴史学的研究を幅広く行ってきた。民族学研究や現地調査の方法論に関する著作もある。壮族の伝統文化とその観光開発については、広西の龍勝県・陽朔県・靖西県・宜州市などの地域で調査研究を行ってきた。壮族村落の観光開発について、この十数年来、一面では壮族の伝

統的な建築・服飾・工芸品・飲食・歌舞等、伝統文化の復興を引き起こした。しかし、他方では、観光開発は壮族の伝統文化に負の影響をもたらした。たとえば村民の商品意識の改変、収入の不均等、伝統的な生産方式の変化、村の環境汚染の増大などが挙げられる。村の観光開発は、壮族の伝統文化と外来文化の衝突・融合を促している。こうした現象について、これまでも「龍勝少数民族民俗風情旅游景点開発与管理現狀的調查研究」(『桂林旅游高等専科学校学報』2004年第1期)、「環北部湾经济圈少数民族文化的開發与保護」(『广西民族研究』2007年3期)、2010「北部湾旅游新村的建設与“泛北部湾旅游圈”的構建」(東洋大学『アジア文化研究所研究年報』45号)をはじめ、観光開発の現状とそれともなう文化の管理・保護、政府と村民との関係などの諸問題に焦点を当てた研究論文を公表してきた。民族史と観光人類学を結びつける視点から、壮族の伝統文化が中国の観光経済の発展という条件下にいかんか発展・変遷を経てきたか、壮族の伝統文化がいかんか資源化されているのか、壮族の伝統文化の変容と経済発展との関係はどのようなものであるのか、観光開発や文化の管理保護に各級政府がどのような役割を果たしているのかといった問題点について、広西の壮族の生態・歴史的条件の異なるいくつかの村落の事例から研究を行う計画である。

・成果

観光開発の民族文化に与える影響について、東興市沔尾村・龍勝県平安寨・大新県板佃村・龍州県板池村など観光開発の舞台となった村落で訪問調査を行った。そして民博での滞在期間中に、塚田誠之教授が代表を務める共同研究会「中国における民族文化の資源化とポリティクス」で口頭発表を行った。また塚田誠之教授等との討議や文献閲覧、日本の観光人類学の業績の理解を通じて一層研究を深めた。その研究成果の刊行はもっか準備中である。

NIKOLOV, Gordan [ニコロフ、ゴルダン] ————— 准教授

任期：2012年6月18日～2013年6月17日

研究課題：伝統陶器についての民族学的・博物館学的研究

【学歴】ベオグラード大学哲学部卒(1992)、聖ツィリル・メトディ大学(マケドニア)地理学研究科修士課程修了(2012)【職歴】マケドニア国立博物館キュレーター(1992)、マケドニア国立博物館上級キュレーター(1997～現在)、マケドニア国立博物館運営協議会議長(2003)、マケドニア国立博物館企画運営部長(2005)、マケドニア国立博物館館長代行(2005)、マケドニア国立博物館館長(2006)【専攻・専門】民族学

【主要業績】

[単著]

Nikolov, G

2009 *Amazing Macedonia*. Skopje: Treto Uvo doel (in Macedonian & English) (DVD付).

[論文]

Nikolov, G

2010 Bread Casserole from Neolithic to Present in South: East Europe; The Beginning of Ethno archeological Cooperation in the Region. *Ethno Archeology and Material Culture*, Rome: Italian Association of Ethno Archaeology.

2007 Cultural Heritage of Maleshevo Region: Possibility for Development of the Berovo Municipality, *Malesh 100 years after Dimitar Pop Georgiev Berovskis' dead: past, present, future*. pp.99-207, Berovo (in Macedonian).

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

伝統陶器についての民族学的・博物館学的研究

・研究の目的

マケドニア国立博物館のキュレーターとして経験と実績を積み、民族陶器を専門分野としており、彼の研究は単に陶器自体を対象とするのではなく、今日および過去においておこなわれてきた同国内の陶器製造を調査し、とくに西部マケドニア Kichevo 市近郊の村落で営まれている陶器製造に焦点をあてて研究をおこなっている。さらに、製造工程そのものに参画し、技術そのものの習得を通して、伝統的手法を再構成し、記録、保存、研

究をおこなっている。同時に、陶器製造の背景となる生産、流通、消費を調査し、その環境との関わり、地域性、実践的・状況的知識などを明らかにしている。

本研究課題においては、こうした研究をさらに進展させ、民族学および博物館学の観点から研究をすすめる。すなわち人類学・民族学における物質文化研究の最新の研究動向をふまえ、我が国における同様の研究事例とも比較することによって、より普遍的な脈絡において陶器製造について考察を深める。また、博物館学的観点からは、国家や国民文化にとっての博物館の役割、地域的・歴史の変異との関わりを、ことに陶器製造の研究を通して明らかにするとともに、研究の社会還元の内実についても知見を得る。

・成果

現地的調査については、丹波篠山を2012年6月から訪問し、伝統的な立杭焼の制作過程を調査をはじめた。また雅峰窯を持つ陶芸家市野秀之氏らが主催するワークショップに参加し、日用品としての陶器の制作技術について研修をおこなった。さらに益子焼の窯元を訪問した。また、研究課題について現地調査を行うとともに、本館の研究懇談会で発表“Folk Pottery in Macedonia”を行い、『月刊みんぱく』37巻2号に“The Treasure of the Museum of Macedonia”を執筆した。そのほか立命館大学等への訪問を通じ、積極的に学術交流を行った。

ROUÉ, Michèle Josette Marie [ルエ、ミッシェル ジョセット マリー]————— 教授

任期：2011年12月16日～2012年9月14日

研究課題：日本の都市における季節性——自然と其の変化をめぐる関係性の社会的構築

【学歴】レネ・デカルト／ソルボンヌ大学卒（1966）、レネ・デカルト／ソルボンヌ大学修士課程修了（1971）レネ・デカルト／ソルボンヌ大学博士課程修了（1975）【職歴】フランス国立科学調査センター（CNRS）・国立自然史博物館・研究員（1980）、フランス国立科学調査センター（CNRS）・国立自然史博物館・研究部長（1998）【学位】博士（民族学）（レネ・デカルト／ソルボンヌ大学 1975）、修士（民族学）（レネ・デカルト／ソルボンヌ大学 1971）【専攻・専門】民族学

【主要業績】

[単著]

Roué, M.

1992 *Silatunirmut: The Pathway to Wisdom. Montreal: Nunavik Educational Task Force. Collective Report by the Working Group on Education in Nunavik.*

[共著]

Roué, M. and Y. Delaporte

1989 *Chants lapons. Collection «Arctique». Paris: Peeters/SELAF.*

1986 *Une communauté d'éleveurs de rennes: Vie sociale des Lapons de Kautokeino. Paris: L'Institut d'Ethnologie, Musée de l'Homme.*

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本の都市における季節性——自然と其の変化をめぐる関係性の社会的構築

・研究の目的

私は、1970年代から1990年代にかけてフィンランドやノルウェー、スウェーデンのサーミ民族のトナカイ遊牧、カナダのイヌイット民族やクラー族の狩猟に関する民族学的な研究を行った。近年はユネスコと共同で、自然に関する先住民の伝統的知識や自然景観に焦点を当てながら、文化多様性と生物多様性の関係を研究するとともに、生物多様性を持続させる上で先住民の知識やNGOの諸活動が果たす役割について調査を行っている。招へい期間中に、私は春のサクラに注目し、日本の都市における季節の変化と社会（社交性）の関係について京都と大阪で調査を実施する予定である。私は、都市における自然を社会的に構築された環境の1つであると考え、季節の移ろいととも人間との関係が周期的に変化すると考えている。とくに都市にある庭園や公園、寺社の敷地、通り、広場のような公共空間においてサクラ（花見）の季節における都市人と季節との関係を調査、分析し、都市エスノグラフィーの作成を構想している。

・成果

都市環境に関する人類学的な研究は、重要な課題のひとつである。日本人が都市環境において自然をいかに社会化し、儀礼化してきたかを問うこのプロジェクトにおいて、私は民博内外の研究者や大学院生と協力しながら中心的な調査者の役割を果たした。

第1期（2011年12月15日～2012年2月15日）には、共同研究者らと協力し、基本文献の渉猟とともに現地調査の準備を行った。また、予備調査としてサクラを管理している人にインタビューを行うとともに、春のイベントについて日記をつけてくれるボランティアのグループを組織した。

第2期（2012年2月15日～4月15日）には、万博記念公園など大阪や京都の特定の場所でインタビューや参与観察を実施した。

第3期（2012年4月15日～6月15日）には、とくに花見に造詣の深い人や関心のある人にインタビューや参与観察を継続した。また、これまで収集してきたインタビュー・データや写真、映像記録を分析した。

第4期（2012年6月15日～9月14日）には、資料の分析を完了させ、英語論文の執筆を開始した。

成果の一部は、欧米の学術雑誌に投稿する予定である。

◎出版物による業績

[論文]

Roué, M.

2012 A Saami Reindeer Herder's Cultural Landscape: Memory, the Senses and Ethics. In N. Raasakka and S. Sivonen (eds) *Northern Landscapes: "Implementation of the European Landscape Convention in the North Calotte Area Municipalities" Conference in Inari, Finland 7-9.9.2011* (Reports 48), pp.45-50, Centre for the Economic Development, Transport and the Environment.

WANG Jianxin (王 建新) [ワン、ジェンシン]—————教授

任期：2012年11月27日～2012年12月26日

研究課題：貴州東南部苗族の刺繍の素材選択——少数民族の生活知恵と文化創造

【学歴】東京大学大学院総合文化研究科博士課程中退(1996) 【職歴】中国新疆放送大学教育番組制作部職員(1985-1988)、日本民族学振興会研究員(1996-1999)、神奈川大学常民文化研究所外国人研究員(1999-2001)、立正大学文学部非常勤助教授(2001-2002)、中国中山大学人類学系助教授(2002-2004)、同人類学系教授(2004-2012)、蘭州大学西北少数民族研究センター副主任・民族学研究院教授(2012-現在) 【学位】博士・学術(東京大学 2004) 【専攻・専門】文化人類学、民族学

【主要業績】

[単著]

Wang, J.

2004 *Uyghur Education and Social Order: The Role of Islamic Leadership in the Turpan Basin*. (Studia Culturae Islamicae No.76). Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

貴州東南部苗族の刺繍の素材選択——少数民族の生活知恵と文化創造

・研究の目的

民博の関係文献を利用し、関係研究者との交流を行いながら、苗族におけるもの造りや素材の選択に見られる文化の創造とエスニックバウンダリーの構築のメカニズムを解明する。

・成果

関本教授を初めとする機関研究プロジェクト「布と人間の人類学的研究」のメンバーと、貴州省苗族刺繍について議論と意見・情報交換をし、このテーマをより広く布・衣の人類学として考えるための多くの貴重な意見を得た。現代のグローバル市場、都市住民の消費文化と伝統的な染織、刺繍等の関わりについて、とくに新し

いアイデアを得ることができた。この3年間で、苗族関係の成果には、論文「高排苗族牯藏节调查与思考」（原生态民族文化学刊 2010年）と編著『南岭走廊民族宗教研究——道教文化融合的视角』（上下册、宗教文化出版社 2011年）などがある。

◎出版物による業績

[その他]

王 建新

- 2012 「サラール族」中国ムスリム研究会編『中国のムスリムを知るための60章』pp. 56-60, 東京: 明石書店。
- 2012 「ムスリムのシャーマニズム」中国ムスリム研究会編『中国のムスリムを知るための60章』 pp. 188-192, 東京: 明石書店。
- 2012 「『エスニック・コリドー』理論とムスリム宗教文化の研究」中国ムスリム研究会編『中国のムスリムを知るための60章』 pp. 317-319, 東京: 明石書店。
- 2012 「中央アジアのドゥンガン」中国ムスリム研究会編『中国のムスリムを知るための60章』 pp. 347-351, 東京: 明石書店。
- 2012 「唐汪川民族関係調査」北方民族大学学報第4期。
- 2012 「哈萨克斯坦东干人的民族教育与群体建构」西北民族研究第2期。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年12月9日 「領土紛争を抱えながらも経済と文化の交流を続けるべき」NIHU 現代中国地域研究コロキウム『日中関係の危険な現状——打開策をどう見出すか?』愛知大学国際中国学研究センター
- 2012年12月10日 「ケンブリッジ大学の Uradin Bulag による発表 “Looking as a Minority: Political Tourism in China” についてのコメント」中国西部少数民族研究学術研究会、愛知大学国際交流学部
- 2012年12月22日 「中国の民族学人類学博士養成の現状分析——日本、韓国との比較の視点から」「中国ムスリム研究やヤオ族研究など2人の若手研究者の発表についてコメント」東アジア人類学研究会、首都大学東京